

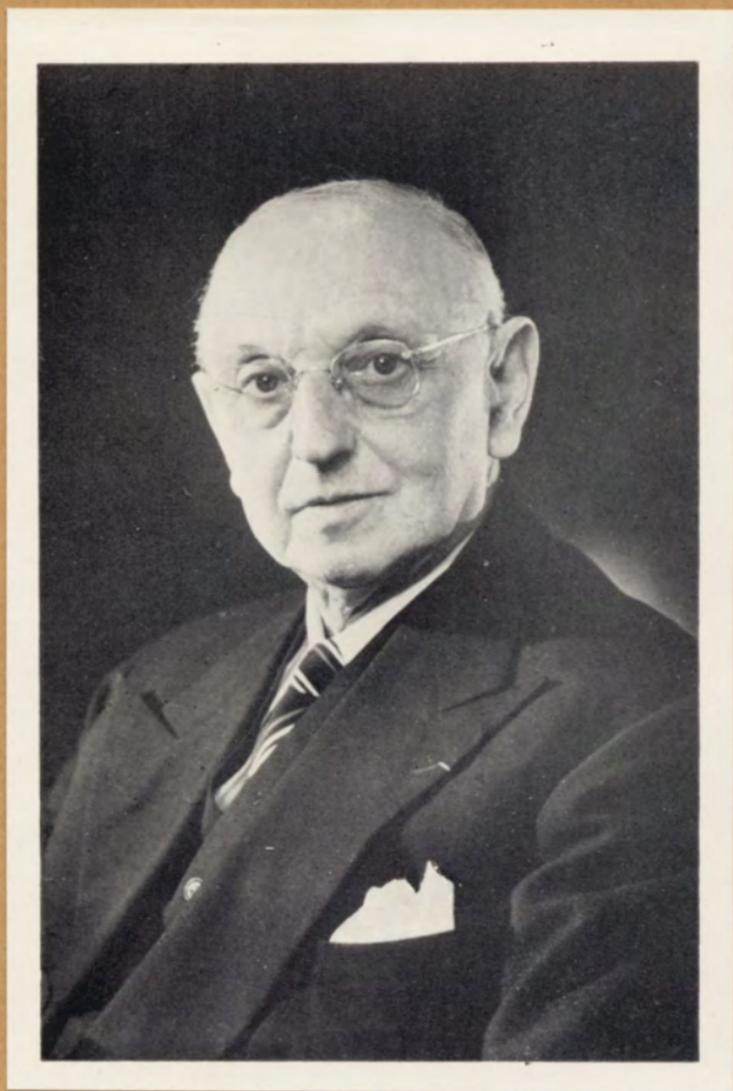
世界を再造する

REMAKING
THE
WORLD

フランク・ブックマン

世界を再造する

フランク・ブックマン



フランク・ブツクマン 博士

目次

フランク・ブックマンについて	一
第一部 危機に立つ世界	
MRAの発足	三七
誕生日にあたって	三三
ギリシャに与えるメッセージ	三七
宗教復活・革命・文明復興	三九
政治家の新しいタイプ	五一
ガイダンスか、大砲か	五二
岐路に立つ人類	六一
秤をかたむける	六二
偉大な解決への指針	六〇
混乱に対する神の挑戦	六四
労働界の精神的遺産	六六

M R A は国の必需品	二四
全米記者クラブへの報告	二七
真のアメリカの背骨	二〇三
光をともしられたアメリカ	二〇六
新しい世界の予告篇	二〇九

第二部 戦争の勃発

新しい武器が必要である	一一五
一つの確かな希望	一二九
忘れられた要素	一三一
世界の危機に答える世界的哲理	一二六
耳を傾ける数百万人	一四三
新しい精神の興隆	一五二
M R A と国防	一五五
訓練された勢力	一六七
世界を再造するもの	一七一

第三部 真のデモクラシーのイデオロギー

思想戦	一七五
-----	-----

世界哲理……………	一八九
十字架の下における革命……………	一九一
善い道……………	一九五
危機に対する解答……………	二〇八
あらゆる主義に対する解答……………	二一八
解答はある……………	二三四
東と西の使命……………	二四四
生きる目的は何か……………	二五九
光をつけよ……………	二六七
電撃的な衝撃が必要です……………	二六八
第四部 世界をかちとる思想	
パン・平和・希望……………	二五一
混乱に應える新しい政治力……………	二五四
すべてのところ、すべての人のために……………	二六〇
精神界の電子学……………	二六七
考えようとしなない国ぐに……………	二七九
予期しない光の源……………	二八一
思想は新しい世界をつくる神の武器……………	二八四

神が解答です……………三三

第五部 初期の動き

基本的に必要なもの……………三六

新しい光……………三七

燃え立つノルウェー……………三七

神は世界に呼びかける……………三八

世界的解答の尖端……………三九

一つの心・一つの意志・一つの目的……………三九

北欧における奇蹟……………四〇

一番よい出発点……………四〇

めざめよアメリカ！……………四〇

神はアメリカを支配するだろうか……………四一

どうやって聴くか……………四一

革命をいやすための革命……………四二

国ぐにの使命……………四二

附 録

一	ブックマン博士を描く……………	四一
1	初期の頃……………	四一
2	いかにして始まったか……………	四三
3	フランク・ブックマンの秘訣……………	四五
4	ベンシルベニアの少年……………	四七
5	指導者としてのフランク・ブックマン……………	四八
6	世界勢力の成長……………	四九
二	奇蹟をつくる……………	四九
三	フランス語版「世界を再造する」の序文……………	五一
四	ブックマンの演説に関する記録……………	五四
1	ストリータ博士の講演……………	五四
2	クロンボークで歴史がつくられた……………	五九
3	デンマーク大僧正のステートメント……………	五四
4	ゲシュタポ報告……………	五六
5	アジアからの招請……………	五九

五	M R A と西欧キリスト教	五七
六	M R A とは何か	五八
あとがき		五九

世界を再造する

フランク・ブックマンについて

アラン・ゾーンヒル

筆者はオックスフォードのハートフォード・カレッジの理事でMRAの劇『忘れられた要素』の作者

フランク・ブックマンは、なだらかに起伏するペンシルヴァニア州のみどりの丘陵の間に立つていた。そこは彼が生れ、成長した田舎で、両親の墓もあり、また彼自身もいつかは永い眠りにつきたいと考えている場所なのである。強い感激にとらえられて、彼は長いこと一言も発せずそこに立つていたが、やがて静かに、「私は何とやら奇しき導きを受けてきたことだろう」と幾度か繰り返すのであった。

この人物の生涯と事業を説明しようとするものは多い。そして、人によつては、

彼に対して愛と忠誠を表わす言葉を使い、また人によつては、憎悪と偏見を表わす言葉を使つてゐる。そしてその何れ of 言葉も、ほとんど使いつくされたといつてよい。ところが、彼の生涯に対する彼自身の結論は、不思議にもそれらの言葉には何のかわりもない。ただ、いつも変らぬ「私は何という奇しき導きをうけて来たことだらう」といふ言葉だけなのだ。

そうした言葉を無造作に、自然に用いるこの人は、二十世紀の潮流の真只中に生きているのである。彼は人類を愛するが、それはただ漠然とした人類ではない。汽車で乗り合ふ人間といつた極めて具体的な人びとである。例えば彼は世界の大抵の都会に滞在しても、あたかもそこに半生を送つたかのような気安さをもつて生活し、友人の間に出入することができる。大小如何なる家庭に入ろうが、心からうちくつろぐことができる。彼は生を愛する。彼にとつて生は一人びとりの人びとそのものである。彼は愉快なことをたのしむとともに、苦痛を転じてよい收穫にする。極めて單純な日常の食事から、歴史を形づくる大事件にいたるまで、彼にとつて飽くまでも玩味すべく、体験とすべく、活用すべき何ものかでないものは一つとしてない。すべてがより

大きい計画の中に織り込まるべき何ものかである。

彼は時代の人である、と同時に彼ほど時代に横溢するいろいろな問題に対して旺盛に体当たりして来た人はない。大量物質主義の時代に、彼は絶えず人を物よりも上位におこうとして斗つて来た。利己的な個人主義時代にあつて、彼は無私のチーム・ワークが有効なことを事実で示して来た。無神論的独裁制の時代にあつて、彼はデモクラシーの真の精神を再びよみがえらせたのである。

彼の業績を十分に理解するには、何はさておき、次の二つのことを頭におく必要がある。第一は、問題解決の鍵は理論よりも体験の中に発見されるべきであるということである。その体験が、長い年月の間にどのように花を開き実を結んだかについては、本書の読者は自ら判断することができるであろう。第二の点は、フランク・ブツクマンにとつてはキリストの精神について彼自ら得た事實は、大切にただ一人で秘蔵すべきものではなく、他の人びとのために活用すべきものであるということである。「神についての体験を消失してしまわないようにする最善の方法は、それを人から人へと分ちあつて、伝えてゆくことである」と彼はいう。各国で何百万の大衆が飢え渴くが

如くに精神的眞実というものを切実に求めているので、この方法が限りない発展性をもつていると彼は喝破している。

フランク・ブックマンに賦与された天資の中には、自分の周囲にいる一人びとりの個人に対して、真心をもつて接する一方、あらゆる国ぐにと世界全体が何を必要としているかを見失うことがないという素晴らしくすぐれた能力がある。しかも、その一方に対する解答は、同時に他方に対する解答でもある。

あるとき、聖オーガスチンは、自分の心の内における精神革命という奇蹟を体験してから、いろいろの奇蹟を信ずるのに少しも困難を覚えなかつたといつたが、フランク・ブックマンにとつても、彼自身を改変せしめた力がやがて世界をも改変し得る力となることに一点の疑いもない。

いろいろな革命がひんばんに起つている時代に、彼は一層大きな革命を育ててきた。その革命は根本的に、建設的に人間の心の問題を処理することによつて他のすべての革命に優先し、さらにそれらに解答を与えるものである。いろいろのイデオロギーが横行する時代に、彼はある一つのイデオロギーに大きな力を与えた。そのイデオ

ロギーは、人間にとつて最も深い必要に答えるものであるから、人間性と同じようにどの国にも通用する普遍性を持ち、その意味で分裂した現代の世界を融合する唯一の希望を与えるものである。

オックスフォード・グループ(註)およびM.R.A.の創始者であるブックマンは、一八七八年六月四日、ペンシルヴァニア州のペンスバークに生れた。彼の家族は、代々自由を愛する雰囲気の中に育てられた人たちであつた。今を去ること二百年前、彼の祖先はスイスのサン・ガレンの地をはなれて、若々しいペンシルヴァニア州に自由とチャンス求めたのであつた。こぎれいに整頓された農家と明い色にぬられた厩舎、掃除のゆきとどいた台所、真心こめてしつらえられた教会堂と墓地をもつた、儉約にして富裕なペンシルヴァニア・ダッチ^①と呼ばれる現在の部落群は、血液の内にキリスト教的デモクラシーをもちつつ育てられた過去の世代を物語つてゐる。ここには神を尊崇し、生を愛する人たちが住んでゐる。

フランク・ブックマンは今でも友だちをアレントアウンの簡素な上品な街路を通つて自分の生家へ案内するのが好きである。そこは彼が子供のとき熱心に画を描いたり、

魚釣りの遠征を計画したり、ことに友だちをもてなしたりした所なのである。ブックマン家は昔も人で一ぱいだった。が、幾年もたつた今日でも、フランクが生家訪問のために帰つて来ると、一、二時間の中には、もう昔の学友だとか隣人たちが詰めかける。フランクが子供のときの話だが、ある日、彼は十二人の少女をダンスに護送したという。その中の一人でも当日の楽しみにはずれることを彼は忍び得なかつたのである。コックのメリーがよくいつたことは、「フランクが帰りがけに街で幾人の友だちに会うかがわからない以上、晩飯のお客が幾人になるのかわかるはずはない」というのだつた。

ミュンヘン大学を卒業するほどなく、彼はフィラデルフィヤ市の最も貧しい方面に、孤児や貧児のためにホームを営んで、そこに住んだ。後年、彼がペンシルヴァニア州立大学内の宗教的事業の指導者に推されたとき、最も熱心に彼を援けた友人の一人はビル・ビッケルという男であつたが、彼は大酒のみの酒類密売者であつた。半生を一変したばかりでなく、ブックマンが学校を去つてからも後に残つて、長い間、歴代の学生に強い感化を与えた人物である。

ブツクマンの人となりも、その業績もみなすべてを捧げて人びとのためにつくす心から湧き出したものである。「個人個人に深い配慮をもつことに熱中しろ。」これがオックスフォード大学での初期の同志に彼が常にいつた言葉である。漠然と群衆とか大衆を相手にして一人びとりの個人を無視するようなクリスチャン的事業には彼は関心はない。「二階の窓から目薬を投げたんでは何の益もない」と彼はいうのである。

私は彼ほど早く、しかも的確に人の心の状態を看とる者に会つたことはない。多勢の人のいる部屋で、彼は特別に援助なり、激励なり、強い挑戦なり、露骨な警告なりを必要とする人に、敏速に目星をつけて、しかも誤ることがない。また、私は大きいあやまちをして、こっぴどく叱られることを予期しながら彼の許へ行くと、慈父の温かさで歓迎とをうけ、あたかも同じ過失者仲間がもつような完全な理解に接するのであつた。それと反対に、肩をたたいてほめてもらえることと思ひながら行くと、よこっ腹をコッンとこずかれて、成程と自分の動機の不純さに気がつくのであつた。フランク・ブツクマンは何人たぐひに対しても、予期したものは滅多に与えない代りに、殆んど常に最も必要なものを与える。人間理解は貴重この上もない彼の天資であるが、同

時にそのために払つた代価は高価である。彼は私にこんなことをいつたことがある。「私は神さまに、人に対して超敏感にして下さるようにと願つたが、後になつて、あいう願いをしなければよかつた、と後悔しそうになつたことが一度や二度でない」と。人びとをありのままに知り、しかも彼らが如何になり得るかを知ることが、絶えず犠牲が要求される、終生つづくところの人生の斗いに全面的に献身することを意味する。たいていの人間が心の中で他人のことを過小評価する一方、自分のことについても貧弱な幻^{まぼろし}しかもつていないのを見て、彼はもどかしさに堪えられないのだ。それは単なる事務員に対しても、台所で働くコックに対しても、国政にたずさわる閣僚に対しても、彼にとつてはみな同じように感じられるのである。

あるとき、彼はエジンバラ市のある晩餐会で一老婦人のとなりに坐つた。彼女は彼に向つて、「私はよい仕事に一生を捧げたので、今は死ぬ支度をするばかりです」と語つた。「死ぬ支度ノ」と彼はいつた。「なぜ、これから生き始めないのですか」と。その後、両大戦の中間期にジュネーブでオックスフォード・グループのために国際連盟への道をきり開いた人はこの婦人であつた。

一九二一年、フランク・ブックマンは、軍縮会議の代表者たちに会うべくイギリス代表部の軍事委員に招かれてワシントンへ行つた。当時、連盟や国際協定などがこの世界から戦争を一掃してしまふだろうとの一般の期待が強かつたが、しかし彼は、一人びとりの個人の性格を交える効果的な力が国の場合にも適用されるのでなければ、何事も成功しないだろうとの固い信念をもつていた。彼はワシントンへ行く夜汽車の中で、それまである大学内にもつていた良い職から身を引こうと決心するようになった。それ以来、彼は俸給というものを手にしたこともなければ、世間的な地位の安定というものを得たことは一度もない。

ワシントン滞在三ヵ月後にして、彼は再びイギリスに帰つた。彼はイギリス聖公会の二人の監督ビショップに招かれ、前ぶれもなしに無名の人としてイギリスに渡つたのである。一人また一人と彼は英人に接して友人をつくつていつた。彼は当時の懐疑的な、そわそわした、戦争の痛手に満ちた人びとを愛し、またよく理解した。彼らの人生觀に静かに耳を傾ける一方、人間についての真実の体験談を語つた。議論に対しては、つねに体験談で答えたのだ。教人の指導的な大学生は、彼の周囲に集つた。大学当局にと

つて、問題^クであつた多くの人びとが、新しい精神のバイオニヤとなつた。やがてオックスフォードにもたらせられた光に対して、大学内の教会で感謝の祈りが公に捧げられるにいたつた。

そうした初期の数年間、彼の主なる仕事は指導者の選択と訓練とであつた。いろいろの人が彼の教えをうけに集り、生涯彼の許にとどまつた。キリスト教徒の生活について彼がどう考へているかは、彼自身の業績だけをもつては計ることはできず、彼の周囲に集つた人びとの質と成長ぶりによつて知り得るのであつた。他の人ならば組織を打ちたてるところを、彼は人から人へという有機的なつながりの育成に力を注いだ。他の人びとが宣言だけによつて世界に呼びかけているとき、彼は実際に世界を一つの家族に作りあげてきた。当時も今と同じく、彼は何人をも誓約や契約によつて、あるいは財的その他の関係によつて自分に結びつけることをしなかつた。彼を中心として何千という人たちは、打ち破ることのできない深い思いやりと全幅の真心で強く結びついている。彼は指令というものを一度も発しなかつた。各人は自ら直接に神によつて導かれるという自由をもつていたのである。

彼の仕事は年ごとに大きくなり、国から国へと拡がった。一九二八年には、ロイズ奨学金をうけていた南阿連邦の学生や他のオックスフォード大学生の幾人かが南アフリカへ旅行した。彼らは自らの体験による燃えるような信念を南アフリカの人びとに語った。彼らの旅行は南アフリカの話題となつて、一行は、オックスフォード・グループとよばれたのであるが、爾來、その名称は彼らとともに全世界に行きわたるにいたつた。その翌年、さらに大きな団体がブツクマン博士自身に率いられて再び南アフリカを訪れた。それから十二年後の一九四一年、戦争のために南アフリカには民族的な緊迫した気分がまき起されていたのであるが、大蔵大臣でスマッツ將軍の右腕といわれるヤン・H・ホフマイヤ、その他有力な南アフリカ人は、「ブツクマン博士らの訪問は国家的な意義をもつものであつて、黒人と白人、オランダ人とイギリス人の全国にわたる人種的和解に大きな恒久的な影響力を与えた」との意見を発表した。

年がたつにつれて、彼の仕事は新しい活動範囲を増大していくとともに、一層の緊急性をも帯びるにいたつた。一九三〇年代の初め頃、私は金色に輝いたイギリス特有の夏のある日に、彼と一しよに歩いたときのことを思い出す。そのとき、私たちが通

りかかつた古い家々の美しさを讃えると、彼はいきなり口をはさんだ。「そうだ。だが数年たつと、これらの家は跡かたもなくなるよ——われわれが変らないことには」と。それを聞いた私は、彼がただ私を驚かそうとして大袈裟ないい方をしているのだと思つた。悲しいことには私と同じように考えた人びとがあまりに多かつた。

大西洋上を往つたり来たり、またアメリカに、カナダに、オランダ、スイス、スカンディナヴィヤに、その他世界いたるところに彼は旅行して休みなく働きつづけた。しかし、決して一人では旅行しなかつた。

かつては彼がほんの僅かな友とともに静かに訪れたところでは、今や幾百、否、幾千という活気に満ちて、つぎつぎとその精神をひろめる信仰をもつ人たちが働くようになつた。彼は名将の如き天才をもつて正しい時に正しい所で精神的勢力を集結して最も大きい衝撃を与えた。彼とともにあれば、凡人も非凡な事をなしとげた。政治家はあたかも信仰をもつ人のように道義的に行動し始め、信仰をもつ人は政治家のように国家的に行動し始めた。彼は多くの教会指導者に、よくいう「強大な軍隊のように神の教会は進軍する。」という言葉の全く新しい理念を与えた。

第二次世界大戦以前の事件に満ちた幾年の間、ブックマンの下に働らいていた同志の多くは、自分たちが築きつつあつたものが何であるかについて、その真の意義を理解していなかつた。彼らは大急ぎで靴をととのえては、世界をあちこちと動いていた。彼らはごみごみした場末の庶民街にも住めば、広びろとした邸宅にも住んだ。大聴衆を相手に演説して、その言葉は多くの国語に翻訳されたりした。ともに働き、ともに旅行した彼らの中には、イースト・ロンドン出身の民衆煽動家も、女王に仕える女官もいた。陸軍の将校たちも労働組合の指導者たちも、悠揚迫らざる東洋の哲学者もいれば、まだ十代を出ない騒々しいアメリカの少年たちもいた。それは一向問題にはならなかつた。彼らは、いずれも世界的な規模をもつ一大家族のメンバーであつた。彼らは階級なき社会であつた。真のデモクラシーの実行者であつた。彼らは個々別々には小さなことしかなし得ないが、チームワークをとれば素晴らしいことをなし得るといふことを学んだ。多少の苦痛はあるが、チームワークの魅力と威力とを発見した。「あれは小さい池に棲む大きな蛙だよ」とある有能な、しかし思い上つた人物をさしてフランク・ブックマンは時どきいつたが、あるとき彼は急に思いついたように、

「オックスフォード・グループは大きな湖だよ、小羊がわたつていくこともできれば、象が泳ぎまわることもできるよ」といい足したことがある。

この間、一方において独裁勢力が世界征服を目指して立ち上りつつあったとき、フランク・ブックマンの指導下にあつた、あらゆる民族や宗教に属する人びとは、一つの大きな解答となり得るイデオロギーをたえず学び、実践し、建設しつつあつたのである。いろいろな問題に悩まされた政治家たちがデモクラシーを口にしてゐる間に、ブックマンは生きたデモクラシーを築き上げるべく世界をめぐる歩いた。国ぐにが奴隸化されようとしていたときに、ブックマンはすべての国が正しく導かれるようにと働き、かつ斗つた。世界が軍備拡張に熱中していたとき、ブックマンはそれに劣らない大きな規模で道義的、精神的な再武装を実現すべく計画し、人びとに呼びかけていた。多くの人びとがキリスト教はもはや駄目だと嘆き悲しみつつあつたとき、彼は世界的規模で運動を展開して、キリスト教精神が実際に役立つということを実証したのである。

戦争になつた。MRAの人びとは何千となくその中にまき込まれた。彼らも他の何

百万という兵士と同じく戦線において、または淋しい前哨線において、汗と血とを流した。しかし、彼らはそれと同時に、それ以上のもの、すなわち前にのべたような比類のない訓練の成果を提供することができた。

銃後の同志は国内戦線（ホーム・フロント）において孜々として働いた。人間の感情は戦時には激化して、世界状況が本質的にどんなものであるか判らなくなるものがよくある。戦時中フランク・ブツクマンとともにあつた人びとは、彼がいかに正確な洞察力をもつて、目前の危機を透して、さらに前方に横わる一そう大きな根本の問題をつかんだかを証言することができる。当時の彼の演説を読むならば、明らかな証拠がそこに発見されるであろう。それらの演説は、デモクラシーの興廃が武力闘争の結果よりもデモクラシーの本質たる道義や精神の動員如何により多くかかっているとの彼の信念を明示しているのである。その動員が行われて初めてデモクラシーは物質主義のイデオロギー（極右、極左を問わず）を克服して、浄められ、高められて、世界の民衆に真の平和と待望の安定感とを与えることができることを信じていた。

戦争が終つたとき、MRAは前よりもはるかに強いものになつていた。そのころ、

M R A に対する非難や攻撃がなかつたわけではない。非難や攻撃が絶えるということ
は一度もなかつた。というのは、フランク・ブックマンの仕事は、現状維持に満足し
ている人たちにはまことに都合が悪いとともに、革命的な物質主義の勢力、およびい
ろいろの同盟勢力に挑戦状をたたきつけていたから、実状を知っているものは、M R
A に対していろいろな方面から反攻がおこるのは少しも意外と思わなかつたのである。
ある上級の陸軍将校は、M R A が遭遇する反対勢力の性質を分析したことがあるが、
M R A に食つてかかる点では、ナチも共産主義者も同じであり、政界における極左も
極右も、猛烈な無神論者も偏狭な宗教家も同じことで、M R A は、ある時には軍国主
義的と罵られ、ある時にはいわゆる反戦主義的だといつて非難された。労働界の一部
の人たちは反組合的だといつて攻撃し、一部の経営者側は組合に迎合するものだとい
つて攻撃した。前述の将校は結論としていつた。「道義的、精神的改革を世界的規模
において起し得る勢力なればこそ、このように毒を含んだ、そして互に矛盾し、しか
も全世界にわたつての敵意ある反対に会うのも当然である」と。

フランク・ブックマンは批評を求めはしないが、発表された批評の前にはたじろい

だことはない。それに対する彼の応答はアブラハム・リンカーンのそれと同じであった。「神がわれわれに示し給うた正義を堅持しつつ、着手した仕事の完成に邁進しようではないか」と。批評に対する唯一の決定的な答は、彼の畢生の仕事の「質」そのものの中にある、というのが彼の信条なのである。そして歴史という法廷に立つたときには、自分も批評家もそれぞれの成果によつて裁定され、評価されるのであるから、批評を恐れる必要は少しもないというのである。もともと聖靈に導かれていたのであるから、彼の仕事は力の源泉から切りはなされることはない。また、それはキリスト教の生きた真髄であるから、どこへ行こうがおさえきれものではなかつた。過去における記録は、それ自身を実証するに十分だ。今日そういうことよりも重要なことは、われわれの行く手に待っている大きな戦いにおけるその戦略的役割を理解するにある。

フランク・ブクマンの仕事で興味のある一つは、彼がそのメッセージを発表するにあたつて新しい形体を「靈感」にもとずいてどしどし創造し、活用して行くことである。十年、二十年前のゆつたりした時代においては、ハウス・パーティーが行わ

れた。ホテル、大学校、または田舎の大きな邸宅で催された友人の非公式な集りで、教会の門をくぐつたことのない無数の人たちが、うち寛いだ雰囲気の中で実際的な実用的な信仰を体得した。それから後になると、大きな国民的、および国際的集會が催された。本書に載っている演説の多くは、そうした集會で語られたものである。大戦初期の危急の時代には田卓會議が試みられて、経営側と労働側の人びとが新しい雰囲気の内會合し、古い、感情的になつた難問題の処理について新しい解答が発見されたことも稀でなかつた。そうした努力が実を結んでついに世界大会の開催となり、米國ミシガン州のマキノ島とスイスのコーに訓練センターが誕生したのである。

たいていの人は、仕事を自分の才能に合せて發展させようとする傾向をもつてゐる。ところがブックマンは他の人がよりよく仕事をできるように深い感動と刺激とを与えろというやり方をもつてゐる。最近、彼は以前のように多くの演説をしなくなつたが、その必要もなくなつたのである。今や全世界にわたつて、彼の訓練したたくさんのチームは書籍や、演劇や、映画やその他いろいろの手段とおして、個人をも國をもより優れたイデオロギーにひきつけつつある。

M R A の劇は、今ではイギリスにおいては炭坑夫や港湾労働者たちを観衆として迎えているかと思えば、アメリカのニューヨークのブロードウェイでは、批判的な観衆を対象に、またアメリカ南部では白人黒人の観衆を相手に、日本では農村において、あるいは北イタリーの工業都市において上演するかと思えば、ビルマでは僧侶の前に、またアフリカのナイジェリヤでは革命的な指導者を対象に上演されている。

これらの劇は、すでに何百万の人たちをひきつけた。しかし、これは単なる劇ではなく、その劇自体がすでに行動を起している勢力である。M R A に奉仕する人たちによつて、この劇は上演されるのだが、いたるところでストライキは解決され、賃金や労働条件は改善され、生産はあがり、欠勤は減る。多年の争いや不平などが新しい希望に変わる。それは労資双方や政府の中に人間愛が生れるからである。

劇と並行して、ラジオやテレビが絶えず用いられ最近では映画も利用されている。たとえば、アフリカはワイドスクリーンの天然色映画「フリーダム」を製作したが、これは純然たるアフリカ人によつて現地において製作された美しい映画で、製作後の一年間には、五大大陸の二十数カ国において、その国の指導者、国会関係の人たちばか

りでなく、商業的にも上映された。

MRAの訓練された勢力は、しばしば世界のイデオロギー的焦点においてコミニズムに勝る思想をもたらし、人種的偏見を処理し、あらゆる種類の行詰りや破局に解答をもたらししている。

フランク・ブックマンは、フランスとドイツの関係を改善した功績により、レジョン・ド・ヌール章を授与された。一九五二年に、彼はアジア七ヵ国の指導者の招聘に応じ、二百名のチームをつれてアジアに出向いた。彼がインドのニューデリーにいたとき、ドイツ政府は国家間の理解と平和を促進する彼の意義深い仕事を認めてドイツ最高十字章を授与した。

一九五六年の春、フランク・ブックマンはオーストラリアからイギリスへの帰途、再びアジアの数ヵ国を訪れた。東京、台北、マニラ、そしてサイゴン、バンコック、ラングーンと歴訪する彼は、その処どころで元首、あるいは首相に大切な友人として歓迎された。

日本では勲二等旭日章が授与され、鳩山首相はとくに彼を私邸に懇ろに迎えた。蔣

介石總統は中華民國大綬景星勳章を授与した。マニラではマグサイサイ大統領の賓客として迎えられたが、その際大統領は彼に向つて「多くの人は私に問題をもつてくるが、貴方は解答をもつてきてくれた」といつた。のちに彼は特使をロンドンに送り、フィリッピンの最高勳章リジョン・オブ・オーナーと金メダルを贈つた。ベトナムではデイエム大統領が、フランク・ブックマンを迎え「貴方のこの訪問は私およびベトナムの国民にインスピレーションを与えるものです。貴方の仕事は自由世界のイデオロギー的覚醒に寄与するところが多いでしょう」といつた。タイ国の空港につくや、首相自ら出迎え、後に王冠大十字勳爵士を授与した。ビルマではウーヌー首相が休暇中の山荘からラングーンにきて、フランク・ブックマンを出迎えた。のちに彼は「ブックマン博士は人種、階級を超えて人びとの心の深い必要に答えるイデオロギーを世界に与えた」と述懐した。

フランク・ブックマンの仕事のこうした多角性というものは、過去の因襲や先例から解放され、無私の献身という素晴らしい特質によるものである。しかしそればかりではない。それは彼が神の力を自らも知り、それを人に伝え拡大していくことが基礎

になつてゐるのだ。このことは十代の少年であらうが、八十の老翁であらうが、フランク・ブックマンとともに世界にまたがる戦線に立とうとする何びとにとつても必要欠くべからざるものである。

いろいろの機会に、聖光のひらめきを時どき身に感じた人は数限りもない。また星に導かれたものも多い。しかし、フランク・ブックマンの場合においては、詳細な、断えざる、そして正確な神の導きは、あたかも真昼の陽光のように自然で力強いものである。それは毎朝間違ひなく朝日がさし昇るように彼に新鮮に与えられるものである。自分が決して完全無欠でないこと、時には進路をあやまることもあるだろうと認める点において、彼は人後に落ちるものでない。また彼は自分にだけしかできないことを主張してはいない。

しかし、恐らくわれわれの時代の何人といえども、彼ほど全的に神の導きを生活のすべてとして受入れてきたものはないであらう。

本書に収められた演説は過去三十年間になされたものである。世界歴史上最も劇的

な時代のめぐるましい変転を背景として話されたものであるが、それにもかかわらず一貫したものが流れている。

フランク・ブツマンの経歴からみて今日、人びとに語る資格をもつているといえよう。彼の言葉が人びとの注目をひくのは、彼の業績よりもむしろその言葉が現代の問題の核心をつくからである。今日、世界には力強いイデオロギーが人びとの頭脳と心をかちとろうとして決定的に斗い合っている。その中には虚偽ではあるが魅惑的なものが多い。そうしたものは、人間だけを中心として発しているが、究極においては人を裏切り、人をさげすんでいる。自由を約束をするが事實は統制に終る。「人間は偉大であるから神は必要としない」と彼らはいう。ところが、人間はあまりにも弱いのですぐに独裁者に抑えられてしまう。「神の十戒を無視せよ」と彼らは人にいう。そうすると、人は間もなく幾千万の規則に縛られるようになってしまう。

こうした生半可な真理のもたらす混乱にたいしてフランク・ブツマンは、するどく、かつ簡明な、しかも人間性に対する鋭敏な理解と人を変える神の力をもととした普遍的な経験に裏付けられたメッセージをもっている。彼はたいへい単純な言葉を用

いる。日常語をそのまま使う。彼のつたえる真理そのものも簡単であるが、世界が救われる偉大なる真理であり、われわれの一生の間に世界を正気に呼びかえし得るものであつて、それなしには、文明は永遠に地上から消えさるおそれがある。

註 オツクスフォード・グループという名は、フランク・ブツタマンとともに世界を再建するために献身している人びとに新聞が与えた名前である。

・第一部・

危機に立つ世界

M R A の 発 足

一九三八年の初夏、ヨーロッパは神経戦におそわれていた。ヒットラーがオーストリアに進駐したので、民主主義諸国は狼狽して、国防施設の拡充を急いでいた。それと同時に、職争的なイデオロギーの挑戦に対して團結の精神が必要だということが、これらの国々に、ますます強く感じられるようになった。

一九三八年五月二十九日、イギリス労働運動の発祥地であるロンドンのイースト・ハム公会堂で彼のために祝賀会が催されたとき、ブツクマン博士はMRAを発足させた。

次にかかげる彼の演説を窺こうとして集まった三千にあまる大衆は、堂に溢れる盛況であつた。彼とともに、イースト・ロンドン地区の市長たち、

参事会員、評議員など六十人以上の人が壇上に座つた。その人たちの多くは多年労働運動を推進してきた斗士であつた。新聞、ラジオを通して、フランク・ブツタマンの提唱する考え方は全世界に広まつて行つた。

世界の現状は不安と憂慮の原因にならざるを得ません。国と国、労働者と資本家、階級と階級との間など、いたるところに敵対心が盛り上つていきます。憎悪と恐怖による犠牲は日一日と増大しています。軌轢と挫折とは、われわれの家庭の土台を破壊しつつあります。

このような時代に、個人と国とを癒し、満足な回復を早く与えてくれるという希望をもたらず療法はあるでしょうか？

その療法は、われわれが母の膝の下で学んでいるながら、すでに忘れてしまつたか、それとも、なおざりにした日常平凡な真理、すなわち、正直、純潔、無私、愛にもどることの中にあるのではないのでしょうか？

根本的にいつて、現在の危機は道義上の危機です。この危機に臨んで、国ぐには道義的に再武装しなければなりません。道義的回復は本質的には経済的回復の先駆をな

すものであります。絶対正直、絶対無私が満潮のごとく盛り上つて国ぐにを洗い流した場合を想像してごらん下さい。そこにどういふ効果が現われるでしょうか？ 税金はどうなりますか？ 借財は？ 貯金は？ 無私の大波が国ぐにをひと洗いすれば、戦争は跡を絶つてしよう。道義的回復は危機をかもし出さずに、生活の各方面にわたつて信頼と融合とをつくりだします。われわれはどうしたら急速に国ぐにに、この道義的回復を実現することができるでしょうか？ それには人間の性質を変えて、人と人との間に、党派と党派との間に橋をかけることのできる強い力が必要です。これはめいめいが相手の非をあばく代りに、自分自身の過ちを認めるときに始まります。神のみが人間の性質を変える力を持っています。

人間が聴けば神は語り、人間が従えば神は働く、人間が変れば国は変る、という忘れられた偉大な真理の中に秘訣があります。その力が少数の人の中に積極的に働くと、国家の問題も解決されるでしょう。指導者たちが改変すれば、国民の考え方も変る。そうなれば世界は安泰になります。

われわれは世界を再造する者——これは普通の人びとの考えであり、希望では

ないでしようか？ 大概の人間は他の人が正直になり、他の国が自分の国に対して平和であつてほしいと思います。われわれはみな獲ることを望みますが、指導者たちが変つたら、われわれは与えることを欲するようになるでしょう。この新しい精神の中に、経済的回復を麻痺させている諸問題への解答を発見することができるでしょう。

みなが十分に思いやりをもち、十分に分け合うならば、みなが十分にうるおうのではないでしようか？ 世界には各人の必要を満すだけのものは十分にありません。しかし、各人の食欲を満すに足るだけのものはありません。

このようにしてMRAの計画に参加できる失業者の数を考えてごらん下さい。国ぐにを安定にし、安泰と正気さをとりもどす仕事に一人残らずの人間が引きつけられ、糾合された状態を覚えてごらん下さい。

すべての人びと、男も女も子供も動員され、すべての家庭は城砦とならねばなりません。その目的は単に各人が生活の必需品を十分にもつばかりでなく、MRAを実現し、それによつて自分の国の平和と世界の平和を擁護する正当の役割をもつことです。

神は国民の一人びとりに靈感と自由とを与え、あらゆる政治的計画の基礎をきざく国家大の計画をもつています。

すべての就業者も失業者もMRAに参加すること、これがすべての人を人間と家庭と職域とを再造するため働かせるという最も大きな奉仕事業であります。あるスエーデンの製鉄工が私にいました。「精神の革命こそが、人間と産業とのほんとの必要を満すことができるほど徹底したものである」と。

また、ある労働組合指導者はいいました。「私は労働運動が勝利するのを見たが、勝利の中に一種の空虚を感じていた。オックスフォード・グループは私の生活に新しい内容を与えてくれた。私はオックスフォード・グループのもたらすものの中に世界の労働運動と産業の将来をひらく唯一の鍵を見出す」と。

人びとの中に新しい精神ができてこそ初めて産業の中にも新しい精神ができます。産業は新しい秩序の先駆者となり、利己主義の代りに国家的奉仕の精神をもち、神の導きを基礎として産業の計画を打ちたてることができます。労働者と経営者と資本家とが神の導きの下に協力するとき、産業は国民生活の中で本来の使命を果すようにな

ります。

新しい人、新しい家庭、新しい産業、新しい国、新しい世界。

われわれは、まだ神の心の中にある偉大な創造的源泉から汲みとつていません。神には計画があります。結合された国民の道義的、精神的な力をもつてすれば、その計画を見つげることができます。

われわれは、世界を再造することのできる強力な道義的、精神的な勢力をつくり出すことができます。否つくり出さねばなりません。必ずつくり出すのです。

この演説は世界各国の新聞に報道されたが、ワシントンのユナイテッド・ステイツニュース誌（同年九月六日付）の社説として掲載された。同紙の編集者デイヴィッド・ローレンスは、この演説を故ウツドロ、ワイルソン大統領の最後の一文、革命から離れる道（一九二三年八月アトランティック・マンズリー誌所載）と関連させて次のように紹介した。

「ヨーロッパではまたも世界戦争が起りそうな危機がある今日……私がこの二つの文をならべて掲載したのは、一九二三年ウツドロ、ワイルソン大統領が指摘した重大なポイントが一九三八年の今日、世界五十ヶ国で四海同歸の理念を現実的によびさましたつある優れたアメリカ人指導者フランタ・ブツクマン博士によつて、かくも雄弁にくり返されているからである。」

誕生日にあたつて

— ロンドン東地区家族におくる —

一九三八年五月二十九日イースト・ハム市公会堂において

今日、私に花をもつてきてくれた子供たちにお礼をいいたいと思います。その一人は十歳になる男の子ですが、こんな詩をくれました。

われらは進軍する

そして勝つだろう

神を指導者として仰ぐ時

われらは必ず罪に勝つだろう

われらは東西南北いたるところで

最善をつくして斗おう

静かに神の声をきき

間違う時にはひざまずいて祈ろうよ

われらはたのしく愉快だ

世界もこうすれば万事OKオケイ

良い詩ですネ、私たちがみんな万事OKといえたいしたものです。

しかし、誰かが始めなくてはなりません。

私も始めなくてはならなかつたのです。十七年前、私は一人で、人にも知られずイギリスに來ました。それというのは、私の知っている二人の人が、その人たちの家族を交えたいと思つたからでした。

こうしてこの仕事は始まつたのです。今でも覚えていのですが、イギリスのある町を歩いていたとき、静聴ガイレンツの時を通して教えられたことが、あまりに驚嘆すべきことだつたので、私は自分をつねつたことがあります。

一九二一年に、神は私に「この国に神の聖霊の力強いめざめがくるだろう」といわれました。

一人が変わる、町が変わる、そして国が変わるのです。

この機動的な勢力にすべての男女、すべての子供が動員されるのです。この十歳になるケン君にできるのですから、誰にでもできるはずです。イギリスを神の支配のもとにおくために、機動部隊の一員になることができます。機動的な部隊、進軍しつつあるものをみることができますネ。

あらゆる家庭が塞とまとなるのです。人を変えることを学びうる場所となるのです。国中のあらゆる処で、人びとを動員して、このことを行えばイギリス全部の道義的雰囲気の間もなく変えることもできましょう。

「イギリスと世界は道義的に再武装しなければならぬ。」神はとくに今年、この考えを授けてくれたのです。

神がイギリスの島々をその支配下におくためには、誰かが始めなくてはならないのです。あなたがその人になるでしょうか？ フランク・ブックマンという男が、ある

日、静聴をしたことが始まりで、それがやがて五十二ヵ国に拡まつたということなど忘れて下さい。問題はあなたなのです。

これが私の誕生日にあなたにおくるメッセージです。このことを学ぶのにどうしてこんなに長くかかったのでしょうか？ この狂気じみた世界で正気なのは神に導かれた人だけです。ロンドンの東地区のあなたがたが、世界を正気と安全にひき戻してくれるでしょうか？

ギリシヤに与えるメッセージ

フランク・ブツタマン博士の六十才の誕生日には、世界各地から愛情と尊敬の祝辞が送られた。これはその際、各国の友人たちの求めに応じて送ったメッセージの典型的なものである。

ギリシヤの友人たちから、私の六十歳の誕生日を記念してメッセージを送るようにとの求めに答えることは、私にとつて非常なよろこびです。というのは、私の六十年の生涯のうちの三十年の間に、私は偉大な貴国の立派な市民の方がたを多数友人とする光栄を得ているからです。この長い年月の交際ですから、よくわかるのです。

過去において、ギリシヤがいかに文化の敵を防ぎ得たかは、世界のよく知るところです。今日、ちがつた意味の敵が現われてきています。しかし、これは単一の戦場で処理することはできないのです。過去において、ヨーロッパを救い得た文化の力さえ、ある国においては、今日その目的を裏切る危険もはらんでいるのです。

今日の敵は、利己的な物質主義と道義的な無気力さです。これが国の病気の根本の源です。これに対抗できる力は、ただ一つ神に導かれた人びとだけです。道義的、精神的な敵に対して、われわれは、道義的、精神的な攻勢を展開しなければなりません。国ぐにの魂が危機にさらされているのです。

この決定的な斗いには、最大限の勇氣と、規律と、犠牲とが要求されますが、多くの人々が、ギリシヤのみなさんに期待をもつています。その人びとは、ギリシヤの偉大さは、過去にのみあるのではなく、現在と将来にあると信じているのです。ギリシヤが過去の偉大な伝統に忠実であることを確信しています。

(註) 一九四九年十一月、ギリシヤ国王ゴール陛下は、ブツクマン博士にジョージ第一世勲章を授けた。

リグアイヴアル・レグオリユーション・ルネッサンス
宗教復活・革命・文明復興

一九三八年の八月、スエーデンでは、民主主義系統の文化サークルや知識層、産業労働者の反応に答えて、ゴットランド島グイスグイで、M R Aの北欧大会が開かれた。スエーデンの、この「廃墟とバラの島」の廃墟となつている教会堂に、幾百もの人びとが集つた。他にこれだけの人を収容する場所がなかつたのである。

八月十六日の日曜日の朝、フランク・ブツクマンは、このグイスグイ大会で演説をした。その内容は、M R Aに引きつけられてはいるが、未だ十分、その目的をはつきりつかんでいない人びとに向つてのものであった。彼の目的とするところは、神の挑戦をまともにうけて、世界の危機に際して、国々にを救うことを、自分の使命と感ずる人びとを選び出すことであつた。

今日、われわれは融合された戦線をつくりたいのです。はつきりとわかっている根本問題は、われわれが神に導かれているか、いないかということです。われわれが慥巧かどうかということでもなく、またわれわれがどの国に属しているかということでもありません。われわれは、キリスト教徒としてここに集つています。神に導かれてゐるものとして、ここに集つたのです。ですから、われわれの權威の源泉は神の計画であります。

私がこの話を終るまでに、諸君の幾人かが、決心されることを希望します。われわれは、いろいろ異つた目的をもつて、ここへ来ています。ある人たちは改変チェンジされようとしてきています。それは非常によいことだし、また、非常に必要なことです。またある人たちは、他の人びとを改変チェンジする方法を学びにきています。それも非常に必要なことです。

しかし、危険なことは一部の諸君が、そこでとどまろうとすることです。私は第三の目的に大いに関心を持っています。それはどうしたら崩れさろうとする文明を救うかということです。それが私の関心事なのです。しかし、もう一つ、第四番目のねが

いをもつています。それは世界の何百万という人びとに到達したいということですから。これらのことは、みな自然の順序にしたがって起るはずのものです。いつたん諸君が変つたならば、自然に他の人を変えたいと思うでしょう。そのつぎには文明を救いたいと思うでしょう。最後には、世界の何百万の人びとに呼びかけたいと思うでしょう。それが自然の順序です。

ところが、罪というものがありません。諸君が罪というものを認めるかどうか知りませんが、事実存在しているのです。諸君のなかには罪の存在について大いに議論を闘わしい人がいるかも知れませんが、どうかそういうことをして今日一日をむだに過ぎさないで下さい。そんなことをすると、大切な要点から外れてしまいます。われわれは議論をするために集つたものではありません。建設的なプランをたてて、具体的に行動を開始するために集つたのです。

諸君のなかには、オックスフォード・グループから気持のよい、楽な救いを期待している人がいることを私は知っています。すなわち、宗教復活集会リバイバルというようなもの、言いかえれば安楽椅子のような宗教です。そんなことを考える人もあるのです。

だが、諸君がそこで歩みをとめるならば、まことに遺憾であります。もし、諸君がそこに停つてしまふのに対して、私が警告しなければ、私は諸君の敵であります。今日、そういう物の考え方をしている人は大衆を救うために十分に考え、本当に計画をたてているものとはいわれません。

今日、ただのリヴァイヴァル集会をはじめることには、私は興味をもたないし、そんなことで十分だとも思いません。思慮に富んだ政治家であれば誰にでも尋ねてもらんなさい。必ず、各国は道義的、精神的な目ざめを必要としているといえます。それは絶対的に、根本的に必要なことです。しかし、リヴァイヴァルは単に思想の一つの段階にすぎません。そこで止つてしまつては程度の低い考え方といわざるを得ません。もしわれわれが、それよりも大きなものをよび起さなければ、もはやおしまいです。

しからば、次の段階は何かといえ、それは革命です。革命は安楽なものではありません。その言葉さえいやがるキリスト教徒は少くありません。彼らはそれを聞いただけでも鳥肌になつてしまいます。そのような人たちが批判とやらをやりま。つま

り、安楽椅子のような宗教を奉ずる鳥肌キリスト教徒がいるのです。

今日、どのくらいの人びとが教会に行くでしょうか？なぜ教会が民衆の心に百パーセントふれていないのでしょうか？革命というものが必ずしも居心地のよいものでないことはわかっています。しかし、私は今日、諸君を喜ばせるためでも、また諸君に好かれようと思つて来たのでもありません。オックスフォード・グループが与えようとすることは精神の革命であります。

しかし、諸君のなかにはそういうふうに考えない人もいます。世界の最も懶惰な人びとのなかには、破壊主義的な革命の線にそつて考え、それを推進している人もあります。諸君に向つてはつきり言わしてもらえば、ここにいる人びとのなかには、現在のスペインの内乱を可能にしたと同じ種類の危険分子があります。もし、われわれがより大きな精神的な革命という理想をもたない限り、別の革命が可能になるでしょう。

そんな革命の無気味さを考えてごらん下さい。われわれは今日荒れはてた教会に集つていますが、一体どのくらい多くの教会が、今日のスペインで文字どおり荒廃に帰

していると、あなたがたは思いますか？ 破壊的な革命とはそんなものです。まことに居心地の悪いものです。ポイントは、キリスト教徒はヨーロッパを動かすようなキリスト教的哲理を築き上げることができるとしようか？ 諸君はそうした革命をなしとげるようなキリスト教徒ですか？ それが新約聖書に書かれていることではないでしょうか？ それが真のキリスト教的ということではないでしょうか？ 諸君はそれをやろうとしていますか？ それが諸君のプログラムですか？ 政策ですか？

もし諸君が、この戦線に参加する気がなければ、それまでのことです。私は諸君と議論する気もなければ、諸君を批評するつもりもありません。諸君はただ好きな方法で、好きなことをすればよいのです。それがデモクラシーに対する諸君の考えというわけでしよう。

私はそれを真のデモクラシーとは思いませんが、一般に考えられているデモクラシーとはそうしたものでしょう。その証拠には、民主主義国の市民で、言葉にも行動にも、デモクラシーの生命ともいえる内面的権威を承認しようとならない人びとが、ますます増加しています。めいめいが自分勝手の計画をもっていることは大したもので

す。自由なのですから、誰でもが好きなようにやれるというわけです。ところが、オックスフォード・グループではそうではありません。そこには真のデモクラシーがあります。人は好き勝手なようにやるのではありません。神の導くままに行うのです。神の計画を実行するのです。

私はここで革命家にとつて必要な特質を全部いうつもりはありません。使徒行伝や福音書にはすべてを献身した人たちのことが書いてあります。また全部を献身しなかつた人たちのことも書いてあります。革命に身を挺しながら、人によつては自己保身のための安定を求めている人がいますが、諸君はどうですか？ そんな型の革命家になりたいですか？ もしそうだつたら戦線のはるか後方に居心地のよい場所があるかもしれません。しかし、本当の革命家は最前線に立つてしよう。

それから第三の段階があります。文明復興文明復興です。個人の生れ変り、国民の生れ変り、国の生れ変りです。諸君はいうかもしれない。「幻想だ、幻想だ、幻想だ、狂気の沙汰だ」と。一体、狂気とは何をさしているべきでしょうか？ 何が狂気でしょうか？ 個人と国の生れ変りは、実現できるでしょうか？ 国の生れ変りとか、何百万の人の

とにふれるとかいうことを好まない人がいます。彼らはそのような計画を単なる宣伝だといつて嘲ります。旧約聖書を読んでごらん下さい。イザヤ書の五十二章六節から読んで見てください。ここでは第七節を読みます。

よろこびの音信をつたへ平和をつけ、善き音信をつたへ救をつけ、シオンに向いてなんぢの神は統治めたまふという者の足は、山上にありていかに美しき

かな

ここでは「つげる」といつていますか？　そうです、宣べ伝えることです。たくさんのキリスト教徒や伶俐な人たちが、このような他愛もないことで閉口させられるとはまことに驚き入った次第です。何かを打ちたてたいと思ふとき、宣伝をやつてはいけない、宣伝というのはすべて破壊のためのものではないでしょうか？　破壊のためのものでなければいけないのですか？

福音という語をごらん下さい。「善いニュース」という意味です。第一面のニュースです。ところが、それが第一面に掲載されると、人びとは反撥します。ある批評家が反撥しました。そして気の利いた文句をならべました。それが広く宣伝されまし

た。何のためにその男は気の利いた文句をならべたのでしょうか？ いったい、どうして人間がそういうことをすると思えますか？ 私がするとしたらどうしてでしょう？ もし誰かに、私の痛いところをつかれたくないときには、私はちよつとした防禦をしたり、ちよつとした煙幕を張るでしょう。今いつた男の気の利いた文句は毒ガスのように国中に拡がりました。ところが、普通の人は防毒面をかぶつていないのです。

わかりましたか？ 気の利いた文句をならべた男は自分自身の生活において敗北しているのです。それが敵となるのです。愛すべき敵であるかもしれませんが、それだけにいつそう危険です。彼は多数の人びとが真実のものを得るのを妨げているのです。人びとは敗北の穴に閉じこもつて出てこないでしょうし、そういう人には接触することはできません。そのような人びとの生活を救うことはできません。

人間というものは臆病で、ためらいがちで、批評を恐れるものです。批評は気持のいいものではありません。私はよく知っています。初めて批評をあげられたときには^{かいも}じ首で心臓を刺されたようでした。私は苦しみました。ですから私にはその味がよくわかります。しかし、諸君が本格的な革命家ならば、人が何といおうが見透しを誤

ることはいはずです。石がどこから飛んで来ようが、まつ直ぐに進むはずです。批評のつぶては人の心を引きしめます。かえつて、その日一日を張りきつてすごせるといふものです。

私は諸君がいろいろと準備して下さいたことや、多くの困難をのりこえたことに對して、深く神に感謝してゐるのです。しかし、まだまだ、われわれの陣営内には罪があります。その罪とは、程度の低い考え方、ということであるかもしれませぬ。

旧約聖書の詩篇第五十一篇を読んで見ましよう。それはすばらしい人間の体験です。それから新約聖書のなかに書いてあるキリストの十字架について読んで下さい。キリストの十字架の意味がわかるまでは決して、決して、その体験をすることはなしでしよう。諸君のなかには日曜日ごとに、その話を聞いている人がいるでしよう。しかし、それは体験ではありません。もし、本当に体験をしたならば、決してたじろぐことはないでしよう。

私は諸君に一つのことを約束します。私は後退しません。ほかの誰が後退しようとも、またその犠牲が何であろうとも、私は後退しません。私がいるからという理由だ

けで、諸君と一緒に来てもらいたくはありません。そんなことではないのです。そんなことだつたら貧弱な革命です。貧弱な同志です。キリストの十字架の光景をちよつと思ひおこそうではありませんか。もし諸君がこの大十字軍に参加するならば、十字架の道が与えられるでしょう。私は物質的な成功の希望で、諸君を釣ろうとはしません。また諸君が、英雄になるだろうといつて誘いもしません。この国ぐには、人間の生きるべき姿の模範を示すことができるかと私は信じていますが、それで諸君をさそおうとは思いません。十字架を自分自身が体験することです。私ではなく、キリストです。私が先頭に立つていゝのではない。キリストが率いていゝのです。

今日の午後にはいくつかの集会があるでしょう。法律家の集会も、教育家のも。みな大切な集会です。しかし、それよりもつと大切なのが一つあります。それは神と諸君自身とが会いまみえることです。他の集会への出席は全部取消してもこの会見には出席すべきです。今日の午後、諸君にとつて最大のこととは、一人で静かに、この革命家の同志の一人として戦線に立つかどうか、立つとしたら受け持つ部署を決めることです。すぐ決定しなさいとはいひせまん。諸君が決定しなければならぬことは諸君

と神と間のことです。一人でおやりなさい。紙に書きとめたかつたら、そうするがい
いでしよう。財産の譲渡の場合と同じで、それは証文です。革命家の同志の一人とし
て全面的な、そして完全な指導をうけるために、諸君の生命を神に引き渡す証文です。
そこで諸君は初めて自由になるでしょう。自由でありますから、真のデモクラシー
を知るようになるでしょう。これが私の挑戦チャレンジです。

コペンハーゲンの有力な労働新聞は、このことについて、次のように報道している。(ソー
シャル・デモクラチン紙一九三八年七月二日付)

「スエーデン全体に、ちようどデンマークや、ノルウエイと同じように、生きた活力のある
細胞がつけられた。とくに強い運動が、スエーデンの最も重要な工業が集中しているダラルナ
に起つている。この工業に働いている労働者たちは、自分たちがスエーデンの労働運動、およ
びスエーデン人全体の背骨としての責任を感じている。オツクスフォード・ダルーブは、とく
にこの労働者の間に深く入つていった。」

政治家の新しいタイプ

一九三八年九月、ヨーロッパが戦火の巻になろうとするかに見えたとき、第一回MRA世界大会がスイスのインターラーケンで開かれた。ロンドンでは防衛面がすべての非戦闘員に配給されていた。そしてハイド・パークでは、民衆が夜間に防空壕を掘つたいた。動員令は下つた。動乱の巻になろうとしていたヨーロッパの国々からインターラーケンに乗つていた若人たちは原隊に入るために召還された。

フランタ・ブツタマンにとつて、この大会は時代の運命をにぎっている人たちに向つて、正気をとりもどす最も肝要なメツセージを伝える絶好の機会であつた。彼の最初の演説は九月二日に次のように行われた。

われわれは、来るべき、恒久的な、正しい平和の立案者を育てあげなければなりません。世界平和のためにと言われている現在のいろいろの条件の中には、実は平和の要因でないばかりか、かえつて平和に背くものもありました。

国ぐにが重大な決定に迫られた危急な際にも、過去において、たびたび失敗したような人間の智慧よりもはるかにすぐれた、質々を十分に発揮できるような、精神をつくり出さねばなりません。

われわれは一見、不可能と見え、また人間的には絶望と思われる状態にも橋をかけわたさねばなりません。われわれは、各自が自分の困難を考えるばかりでなく、他人の困難をも思いやることのできる正しさを、持たねばなりません。すべての人びとに、満足と安心とを与え、政党、階級、派閥、国境を越えた解決を発見しなければならぬのです。

ヨーロッパ全体に覆いかぶさっているこの暗雲に対する正しい解答は何でしょうか？ 連日、ユングフラウの山上にかかっている、この不気味な雲をどうしたら払いのけることができましょうか？ まことに、山やまさえもが、かき乱されたヨーロッパ

バの気分を反映しているかのようです。

われわれは考えるにも、欲するのにも、生きるのにも全く新しいレベルに到達しなければなりません。完全にめくらでないかぎり、これ以外の結論を見出すことはできません。民衆は心配しながら、政治家や指導者の発言を待つております。その発言することを通して、すべての人びとは、彼らに最大限の安全が保証されることを望んでおります。民衆全体の心から生れる自由、平和、正義が危機に直面すると、少数の人たちの手に握られてしまうのです。

前大戦以来、一貫したオックスフォード・グループの目的は、政治というものまったく新しい模範を示し、まったく新しいレベルの責任感を与えることにあります。そうした能力は神の導きに生き、日日、神と接触し、日日、神に服従することによって改変された人びとにのみ与えられるものです。オックスフォード・グループの目的は、世界を再造することと永い間に得られた経験とによつて、いたるところで実験ずみの新しい生き方の原理を提供することです。

オックスフォード・グループが、いろいろの国ぐにでかくも効果的なのは、何か特

別の秘訣でもあつたのでしようか？ それは問題の根本、すなわち人間の心の改変チヤンゼンに
触れるからです。

われわれは、日に日に高まりつつある憎悪と恐怖による犠牲を解消しようという困
難な仕事を引き受けているのです。一見、われわれの仕事が成功するのは難しいよう
であります、しかし個々の人間が嫌疑と敗北主義の獄舎から救い出されるように、
国ぐにも恐怖、怨恨、嫉妬、無気力の獄舎から救い出されることは可能であります。
しかも、光を授けられた一人の偉大な預言者を通して、国が救われることは稀でな
いのです。歴史上、しばしばこのようなことが繰り返されているのです。一人の人に
それだけの力があるなら、光を授けられた一団の人びとが、まったく新しい世論
を各国内でよび起したならば、どんなことになるでしょう？

MRAが実現されるときには、国の面子を保つという考え方は、国の政策において
問題でなくなるでしょう。各国は新しい使命を全うするための新しい責任のなかに国
の威信を見出すようになるでしょう。

世界は今日、猜疑、恐怖、貪慾の雰囲気の中に生きています。世界は真の解決が政

政治家からばかりでなく、一般の人から与えられることを期待しています。政治家といつても、人間の知恵だけに頼るのでなく、神の計画を十分に認識し、それに導かれる政治家でなければなりません。世界の病気を癒すするには、適切な計画がなくてはなりません。神にその計画があるとすれば、神はそれを実施する器うつぐをも用意しているはず
です。

ガイダンスか、大砲か

一九三八年九月六日、インタラレーケンにおいて

世界は岐路に立っています。神の導きガイダンスか、大砲か、どちらかを選ばねばなりません。神の導きの声を聴くか、大砲の音を聞くかです。世界に新しい道義的雰囲気が必要だといわない政治家はありません。しかし、精神的指導力が要だといわない政治家はありません。しかし、精神的指導力が要だという偉大な真理を、口にするのと、それを実践して国民生活に生かすこととは別です。そこに問題の真の鍵があります。すべての人びとに、日日、神の導きをうける心を決めてもらいたいのはそのためです。そういう生き方をしないから、国民の生活も、世界の生命

をも飢えさせているのです。

精神的な指導力ということは、その言葉が普通に考えられているよりは、はるかに大きな積極的行動を内容としてもたねばなりません。誰かが精神的な指導力について語りますと、「ありがたいことだ、大切なことをいつてくれている、わしが出しやばるには当然、大丈夫だ」という人が非常に多いのです。それを聞いた人たちは「そうだ、そうだ」と賛成して、そして相変らず、てんでに勝手気儘なことをしています。

オックスフォード・グループは、利己主義に対して世界的な戦いを絶えずいどんでいる、各人からなる密集部隊で、彼らは、常に神の支配のもとに行動しているのです。それは前大戦以来、国ぐにの道義的復興のために人びとを絶えず訓練しつづけて来たのです。誰にでも変つてほしいと思う相手があります。どこの国でも変つてほしいと思う相手の国がすぐ頭に浮びます。では相手が変つたとしたらどうでしょうか？人びとが変り、そして他の人びとや国ぐにを交える力をもつとしたら、それこそ、われわれのすべての問題に対する正しい解答ではないでしょうか？ オックスフォー

ド・グループの信ずるところもそれです。それほど簡単で、自然で、当り前のことなのです。しかも、それがすべての人が待望しているところなのです。国としても必要なことなのです。どうして、われわれは、正氣の時代に入つて、それを実行しようとしないのでしようか？ 最も低い標準に照して見ても、それはすべての人びとにつて、大切な保障ですし、最少限に見ても、それは安全を意味します。神は十分な解答をもつていますから。

すべての国の、すべての人は神の導きに耳を傾けなければなりません。どこの国の、どの家庭にとつても、計画を神から授かるということが自然で、当り前のことになければなりません。産業において、工場において、国民生活において、国会において神に耳を傾けるといふことが、当然のことになるべきです。各国民は、それぞれの流れ儀によつて、その表現の形は変わるでしょうが、神に支配され、神に率いられるという点で、みな同じです。このようにして、神に率いられるとき、すべての人は互に理解し合うのです。

この哲理のなかに恒久の平和があります。他にはありません。どこをたづねてもこ

れ以外にはありません。それは神の支配から生れる平和です。神の支配とは神の導きを求めることであることはいうまでもありません。

神の導きに耳を傾ける——このことは今日、世界の政治において忘れられた大切な要素です。ところが、今でもある国ぐんにおいては、すべての国法は、少なくとも法令全書によれば、「神の指導の下に」制定されると書いてあります。すべての個人が神の支配により道義的に復興されたとしたらどうでしょう。全世界にわたつてそれはどのように強い力となることでしょうか。

それはわれわれの間にある潜在力——われわれがしばしば国民性と名づける間違つた遠慮のかげにかくれている潜在力を、十分に働かせることになるでしょう。もし、それらの潜在力が解放されて、神の下に集結されたならば、世界の人びとの考え方と生き方とを改変するに足る力を産み出すでしょう。

また、神に導かれる少数の人びとの内にも大した力があります。ジャンヌ・ダルクというような人物のことを考えてごらん下さい。彼女は自分の国を救つたではありませんか？ 彼女に來た神の声は、彼女の同胞にとつて正しい理性の声になりました。

それが現代の必要とするものです。神の声が再び、国民の意志とならねばなりません。
ん。

この神が支配するメッセージが届くところの数百万の人びとの影響力を通して、神が何をなし得るかを考えてごらん下さい。精神力は今なお、世界の最大の力でありま
す。

岐路に立つ人類

一九三八年九月十日、インターラーケンにおいて

今朝、私は、アルプスの連峰が暁の光に照り輝きはじめてとき、ユングフラウ山上に見える朝日の光を見ました。あれはヨーロッパと世界のために、新しい日を告げる神の光明となるではありませんか？ それとも、滅亡の運命にある文明の消え失せてゆく光となるでしょうか？ 世界は今、この歴史的選択の前に立つていっています。

今日の決定は歴史の手網をとりつつある少数の人びとの肩にかかつていますが、われわれ一人びとりも、「いかなる困難に遭遇しようとも、われわれの生活とわれわれ

の国は生ける神によつて絶対に導かれねばならない、われわれは世界のための神の計画を受け入れるものだ」との厳肅な決意をしなければなりません。

オックスフォード・グループは、国を支える、しつかりした基盤をつくります。それは国民に生ける神を意識させます。それは国民に対しても、^{ワグネル}導きへの服従^ノということを第一義的に提示します。

そうすることによつて、健全な家庭は、国を健全にし、神に導かれる立派な市民となるべき子供を育てます。そうすることによつて、道義的に健全な教師と学生とがともに神に教えられるようになるときに、教育は真の目的を達します。

そうすることによつて、産業にも希望がもたらされます。何となれば信頼が産業を発展させ、神に従うことによつて調和と能率がもたらされるからです。資本と労働は相携えて、手の指のように働きます。各人が労働を分担し、各人が国の資本を築き上げます。

ある首相が言いましたように、「政治がやりやすくなります。人が神の下で自らを治めることが多ければ多いほど、外部から治めるということが、それだけ少なくてよ

いからです。人が正直になればなるほど、税金は下ります。民衆は最も明晰に神に導かれる人を指導者にえらぶようになるのは当然であります。

MRAは、国民の血管のなかに、白血球と赤血球、すなわち、エネルギーと防護力とをつくります。ちようど健全な有機体が病気をいやすように、頽廃と分裂の毒素は廃除されます。

オックスフォード・グループは、国の問題を人間を通して答えていく有機体を築き上げています。その大事業を果すために、すべての男女が神の支配下に加わるようにいどんでいます。世界の再建にあなたはどういう役割をもちますか？ 神の命令の下に参加することを拒むものは、結局は世界を破壊する原因の側に加わるものとなります。戦時では、国家は国防のために全エネルギーを動員します。諸国民は共通の敵に対して、各自相互の相違をのりこえて大同団結に融合されます。例えば、地球が火星から途方もない大軍によつて侵入され、われわれの存在が脅かされたと仮定した場合、地球は挙げて自己防衛のため協力しないでしょうか？

現在すべての国民が肩をならべて斗わねばならない共通の敵はないでしょうか？

あります。恐れ、貪欲、怨恨という共通の敵は、国ぐにを破滅の土壇場へ導こうと、恐ろしい正確さで働きかけています。

個々の人びとに影響をおよぼすことのできないような方法が、どうして国ぐにに影響をおよぼすことができましようか？ 自分自身のあやまちを軽く見逃す人たちの説教や空念仏に、諸君は共鳴しますか？ もし共鳴しないなら、どうして国ぐにがそれに共鳴することが期待できますか？

ただMRAだけが、国ぐにを融合することができます。それは恐れのかわりに、信頼と感謝の念とをよびおこすものです。神に導かれる人びとによつて構成される世界的な有機体、すなわち信ずるに足る人類の一大家族のなかにすべてを結合するのです。

人類は岐路に立っています。われわれは自分自身のために、また、めいめいの国のために、最終的な決断を致さねばなりません。收拾することのできない暴力と暗黒への道、すなわち利己主義の道をえらびますか？ それとも、われわれがともに生きる道、すなわち神の下で正義、理解、平和という古い美德が、正気な人類を治める健全な世界への道、——十字架の道をえらびますか？

選択は各人にかかっています。誰もが神の導きをうけて人間の改造者となることができますし、神に支配されるすべての人はM R Aのための勢力となるのです。

この信念はあなたの中の心の中に情熱となつていますか？ もしそうであれば、それは火のようにあなたの国に拡がります。

生きる神の主権を受諾し、その下に動員されて自国のために斗い、そうして平和と新しい世界に対する人類の切実な渴望に答える人びとはどこにいますでしょうか？

秤はかりをかたむける

インターラークンで開かれた世界大会後、ブツタマン博士は九月十五日にジュネーブの国際連盟の午宴会に招待された。彼はノールウエーのハンブロー氏によつて出席の五十三カ国の代表に紹介され、次のように演説した。

危機に直面した場合には、われわれは、それまで認めてきたすべての価値判断を、検討し直す必要にせまられます。われわれが一般に認めてきた標準は、役に立ちません。すべての人びとにとつて、新しい生活の質が必要であります。われわれは、何かすぐれた質をもたねばなりません。怨恨、嫉妬、貪欲、見解の相異など、私ども

を最大の使命から遠ざけるものを越える、生活の質が必要です。

人も国も長い間、病的なものの考え方をして来ました。みな自己陶酔的な麻痺症にかかっています。世界は、それ自身の罪の毒素にあたつています。それ自身の利己主義のために目がくらんでいます。人は当然もつべきと知つているものよりも、ずっと低い標準をうけいれているのです。

普通の人間、および指導的地位にある人びとのものの考え方を交えるには、人間以上の力が必要です。まつたく新しい生き方を生み出さなくてはなりません。党派を超越し、階級を超越し、派閥を超越し、国家を超越するような生活の質が必要なのです。すなわち、神の支配が必要なのです。

神支配が唯一の、真の政策であるということを口にすると、それを国の生活に具現するのはまつたく別のことです。まつたく新しい布地を織り出さなくてはなりません。われわれは誰もが、初めは大きな希望をもつて開かれ、後には失敗に終つた会議を思い出します。しかし、もし会議が神に支配されたならば、人びとを驚嘆させるでしょう。そのような会議は必ず成功して、目指したことを達成するからです。

神の支配を目的とする偉大な政治家は、人類の病気を癒し、永続性のある平和をもたらすでしょう。歴史上の大人物は、戦争に対する解答を口に唱えるばかりでなく、それを実行に移すことのできる人です。他人の欠点を指さす代りに、自己の欠点を告白する勇気のある人です。

個人も国も懺悔の念をもたねばなりません。個人を目ざめさせれば、国も目ざめます。そのとき、われわれは新しい道義的雰囲気をつくり出し、現在の危機や願発する多くの危機に対して答を得るようになります。この偉大な仕事をするには、神と人との合一した英知をもつことを必要とします。

各国の政治家はだんだんに、これのみが恒久性のある仕事であると信ずるようになってはいますが、それぞれの国において実行に移す意志のある人間を育成することが必要です。ベルが電話を発明した初期のようなものです。取りつけもまだ不完全であつて、十分に聴きとりにくいというわけです。

敗北と勝利を両端にかけた秤はかりを傾け得るただ一つのもは、神の決定的な声であります。政治家と国民とが神の支配の下に結合することです。世界の政治家たちは新し

い時代と新しい道とを切り拓いて、新しい世界の平和建設者たる勇氣をもたなくてはなりません。

ノールウエー前国会議長C・J・ハンブロー氏は博士を紹介してこういった。

「われわれ国際連盟にきている代表の数名は、今日ここに集つてブツタマン博士とオツクスフォード・グループの人たちに会い、その話を聞くため諸君をお誘ひした。そのわけは、今日のような憂慮と恐れに満ちたときに、希望と、信仰と、力にふれることは最も重要だと考えたからであります。この人たちはわれわれの失敗した根本的な物に成功しているように思われます。彼らは国籍と政治上の主義の相違をこえて、人と人との間に親しい交わりを創りだし、われわれが何年もかかつてさがし求めながら、ついに発見することのできなかつた建設的な平和を築いたのです。そこで彼らにここへきていただいで多くの国々に推進してきたMRAの、その心構えをここでも教えてくれるようにと頼んだのであります。われわれが政治を変えることに失敗しているとき、彼らは人を変え、生きる新しい道を与えることに成功したのであります。」

ジュニナル・ド・ジュネーブ紙の主筆ジャン・マーテン氏はその数日後、同紙が発行したMRA特集号を世界各国の新聞主筆に送つた。それに添附された手紙の中には次のような言葉があつた。「ヨーロッパにどのようなことが起るとしても、MRAだけが頓発する危機に対する唯一の解決法であり、融和と恒久平和との唯一の基盤である。……現在の危機に當つて、各国の報道機関は世界与論の道義的再武装のため重要な役割を果すことができる。本紙もまたその目的に幾分でも寄与することがあれば幸いである。」

偉大な解決への指針

ミュンヘン事件の起つた一九三八年の秋、ヨーロッパは戦争の危険を感じていた。同年十一月十一日終戦記念日にロンドンでフランク・ブツタマンは現実の危機を直視することもなく、また個人的にも国家的にも徹底的改変の必要をも認めず、自分らの生活をそのままに保ちながら盲目的に平和を望む人たちの目をさませようと試みた。

私の愛する兄はフランスの墓に眠っています。休戦記念日には数々の尊い思い出がよみがえつてきます。フランスのその土地は、永久に私の心につながっているのです。そしてそこには永恒の印がついています。非常に多くの人びとが同じ運命を持つ

ています。

われわれはお互に大きな犠牲を払った同志です。どうしたら、再びこのような大きな損失がなされないですむように、この休戦記念日を意義あらしめることが出来るでしょうか？

その秘訣はあの二分間の沈黙の中にあるのです。あの貴重な瞬間に、われわれが国として、現実^{ガイダンス}に神の導きを捉えることができさえすればよいのです。

多くの人びとにとつて、あの沈黙の二分間は大きな経験とはなつていますが、十分にその目的を達してはいないのです。多数の人が、ぎこちなく感じているのです。多くの事が起り得るのに、実は何も起りません。何をしてよいか分らないのです。沈黙の間に、失われた最愛の人たちの面影をおもひ浮べようとします。われわれは何かを求めているのですが、それを捕えることができないのです。ただ何となく心が高められたような気分になるだけです。

深い悲しみも利己的なもので神からわれわれを遠ざけてしまうかも知れません。深い悲しみが神の实在感をぼやかし、そのために正しい解決を見出し得ないようにして

しまいます。利己的な悲しみにひたつている人は、自己憐びんに落ちいつてしまいますが、そのことは最愛の者が生命をかけて求めた悲願を裏切ることになります。その人たちは何時でも、危機から危機へ、問題から問題へとうつるばかりです。この利己的な考え方が、また別の時代に戦死者の墓を必要とする原因となるのです。相手の人や相手の国ばかりが問題だと思つて、自分や自分の国に対しては、全然建設的な解答を持つていないのです。

こういう人たちは面倒なことには関わりたくないと思い、自分たちの世代に何も与えることができないのです。

余りにも自分のことのみ捉われているので、神がこの世代にも計画を持つておられるということや、全然新しい人生観があるという偉大な真理を具現することもできないのです。

私が静かに聴くとき、どんなことが起るかをいいますか？ 先ず心に規律を持たせ、神に向うようにします。神の考えが私の考えになれることが分ります。神の心から人の心に、適確な直接的な、そして決定的な考えが伝つてきます。神が語るの

す。

ラジオがそのよい例になります。受信機があり、スイッチさえ入れれば、聴えるのです。それを分つていないはずの人でも聴こうとしない人が案外多いのです。我にこりかたまつた人たちは、聴きさえすれば聞えるという疑う余地のない真理、偉大な交響楽に耳を傾けようとしなくて、しゃべつて、しゃべつて、しゃべりつづけて行くのでしよう。神は国ぐにに對して計画をもつておられます。国ぐには全く新しい真理の体験を求めているのです。

われわれは国として、沈黙の間に、どんな犠牲をはらつても永続する平和の解答を発見しようという決意をもとうとするでしようか？ 休戦記念日は力強い解決の指針を与える日になることができます。休戦記念日の二分間に黙禱することが、毎日の習慣にもなるでしよう。二分間の経験が非常に満足を与えるものであるため、神の導きが、創造的な考えと日々の生活の源泉になることもできます。こうして沈黙が人と国とを調整するものになります。導きは沈黙の内に来るものだからです。

混乱に対する神の挑戦

一九三八年十一月二十七日に行われたイギリス放送協会主催の「真の宗教的体験」と題した一連の放送の中で、ブツクマン博士は世界の紛争に永続性のある解答をもたらすに必要な、個人的、社会的、国家的に行われねばならぬ革命的改革について語ったのである。

今日世界は、神の導きを待っています。現在われわれは世界始つて以来ともいうべき大きな戦いを斗つてゐるのです。この戦いは国と国との戦いではなく、混乱に対する神の戦いです。

今日世界は解答を待ち望んでいます。

神に支配された新しい人びと、新しい国ぐに、新しい世界、これが世界の危機に対する答えです。

真の宗教的体験は人を変え、家庭を変え、産業を変え、国を変え、力を持つていきます。今までに経験したことのない偉大な宗教的体験が現実とならなければなりません。それは、われわれの偏見や、個人的意見を超越したものでなければならぬし、これこそあらゆる問題に対する待望の解答だと誰もが直感できるようなものでなければなりません。

われわれの今までの宗教的体験という概念を考え直さなくてはなりません。その中には真実の力のない体験があることは認めなければならぬでしょう。ほんとうならば生命を与え、国をも形づくる体験であるべきものが往々にして何等の効果もなく、粗野で味気のない、つまらない、生ぬるいものになっています。間違つた道徳のために正しい宗教的概念がゆがめられています。われわれの精神生活が貧困なために、宗教が政治と実業とは無関係であると口達者にしゃべっています。

われわれの宗教経験というものが、余りにも長い間、低かつたので、もしもわれわれの考え方や行動や計画が、すべて神に支配されて、人に支配されなければアルプスの山々の高さにも似た高い宗教経験を持つことができることすら判らないのです。予言者イザヤの言葉を借りていえば「汝神なるが故に国ぐには汝のもとに集まる」のような力強い宗教経験を通しての新しい創造的な力を今世界は必要としています。

ルーズベルト大統領はいいました。「精神的目覚めの炎の前に溶けない問題——社会的、政治的、経済的問題——はないでしよう」と。

今日われわれは、歴史の流れを変えるような経験を創る代りに、流れに押し流されています。最近の危機に当つてすら多くの人びとは神にそむきました。人間の絶望は神にとつて好機です。エヂンバラのある地主の奥さんが私にいいました。「困つたときに祈ることは皆がすることだけれど、そうした危機がおこらないように、普段正しく生きることが大切ですネ」と。

どうしたらこの新しい生活の質を見出すことができるでしょうか？ 世界を変えることのできる精神をどうしたら捕えることができるでしょうか？ それは真実の宗教

経験を通してのみ可能でしょう。人の心を変え、社会の状態を変え、国の真の安全を確保し、国際間の理解を増すことができるのもこれです。これが真に効果的であるのは、神に源をおき、人間の性質を実際に変えることができるからです。このような体験を国民に与えることこそ国に対する最高の奉仕であるし、国の最高の目的であらねばなりません。この仕事はすべてのところのすべての人のできる仕事です。今日議論をしたり説明をしたりすることよりも、新しい人、新しい国、新しい世界を創りだすことが最大の必要です。

われわれは、個人的な宗教的経験の力を再び促えねばなりません。毎日、赤子が生まれるように、人びとが日々生まれ変わることには自然であるべきです。

ロンドン東地区のある婦人の日記を引用しましょう。この人は失業していますが、宗教的体験を人びともたらずという仕事についています。

「ロンドン東地区での私の生活は、毎日忙しい思いをしています。いろいろの困難にもめげず斗う人たちをみることは素晴らしいことです。私は八十六になる母親のいる私の生家へ行ってきました。東地区では、毎日人びとが生れ変わるということを話し

たら、みなが不思議がつていました。無信仰で何時も私をひやかしている兄は「お前のいうことの正しさがやつと判つてきた。僕も変らなければならぬ」といいました。私が帰る前の日に彼の妻は改変オムレンジしました。朝、五時前から起きて二人で話し合つていました。一人の妹とその娘も改変オムレンジかけていますし、弟夫婦と二人の息子も変わりかけています。

こんどの危機で、私たち女もいろいろ考えさせられています。明日の晩、東地区の年輩の婦人たちが集ることになっていますが、どうしたらすべての家庭をM R Aのセンターにすることができるかについて話しあうことが私たちの導きです」

これが失業者である婦人のしていることです。次にこの息子の日記をみましょう。「先週は、船造りの職人が一人改変オムレンジしました。昨晩はガス工事をしている人が変りました。この間、会合をしたときには牛乳配達人と八百屋が三人、洗濯屋が二人、電話の交換手が一人集まりました。あるところのストライキが調停されて、二百人の人が仕事に戻りました。」

この親子がしていることは国の模範ともなりましょう。こういうことが何千となく

繰返されることが失業に対する答です。神の計画の中に、失業などというものはありません。そこには真の平等と兄弟愛があるのです。すべての人が十分に思いやりをもち、分かち合うならばすべての人が十分に与えられるのではないのでしょうか？

毎日こうして古い人間を新しく造り変えていく仕事が続いています。真の精神的体験は加速度的に増加して一つの社会全体をも包含しうるのです。兄は弟に語り、隣人は隣人と語り合い、新しい精神は拡つていきます。一つの家庭が新しくなることによつて、百もの家庭が新しくなりうるのです。

改変された人間が新しい世界秩序の真の基盤です。ある著名な新聞記者は「今日の世界に残された唯一つの希望は、大きな規模において人を改変することです。」といっています。その他のすべてのものは失敗しているのです。軍縮も失敗しました。国際連盟もそれを企劃した人たちの目的を達成してはいません。人間のたてる計画は人間の性質のために失敗するのです。神の計画を試してみたらどうでしょう。あなたがたのうちでまだ納得できない人は、それを試してみるより他に途はないのです。

忘れてならないことは、真に効果的な宗教体験には道義的バックボーンが必要です。

数週間前にジュネーブである外務大臣（国際連盟での午餐会に出席したオランダのパナジューン外務大臣）が同僚に向つて、ある困難な政治的決定をしなければならなかつた時の経験を次のように語りました。

「最近、私は自分の国と紛争していたある国へ公使として派遣されました。この紛争でわれわれは負けたのです。そのときのことを報告をした新聞の書き方に私は憤慨しました。というのはまるで私の国を馬鹿にしたような書き方だつたからです。

丁度、その時、その国の主都で開かれた晩餐会で演説をしなければなりません。その問題について話すようにという提案がありました。最初私は拒みませんでした。然し、食事も終つて乾杯をする時になつて、この紛争について語るべきだと強く私には感じられました。私は主催者側の国の勝利を祝つて、今後は両国が一層よい友だちになりたいと結びました。

その日以来、私の国に対する非難はあとを絶つてしまいました。何故、私があるような演説をなし得たかといいますと、その方が私が前に計画していたものより、神の意志に合つていたと強く確信したからです」

後でこの外務大臣は自国の国会で外交政策を説明して次のように言いました。

「将来に希望を約束する新しい精神生活が世界にみられます。それはM R Aの仕事の中に展開されています。

わが国の政府は、多数の国会議員と共に、M R Aの努力が例外なくすべての国ぐに力強く浸透することを望むものです。わが国としてもできるだけの支持を与えるべきです」。

彼は彼自身の国について、このようにいつたのです。あなたはあなたの国についてどう考えますか？

精神的な力の方が、物質的な力よりも強いことを、世界はなかなか悟りません。また如何なる政府が作り出す計画よりも、神の計画の方が無限に偉大であり、はるかに完全であることもなかなか悟りません。われわれに必要なものも聖霊の独裁です。

平和を作る基礎としての国際連盟、その他如何なる国際会議をも成功させるものは、あらゆる政党、階級、宗派に属する国家的指導者に偉大なる精神的経験が必要です。

このような努力は神によつて方向づけられねばなりません。はつきりいいますが、他に道はないのです。

平和の計画は先づ自からの心に、ついで自分の家庭に平和を見出す秘訣を学んだ人たちに神が指示しなければなりません。そうした時に国際家族にも平和がもたらされるでしょう。

国際連盟にしる、平和会議にしる、新しく生れ変わった人たちによつて成功するでしょう。先づ新しく生れ変わった人を得なければなりません。そうすれば自然の順序として新しい国が生れるでしょう。そうすれば派閥の争いも、階級の争いも、利害の対立も、国と国との戦いもない新しい世界ができるでしょう。

このような真実は子供にも判ります。ロンドン東地区の十歳になる少年がいました。「世界の戦争をやめさせたかつたら、家の中の戦争をやめなけりやだめだネ。」本当に幸福な家庭を一体幾つあなたは知っていますか？ しかも家庭は国家生活の基礎なのです。

「私の家庭を支配するものは民主主義か独裁主義か」と自問してごらん下さい。おそらく民主主義を標榜する人たちが家庭で独裁者たる権利を保持していることがあまりにも多いのに気がつくでしょう。家庭で利己的である人たちは、利己的な世界に与

えるなに物ももつていません。

家庭の不和は国の不和をかもします。道義的妥協と紛争は国家生活の力を消耗させます。世界の平和を望む数知れない家庭が、家庭間での戦争を斗い、そのことによつて国の団結した力を減殺しています。その結果、民主主義は神によつて国が導かれるという経験をすることができないのです。

産業においても、しばしば忘れられた要素は神に計画があるということです。この忘れられた要素は産業界におけるあらゆる問題をとく鍵です。

産業に必要な公正な精神と能率とを作り得るものは、新しい精神をもつ人たちです。産業界は新しい秩序の先駆者となることができます。

八年間も不作つづき（昨年はずばつでやられ、今年はいなごの大群にやられた）のカナダのある農夫がいました。

「農夫として一番つらいことは、神との接触を切断されることです。」

今日、われわれは余りに人間の声を聞きすぎます。あきあきする程です。神の声を渴望せずにはいられません。そうです、神の声が国民の声となり、神の意志が国民の

意志となることを渴望するのです。

そうした時に新しい精神が国ぐににみちあふれ、すべての困難を打開し、見解の相違に橋を渡し、偏見にうちかち、基本的忠誠心をたかめ、国家生活に融和をもたらずでしよう。国をあげて偉大なる基本精神をうけ入れることができます。オックスフォードのある女店員がいました「イギリスに必要なのは神の靈感で書かれ、すべての人が書名した大憲章です。」真に効果ある宗教的体験こそ国の礎となるべきです。

決定的な今日、われわれの宗教的体験は再び世界をかちとる力強い動きをしなければなりません。残された唯一の希望は巨大な規模における力強い改変チェンジです。この改変チェンジはキリストを通して人間の性質におこる改変チェンジで始まります。

新しい人びと、新しい家庭、新しい産業、新しい国ぐに、新しい世界。

全部をキリストに捧げ、神に導かれた人を通して、またその人のために、キリストが何ができるかを世界はみようと待望しているのです。あなたがその人になれるのです。

全部をキリストに捧げ神に導かれた国を通して、またその国に対してキリストは何

をなし得るかをみようと世界は待望しているのです。あなたの国がその国になれるのです。

神によつて導かれた国は世界を導くでしょう。

労働界の精神的遺産

一九三八年十一月、ロンドンにおけるイギリスの全国労働総同盟主催の
ブツタマン博士のための午餐会における演説

私はここへ招かれたことを非常にうれしく思っています。労働者の福祉について最も深い関心をもつ人たちが、同志的な集まりを度たび持った思い出深い部屋で、昼食を共にすることは、まことにうれしいことです。ここでははずいぶん沢山の計画をねられたでしょう。ここに列席しているベン・テイレットやトム・マンのような古い革命家と一緒にいると、私は本当にうちくつろいだ気分になります。私は貴方がたの果斷

と公明正大さが好きです。あなた方は、迫害がいかなるものであるかを知っています。私も革命家なので、その味を知っています。大きな迫害をうけていたあるとき、神は私に「迫害は予言者をきたえあげる火である」という考えを授けてくれました。オックスフォード・グループは革命運動です。だから労働階級がそれを理解してくれるので、われわれもまた労働階級を理解するのです。両方とも革命のために闘っているからです。

今、私はそれぞれの方面の専門的な権威者で、豊富な経験をもっている方がたを前にして話しているのですが、わずか二十分間に、大切な問題のすべてを話しきることはできないことです。ですから私は、すべての重要な問題を解決するために必要なことは、新しい精神であり、また新しい精神をもつ新しい型の間人であるということだけをいいたいのです。

故ケヤ・ハーディーが労働界にもたらした新しい精神のことを考えてください。イギリスと世界とが、社会的に、経済的にケヤ・ハーディーに負うものを考えてみてください。

イギリスの労働運動は精神的覚醒の中から育つてきました。そのことが、社会的および経済的政策におよぼした影響は図り知れないものです。

われわれは貿易の復興、産業の復興を大切に思います。しかし、それよりも大切な要素がある——それがM R Aの目的であつて——精神的革命と社会的、経済的復興に導くところの道義的、精神的な復活です。ルーズヴェルト大統領がいつたことがあります。「社会的問題だろうが、政治的問題だろうが、経済的問題だろうが、精神的覚醒の火の前にとけないものは恐らくないでしょう。」

イギリスの労働運動とM R Aとは同じところで、すなわちイースト・ハム(ロンドン東地区労働者)で生れました。イギリスの労働運動を育てたと同じ精神がM R Aをも育てたのです。そしてM R Aもまた世界の人びとの心を捉えました。

イギリスの労働界の指導者たちは、このあいだ、デイリー・ヘラルド紙にこうゆうことを書きました。

「本来、世界の不安は物質主義マテリアリズムという根本病患の中にある。その物質主義は、この国とか、あの国とかでなく、すべての国ぐににまんえんしている利己主義、恐怖、貪

欲の中にその姿をあらわしている。われわれはみな罪深い。もしすべての国ぐにの労働者が、人間的、精神的の価値を、物質よりも上位におくという伝統に忠実ならば、国際的な障壁に橋をかけ、国と国との和解にも決定的な役割を演ずることができる。

そのとき、党派心と私利私欲の聲が効果的に処理され、恐怖は消え去り、人類のための神の偉大な計画を啓示され、表現されるといふ、非常な貢献を世界の情勢に対しなすであろう。これは初期のすぐれた労働指導者の力強い気構えであつたが、それをまた再現しなければならない。これがM R Aが労働界にもたらすことである。」

私は労働者の境遇を知るばかりでなく、味わつたこともあります。私はまず最初に、ある工業都市で少年労働者のためのホームで働きました。彼らに十分の食事と正しい環境を提供しようとしてました。その仕事の手始めは、たつた一つの部屋に住んでいた、あわれな一家族の面倒をみることでした。父はすでに施療院で死んでいました。母は飲酒狂、子供らは小さな野蛮人で学校へ行くのを罰と心得ていて、朝やつとのことで、学校へつれて行つてやると、昼ごろには、もう逃げ出して三日ぐらい帰つてこないといつたこともたびたびでした。なにか仕事につかしてやろうとしても、彼らにはちつ

とも興味がない。一定の時間、職場にいななければならないからです。一日に三度、ちやんと坐つて飯を食うということさえも、彼らには苦しかつたのです。その上に、私はその理事たちとうまくいかなかつた。彼らには栄養とか訓練とかいうことがわかつていなかつたのです。衝突してしまいました。そのとき私は、自分もやはりあの子供たちと同じように我意をとおしたいのだな、と気がつきました。同時に、われわれの社会問題の解決は、人間の心の中にあることがわかりました。私が変わると、周囲のものも気持も変りました。それから、協力し、融合することを学びました。

それは労働界が世界に与え得る大きな教訓です。

この間、労働界の人びとと会つたあとで、一人の指導者が私にいいました。「君はわれわれに新しい交りを教えてくれた。それは世界の交りの精神にならなければならない」と。

「われわれに必要なものは新しい融和です」と、今日、この席に婦人労働者たちといつしよに坐つてゐるある婦人がいいました。婦人たちは、主婦としてゼリーをつくるときのご存じに相違ないが、ゼリーになるためには固まらねばならない。

ゼリーに堅さと結合を与えるには、固まらなければならぬことを主婦は知っています。今日イギリスが必要とするものはそれです。固まらなければなりません。われわれは融和の秘訣を知ることが必要としているのです。

私は今日、アメリカCIO鉄鋼労働組合委員長からメッセージをもらいました。彼はイギリスの労働運動を研究するために、さき頃この国へきました。そしてアメリカの労働界のために一つの新しい使命観をつかんで帰りました。アメリカの労働運動は今、異常な状態にあります。分裂があり、指導者たちがみな一致してはいません。ところがこの男は、対抗している指導者たちのあいだに一致はありうる、彼らはみな変らねばならない、変りさえすれば一緒になれるということです。

この私の友人は労働運動のために働らき、一身のために何も求めていないことを、みなが知っているので、こんなことがいえるわけです。アメリカ労働界におこつた分裂からくる損失を考えてみてください。それが生産的エネルギーをどんなに涸渇させているかを考えてみてください。

かつて私どもが訪れたある国では、二つの政党が公然と相手を泥棒呼ばわりし合つ

ていました。ところが私も訪問したあとで、両政党の指導者たちは会合したので、そこから新しい融和が生れ、新しい政策が生れるようになりました。保守派が非常に建設的になつたものですから、労働派がそれに信任投票を与えるということになりました。労働派の領袖たちはいいました。「この基礎の上に立つて労働派の理念を考え直し、融和を打ちたてねばならない」と。

世界は新しい道徳的、精神的雰囲気が必要としています。オックスフォード・グループはどの党、どの階級、どの宗派の人びとでも、ともに生き、ともに働くことのできるような道義的、精神的雰囲気をつくりだしていけますから、国家にとつて必要なものであります。

労働界が融和すれば、国を融合することができます。神に導かれる労働界は世界を導くことができます。

註

ベン・テイレットは香港労働者の指導者であるが、ブツタマンの親友となつた。「僕はフランク・ブツタマンが好きだ。彼は簡明に話すし、人間を非常に愛するから偉大な男だ」といつたことがある。死ぬ間際に彼は博士に次のようなメッセージを送つた。「戦いつづける

第一部 危機に立つ世界

ように伝えてくれ。僕は成功を祈っている。彼をしていることは偉大な世界的運動だからそれを活用するように。明日への希望です。世界を正気に引き戻すものでしょう”

M R A は国の必需品

ミュンヘン事件の冬、イギリスは再軍備の必要を痛感していた。同時に責任ある指導者たちは道義的精神的備えの必要を感じてM R Aを全国的に押し進めていた。ロンドン・タイムズ紙や他の新聞紙の読者欄を使って国民に呼びかけた。

『モラル・リアーマノント』(道義的再武装)という言葉は加速度的に全世界に拡がって行つた。

次ぎの演説は一九三九年一月イギリス新聞協会の求めに応じてブツタァン博士が送つた新春のメッセージである。

M R Aは個人と国との道義的再武装です。

MRAは一九三九年の暗い予感と恐怖に対する正しい解答です。新年にあたつてもつべき最小限度の必需品です。

MRAはA・R・P（防空準備）と同様、大切なもので、恐怖をとりさるものです。MRAはすべての家庭の必需品です。

MRAは偏見から解放された生活です。それはすべての人が、党派、人種、階級、信条、意見、個人的利益を超越して、建設的な行動を即座にとることのできる公分母です。それは神の所有に属するものです。誰でもが欲している新しい考え方、新しい指導精神です。それは神が個人をも、国をも支配することです。それは神の導きもたらす知識と適確な情報であります。気狂いじみた世界に正気をとりもどす神の賜物です。

MRAは個人としても、国としても、絶対の正直、純潔、無私、愛を意味します。

MRAは人を変える力―友人ばかりでなく敵をも―相手と相手の国をも変える力です。MRAはすべての人びとに役に立つ良いものであると同時に、われわれにはとくに必要なものです。他の国ぐにの役にも立ちますが、われわれの国とわれわれ自身に

は特に役立つものでせず。それは人と国を利己的な心や分裂的な考え方に対して武装させるものです。

M R Aの目的は、二つあります。第一に国家生活を導く力として神の指導権を復帰させること、次に国民生活の道義を高めて、国の健全さを増すことです。M R Aは世界中のすべての人びとの心と家庭に入らなければなりません。

M R Aは人びとと国ぐにとを再建するため、時と競争しています。M R Aは平凡人に与えられた世界再建の好機です。

ナチスの指導者はM R Aを『世界を民主化しようとするキリスト教的衣』であると評した。ゲシュタポの発表したオツタスフオード・グループに関する報告は『ナチズムに対して妥協することなく戦いを挑むもの』として非難した。『オツタスフオード・グループは西欧民主主義の臭いが強い……ナチスの鍵十字の目的はキリストの十字架を破壊するものであるが、それに対抗して、オツタスフオード・グループはキリストの十字架をかかげて挑んでくる。』（附録

四の4参照)

全米記者クラブへの報告

一九三九年の春、フランク・ブツタマンは、M R A によつて訓練された百三十名の勢力をつれて三年ぶりにヨーロッパからアメリカへ帰つた。

この訪米の目的は、M R A の革命的思想を全アメリカに知らせることであつた。ニューヨーク、ワシントンおよび、ロスアンゼルスで開かれた大会を通じて、フランク・ブツタマンと彼のチームの語る言葉は新聞、ラジオを通じて全米に伝えられた。一九三九年五月八日ワシントンの全米記者クラブに招待された次の演説をした。

現代人は三つの大きな仕事に直面しています。平和を保ち、それを恒久的にするこ

と。世界の富と仕事をすべての人のものとし、何人の擄取にも委ねないこと。それから平和と繁栄とを、われわれの主人公としてではなく、われわれの僕しもべとして、新しい世界をつくり、新しい文化を創造し、そうして黄金を追う時代を變じて黄金時代にすることです。

人間は自力で黄金時代を実現しうるものとたびたび信じたことがあります。しかし、人間の知恵が不充分であることは立証されています。今日、われわれは知恵の極点までに到達しました。われわれがひとしく渴望する新しい世界は、われわれの知恵のみによつてはもたらされませんが、M R Aの仕事において神に従い、協力することによつてもたらされるのです。M R Aはその道を指し示します。それが現代人に対する神の解答であります。

現代が必要とするものは、神によつて設計され、すべての人びとによつて運営される新しい型のデモクラシーであります。

今日は諸君に、大西洋の向う側でM R Aに対してどのような広い反響があつたかについて概略を報告します。最近ロンドン・タイムズ紙、またその他の新聞に掲載され

た注目すべき一連の手紙はヨーロッパの人びとの注意をM R Aにむけました。国家生活の力として如何にそれが必要であるかは、政党を異にする一団の国会議員によつて署名された次のような声明書に強調されております。

「高い質をもたないデモクラシーは崩壊する。また自称審判官として他の制度を批判したとて、それで足りることではない。道義標準が低下して破壊的勢力の苗床となつてゐる時代において、デモクラシーは改めてその力の源泉を探究し、そうして道義原理の力を世に明示すべきではないか……M R Aの十字軍は、迅速に広まり、世界中の主なる斗争の中心点において和協の素地をつくつてゐるようである。このようなものが必要であるということは、心ある人びとのひとしく共鳴するところである……」

全ヨーロッパを動かした歴史的書翰で、その署名者の中にはイギリスの空軍元帥、海軍元帥、二人の陸軍元帥およびソースベリ卿やポールドウィン卿の名の見える重要なこの文書には、左のごとき文句が含まれています。

「故に現在、真に必要なことは道義的、精神的再武装である……この国および他の国ぐにおいて日に日に増してゐる一団の人びとは、それを目的に進んでゐる……もし

われわれが列国の人びととともに、今国防のために注ぎ入れることを余儀なくされているエネルギーと知能とをこの仕事にむけるならば、世界の平和は確保されるであらう。

神の生ける靈は個人も各国も同じように彼らが最高使命を達し、恐怖と貪欲、猜疑と増悪の障壁をうちやぶるようにと、呼びかけている。神の靈は対立抗争する政治体系を超越し、秩序と自由とを統合することができ、真の愛国心を再び燃え立たしめ、すべての市民を国家への奉仕を中心として、またすべての国を人類への奉仕において結合することができるのである。」

どんな世界的運動も、労働階級の支持なくしては成功することはありません。幸いにもMRAはこの支持を得ています。五百万の組合員を擁するイギリス労働総同盟の現議長および三名の元議長は、心の底から支持者になつて居るのです。これは誰でもが要求している新らしい考え方と新らしい哲理です。MRAはイギリス労働運動の発祥地イースト・ロンドンで育てられました。労働運動におけるケヤ・ハーディーの古い協力者の一人であつたトッド・スローンは次のことをいいました。彼は、商売は時

計修理師、生れつきは煽動家^カと自分を紹介する男です。

「このイースト・ロンドンで民衆は新しい指導力に飢えきつてゐる。彼らはこの新しい考え方を求めている。だからMRAはこのウェスト・ハムにきてから四方八方に拡がつていつた。今日、一家こぞつてこの^カ生活の質^カを生きつてゐる家庭は非常に多い。

私にはこれだけが意義のある革命である。人間の性格^{キョウ}の變化^{ヘン}——しかも、それは現実である。」

私の最後の言葉は、イギリスでの諸君^{シヨ}の同僚——新聞発行者および編集者から得たものです。彼らは業界雑誌ニュースペーパー・ワールドに一書を寄せて、MRAのプログラムは、^カ国家奉仕の基本的条件^カであるとの信念を述べました。

「責任ある自由の伝統を重んずるわれわれ新聞人には、MRAの特別の役割がある。このことはわれわれが、国内に融和をもたらし、積極的再建への意思を、新聞を通して創造し、鼓吹するために本気になつて当ることを意味する。それがわれわれの職業的自由を最もよく守ることができるとともに、われわれが即座になし得る實際的

貢献でもある。」

その一週間後に、同じ雑誌に新聞人の一団から次のような反響があらわれました。

「われわれ議会記者は、先週掲載された国民の道義的、精神的再武装において新聞がつとめ得る決定的役割を強調した社主および記者協会の代表者の手紙を歓迎するものである。」

われわれはこの理想のために不断に努力することによつて

全世界にかけわたすべき、

人から人への橋

をつくることを誓います。」

真のアメリカの背骨

一九三九年六月四日、ワシントンの憲法会館に開かれたM R A全国大会
において

M R Aは神の与えた思想の勝利で、それは文明を脅かす危機に対する解答として生れて来たのであります。古い真理が再び全世界中にわたつて強調されました。それは真のアメリカの背骨バックボーンであつた素朴な真理、すなわち神の導きガイダンスと心の改変トランスフォームとです。

これらの偉大な真理がもう一度把握され、実践され、元の権威に復活させられるべきであることに異存のあるものではありません。この真理は、実践されるとき、解答を

必ずもたらすでしょう。道義と精神の再武装（MRA）という言葉は到る処で人びとの注意を強く引きました。

将来の指導権は道義的勇氣ある人、即ち一ヤードには必ず三フィートを与え、一ポンドには必ず十六オンスを与える人の手に帰します。アメリカ人として、また愛国者としてわれわれは、MRAがすべての人びとが融合し得る最大公約数であることを認めます。物質的な完璧を目指す時代こそ、精神的力の時代の招来を必要としています。神の声は国民の声に、神の意思は人びとの意思にならねばなりません。それが本當のデモクラシーであります。

アメリカには実業界において、家庭において、工業界において、また中央、地方の政治において問題がないわけではありません。必要なことは国民が正直、無私、愛という基本的な道徳に再び献身することであり、そしてもう一度われわれは、分裂よりも融合するものを求める意志をもたねばなりません。それが新紀元、新時代、新文明の夜明けとなるのです。

将来は、ヨーロッパにおける少数の人びとが何をなすべきかを決意することにかか

つていただけではなく、アメリカにおける百万の大衆がどうするかを決意することにかかっているのです。

光をともされたアメリカ

一九三九年六月、ジョージヤ州のオグレッツ大学における講演。その
前日同大学はブククマン博士に法学博士の称号を授与した。

アメリカは戦争から戦争という危機を知らないかも知れないが、経済的危機はたくさん味いました。まるで経済恐慌から経済恐慌へ、ストライキからストライキへ移動しているようです。ヨーロッパに戦争が起つたら、アメリカはどうなるでしょうか？ エマーソンがいつたように若しもアメリカが世界に対する神の最後のチャンスであるとするならば、アメリカは変らなければなりません。ということは違^{ホエン}った国民とな

らなければならぬのです。新しい精神をもつた新しい人とならなければなりません。現代はスピードの時代であります。偉大なる新しい生産的な思想はそう容易に生れません。今日のアメリカは、すべてタプロイド版を要求します。これは粗雑な物質主義の所産です。すべての人が必要としている新しい考え方、新しい哲理を、僅か二十分で説明しようとするような人は天の助けを必要とします。

毎朝、神に聴くことを始めた時、私の生活には偉大な新しい革命が起りました。現代の危険はわれわれが聴かないことです。われわれは、只、しゃべりまくるばかりです、答は聴くことにあります。それが秘訣です。それは誰にでもできることです。

誰でもアメリカに光をともしたいと思つていますが、発電所なくしてそうしたいと望む人が多いようです。人びとは新しい精神をもたなければなりません。これを達成する鍵を大学は握つています。世界の危機にあつての大学の機能は、新しい文明を創り出す新しい人を創ることではなればなりません。

アメリカが国内で解答を生きる時、世界に向つて權威をもつて語ることができるとしようが、それには新しい国家生活の質をうけいれる必要があります。アメリカ自身

の生活の中に新しい要素をとり入れ、アメリカは他のすべての国ぐにに、それを与えるだけ大規模にアメリカはM R Aを必要とするのです。一つの目的、一つの心、一つの目標に向つて新しい団結を必要とします。海外での戦いに勝つ前にわれわれは自身のうち戦いに勝たねばなりません。アメリカは文明に全く新しい型を与えることもできません。機はすでに熟しすぎています。われわれは改変して国として声を一つにして世界大のメッセージを与えねばなりません。

新しい世界の予告扁

一九三九年七月十九日、カリフォルニア州ハリウッド・ボールにて

今夕、私たちはみな夢に描いた新しい世界の予告扁を見るのです。ハリウッドは
そのためには最もふさわしい舞台です。

MRAは普通の人びとに世界を再造する機会を与えます。それは世界が必要とする
ものです。だから世界的に反響が起つています。

恐怖と不安の暗雲は今、国ぐにの上に重く垂れさがっています。憎しみと恐れとは
信頼の根底をくつがえし、希望を破壊し、いたる処で猛威をふるつています。私ども

はみな、指導者も市民も、恒久的の平和を渴望しています。

しかし、平和を渴望するだけでは不十分です。新しい精神ができなければなりません。紛争の原因、利己主義、貪欲、憎悪に対しての戦いがなければなりません。この戦いに役割をもたないものは一人もありません。

MRAは黄金時代のシナリオ——神が監督する作品——新しい世界の試写であります。すべての家庭に親しまれているハリウッドは、MRAを国ぐくに伝えるための共鳴板となることができます。

あの四つの標準を見てごらん下さい。勢いよく昇天して星にまでも達するではありませんか。それはMRAの四つの標準——絶対の正直、絶対の無私、絶対の愛、絶対の純潔、個人にも国家にもあてはめるものです。それは個人的、国家的、国際的生活の四つの標準です。

アメリカのMRAは、あなた方と私とがこれらの標準に正直に直面し、勇氣をもつてそれに従うときにはじまります。

MRAは勝利します。団結した心の力をもつて進むからです。本当の愛国心の火を

呼び起すからです。恒久的な平和の秘密を蔵しているからです。

この日ハリウッド・ボールに開かれたM R Aの、同々にへの呼びかけ、大会には三万以上の大衆が参会し、他に入場できなかつたもの一万五千に上つた。ロスアンゼルス・タイムズ紙（一九三九年七月廿日付）は次のように報道した。「あるものは高級車でやつて来た。あるものは泥濘した自動車路をようやく走れるような古自動車でハリウッド・ボールへと向つて来た。徒歩で、バスで、タタシード人びとはきた。一人のこらずが驚きの心をいだいて集つてきた。ビルマ、ロンドン、東アフリカ、オーストラリア、中国、日本から指導的な人物が集まり、三万の大衆にM R Aの実際を示した。この大会はM R Aの運動のぼう大さを示した。

・第二部・

戦争の勃発

新しい武器が必要である

第二次MRA世界大会は、大戦の前夜、カリフォルニア州のモントレー半島に開かれた。危機に対処するには人間の知恵のみでは足りないということ、ますます明らかとなつて来た。解決を求めようとすれば間に合つたのであるが、その条件は厳しく、戦争の原因は深く国々の生活の中に巣喰つていた。MRAの解決は永遠の真理を基礎としたものであるから眼前の危機を超えて将来にまで及ぶ恒久的な道理が見受けられる。次の演説は一九三九年七月二十二日、第二次MRA世界大会において行われたものである。

一年前、われわれは戦争の脅威の下でスイスのインターラーケンに会合しました。当時、世界の注意を集中していた考えは「神の導きか、大砲か」でありました。月日のたつにつれ、この二つのうちのいづれかを選択しなければならぬということが益々明らかになりました。道義の再武装が世界問題の解決にとって絶対に必要な基礎であることが非常に明らかになりました。

そこで各国の人びとのしなければならぬことはM R Aに参加すること以外にはありません。

非常な危機に臨むと、人間は極めて自然に神にすがります。そして指導者たちが彼らを指導することを期待します。生死の運命を決する宣言がなされようとするとき、人間が当然の結果として受けなければならない運命さえも変えることのできるような勢力が、どこかで働いてはいないかと、絶望の中から希望の光を求めようとします。

われわれは利己主義に対して、史上空前の戦いを世界的に展開しているのです。われわれは新しい武器をつくり出さねばなりません。われわれは過去に生きることはできません。今日、われわれの政治のやり方を見ると、あたかも先祖の倉の中から出

して来た遺物をつかつているように思われます。当時はずいぶん役に立つたでしょうが、今となつてはすでに時代おくれで、われわれを敗北させ、無防備にする古物のように思われます。われわれは精神的武装というすぐれた力をもたねばなりません。われわれは再建のために、名将を名将にする特質をもたねばなりません——人格プラス世界を変える力が必要です。

現下の事態は、われわれを唯一の正気の支配、すなわち神支配の一点に集中してしまいます。私はある世界的政治家と懇談するために招かれました。彼は卒直に「自分は気の狂つた世界に生きているのだ」といいました。彼は気の狂つた世の中にあつて、正気のもものは、ただ神に導かれるものだけである、という偉大な真理がわかり始めたのです。

われわれは一つのことにおいて、みな一致しています——われわれは変わらねばならない、世界も変わらねばならないということです。もし人びとが本当に變つて、そうして他の人びと及び他の国ぐにを變える力をもつならば、すべての問題に対する解答となります。

M R A だけが国家の安全保障です。M R A は世界再建の基調となります。選択は「神の導きか、大砲か」であります。われわれは神の導きに心を傾けねばなりません。そうでないと大砲の音を聞くようになるでしょう。選択は恐怖の渦まきか、勝利の絵巻物かのいづれかです。

一つの確かな希望

第二次M R A大会の最後はサンフランシスコの世界博覧会会場で開かれ、多くの国々への代表はラジオを通して全世界に呼びかけた。一九三九年八月二十九日ブツクマン博士はアジアと南アメリカに向つて次の放送をした。

危機に対する恒久的解決は、あらゆる国々にの国民と政治家がおそれなくM R Aを
実践することにあります。世界の問題の恒久的な正しい解決の確かな希望は、この精
神が国際会議を支配することにあります。われわれは人の作つた計画、或は、あの国
やこの国の計画を考えずに、神の計画を考えなければなりません。われわれは再び危

機に直面しています。こうした危機がわれわれに教えることは、人間の絶望するときが、かえつて神にとつて好機であるということですが。

オックスフォード・グループは危機になれています。何故かというところ、M R Aは昨年の危機の暗雲に閉ざされた時期に生れたからです。M R Aは労働運動の発祥地であるロンドンの東地区で生まれました。十二月後の今日、M R Aは建設的解答のメッセージを全世界にもたらしました。それは病患に対する根本的な治療でありますから、非常なスピードで拡がったのです。

われわれは皆、新聞の見出しをよみます。しかし、よむだけでなく、それ以上の事が出来るのです。M R Aは見出しをよむすべての人に何かするチャンスを与えています。自分自身を見、自分の国の姿を見て変らなければならぬ点を見ることが出来るのです。人が変わる時、国が変わります。

M R Aは憎しみ、恐れ、貪欲から解放された人びとの世界的な結合です。M R Aは国境、階級、人種をも超えて働きます。M R Aの人たちは自分たちの国を神の計画する新しい世界の一部とするために働くことを神にも誓い、互に約束しあっています。

忘れられた要素

一九三九年八月廿七日、ブツクマン博士は、接近しつつある戦争を乗り越えて、新しい世界を創る希望は人類が根本的な道義問題に直面することだと世界放送を通して訴えた。

私は、人と人とを隔て、国と国とを隔てるすべての障壁を越える共通の生き方をMRAの中に発見し、かつMRAこそは危機に対する唯一不変の治癒であることを確信している各国の無数の著名人および無名人に代つてお話しします。

危機に対する解答はありますから、それを公表しなければなりません。

危機はわれわれの失敗の表われです。危機が破局に達する前に、われわれにはその原因を直視する勇氣があるでしょうか？ われわれ自身がその原因なのです。すべての国ぐにの、そしてまたわれわれすべての生き方が原因で、われわれは今日このような羽目に陥つてゐるのです。すべての国、すべての個人は現状に対して責任があるのです。失敗の責は一つの国だけにあるのではなく、すべての国がわかすべきものであります。われわれみなが悪いのです。何故なら、どこの国にも怨恨、分裂、破壊をかもし出す勢力が働いてゐるからです。国ぐにも個人と同じように、互に指をさし合つてばかりいて、自分自身のあやまちには目をふさいでゐるのです。利己的な人びとが第一線の墮壞を必要とさせてゐるのです。われわれの国をも、他の国ぐにをも、無私の波で洗うことが、戦争に対する恒久の解答となるのです。

われわれはみな平和を欲しています。協約によつて、連盟によつて、同盟によつて、制度を変えることによつて、経済會議によつて、軍縮會議によつて、それを求めたが得られませんでした。われわれは平和を欲しましたが、まだ平和の代価を払つたことがないので、すなわちわれわれ自身や、われわれの国が正しくなかつた点につい

て、神に直面し神の導きのままに、過ちを正しくするという代価を払つたことがあります。

新しい精神は他国の過ちを指摘する代りに、われわれが自分自身の過ちについて正直に謝まるときに生れてきます。国人も、つまりわれわれ全部が、変わる必要があるという事実の中に和解の素地があるのです。今日の危機に際しては、指導者が変わるならば、国民を変えることができます。またもし国民が変わるならば、指導者を変えることができます。

今日の危機は道徳的なものですから、それに対処するにはM R Aの精神、すなわち正直、正義および愛の精神をもつてせねばなりません。M R Aは敵も味方も、他国も自国もおしなべて、すべての人間を変わらせる力を意味します。あなた方は予期しない逆説にも、備えていなければなりません。

すべての人は自国に対して責任があるのです。国民がこぞつて要求するならば、その国は正直な陳謝をして、過去のあやまちを改めるであります。

すべての人は直ちに果さねばならぬ役割をもつております。すなわち、自分自身の

心の改変を受け入れることです。毎日、神の声に心を傾ける決心をすることです。そして憎しみ、恐れ、貪欲から自由な世界をつくり始めることができます。

恒久的な平和のために必要な犠牲は、戦争が要求する犠牲にくらべれば物の数ではありません。

利己的で、恐怖にみちた世界が生ける神の声に聴くことは、今でもまだおそくはありません。外交において忘れられた要素は、神に平和のための計画があるということ、神に服従する人びとをとおしてその計画を実現する手段があるということであり、神に対する忠誠は、他のすべてのものに対する忠誠より高いものです。人類すべてが神に服従するときに、国々にはそれぞれ真の使命を見出すのです。それが本当の愛国心で、最高の勇気を要すると同時に、最大の力を与えるのです。

一国の最も確かな防備は、隣国の愛と感謝とであります。この精神で破局を未然に防ごうと努力し、万人が要望する憎しみのない平和を築こうと努める政治家を、国民は全力をもつて支持するでしょう。各国の政治家や指導者は、過去を正し、将来を建設するというこの計画に心を合せて働く用意があるでしょうか？

すでにこの偉大な真理を知っている何百万という人たちは、さらに他の何百万にそれを分け与えねばなりません。今日この放送を聴いている人びとが、MRAをすでに実行している何百万の人びとに、始める方法を教えてもらえば、世界が早く変わることを助けるでしょう。

われわれは今、国家大の考え方と行動とを必要とします。われわれが戦争をするのは、平和をつくることができなからです。われわれは新しい世紀を目指さなければなりません。新しい型の人、新しい型の家庭、新しい型の産業、建設的なプログラムの方によつて、戦争と産業の不安を駆逐してしまふ政治の新しい型を示さねばなりません。今こそわれわれは、正しい平和——永久につづく平和——の建設者を育成しなければなりません。

戦争の脅威がわれわれに価値判断の再検討を要求します。個人的に、国家的に神に献身することが世界的に必要な事なのです。文明の将来がそれにかかっています。

将来は神の声に聴き従う人と国のものです。

世界の危機に答える世界哲理

一九三九年十月、フランク・ブツクマンは戦争の前線を超えて、ヨーロッパおよびアジアに向つて一連の放送を試みた。つぎの放送はサンフランシスコとボストンから十月二十九日に行われたものである。この放送は印刷されて、イギリスでは二百万部が特に空襲の激しかったロンドン東地区や他の工業都市に配られた。

1

私は今日、MRAを将来の唯一つの希望として、憂うつな情勢にも拘らず、ますますそれに期待をかけている何百万という世界の諸君にお話します。特に私の念頭にあ

るのは第一線の塹壕内にある人たち、すなわち冷厳な現実と直面している人びと、戦争が如何なるものであるかを体験している人びとです。

だが今日、第一線の塹壕はどこにあるのでしょうか？ 現に多くの国では、非戦闘員でも防毒面をたずさえないものはなく、庭園には防空壕の掘られていない処はありません。これは新しい戦争の様相であつて、この戦争では、すべての人に責任があり、すべての家は前線の塹壕なのです。

われわれの和解の術は、戦争技術の進歩と同じようには進歩しませんでした。今や、破壊の術は生きる術を追い越しはじめています。前大戦後に通貨が暴落したように、われわれの価値観念も転落しつつあります。私の友人で、オックスフォードの哲学者のストリーター博士は、「知的に発育した民族は道義的にも発育しなければ滅びてしまふでしよう」といいました。

今日、われわれは岐路に到達しています。人間が支配しようとする文明は崩壊の危機に望んでいます。長い間つづいた危機から危機への循環は、ここで終らねばなりません。各国は危機をのり越えて、解答を見出さねばなりません。

新しい世界哲理が必要です。個人間、国家間に建設的な関係をうちたてられることのできる世界哲理が必要です。この高められた考え方と生き方から、新しい政治家と指導者とが生れてくるのです。

人びとが生ける神から導きを受けようになると、こうした世界哲理は地上に現われるでしょう。それは憎しみや、恐れや、貪欲から解放された生き方の中に見出されるでしょう。憎しみや恐れや貪欲の代価を考えてごらん下さい。人類は長い年月の間、仮面をかぶつて生活してきたために、今日、何百万という人びとは防毒面を持たなければなりません。何百万という人びとが、暗い都市の街路を手さぐりで歩かねばならないのは、諸国民が精神的な燈火管制の暗闇の中に生きて来たからです。何百万という人びとが、今日、空襲警報に耳を傾けねばならないのは、過去において、諸国民が神の声に耳を傾けなかつたからです。

危機はわれわれの思想と行為の破産状態を明らかにします。われわれは血眼になつて即席案と便法とを探しますが、時間とエネルギーをつかい、究極の失敗は、われわれを神の支配の前にぬかずかせることになるでしょう。

人は今、人間の知恵が失敗に終つたことを認める段階に達しています。神に語つてもらいたいと願う心境は深まりつつあります。そのはずです。刻々に変化する、途方もない、誰もがいやがるような新聞の見出しを眺めて暮す人間が、絶望から逃れるには、それ以外にないでしょう。事象を解釈したり、形づくつたりするために、人は何らかの適切な声が必要としています。一時しのぎの便法は、神の導き、にゆずらなければなりません。神の導きは統制されていない必需品ですから、燈火管制下の闇に静かに待つてゐる時間も、あるいはかくされた恵みとも言えましょう。

世界は解答を待つてゐます。戦争は利己的な国ぐにの払う代価です。すべての人びとが手に入れることができ、すべての人びとによつて適用され得る簡単な、実行可能な解答をもたねばなりません。われわれは適切な平和をつくるばかりでなく、それを維持するように訓練された人たちを必要とします。多くの人は利己的です。から平和を欲し乍らも自分自身は争いをつづけたり、享楽に耽つたりするのである。あるアメリカの主婦は、こういう質問を出しています。「アメリカの利己主義と貪欲とは誰のせいですか？ 実業家に責任があるのですか？ 労働者に責任があるのですか？ それと

も全米の一般の人たちのせいですか？」と。

新しい精神が生れない限り、われわれは自分たちの利己心の代価を払わねばなりません。ある将官は先日、私に「国のために自分の利己主義を犠牲にするか、自分の利己主義のために国を犠牲にするか、どちらかです」といいましたが、それと同様に、われわれは世界のために自国の利己主義を犠牲にするか、自国の利己主義のために世界を犠牲にするか、どちらかです。

最大の罪は、われわれが適当な人生哲理をもたないことであります。生きることに ついてのわれわれの考え方——安易を求める軟弱な、自己保存の気儘な考え方は間違っています。われわれは徹頭徹尾、新しい生き方の内容と考え方を持たねばなりません。個人をも国をもこのように破壊するようになったのは、永い間世界の頭脳と思考とがサポータージュされ、空費されていたからにちがいないのです。私は蔣介石將軍の「平時にもつと汗を流しておいたならば、戦時にこのように多量の血を流さずにすんだであろう」という力強い言葉を思い出さずにはいられません。

われわれはこれまで自分の欲するように考え、生きてきました。これからは神の欲

するようにならば、生きようと努めてみましょう。他人に生きてほしいと思うように、自分が生きるべきです。他の国に生きてほしいと思うように、自分らが生きるべきです。そうすれば、われわれの国は新しい世界秩序の先頭に立つてあります。

われわれは平和について全く新しい考え方を必要とします。もしも平和な時代に戦争と同じ程度の献身が要求されていたら、とうの昔に戦争はなくなつていたでありません。

世界は憎しみと恐れに対して、個人的にも国家的にも支払い停止をすることを宣言すべきです。各国内の人びとが個人同志の間で永久に戦争状態をつづけている限り、われわれは国家間に平和を打ち立てることはできません。われわれが生き方の考えと質とを一変しない限り、ストライキと、労働争議と、戦争とは避けようがないのであります。

新しい平和協約は、すべての協約当事者、すなわちすべての国が憎しみ、恐れ、貪欲をなくして生きることの前提としなければなりません。平和は、誰かがつくらねばならないのです。平和は単なる抽象的観念ではありません。それは、人びとが変わる

ことです。われわれの多くは、相手が悔い改めることによつて平和をつくろうとした
がります。世界は、みなそんな風にしたがるのであります。けれども、われわれは他
国が先きに悔い改めるのをいつまでもまつわけにはゆきません。M R Aの行き方は、
「まずそういう自分から変わつてみる」というのです。

この協約にとつて必要な前提は、各国における各人が、将来、いつかは実現される
であろう休戦のときを待たずに、生き方の新しい質をいま直ちに始めることでありま
す。そうしてこそわれわれは本当の愛国者となるです。そうしてこそヨーロッパにお
いても、世界においても、あなた方の心の中に、あなた方の国の中に、法と秩序とが
現われるであります。また、そうしてこそわれわれは「これらの国ぐにが如何に
愛し合うかを見よ」ということが出来るのであります。

子供にはこれらの真理がよくわかつています。毎朝、両親とともに神の声を聴いて
いる二人の子供から送つて来た手紙の一部を読んでみます。十一才のケニーは「今が
私もアメリカ人のチャンスです。戦争がどうして起るかを僕は知っています。僕は
よく姉さんと喧嘩をしましたが、議論をしたり、神さまの命令と、神さまの四つの標

準にそむくときに喧嘩が始まりました。さようなら。ケニー」といつております。

姉のアンからの手紙にはこう書いてあります。「もし私たちが世界を変えようと思ふなら、神様のおつしやるとおりにするより他ないでしょう。そうでないと、神様は世界を変える力を私どもに与えて下さらないでしょう。それには、子供ときには第一に、父母と四つの標準とにそむかないことから始めることだと思ひます。子供でも、自分の国を変えようと思ふなら、そうするより他ないでしょう。私どもは今すぐに始めなければなりません。そうでないと、戦争がすめばみなが我儘を通そうとするでしょう。私どもに力を与えることの出来るものは神様だけです。その力がほしければ、私どもはそれを得ることが出来ます。」

これに対する私の言葉は「小さき童子わらわに導かれる」という一言につきまします。

鍵は神に聴くということにあります。人間は独りでは平和を創り出すことが出来ないのです。われわれは将来の正しい、永久の平和の建設者を育て始めねばなりません。明日の平和建設者のために、世界いたる処で、精神的に再武装された開拓者を育てねばなりません。

この機会にM R Aの呼びかけに応じられた、各国の皆さんに感謝します。今までに達成されたことは非常に大きな影響を与えています。賢明で深い洞察力をもつこれらの人びとは、M R Aが最高の愛国主義であることを感じたのです。

M R Aは各国の生命に絶対に必要な新しい力を注入しています。M R Aはあらゆる争いにおいて、神を不断の、そして最後の審判官とする新しい国家的融合の焦点となるでしょう。本当に融合された国民は神に導かれて生れて来るのです。この哲理は国民精神の主動力となつて、磁石のようにあらゆる建設的な力を糾合することになります。それは労資に新しい融和をもたらし、産業界の闘争と不安に答をもたらし、家庭内における戦いにも、世界における戦いにも答をもたらすことになります。M R Aは今日、破滅の瀬戸際に立つている世界を再造するという巨大な仕事の出来る指導者を訓練するでしょう。

2

只今こうして話している私は一秒の何分の一という極めてわずかな時間の内に、多くの国ぐにに住んでいる友だち、前線の塹壕内にある友だち、ラジオの波長を外界と

の唯一の連絡とする前哨線の人びと、遠い北方のスカンディナヴィヤ、インドの西北国境地帯、南アフリカの草原地帯、オーストラリア、ニュージールランド、蘭領インド、さらに地球上最も遠い隅すみに住んでいる友だちにさえも話しかけることが出来ます。地球のはてまでも、ラジオで運ばれる人間の声を、われわれはあたり前のこととしています。科学の奇蹟は、この世紀の驚異であります。だが、それらの奇蹟のすべてはわれわれの家庭へも、国へも平和と幸福をもたらしませんでした。われわれの必要とするものは精神の奇蹟なのです。

その奇蹟とは、神によつて定められた人類の使命です。そう考えない人がいるでしょうか？ 各国に、初期のキリスト教徒がもつていた信念と、炎と、情熱とを具えた固い決意に満ちた、神に導かれる人びとが出現したときにその奇蹟は現われます。現にそうした人びとの出現は待望されております。広がつてやまない、そうした人びとの影響力は何ものも防ぐことはできないのです。もし各国に、恐れから解放され、個人的および国家的野心を越えて、神の導きに従う新しい指導者が出現するならば、新しい国家精神も、諸国民間の新しい協力関係も時を移さず生れることとなります。

こうした哲理は古えの予言者によつて国家の歴史的基礎として宣言され、幾世紀も
の試練に堪えた来たものです。預言者イザヤはいいました、「又なんぢの子等は皆エホ
バ（神）に教をうけ、なんぢの子等のやすきは大きいならん……汝をしらざる国人はな
んぢのもとに走りきたらん、そはなんぢの神……のゆえによりてなり。」

ある大国の外相は、われわれの必要とするものは預言者アモスのような型の人間で
あるといいました。イギリスの労働指導者は大会中にアメリカの首都にMRAに關す
るメッセージを送りましたが、その中に「われわれは預言者ミカーの幻を現実化する
ような人を求める」という文句がありました。

MRAは予言者たちのメッセージを再び把握し、それに生氣を吹きこみ、再び生か
そうとしているのでありまして、すでに試みられ、試練され、確かなものであること
が明らかにされたものです。

テレヴィジョンは一つの偉大な真理を指し示します。普通の人も政治家も、物質面
におけるテレヴィジョンに対して、精神面において一対をなすもの、すなわち神の導ガイダンス
きを発見しなければなりません。ちようどテレヴィジョンが物質面において空間征服

の遠視であるように、導きは精神面における遠視であります。そしてその限度は、われわれにどこまで神に対する規律ある服従が可能であるかによつてのみ決まるわけです。

導きは、われわれが神と相通ずるときにきます。われわれの心を神の方向にむけることの手初めとして、喋ることの二倍聴くということが大切です。これがどうして始められるかという間に対する簡単な答です。しかし、世界を自己中心の癖から引きはなす術はここにあるのです。というのは、自己が中心になると個人の場合であらうが、国の場合であらうが直ちに戦いが始まります。恐れも、人を導くことができます。人は恐れているから利己主義に対して毎日斗おうとしないです。

導きは、精神的にも肉体的にも大衆を活かしてゆくための絶対的必要事です。また、それよりも一毫も減らすことの許されぬ最少限の必要事です。それは国家の血液であつて、それが絶えれば国は滅びます。政治家が、この生活の質を自ら生きるならば、神の心を国民の心たらしめることが可能になります。政治家たちにこの質が欠けているとき、国ぐにはその天賦の権利を売ることになるのです。「もし、われわれが神に

支配されなければ、暴君に支配されるでしょう。」とウィリアム・ベンはいいました。

M R Aは偉大な革命勢力の中核であります。私もかつて心の中で斗つていたことがあります。十字架の体験は、私を新しい型の革命家にしたのであります。

現在、われわれは利己主義に対し史上最大の世界戦争を斗つていゝのです。全員銃をとれ！ われわれは道徳的、精神的力をよび起さねばなりません。われわれは大衆を改変し得るような生活の質を生きる必要があります。過去数十年の間、そうした適切な行為がなかつたために今日、われわれは戦争のために高価な犠牲を払わされていゝのです。破壊の勢力に打ち勝つためには、今、われわれが建設しているよりも一層よく、一層賢明に建設することあります。

神は世界全体のためにも、個々の国ぐにのためにも、十分のプログラムをもつています。それはすべてのものに靈感と自由とを与え、他のあらゆる政治的プログラムに先行するものであります。われわれの目的は、各人が生活に必要なものを十分に持つばかりでなく、この精神復興を実現するために、みな正当な役割をもち、そうして自国および世界の平和を守つてゆくというのでなくてはなりません。このように、この

計画に参加したものは、みな自分に適した仕事をもち、それによつて社会、産業、国家の安寧と福祉に対して影響力をもつことができるのであります。

交戦諸国が民衆の疎開を行うのと同じ規模と親切心とをもつて、失業救済のために一種の国家的動員を行わねばなりません。失業者には、「自分らは無用の人間ではない。またなすべき仕事もある」ということを知ることから生ずる安定感をもたせねばなりません。このようにしてこそ各国はその全資源を活用し、真の安全を見出すことができるのであります。

われわれの眼前の必要事は、何百万の人びとが新しい世界を計画するということです。

それは単に幾人かの政治家にまかせるのでなく、日常の生活と実践に支えられた世界の融合された勢力が、利己主義に対して永久的な戦いを挑むことで政治家を支持することです。これができたとき、われわれは初めて本当に必要な事に近づき始めるのです。

ある国の労働指導者は、組会員が一千万になることを考えていました。世界を再建

しようという融合された勢力は少くとも一億人が神の命令をうけることを考えるべきでしょう。神に聴くときに、はじめて、人間の心を動かして、その考え方と生き方とを根本的に変えるすぐれた方法を知ることができるとしよう。この人たちは、比類のない、征服されることのない、抵抗できない勢力となるでしょう。

カトリック教徒と新教徒、ユダヤ人と他の民族とをくるめて動員し得る大勢力を考えてごらんなさい。精神的に再武装された人たちは、明日の平和建設者の先達となるのです。M R Aの門戸は万人に向つて開かれています。何人をも排除するものではありません。それは、生活の質です。M R Aには入会ということも、脱会ということもありません。生き方です。普通の人も政治家も力を合わして自国の重荷をせおえというのがわれわれの呼びかけです。各自が当然やらなければならない考え方も、計画も、生活も、政治家が代つてやるべきだという考えのために、責任はあまりにもしばしば少数の人びとにおおいかぶさつて来しました。

われわれは世界を再造しなければなりません。それがわれわれの仕事なのです。男も、女も、子供もこのために動員され、すべての家庭はこのための城砦とならねばな

りません。神の声を聴くという体験を始める無数の人たちの影響によつて、新しい世界哲理は威力を発揮することになります。もちろん、はじめは単なる初歩の体験にすぎないかも知れませんが、動員されたからとて、直ちに訓練ある戦士になれるものではありません。だが誰でも始めることができるのです。

今こそ、利己主義に対する世界戦争のために志願する好機であります。われわれは不断の戦士とならなければなりません。

われわれは今、新しい世界秩序への^{しん}闕を^こ跨ごうとする刹那にあるのです。

アメリカ南極探検隊長バード少将は出発前にこの放送に参加した。

「私が探検に行くのは未知の領地と海を征服した先駆者の情熱に動かされるからである。しかし今日、文明と自由を破壊しようとする危機に対して必要なは精神界の先駆者である。一國の防衛はその国民の質による。その質は自然に出来るものではない。自由を保つためにはすべての時代の大人も子供もそのために斗わなければならない。国民の質が低ければ自由は保てない。質の高い人は他の人に対しても思いやりが深い。隣人の事もよく考える。今日の世界では全部が隣人である。

MRAはそうした質をつくり出すものだ。これはアメリカにとつても世界にとつても必要な戦いで、これだけが破壊のための軍備を停止することの出来る唯一の武装である。

南極に出発するにあたって私はここにこそ平和の希望があるといいたい。

強く清純で融合された新しい世界を造るMRAの戦いはすべての愛国者の血をわかせて行動にうつらせるであらう。」

耳を傾ける数百万人

一九三九年十二月一日、二日、三日の週末に、何百万の大衆は世界的に行われた幾つかの放送を通じてM R Aの呼びかけを聞いた。十二月二日にブツクマン博士は短波で次の放送をした。

この歴史的な十二月の週末の計画に参加している多数の方がたのうちには私の知っている方も知らない方もおられますが、その皆さんにこうしてご挨拶できることを喜んでいきます。この国でも、また他のすべての国でもラジオに聞き入っている人たちは実に広範な層に亘っています。その中には政治家も、労働指導者も、実業家も、スポ

「ツマンも、勤労者も、理想の高い人もいるでしょうが、皆が共通の原理と共通の目的とによつて一つに結ばれているのです。人間の知恵というものが失敗に帰したという自覚によつて結ばれ、人間の便宜主義の代りに神の導きが必要なことを知つて、これらの人びとが世界再建にどんなにか役立つことでしよう。」

「アスロン卿は昨日ロンドンから放送されましたが、それは予言者の言葉にも似て靈感に満ちたものでした。この国アメリカでは下院の指導者バンクヘッド議長がアメリカとしてイギリスのアスロン卿と同様に永遠の真理を感銘深い迫力を以て次ぎのように述べています。」

「私はアメリカ諸国に向つて十二月の第一週末のMRAプログラムを開始することを喜ぶものです。この時に世界各国で人びとがMRAの挑戦を聴くことになつていきます。」

「つづいてこの新しい精神が首都ワシントンをはじめアメリカ各地に起りつつあることを述べたのち次のようにも語つていきます。」

「今日、われわれは歴史上重大な瞬間に立っています。尨大な力が既に動き出して

います。人類の中にある回復力を集結して、混乱にうちかつことのできる勢力があるでしょうか？ われわれがその気になれば他のすべての勢力に打ち克ち、将来の運命を決することの出来る勢力が存在しています。人びとと国ぐくに心の改変を迫る新しい精神は強力に進軍できるのです。神に聴き、神に従おうとする数百万の大衆の与える影響が集積して生れて来るのです。この精神に忠実であつた時代には、人類は繁栄し、おろそかにした時代には国は衰えています。

今こそ、われわれおよび子供たちのために真に愛国的な生き方、すなわちMRAの生き方を示す好機チャンスです。その備えあつてこそ、現代に迫つてゐる運命的な難問題を正しく処理することが出来るのです。」

テレビジョンの奇蹟的な能力が更に無限に広がつて、皆さんが目の前に今日各国で人びとが神の導きを聴いている感動すべき姿を見ることが出来たらよいのにと思わずにはられません。

イギリスだけでも、少なくとも二万五千の会が開かれ、みな聴いてゐるのです。イギリス全国の総人口の半分にあたる五百の都市の市長、町長らが心を一にして道義と

精神の再武装を宣言しています。

同じような反響が海を越えてイギリス連邦各国からも起つています。このアメリカの北の隣国はイギリス連邦の一部分ですが、そこにも全国的な関心が高まっています。トロント市の市長は他の市長たちと共にMRAのことを宣言し、それが全国に放送されています。

カナダの何百万というラジオの聴取者はどんな反応を見せるでしょうか？ カナダの総督の夫人ミント女史の姉に当るアントリム老伯爵夫人は今日ロンドンから放送しています。ミント夫人はカナダの将来について、次のような予言的なことを言っています。

「カナダが神の下に団結するとき、英帝国ばかりでなく、他の国ぐにをもふくめて平和な、そして自由な世界に導く歴史的な好機をうる事ができるでしょう」と。

オランダの各地で、事務所でも、家庭でも、教会でも、たくさんの人が集つて聴いています。「国ぐにを和解する国となるための生れ変り」というテーマで聴いています。アムステルダムでは、カトリックとプロテスタントの別なく、国会議員と市の指

導者が合同で市内の一番大きな会場を借り、多くの人が集つて聴く場所を提供しました。この放送の後の方で、オランダの本国ばかりでなく、海外の領土からの放送もあるでしょうが、どこでも聴く会をもつていゝのです。

北欧の各国もこの番組に加わるため、国をあげて努力してきました。いたるところで人びとはきいています。文化的復興の先駆となつていゝ人びとも、労働指導者も、作家も、実業家も、新聞人も、主婦たちも、みんなが聴いています。

フィンランドの婦人たちから来たメッセージの一部をご紹介します。彼女たちはフィンランドの大統領夫人が先導となつて、M R Aの呼びかけをしていゝのです。

「この方法で、わたしたちは、自分たちの生活を通じて、国の団結と力を増すことができます。すべての婦人をこのために動員したいのです。われわれをはじめ、北欧の諸国、そして世界のすべての国は神にきき、従う生活にもどらねばなりません。」

安楽な家庭生活を楽しんでいゝ人は、国に迫つていゝ危機に対して、手おくれにならない中に適切な行動に出る必要があります。神に聴くとき、与えられる導きと方向という新しい武器を国ぐに与えねばなりません。国の安全はその国の人が神に聴く

ことにかかつています。

自由と独立の精神に富んだスイスでも、全国各地で、各人種、各言語の人びとが集つてこの番組を聴いています。

いつも第一線で斗つているある若いスイス人でMRAのためにした仕事によつて国からも認められている人からこんなメッセージが来ています。

「新しいヨーロッパの建設は、古いヨーロッパの滅亡をきたそうとしている原因を現実的にみとめることによつてのみ可能です。世界の将来は、生ける神から受けた創造的な思想を実現するために自らを捧げて行動をおこす人たちの手中にあります。」

フランスでも都市や町村、農場や工場で、グループで聴く会をもつています。

政治指導者や作家たちが、ラジオや新聞を通じてフランス帝国の各地の人びとに訴えています。基督教的文化が彼らに与えた恩恵と、祖先の与えてくれたものに対して感謝し、そしてわれわれの過去の失敗と神の恵みを数え、道義の再武装(MRA)を国にもたらすための各人の責任について考えようと訴えています。

不屈の魂をもつた数億の民の国、中国も参加しています。三つのラジオが中国語と

英語でMRAのメッセージを放送をしています。中国語と英語の有力な日刊紙全部にMRAのニュースを掲載する計画ができています。中国語と英語のポスターやパンフレットも広く配布されることになっています。この貴重な放送の時間は余りにも短く、みなさんを地球のすみまでお連れすることはできません。

ただ、このアメリカの大都市で起つていることを申し上げましょう。その一つは、サンフランシスコです。この黄金の西部の大都会から三つの放送がなされ、その影響は全世界に及んでいます。

正十二時には、市庁正面の階段で、三日にわたるプログラムが宣言されました。サンフランシスコ市内の五つのラジオ放送会社も各々のMRAのプログラムを電波にのせましたが、話をした人びとの中には実業家、医者、新聞寄稿者、造船工や経営者もいました。

ロスアンゼルスでは、ミゾリー選出の上院議員トルーマン氏と市長のポウロン氏がこのプログラムを開始する先達となりました。

市長はすでに市長布告を発していますが、トルーマン上院議員の放送にあたって、

彼を紹介しました。アメリカ全土、西から東の沿岸まで人びとはこの放送をききました。これは世界的な聴取者のごく一部です。

道義と精神のために、ぼう大な数の大衆を戦士として召集動員しなければなりません。自分の個人生活と国の生活に意識的に、神を指導の座におく決心をした大衆を動員せねばなりません。強大な積極的な前進をするために、正義の勢力を召集せねばなりません。憎い行動をする者に対してさえも憎もうとする気持をしりぞける精神、相手が不公平であつても、不公平でありえない精神、相手が利己的である場合にも、無私である精神。そうした精神の持主こそ、神が平和を創る人として用いることのできる人びとです。

われわれは特に今日このプログラムを通じてはじめて決意をかためる人びとと、そしてこの宿命的な時代に効果的な解答を与えるために必要な規律を学ぼうとする人びとのことを考えています。同時に絶望の中から「われわれはすべての方法に失敗したから、最後の手段として神に求めたい」という気持になつている人びとについても考へていきます。

現代は平凡人の時代です。あなたや私のような百万の大衆が神に聴く大きな世界家
族として、世界の再造にあたるのです。

イギリスの指導者たちの言葉を次にご紹介しましょう。

「今日世界が滅亡の危機にのぞんでいる場合、今迄以上にM R Aの新しい勢力、正
気と秩序をもち、繁栄と平和の新しい世界を生みだす勢力が必要となつている。人間
の知恵が行詰つているこの時に、われわれは、至高の源泉から、新しい力、新しい希
望、新しい光を得ることができると、神は聴くことと、服従することを決心しているす
べての人の心に語る。」

ジョージ・ワシントン
は戦乱の時に神に聴いて、
国に自由を与えました。

ベンジャミン・フランクリン
は混乱の時に神に聴いて
国に秩序をもたらしました。

アブラハム・リンカーン
は危機にのぞんで神に聴くことにより
国の団結を保ちました。

あなたは今日、神に聴きますか？

新しい精神の興隆

イギリスでも、また「民主主義国家の兵器庫」になりつつあったアメリカでも、MRAは紛争の根本的な問題は道義的精神的なものであることを強調した。

フランタ・ブツクマンは自国の必要をはつきり見て、それに向つて斗い出していた。次に掲げる一九四〇年新春のメツセージでもわかるように、彼はアメリカの建国の偉大さと民主主義の基本的な信仰とを、くり返した。フランタ・ブツクマンとそのチームが劇を使いラジオを通じ、またMRAの訓練所での働きや工場における円卓会議を通じてアメリカおよびカナダでの戦争遂行のうえに大きな影響を与えた。とくに忘れられぬちの道義的、精神的要素を強調したことは、いろいろな困難な産業問題に影響するところが大きかった。

アメリカにとつて、今年は運命を決する年です。われわれは新しい世界の型を示す好機を与えられているのです。

アメリカの戦いは、産業界における協力と国内の融和ですが、それに向つて、すべての人を動員することがわれわれの任務です。

これ以下の目的はわれわれにないのです。このような大きな任務を遂行するには人間の計画では不十分です。基本的に大切なことは、新しい世界を可能にするような新しい精神をつくり出すことです。

この決定的な年に、われわれは歴史の方向を變えるような押えることのできない勢力をうち出さなければなりません。それがアメリカの運命でしょうか？ アメリカは新しい世界の基礎をつくる国となるでしょうか？ アメリカは人と資源とエネルギーをもつています。われわれが必要としているものは、新しい精神の興隆です。——政党、階級、人種、意見、個人的利益の相違を乗りこえた新しい精神の興隆が必要です。このような新しい精神をもてば、われわれは産業界の協力と国内の融和の模範をつくり、混乱から抜けでる道を世界にしめすことができます。(註) それには幻をもつた

人が先達しなければなりません。道義的に武装されたすべての人はそれを支持するでしょう。家庭でも、農村でも、事務所でも、工場でも、人びとは、わが国を偉大にした正直、無私標準と信仰にめざめています。MRAでは、すべての人に役割があります。

われわれが直面しているのは、国ぐにの滅亡か、新しい精神の興隆かです。これ以外に撰ぶものはありません。われわれは融和した、強く自由な新しい世界をつくろうとする人たちとともに、MRAのこの任務のために献身していくものです。

註 ワシントン・スター紙の一九四二年十二月一日付にダールド・リンカーン氏は次の記事を書いた。

「今回の戦争にアメリカが突入するずっと以前から、ブツタマン博士とそのチームは、將來の困難を見通して家庭および工場に基礎をうちたてようと努力していた。三年前に、MRAは全国的な運動として始まったが、当時すでにその価値が、指導者たちによつて認められた。その後、この愛国的十字軍は、英語を話す国々に燎原の火のごとく拡がった。そして、われわれにとつて最も必要な自己犠牲の精神と産業界の協力と国内の融和を促進してきた。」

M R A と 国 防

人間同志の争いに橋を渡そうとするMRAの運動は、戦時中は主に各国内で進められた。軍艦にあつたMRAの人たちは、その行くところどころで、MRAのメツセージを伝え、国々にや大陸を結ぶ役目をした。ヨーロッパやアジアで、戦争や占領を通じて、MRAの焰を心の中に燃し続けた人びとと、戦後最初の接触をなし得たのもこの人たちである。その多くの者は、勇敢な行動のために叙勲されている。彼らはMRAが戦争中に必要な力であるばかりでなく、戦後の世界への希望であるということを感じている。

次は一九四〇年六月四日、サンフランシスコからアジア、南アフリカ、南米、ヨーロッパに向けての短波放送である。

世界各国のM R A 家族の方々から、いろいろとお祝いの言葉を頂いたことに対して、こうしてラジオを通じて、お礼をいえることを感謝します。

われわれは、いまアメリカの各地から、最も美しいサンフランシスコに集まつてきています。この美しさと喜びを皆さんにわかち合えたならと思います。

二年前に、ロンドンでM R A が発足しました。そこに集まつた人たちを通して、神はたくさんの奇蹟を働らいて下さいました。一年前に、われわれは主都ワシントンにいました。そのとき、ワシントンからロンドンへ大西洋を越えて電話で話もしました。今日、私はアメリカのM R A の家族とともに、サンフランシスコにいて、そこから皆さまに話しかけているのです。

世界の情勢にてらして、われわれは考え方の方針を立てなおさなければなりません。われわれが大事だと思つてゐるものは、明日の試練に耐えるかどうか、はつきりさせることが必要です。危機はわれわれを団結させました。愛国心のある人は誰でも、自分の国が十分な備えをもつてゐることを望むでしょう。

国ぐには、新しい防備を必要としています。今は力が必要とされる時です。今日、

私と一緒にここには海軍大臣エジソンのお母さんもいますが、大臣は最近次のようにいいました。

「他の何よりも大切な国防の要素が一つある。それは国民の心に生れるもので国の性格とも呼べよう。

このような国の性格と、国民の道義的武装が行われなくては、どんな方面で、どのような仕事をしようが防衛に値するものがなくなるであらう。

海軍は指揮下の軍人の訓練、福祉、規律の責任はとる。しかし、海軍々人は国民の僅かな一部にしかすぎない。一億三千七百万の全アメリカ人が、何を理想としてアメリカは生きるのか、また生きる価値のあるものは何かを知る必要がある。

わが国の偉大なる伝統に生きる市民を育てること、何時の日か、混乱から世界を正気に導き得る国民性を養成すること、国の内外の敵に備えること、これは海軍の任務ではなく、一人びとりの責任である。」

エジソン氏はさらにいいます。「このような危機にあつてMRAは物質的再武装と同じく必要である。」この言葉はわれわれの真の任務をついています。それは国内に

おいて、またわれわれ自身の中にある物質主義を征服することです。

非常時には今までの利己的な近視眼的物質主義では駄目なことを人びとは悟りつつあります。M R Aはそうした人に解答を与えております。過去二年の間に世界を一周して新しい希望と新しい型をこの幻滅の時代にもたらしています。物質主義マテリアリズムがわれわれの敵です。これは、われわれが斗つて征服しなければならぬ主イデオな主義です。これはすべての主義の母です。これが戦場です。個人的にも国家的にも正気であるためには正直と無私と、神の導きに従順であることを確立しなければなりません、そのために斗わなければならぬのがこの戦い입니다。パチカンの機関紙であるカトリック新聞オセルバトール・ロマノ紙は、M R Aのことを「福音の伝える美徳に世界の人びとの魂を呼び返そうとする法皇の努力を助けるもの」といつています。また他のカトリック新聞イタリア紙もM R Aについて次のように書いています。

「神がわれわれのうちに生き、力強い勢力であることと、機械や技術的知識、組織などそれ自体がよくてもわれわれの問題を解決することはできないということを知るために、人びとの考えを変える必要がある。」

これがM R Aの戦いです。物質主義を征服しなければ、われわれの国は外敵の侵攻を防ぐ準備をする間に国内から亡びます。

物質主義と無神論とは腐敗と無政府主義と革命の温床です。これらは家庭を支配する利己心、階級と階級を分裂する憎しみ、国を分裂させる派ばつ的思考と同質のもです。ここにわれわれの当面した危険があります。われわれの真の安全が何処にあるか考へるなら道義的、精神的防備をするべきです。そのためにわれわれは固い決意をもつて、賢明に行動しなければなりません。

アメリカは備えを固くしなければなりません。しかし、アメリカの安全は飛行機や軍艦やタンクにあるのでなく、国を強くするために道義的に精神的に防備をした人たちにあります。これが最大で、最初の必要です。

軍のある将官が最近ラジオで次のようなことを放送しました。

「最近私は西部海岸ですばらしい精神が動いているのに気がついた。この精神は互に相争うもの同志を融和し、普通のアメリカ人に世界情勢の重要さを感じさせ、国家生活に自ら進んで役割をもたらししている。M R Aと名づけられているこのこの精神は

人から人へ、家庭から家庭へ、一つの社会から社会へと速さと効果的な力をもつて拡
つている。これは国防にも大きな役割をもつてあろう。」

道義的に再武装されることが国の真の備えですが、これは一人びとりの責任です。

国の道義的防衛に誰もが役割をもたねばなりません。道義的武装なくしてデモクラシ
ーは内部から亡びますが、これをつくりだすために誰もがこれに役割をもち、すべて
の人が防衛の大切な一環であり、すべての家庭がその塞とめてになること、これは国民に与
えられた特権です。

しかし、われわれはアメリカの良い伝統にそむこうとしています。それは一人びと
りの国民の重要性の自覚が失われようとしていることです。この自覚があれば個人的
にも家庭でも社会でも国家としても国際的にもわれわれを焦燥させる問題に解答をも
つことができるのですが、この自覚がないと少数の人たちに責任を負わせる結果にな
ります。われわれは利己心と程度の低い生活のために、自分の負うべき責任を他に転
嫁してしまうのです。そしてその少数の人たちに十分に予算を与えさえすれば、必要
なことはしてくれろと望むのです。

危険を理解するだけでは足りません。また迫りくる物質主義に対して精神的な反攻が必要だというだけでも足りません。一般の実業家は今日アメリカに必要なのは道義的精神的目ざめだといつてます。しかし大急ぎで「それは宗教家のすることだ」とつけ加えます。そうです、しかし実業界の指導者もその信仰をもたなければなりません。実業家はしばしば間違つた神を祭ります。その一つは物質主義です。ある商業雑誌は、「もしわれわれが神の声をきかなければ物質主義がわれわれを溺れさすだろう」といつて次のように書いています。

「ぬけみちが一つある。われわれが疑う余地のない自分以上のものから聞こえてくる声があるのである。これなくしてわれわれは世界を創造することもできなかつたが、今それを救うこともできない。」

だが、誰がこの声に耳をかして新しい世界の先ぶれとなるでしょう。それは読者であつても出版者であつてもよいのです。

指導者はこそつて道義的、精神的めざめが必要だといひます。その通りです。同時に指導者にも道義的、精神的目ざめが必要です。時は迫つています。昔の楽しい夢

を見て安全だと思つてゐる時ではありません。つらくても現実を直視しなくてはなりません。産業界の協力と国内の融和を得るための道義的、精神的備えのためにわれわれは国家的計画を建てねばなりません。

国内の融和をもたない国は初めから破れていきます。国の性格をつくりあげるために無休で働かねばなりません。混乱と分裂の隘路を切り開き、破壊的な勢力の作戦を見破らねばなりません。飛行機を生産する早さをもつてわれわれは道義的に武装された人を作らねばなりません。

この力の時代にM R Aはより高い力——人を通して行われる全能の神の力——で世界をつくり変えようとしてゐるのです。

アメリカが道義的に再武装するとはどういうことを意味するでしょう。それは国のあらゆる分野で建設的な計画のために融和を見出すことです。融和した心のもつ力を再び見出さねばなりません。いろいろの良い目的をすててこの共通の目的を見出さねばなりません。愛すべき個人主義者をすら、融合し得る力を見出さねばなりません。

これはわれわれが紛争を除く時に可能になるでしょう。現在われわれの主義は「意

見の合わない人は排斥する」ですが、M R Aの主義は「皆が改変して一緒に働く新しい基盤を見出す」ことです。産業界であろうが、国家的のものであろうが、国際的のものであろうが、あらゆる紛争に対する調停者は、神でなくてはなりません。国ぐにの外交政策が「汝らのうち罪なきと思うものは最初のつぶてを投ぜよ」という考えで行われるとしたらどうでしょう？

家庭であろうが、事務所であろうが、町であろうが、市であろうが、国であろうが、真心の謝罪が真の平和に通じる途であることを試してご覧なさい。家庭でやってみてすつかり気に入つて事務所で行う人もあるでしょう。また逆に事務所で行つてみて結果が良いので家庭でもやつてみる人もいましたよ。

家庭、産業界、国ぐにの争いに解答を与えるこの新しい精神はアメリカの融和を築くために欠くべからざる要素です。

われわれの仕事は先ず自分の家をととのえることです。われわれは相手と相手の国を先に変えようとして余りにもエネルギーと時間を損失しています。そのために憤慨の余り卒倒しそうにさえなります。しかし、われわれが変わらないから事態も、相手

の国も変りません。折角一生懸命に力を出しても何の効果もありません。

仕事は膨大です。人と国を変えするために力以上の力が必要です。一九四〇年がわれわれに教えることは神の導きに耳を傾けなければ鉄砲の音を聞くことになるということです。この悲劇的な真理は、前にも増して緊急さをおびてきます。町を行く人たちにも神を伝えなくてはなりません。町を行く人たちも超自然の神からの経験を再び体験し、再び生きなければなりません。

神の導きを聴くとはどういうことでしょうか？ 古の予言者は知っていました。彼らはそれを聞いて国内政策や外交政策の進言をしたものです。協定についても危険を知らせています。侵略の危険を知らせました。彼らは災難の予言もしました。

アメリカの建国の父祖たちも神の導きを聴き、かつ従うことを知っていました。

ウイリアム・ペンはいいました。「人は神に支配されなければ独裁者に支配されるだろう。」

神の摂理は彼らにとつて日々の現実でありました。独立宣言を書いた当時の指導者たちもそれを知っていました。「神の摂理の保護を信頼し、われわれは互に生命、財産、

名譽すら捧げることを誓う」と。こうして彼らはこの国を築いたので。今日この国を融合するためには、この精神を再び生きなければなりません。

アブラハム・リンカーンは神に支配される秘訣を知っていました。彼は次のように書いています。

「神の摂理に深い信頼をもたずしては、この困難な問題の中にあつて理性を保つことはできないのであろう。神の力があることを疑うには余りに多くの神に導かれた証拠を私はもつている。神は常に何かの方法で私に何をなすべきか、なすべきでないかを知らせ給う。」

過去の偉大な人たちは神の支配のみが国を治めるに適当なやり方だと知っていました。彼らの経験をわれわれのものになし得るのです。はつきりした方向と、適確な情報、神の心から人の心に通じるのです。そうした導きは、すべてのところの人びとが神に聴き従うとき、またM R Aの四つの標準、正直、純潔、無私、愛によつて個人に行く途も、国に行く途も決めることを学ぶときに得られるのです。

しかし、すべての人がどんな場所でもどんな状態にあつても、聴かなければなりま

せん。宗教的な指導者だけでなく実業界、文化界、国家の指導者も聴かなくてはなりません。

神に聴く国は安全です。ただ一つの真の安全は神に従う人たちを通して神の力が働くことです。

どんな人でも今日、神にきくことを始めることができます。どんな人でも今日、自分の家庭に、町に、国に、新しい精神をもたらしことができます。キリストの十字架によつて世界を変貌する最大の革命が人びとを動員しています。世界の情勢からいつでも直ちに応召しなければなりません。そしてこの仕事に向つてわれわれは互に命も財産も名誉をも捧げることが誓つているのです。

訓練された勢力

一九四一年六月四日、フィラデルフィヤにて

M R Aの目的は国の外からの敵ばかりでなく内からの敵に対して防備することです。それは国家的な必要です。

M R Aは最高の愛国心を意味します。M R Aはすべてのアメリカ人に役割を与えます。

M R Aは民主主義を運営するに必要な質をつくりだします。これは簡単に党派にも宗派にもわずらわされるものではありません。それはすべての人が必要とする心の規

律と、すべての人が欲する心の自由とを与えます。それは個人個人が、その場で直ちに行動できる道義的、精神的責任を呼び起しています。

それは無私で奉仕する人たちを作りあげて、民主主義の基盤とします。この人たちは個人的な利害に左右されることなく、真の融和をつくろうと決意する人たちで、如何なる非常事態にあつても、うろたえることなく、神の導きにたよるといふ経験を人に伝えることを知っている人たちです。

国の道義精神をたかめるといふM R Aの仕事は集会、ラジオ、劇、印刷物、円卓会議等で行われますが、相互が信頼し合える雰囲気で労資が共に会つて問題の解決を見出すこともできます。

M R Aに働く人たちはこの遠大な愛国的奉仕に自らを捧げています。中には第一次世界大戦後からずっと奉仕しているものもあります。この人たちは長年にわたつてうけた訓練の結果を今この国に無償で与えようとしています。これは犠牲なしにはできないことです。道義的に再武装された人たちは、危機に当つても怖れに支配されることなく規律ある生活することを学んでいます。この人たちは自分の利益よりも国を大

切に思う人のためなら喜んで奉仕する訓練された勢力です。一つの目的をもち、非常時にもうろたえない賢明な人びとです。

この人びとは真の闘士です。国と国、資本と労働、階級と階級の間に敵がいないかまがりつつある現在、最も必要な解答をもたらすために長年にわたつて、日々の生活を通して斗つてきた愛国者たちです。彼らは混乱と分裂との隘路を切り開き、国内に混乱を起す破壊的勢力の作戦をあらかじめ知ることのできる人たちです。

たかめられた国民の志気の大切さは、ヨーロッパの例でもよく判りますが、この国でも指導者の常に強調しているところ です。志気をたかめるためにMRAが大切な役割をもっていることは、国防問題研究会の会長トルーマン国會議員が指摘している通りです。(註)

「自分は最近各地におけるMRAの拡大する有様をみて、この国の安全に対して新たな確信を得た。真の愛国精神をしめすMRAは、如何なる外国からの力よりも国家生活をおびやかす国内の不調和を解決している。」

註 一九四三年十一月十九日フイラデルフイヤで、M R A 劇^レ忘れられた要素^がが上演された際、トルーマン上院議員は次のようなステートメントを発表した。

「アメリカが産業界のチームワークを獲得できれば国内融和に向つて前進することができ、これに成功すればわれわれは世界に貢献することができる。

利己的な目的を追求するのをやめて誰の心の中にもひそんでいる偉大なことをしたいという念願に訴えるべき時がきている。アメリカ人がほんとうに求めているものは無償で何かを得ようとするのではなく、偉大な目的のためにすべてを捧げることはなからうか？…この M R A のチームが前進するとき、どんな困難な産業界の問題でも解決されると私は確信する。

この精神は産業界に必要であるばかりでなく国々にも必要だ。若しアメリカがこの精神を持たなければ、例え速く戦争に勝つても平和を失うことは確かだ。この精神をもてばアメリカのためにも、またアメリカが世界のためにもなし得ることは無限である。」

世界を再造するもの

クリスマスのメッセージ

クリスマスに当つて、すべての人と政治家が欲している新しい世界を導入できる新しい考え方を、幼な子イエスがもたらすことを祈ります。現在の暗闇を照らし、早く解答をもたらすためには、われわれは神からの賜物——第四次元の考え方——を必要とします。

最初のクリスマスの時、星に導かれて遠くの国から賢い人たちがきました。願わくばわれわれの一人びとりが遠くの光に照らされて如何なる地上の賜物よりも大切な贈

物を人類に捧げることできますように。

試練と苦難は予言者をきたえあげる鎔鉱炉です。願わくば心一つにして世界を再造するものとなるため、神がわれわれに与えようとしておられるこの第四次元の考え方をうけいれる勇気がもてますように。星に導かれながら新しい世界という贈物を、すべての人と政治家に与えることがわれわれに永遠の融和を与えてくれるのです。

ベツレヘムの幼子

われらに降りたまひ

われらの罪をほろぼし

われらのうちに今日生れ給う

天使のもたらすよきおとずれを

われらきく

わが主よ

われらのうちに宿り給え

・第三部・

真のデモクラシーのイデオロギー

思想戦

戦争が進むにつれ、最終の戦いはイデオロギーの戦いであることが、はつきりしてきた。戦争に勝つても、決してこの争いが終るものでないことをみてとつたフランク・ブツクマンは、デモクラシーが必要とする新しい型の指導者の訓練にのりだした。一九四〇年来、MRAの訓練センターに、アメリカ各界の人はもとより、他の国々への代表も集まつた。一九四二年以来、毎年マキノで訓練がされている。一九四四年九月十四日付のグランド・ラビット・ヘラルド紙は、マキノのことを「新しい世界の実際所」と名付けた。次に掲げるものは、一九四三年七月に、MRA訓練所開会式に当つてブツクマン博士が行つた談話である。

本日、私は世界に動きつつある大きな諸勢力について語ろうと思います。六十何年前前には、共産党というものについてはたいして知られていませんでした。まず最初に、カール・マルクスという一人の人間がありました。それから長い間、共産主義の小さいグループが存在したにすぎません。しかるに、世界情勢はついにカール・マルクスをして志をなさしめました。その結果、今日の共産主義に発展したのです。

今日、世界におけるロシヤの意義を考えてごらん下さい。いつたい、ロシヤはどの位大きいでしょうか？ 地球の六分の一です。私はロシヤ皇帝が、六尺ごとに見張り人をおかないことには、馬車に乗つて往来することができなかつた時代を覚えています。鉄道で千マイルもの長い旅をするにも、彼はいつも沿線に見張り人をおいたものです。そうしたことも共産主義と称するものを産み出すことの原因として力あつた事情の一つです。

ごく最近まで、世界は共産主義を格別、氣にとめませんでした。それは、われわれに何の影響もありませんでした。われわれがそれに接触するということもなかつたのです。時々、線香花火のようにパツと火の燃え上がることがあつただけです。ところが

前大戦中に不平不満はますますつのりました。革命が起りました。そして共産党が政権を獲得したのです。

今日のロシヤはなかなかよくやつていますし、アメリカは大いに彼らを援けています。ドイツを処理する上に、彼らは現在決定的要素であり、また将来も、支配的勢力をもつようになるかと思われるからです。

これを一つの絵と考えましょう。それを金塗りの立派な額ぶちにはめたらよいでしょう。また赤色もせいぜい使つたらよいでしょう。だが、そうしたからといって、それで共産主義が処理されたことにはなりません。そんな生やさしい勢力ではないのです。この国でそれに全く促えられたものや、中途まで行つたいわゆる左派的なものの考え方をする人の数を考えてごらん下さい。これから共産主義は絶えずわれわれの周囲に見受けられるでしょう。

もう一つの勢力をとりあげてみましょう。ファシズムについてわれわれが初めて耳にしたのはいつでしたかと？ 一九二一年から二二年にかけてです。ここでもまた、最初にムッソリーニという一人の人間がいました。私はイタリヤのミラノへいったと

き、壁や扉に「共産主義万歳」と書いてあつたのを覚えています。ところが間もなく、やはり壁や扉に「ドゥーチェ万歳」の文字が見られました。共産主義に反抗する勢力としてムッソリーニが起つたのです。彼はローマへ進軍しました。そして政權を握つたとき、ファシスト勢力が生れたのでした。それから当分の間、民衆は安定と繁栄をだんだん力強く感ずるようになりました。彼らはいいました。「よかつたノムッソリーニが現われ、ファシズムが現われて汽車はダイヤどおりに動く。街に乞食はいなくなつた。いい秩序ができた」と。ところが今日、ムッソリーニはどうなりましたか？イタリヤはどうなりましたか？そして讃えられた秩序はどうなりましたか？

その頃、一九二〇年代のドイツは、未曾有の衰退期にありました。多くの住民は食うべきものも、否、何もなかつたのです。私は財産家のドイツ人たちが固いゆで卵を一つポケットから出して弁当代りにしたのを覚えています。何年かの間、崩壊と革命の危機はつづきました。青年層はまつたく不身持で怠惰に流れて、いたるところで暴行を働き、盗みをしながら国内をおし歩きました。

そこへ、極めてはつきりした思想をもつヒットラーという一人の人物が現われました。彼は牢獄に在る間に、その思想を本に書きました。出獄したところは群衆が騒いでいたし、秩序が乱れ、虐殺も行われました。このオーストリア人（ヒットラーを指す）はドイツ市民になりました。当時のドイツには秩序というようなものはありませんでした。ところが、この怪物が現われて、秩序らしいものを与えました。世界における彼の地位は高められました。だからドイツ人は「ハレルーヤー」と讃え、「ハイル・ヒットラー」と叫びました。それから先はご存じのとおりです。

このようにして共産主義とファッシズムの二つの勢力ができましたが、それらはどのような源泉から湧き出たものでありましようか？すべてのイズムの母たる物質主義マテリアリズムから生れたものに外なりません。それは腐敗と無政府状態と革命とを生み出す反キリスト教精神でありまして、私どもの家庭をくつがえし、階級と階級とを闘争させ、国家を分裂させるものです。物質主義こそは民主主義の最大の敵です。

これらが世界を支配すべく猛威をたくましくしつつある勢力です。

一九三八年に、私は、神の導きを得て、M R Aが生れました。それは道義と精神

とが、強調される運動です。現代に必要なのは道義と精神とです。われわれに課せられた仕事は、道義と精神の現実を必要とする国ぐにに再びもたらそうとすることです。私どもはロンドンのイースト・ハム公会堂でこの考え方を始めて以来、それを各国に伝えていっています。M R Aはその年に生まれました。

共産主義とファッシズムは、否定的なもの、すなわち分裂を生む物質主義と混乱の上に築かれたものです。M R Aの行くところには、必ず建設的なメッセージが生まれます。その目指すところは、国民生活の指導力として神の指導権を回復することです。

私が誕生日にフィラデルフィア市で話したことを繰返してみましよう。

「M R Aはデモクラシーが十分に機能を發揮するのに必要な質をつくるものです。それは単純で、非派閥的で、非宗派的で、非党派的です。それはすべての人が必要とする心の規律と、すべての人が希望する心の自由とを与えます。それは直ちに着手しなければならぬ活動のために、各人の道德的、精神的責任感を呼び起すものです。」

MRAはデモクラシーのために、活発で、無私で、献身的な市民による確固たる体制を創るものであつて、融合をもたせようとする彼らの決意は、自分自身の損得によつて動かされるようなことはなく、またどんな恐慌にもあわてないですむ神の導きの体験を人から人へと伝えることを知つてゐる人びとです。」

アメリカは正純なイデオロギーを見出さなければなりません。それは祖先伝来のキリスト教的伝統から来るものでありまして、物質主義、その他すべての主義に対する戦いにおいて、アメリカの唯一の解答となるべきものです。ところが、アメリカは物質主義を憎んでいないのです。試みに考えてごらん下さい。もし、アメリカが、他国の中にあつて悪いと非難するものと同じものために、かえつて自分自身が滅ぼされるとしたらどうでしょうか？

イデオロギーの闘争は新約聖書、旧約聖書の花崗岩（なつかげいし）でありました。しかるに、今日は堅い花崗岩（なつかげいし）の代りに、ざらざらの砂糖を与える人が恐ろしく多いのです。だから物

質主義を治癒することが出来ないのです。

MRAは何よりもさきに、まつしぐらに根本問題を衝いて、罪を指摘します。罪が病患です。イエス・キリストが正にそれを癒すのです。その結果は奇蹟です。あなた方はこのマキノ島のような訓練センターへ来て、「私は罪なんていうことを聞きたくない」というかもしれません。そうだつたら、まことにお気の毒です。罪は指摘されねばなりません。ただ、それがどんなものであるかを知らせるだけでよいのです。それがわかつたら、さきへ進んだらよろしい。あなた方は罪を見たら直ちにそれを認めて、^{オムンダ}改変するだけの感受性があるべきなのです。改変することが、またもう一つの奇蹟です。昔、あなた方の祖父母たちが、罪についてのかざり気のない説教をきくことを喜んで、水曜日晩ごとに教会へ行つたように、今日もそういうことが起るべきなのです。あなた方にそんな暇があれば、それに越したことはありません。時間をとつて聞く必要があるでしょう。いずれにしても、罪を最小限度に考えてはいけません。最大限に考えるべきです。だが、わかつたら、速やかにそれを直しなさい。変わる、融合する、斗う——それが自然の順序です。

あなた方がここへ来て発見するのは、古くからある根本的な真理ですが、ただそれが非常な強さで与えられるのです。利己主義や便宜主義が個人および国家の常習であるようなこの時代に、M R Aは絶対の標準を復活しようとするのです。正直、純潔、無私、愛、これが四つの絶対です。あるいはあなた方の中にはそれらを大して尊重しなくなっている人があるかもしれませんが、国民を精神的に武装させるには、こうした単純な、基本的な標準をぜひ与えなければならぬのです。

第一番に、正直ということを考えてみましょう。わが国の現状はどうですか？たとえ軍需品契約などで不正を働いた人がいませんか？汚職とか闇商売などのために沢山の人たちを忙しい目にあわせ、国民に巨額の負担をさせているではありませんか？昔は不正直をよくいつたものはなかつたのです。今日はどうかといえ、不正で大儲けをした人間は、かえつて珍重がられるかの観があるではありませんか？

つぎに、純潔ということを考えてごらん下さい。それは、個人問題だと皆さんはいうかもしれませんが、この国の現状をよく見てごらん下さい。ある軍需工場などでは不純潔はあたりまえになつていて、職工の間に組織化さえもされているといわれ、とく

に破壊的分子はそれを武器として居るのです。彼らは大衆の風紀がかき乱されれば、その思想も混乱することを知つて居るのです。しかるに国民は「困つたことだ」とつぶやくだけで、相変らず日曜ごとに教会へ行くのです。そして何の変化も起らないのです。国に偉大な浄化力をもたらそうとする人は、あまりにも少ないのです。もし、それをもたらすものが全くなくなつたら、国はどうなりますか？破壊された家庭、安定を失つた子供たち、文化の頹廢、革命の苗床！

無私と愛はどうですか？人びとは無私であろうともしないし、そして愛をもとうともしません。

多くの人びとは、この四つの標準は馬車時代の遺物ぐらいに考えて居るのです。だから国家として、そのようなことを問題にしようとしません。そのおかげで、世界の現状はこんなことになつたのです。今、もしあなたが、人びとをしてこれらの絶対標準に生き抜くことが出来るようにしたならば、あなた方は何ものも否定することのできない創造的な力を国内にもたらすことになりす。

道義を強調する外に、イエス・キリストの救いの力ということを忘れてはなりません。

ん。そのことがわかれば、ほとんど忘れられてしまつた原動力——聖靈を体験するでしょう。聖靈こそは、あなた方に、導かれた答へを与えて、神の明晰な直接の声として、何をなすべきかを正確に教えてくれるのです。

それが今日、教会に与えられた役割です。私は心の底から革命の焰に燃える教会に期待をかけるものです。われわれはまだ必要な精神的革命を体験し始めていません。われわれは革命を必要とします。そしてあなた方が神の明るい光の前に立つならば、光輝ある精神復興を体験するでしょう。そして、キリストが、この古い世界をどうしようと思つてゐるかを理解するに至るでしょう。

これらの事実を知ることとは大切です。しかし、それ以上のことがあるのです。それはこれらの事実を国家大に拡大することです。

あなた方の中には困つた人がいます。それはあまりに理想的で、希望していることが自分の家族間においてすらも実現の見込みがない、というほどの理想家があります。国際連盟もそうでした。人びとはあまりにも、連盟心理に没頭して、連盟が最も必要とした事柄、すなわち人に、**改変**をもたらすための個人を相手としての仕事をし

なかつたのです。連盟からは大切な、あるものが置き忘れられていたのです。それは神です。国際連盟はついに神を戴かなかつたのです。

各人の任務は神を奉戴する最上の案を見出すことです。それが見つかれば、われわれのためばかりでなく、戦後のヨーロッパのためにも最上の案が得られるわけです。ただ厄介なことは、政治家に、われわれの代りに考えることから何から何まで全部させておいて、それをデモクラシーと呼んでいることです！

自分の都市について考えてごらん下さい。あの指導者は破壊的だとか、どの指導者は破壊的だとか不平をいいますが、そういう破壊的指導者を可能ならしめるものは各人の利己主義ではありませんか？ 進んでそれを矯正しようとせず、退いてそれを我慢しているところに欠陥があるのです。祈るかわりに、金で解決をつけようとしているのです。自ら改変して解答を得るよりも、混乱をつづけ、ぶつぶつ不平をいいつづけようというわけです。

アメリカのための戦いはアメリカ人の心の戦いです。国が荒廃に帰する前に、国民の考え方が荒廃するのが常ですが、アメリカの考え方は、すでに荒廃の中にあるので

す。

アメリカ人は、左派であるとか、また右派であるとかということの問題にして迷っていませんが、われわれが本当に必要とするものは、神の聖靈に導かれるということだけなのです。それがわれわれの研究すべき「力」です。それが得られれば、われわれは混乱に終止符をうつべき光明を得ることになりましょう。聖靈はわれわれに如何に考え、如何に生くべきかを教えると同時に、国家に奉仕する具体的基礎を与えてくれるのです。

アメリカは祖先伝来の道義的遺産の大部分を失いました。もし、われわれが道義的雰囲気に関心をおかなかつたならば、われわれのデモクラシーがどういうことになってゆくかを考えてごらん下さい。われわれのあるものは、自分のことにかかりきつてゐるために、国のことに注意するのを忘れて来ました。もしアメリカが正しいイデオロギーを取り戻さなければ、われわれの前途に待つてゐるものは混乱だけです。われわれの運命は神の導きに従ふこと以外にはありません。

今日、世界における眞の戦線は階級の間にあるものでも、民族と民族の間にあるの

でもありません。真の戦いはキリストとキリストに背くものの間にあるのです。あなた方はそのどちらに奉仕しようとするかを今日、ここで選ぶべきです。

世界哲学

一九四五年六月四日、サンフランシスコにて。

私の誕生日の願いはM R Aが世界の哲理となることです。

今日、三つのイデオロギーが支配権を得ようとして斗つています。ファシズムと共産主義と、そしてキリスト教的民主主義の核心であるイデオロギー、すなわちM R Aです。

他のイデオロギーに打ち克つことのできる偉大で完全なイデオロギーをもたなければなりません。それを見出すまで人びとは悩むでしょう。進むべき道を見出さないで

しよう。

しかし、神の聖霊が人びとの心と生活を支配する時、皆が待ち望んでいる明日の新世界を創り出すことができるのです。

この日各前線で斗っているM.R.Aの人たちから、ブツクマン博士に届いたメツセージを、連合軍輸送船田司令官コタレン少将が手渡した。その一部は次の通りである。

「忍耐を要する今日、あなたの靈感がわれわれを強めてくれます。勝利に向つて進もうとするわれわれにあなたの哲理こそ希望です。国々を復活させ、分裂した世界にチーム・ワークをもたらせる信仰がそれです。……われわれはあなたとともに思想戦を斗います。武器の戦いに勝つた後にも、道義的に武装され、神に支配された健全な世界を打ちたてるべく闘いつづけます。」

十字架の下における革命

一九四六年四月二十三日、ヨーロッパに向つて出発する前夜、ニューヨークにて。

アメリカに来て、もう七年経ちました。多くを学んだ素晴らしい七年でした。われわれに示されたキリストの真理を、この部屋にいるすべての人に分かつて貰いたいのです。

私がイギリスを去るとき、ある偉大な政治家がいました。「この国から行かないでください。」それに答えて私は「私の義務はアメリカにあります」と答えました。私

は七年間いましたが、その間、多くの偉大な真理が示されました。カリフォルニアで過ごした素晴らしい日々を思い出します。サンフランシスコで、世界に向つて真の解答のメッセージを語つた時のことも思い出します。これは偉大なイデオロギーです。これはキリストの完全なメッセージです。現代の世界に分るようにそれを伝えていくのです。初めは人びとが十分には理解できませんでしたが、今ほど危機が迫つてはいないかつたからです。今日では人びとはどこでもこれが解答だといつています。

選択は二つのうちの一つです。すなわち、マルクス主義的共産主義か、今までにも人間に自由を与えた偉大な靈感によるイデオロギーのいずれかです。

われわれは、世界的な規模で働いています。オーストラリアを例にとつて見ましょう。ロンドンでの国連会議に出席したオーストラリアの代表はいいました。「MRAが世界の唯一の希望です」と。MRAが世界の唯一の希望。バード少将を考えて見ましょう。私の生涯のうちでも記憶に残るような会合で、私は彼の隣りに坐つていました。彼はあの素晴らしい劇「忘れられた要素」を見たのです。見終つて彼は「私に話させて下さい。」といいました。彼の語つたあとで二人の人が話しましたが、そのあと

で彼はまた「話さずにはいられない」といつて立ち上りました。そのとき彼は「これがアメリカの解答だ」といいました。これがアメリカの解答！

もしこれがアメリカの解答であるなら、われわれは救主イエス、キリストによつて世界をかちとる努力を世界的に行っているのです。そうしたときに福音書に書かれた真実は今一度あがめられ、キリストが王の座につくでしょう。これがあなたのイデオロギーです。これは神と救主との福音の完全なメッセージです。このメッセージの実体のみが世界を救う唯一の希望です。世界を變貌することのできる革命はキリストの十字架の下に行われるもので神のチャンスです。ただ一つの希望。ただ一つの解答。心一つにしてこのメッセージを伝えれば世界を救うことができます。

しばらく静聴してみましよう。

天の与えし賜物よ汝なれ

汝は死して自らを与えり

わがために汝は死に給える

われ汝のために何をなしたるや

われ汝に仕えんとするものぞ

教主よ道を示し給え

すべてをなげうち十字架をとりて

汝に従えまつる

文明キリスト教復興をもたらし、世界を変え得る革命はキリストの十字架によるものです。キリストの名において祈ります。アーメン。

善

い

道

一九四六年七月、マキノ島大会に参加したスイス人たちが中心となつて、スイスのコーにM R A訓練センターが開かれた。コーでの世界大会には、初期の十年間に首相、閣僚、国会議員、産業界や産業団体の指導者、六千万の労働者の幹部、教会や軍隊や新聞、ラジオや教育界の指導者などを合めて十万を超える人びとが百十六カ国から参加した。とくにアジア、アフリカ、アメリカやオーストラリヤは多数の代表を送つた。何百万の人びとにとつて、コーはすでに世界を再造するための希望のシンボルになつてゐる。次の放送は、一九四七年六月四日、スイス放送局の要請によつて、コーからなされたものである。

いたるところで、人びとは安全に達する善い道を見出そうと試みています。すさまじい恐怖がすべての人びとにつきまとい、世界中にはびこつています。国際会議は次つぎと開かれますが、平和は少しも近づきません。険悪な経済問題が新旧両世界に迫つていきます。できたばかりの国際連合は、諸問題の重圧下に、そしてそれらの問題に對すべき適切な精神を欠いているので、ぐらついています。人びとは指導者への信頼感を失つていきます。真面目で有能な政治家たちは懸命になつて努力はしますが、何も収穫を得ていません。

ある人びとは、つぎの戦争を目やすにして考えています。もし、彼らが本当にそのようなことを考えているとするならば、正氣の精神状態にあるものとは思えません。けれども、もしつぎの戦争が現状から逃がれる唯一の道ならば、その惨害を甘受しようとしてゐる人びとがあるのです。

他方では、破壊的勢力は禿鷹のように、人類の幻滅感を餌食にしています。のみならず、自然力さえもが、破壊的勢力とぐるになつて、帳尻が赤字になるようです。どちらを眺めても、目に入るものは分裂です。分裂が現代の特色であります。一団

の人びとが、他の一団の人びとに敵対しています。ただ他国、他民族、他階級、他党員だという理由あるいは、単に見解を異にするからという理由だけで。

みな平和と秩序とを熱望しています。しかし、分裂的な見解のために争つていては、ただ混乱を増すばかりです。一体われわれの最大必要事は何ですか？

あるヨーロッパ人は最近こう言いました。「われわれは飢えている。単に食物だけでなく、思想に飢えている。われわれの個人的および国家的生活をつくりなおすための基礎となる思想に飢えている」と。

われわれの問題は経済や政治よりも深いところにあるというのが真相です。すなわち、イデオロギー的なものであります。今日、分裂的なイデオロギーが人の心の支配を指して斗つています。そして無数の人びとは、他に確信を与えてくれるものがないために、それらの傘下に投ずるのです。すべての政府がイデオロギー的心構えが最も大切だということがわかつているわけではありません。物質的に強力な国でイデオロギー的に分裂することがあります。そういう国は危険に瀕しているわけです。この

事実を無視する指導者はわれわれを裏切ることになるのです。

しかし、道はあります。沢山の偽りの道の中に善い道があります。人類がこれを見出して、歩まねばならない道があるのです。それは神のつくつた道、真の民主主義のイデオロギーの大道であります。それはどの国にとつても、たしかな道であり、世界平和にとつて欠くことのできないものです。

人びとは今日、意識的に、または無意識的に考え方の一つの新しい型にはめられています。そして、いたる処で彼らは「共産主義に対する解答があるか」と質問しています。

その解答を発見しようとしてあるものは仮空的に、あるものは大胆に、あるものは哀れとさえ感じられる努力をしているのを見るのは興味があります。また他の人びとの中には変化チェンジが来なければならぬと漠然と考え始めているものもあります。そういう場合には誰でも、ある人、ある国が変らねばならぬといいますが、自分自身が徹底的に変る必要があるということには滅多に気がつかないのです。しかし、今は徹底した行動をなすべき時です。人間の性質は変り得るものなのです。

一人の軍人が、最近MRAの会合に出席したあとでこういいました。「私は今まで、自分はブラウン少佐だと思っていました。ところが、大きな変化に直面している無名氏であることがわかりました」と。

この軍人は、善い道、すなわち心の改変という道を発見したのでした。われわれがこの道を歩めば、そこに奇蹟が起り、再生も真の安全も順々にできます。

一人の製鉄工がコーの訓練センターへきました。二十八年間共産主義者だった男です。自分の娘を共産主義者として訓練した結果、娘は父よりも過激になりました。ところが、娘は改変して、父にコーへ来るようにとすすめたのでした。さて、彼が私たちと別れて帰るときに自作の詩を朗読しました。こういう詩です。

神の偉大なる計画の前に

私はつらつらと思い畏れのうちに額づく

私は絶妙の奇蹟をながめている

利己心のなかに起つた変化を

ダン・デュ・ミディ山上の雪は

神の恵みの衣にすぎない

神に万人のための計画あり

一人としてその中に地歩なきはなし

この製鉄工はいま、こういう手紙を書いています。「私はキリストを通して生れ変わりました。そしてコーにおける体験は、神に対する私の忠誠を永久に確実にしてくれました。精神的なことを筆にするのは、幾年もの間、これが初めてです。というのは、過去二十八年の間、私のペンと才能とは、マルクスの物質主義にかけた私の信念を宣揚するために捧げられて来たからです。」

最も暗黒なときにも信仰の声を確実な解答として与えるならば、人は必ず新しい希望をいだくものです。それが偽りでないと云う証拠が——ときどきは新聞などの見出しの中に、さらに多くの場合に、見出しのかけに——積み重ねられることに対して、私は神に感謝します。私はただ今、A P 通信社の有名な評論記者デヴィッド・マッケンジーが自分の今までの経験において、最も驚嘆に値いすることの一つだと書いた一文を手に入れています。彼はその中で、中国の一流の軍人政治家の一人が自国のため

につくり上げている驚くべき新計画について語っています。戦時中、中国の参謀総長であり、現在国際連合の軍事参謀委員会に自国を代表している何応欽將軍は自国の悲劇的な分裂に心を痛めながら、アメリカに開かれたM R A大会に赴いたのです。

彼がそこで見出した新しい真理はこうでした。彼は「過去二十年にわたつて中国での物質主義に対する抗争で私のとつたやり方は、武力に対するに武力、組織に対するに組織であつたが、今、私は思想に対しては思想をもつて戦わねばならぬという実にはつきりした結論に達した」と語っています。何將軍はいま、中国の道義的復興を第一位においているのです。彼は経済改革とともに、中国には新しい標準を与える道義的力が進まねばならぬと信じているのです。要するに、露骨な武力のみによつて共産主義者を転向させようと努めるのは無益であります。道義の力によつて共産主義の問題を解決するのが最善の方法と思われる、と將軍はいうのです。彼は共産党をも国民党をも含む全体としての中国社会の道義的水準を高めることの重要性を強調するのです。

そうした目的を達する準備として、彼は自国の政府に選抜されたものをM R Aの訓

練をうけるため、直ちにスイスとアメリカに送るようにとの詳細なる建議書を提出しました。彼はその中において、選ばれるべき人たちが無私であり、身体強健であり、信念の人であるべきであつて、またこのイデオロギーを自国に拡めるために帰国後、少なくとも一カ年は奉仕しなければならぬ旨を強調し、さて最後にこういう銘記すべき言葉をもつて結びました。「世界に秩序を与えるには、まず以て国を充分に治めねばなりません。国を治めるには家を齊ととのへなければなりません。齊ととのへるには身を正しくせねばなりません。すなわち各人はまず第一に、自分自身の心を正しくせねばなりません」と。

まことに政治家にふさわしい計画であつて、今日あまりにも多くの国ぐにを脅かしている兄弟相剋の抗争に対する解決として新しい在り方を示すものです。

安定なきヨーロッパのまん中にあるコーに、またアメリカのマキノ島にイデオロギー訓練の中心があつて、そこを訪れる一般の人びとや政治家の数はますます増えています。それらの人びとはそこで新しい希望と、混乱から脱出する道とを得ています。去年の夏バリの平和会議からの帰りがけの政治家の一人は「パリへの解答をコー

で見つけた」と言いました。

今日、かなり混乱状態にあるインドは、代表として幾人かの著名な指導者を送つて来ました。その一人はユナイテッド州の農務長官であります。こういいました。

「二つの主なるイデオロギーがインド民衆の心を捉えそうである。一つはカール・マルクスのイデオロギー、他はM R Aのそれである。」インドの諸新聞は問題の核心をつかんで「共産主義への解答。コー。」と見出しに報道しました。

石炭は経済界の主要なる問題の一つです。イギリスの大炭坑でコーに代表を送らなものはありません。英炭坑にとつて最も危険であつた年に、それらの指導者は国に帰つて争議を解決し、生産高を高めました。新しい精神のために、より多くの石炭が産出されたのです。それらの炭坑夫は生産を増したばかりではありません。楽しい家庭をもつことになりました。

一人のイギリス下院議員はこういいました。「自由と善意との新鮮な風がコーから荒廃した国ぐにの上に吹いている。」今日、この人は議員の委員会を組織して、諸国民の道義的、精神的な再生によつて平和を確実なものにすることを目的としてここで

会合をするために諸国の政府代表を招いているのです。労働者は今や多くの国ぐににおいて指導的地位にあります。もし、労働者が神に導かれるならば、世界は融合されるでしょう。

軍の指導者もまた自分らおよび配下の人びとの新しい役割を知るようになりました。それは、靈感に満ちたイデオロギーの新しい力を速かに自国に提供するということとあります。

そうしてありがたいことに、今や、イデオロギー的に装備された人びとが、世界的勢力となつて働いていることです。彼らは自分自身の内に起つたことから、新たな道義的雰囲気がつくり出され得ることを知っています。工員も兵士も主婦も政治家も、農民も産業家も、若いものも年寄りも、彼らは新しい紙上計画を提供しようとしているのでなくて、否定することのない体験をもつています。彼らは人間の心が変り得るものであることを知っています。神からはつきりした決定的な導きガイダンスが今も昔と同じく、得られるものであることも知っています。

二週間前、私はローマに参りましたが、それは十五世紀にこのスイスに住んでいた

当時の一政治家ニコラウス・フオン・デル・フリューエを聖者として宣布する式に参列するためでした。ニコラウスは神の導きの賜物を持ち、その通りに行動して自国の救い主になつた方です。彼は勤勉な農夫であり、戦士であり、また奉行でもありません。五十才のとき、戦いに寧日なき世界にうつうつとした彼は、最大の犠牲をはらつて神の導きに極めて従順に服従することになりました。靈感にふれた彼の良識、人間についての知恵、心の純潔さは、間もなく彼をしてスイスにおいてのみならず、ヨーロッパ全体において、時代の人びとの尊敬を博するにいたしました。彼は人びとが最も熱望する国務裁定者の地位を得ました。スイス諸州間の確執が甚だしくなつて、今にも内乱になろうとしたとき、神から授かつた彼の答は、スイスを融合への善い道にのせたのであります。五百年前に生きた、そして神の言葉に耳を傾け、敢然としてそれを自分の時代の人びとに分け与えたこの政治家が、今日にいたつて、最高の表彰を得たことは、まことに時宜にかなつたもので、彼は正に現代の聖者、国際連合に對する模範なのです。

神に率いられる外交家——融合された国。解答はそれでないでしょうか？

アラビヤの外相はいいました。「世界は岐路に立つている。一路は革命と混乱とに導く。一路は反動と失望とに導く。M R Aは第三の道である——世界を融合する真のデモクラシーへの道である」と。

真のデモクラシーのイデオロギーこそは、正に生活に活かすべき生き方であり、歩かねばならぬ道です。政治家としての全く新しい規律が要請されているのです。善政を念とする大臣たちは、国民を変えねばならないのですが、大抵の内閣はその術すべを知らないのです。国民が変れば国は新しい生き方を発見します。そうなれば、あらゆる問題は自然に解けるのです。

国民が神の導きに聴き、神の命令に従うならば、国は神の意思を政治の基礎とする術すべを発見します。

ここに善い道があります。誰でも歩けるし、誰もがその道を歩かねばなりません。普通の人も政治家も。われわれがその道に乗って行くときに、神は現実のものとなります。恐れは消えさり新しい生命が展開されます。この善い道には曲折はなく、ただ一直線に前方にのびているのです。

「汝が右にゆくも、左にゆくも、その耳にこれは道なり、これを歩むべしという御言葉を聞かん。」

もろもろの国は汝の主なる神の故をもつて汝の許にきたらす。しかして汝の子らの平和は大なるべし。」

この放送はワーズワース氏によつてアメリカ国会議事録に記録された。そしてこの放送に加えてそれは六カ国語でラジオ・ローマ、ラジオ・ルクセンブルグ、ラジオ・アチネやビルマ、中国、マレー、オーストラリア、ニュージーランド、南北アメリカ、カナダの放送局を通して放送された。

危機に対する解答

一九四七年七月十五日、スイス、コーで開かれたM R A世界大会の開会に当つてなされたもの。

この講演はトマス上院議員によつて一九四七年七月二十六日アメリカ国会議事録に挿入された。

世界はあげて解答を求めております。もし、すぐにそれが得られなければ、特定のどの国ということではなく、すべての国ぐにが容易ならぬ破局に、直面するであります。よう。

あまりにも長い間、われわれは問題に満ちた雰囲気、呼吸して来ました。われわ

れは会議から会議へとさまよいながら、根本的な解決の望みを失つております。われわれは成功を信じなくなつたのです。個人的にも、国家的にも失敗の奴隷になりきつてゐるのです。

各国は解答をもたずに、その成果だけを望んでいます。生産がほしい、平和がほしい、繁栄がほしい、世界的な組織がほしい、融合されたヨーロッパがほしい、新しい国民生活がほしい。だが一向にことの根元を衝こうとはしないのです。

適切な解答を与えることをしないで、ただ際限なく危機を叫びつづけることは却つて無感覚の習性を生みます。われわれは人類を今日の恐怖の濃霧と悲痛の泥沼の中から新しい平野に救い出さねばなりません。

国ぐにの問題がうまくいかないのは、ただ夢中になつて、経済計画で道義的無感覚と取り組もうとするからです。経済的崩壊は、すべての政治家および市民の心を貫きつつ、まづ黒な脅威となつて横行しています。しかし物質的危機はその底に横たわる物質主義マテリアリズムと道義的崩壊とを覆いかくしているものだから、彼らにはそれを治療する方法がわからないのです。われわれが国家的規模において人間の性質を徹底的に変えな

い限り、各国は暴力と破壊への歴史的道程を歩まねばならないのです。

問題は国と国とをへだてる単なる鉄のカーテンではなくて人と人とをへだて、すべての人を神の支配からへだてる鋼はがねのような冷酷な利己主義なのです。しかし、人が神に聴いてそれに従うならば鋼も鉄も溶け去るのです。

一世代前、一つの物質主義的イデオロギーに捉えられた一団の人びとは、それで世界を掌握しようとは決心しました。彼らはその仕事に献身して、世界戦線を張りつつ、二十五年の間、寝てもさめても休みなく、巧みに、容赦なく働きつづけました。

民主主義諸国の政治家たちは急に目をさまし目をこすりながら、あたりを見まわしました。物質主義の世界的勢力は、すべての国ぐにに浸透し、学校にも工場にも食い込んでいます。彼らの事務所にも政府部内にも侵入し彼らの家庭にも、同僚にも、彼ら自身にさえも影響をおよぼしています。

危機の迫っていることが、やつと彼らにわかりました。世界の混乱と支配とを目指して進軍する、組織され体系化された物質主義が、大きな進展を示していることに気がつき、彼らはいぶかりながら、「これはどうした情勢か、どうしてこんなことにな

つたのか」ときいています。

理由は簡単で多くの人びとが眠つている間に、またその他の人びとが自分自身の仕事にばかり没頭している間に、物質主義者らは哲学と情熱と計画とをもつて營々として彼らの革命を育てて来たのです。

それに対する解答はなんですか？ 一世代前、MRAの勢力もまた斗い始めたのです。世界戦線にあつて、計画には計画をもつて答え、思想には思想をもつて答え、戦斗的無神論的物質主義にはデモクラシーの戦斗的啓示的イデオロギーをもつて答えて来ました。

この思想は人の心を捕え、人間は造り変えられました。それは一国、また一国と影響し、今や地球のいたる処におよんでいます。

今日、このコーに開かれたMRAの大会において、われわれはこの勢力が直ちに役に立つ解答をもつて行動しつつあるのを見るのです。政治家たちが時のおそきを覚り出しているときに、MRAは二十五カ年にわたる労作の成果を喜んで提供しているのです。思想の戦いにおける一勢力、神の下に政治家も普通人も諸国再造のために適切

なイデオロギーで武装させることのできる訓練と体験とをもつた勢力があるのです。新たなメッセージがコーから悲嘆にくれた世界に送られます。コーで発見された解答には脚が与えられて、今や行進を開始しているのです。この地でわれわれは危機の時代の終点に到達して、平和の時代を開拓しようとしているのです。

今日、世界の大問題である石炭の生産という問題を取りあげてわれわれの解答をテストしてごらん下さい。「イギリスは、どうしても石炭を増産しなければならない。さもないと、イギリスは破産してしまふ」と閣僚たちはいいます。今週、石炭庁は石炭の産出量は全国的にいつて政府の定めた量より大分少いと発表しました。ところが、坑夫をコーに送つて訓練をうけさせた炭坑、およびMRAの劇、忘れられた要素が上演された炭田地方では、話はまるで別です。ある炭坑のときは四日半で六日分の量に達しました。もう一つの炭坑では出炭量が頻繁に定量を超過するので、坑夫側から定量を高めるようにとの申出がありました。ある地方では欠勤率は十二ヵ月の間に二十パーセントから三パーセントに減じました。(註)

紙上での計画が生産を高めることはないでしょう。ただ新しい人びとがイデオロギ

1の焰をもつて新しい精神で協力するときのみ生産は高められ、たのしい家庭から湧出るチーム・ワークは打ち樹てられ、国家は回復への軌道にのせられるのです。

もう一度この解答をテストしてごらん下さい。先週末、あるインドの労働指導者がコーへきて、執拗にインドにつきまとう二つの問題、人種的悪感情と階級的悪感情について語りました。彼の見るところでは、解決のめどはないということでした。一日たつと、彼は解答が見つかったといい、その次に来たときに彼はこういいました。

「問題は道義的無感覚にあるのですから、解答はMRAです。私はここで悲劇を生まない生き方を知り、この生き方を自分のものにするとき、私の生活は効果的になるし、他の人の生活をも効果的にすることができません。それがわれわれインド人にとつての好機であります。われわれの一人ひとりが大勢をつくり出し、数千人は数百万人に影響を及ぼし、世界が悲劇から救われることは可能です」と。

彼の言葉は世界を救い得る政治家のあり方への鍵であります。それはどこから着手すべきかを教えるものです。MRAはすべての人、すべての国のためなのであるから、誰でもそれにならつてよいわけです。人間の性質は変えられます。それが根本的の解

答です。国の経済は変えられます。それは解答から生まれる成果です。世界歴史は変えられるのです。それがわれわれの時代の使命です。

正直に事実を正視しようではありませんか。新しい会議を開いたとて、偽りの哲理に対する解答にはなりません。新説を出したとて、戦斗的イデオロギーに対する解答にはなりません。計画が失敗に終るのは、靈感にふれて実行にあたるような人びとに欠けるからです。計画だけは次から次へと繰り出されず。しかし、コーでは計画を実行し得る靈感にふれた人間がつけられるのです。

一人の政治家がコーへきました。その人はその国の商務長官ですが、何年間も彼の日常はイギリスに対する憎悪心によつて支配されてきました。その感情の猛烈さは二度と公式の場合英語をしやべるまいと誓つたほどでした。

ところで、あるとき、彼は一連の事件にかかり合いましたが、それは自国を内乱に導き得るような危機をはらんでいたものです。その時のことを彼は私どもに英語でこゝろ話しました。「時には、白熱化するほど強い憎悪心も神の——といつても当時、私は神を知らなかつたし、信じもしなかつたが、神の奇蹟を行う力を知ろうとの誠意さ

えあれば、一瞬にして除き得るものであることをこの身に体験しました」と。彼は正直な謝罪が本当の平和を勝ち得るといふ秘訣を知りました。そのために目の前にせまつた内乱をさけることができたのです。この政治家の内に起つた変化と、神の導きとは、その国の中の分裂的要素であつた彼を協力の先駆者にし、自分の人種のためにも、他の人種のためにも効果的に生きる道を教えたのです。心の変化。靈感にふれた政治。憎悪と分裂とに対する解答。われわれがひとしくさがし求めている解答はこれではないでせうか？

M R A は世界の政治家に対して、訓練され前進しつゝある力、すなわち個人的および国家的利己心に対する解答をもつ力を提供しています。それはどこに住む誰もが、今日只今、新時代の新段階に踏みこみ得る好機です。それは理論ではなくて、生き方です。あらゆる条件の下にテストされた生活方式です。それは崩壊の一步手前にある社会を再造し救済する実力をもつ勢力です。

南極から帰つたバード少将はM R A についての所信を要約していきました。「私はできるだけの力をこめて強調したい。M R A こそは文明救済のための行動に出ようと

して人びとがさがし求めつつある絶好のチャンスを提供するものである」と。

生れ変わった人たちは、今、国ぐくに精神復興スピリチュアル・リバイバルをもたらしつつあります。M R Aの力を中心にもつ産業は、万人の必要に応ずるだけ十分に生産するでしょう。日常の生活にこの力をもつ家庭は、次の世代を混乱から安泰たらしめ得るでありましょう。この力をもつ軍隊は道義的訓練の新しい標準を国民に与えるであります。大臣や外交家がこの力をもつたならば、全く効果的になるでしょう。敵を変じて友とする力をもつからです。ヨーロッパは起ち上るでしょう。世界は眠りから、無感覚の敗北から、幻滅から起ち上るでしょう。世界再造の希望があるとすれば、これが唯一のものです。「人は神に支配されねばならない。それでないと暴君に支配されるであらう」と、あの偉大なアメリカ人ウイリヤム・ベンはいいました。

新しい日と、新しい道が、ここにあります。

註

一九四七年六月六日、ロンドンのスペクテーター紙に次の記事がのつた。『諷刺は正当な対

称に属せらるべきである。今週、記者は石炭の生産が驚くほど上昇したことを聞いた。聞く

ところによると、ある大きな炭坑の経営者が——どうしてそうなつたか知らないが——M R

Aの劇¹忘れられた要素²をみた。非常に感動した彼は、自分の部下を集めて感想を語つたことだ。興味が坑夫にまで浸みこんだと思え、約三百人が劇をみにいつた。住居三十シリングもかかるのに自費でいつたそうだ。夕方、遅く帰つてきてそのまま夜勤についた。その結果、その辺のどの炭坑よりも生産が伸びて上昇したとのことである。断つておろすが、この情報はM R Aから来たのではなく、この界隈の炭坑と炭坑夫をよく知つている人から得たものである³。

忘れられた要素⁴は、フランタ・ブツクマンの思想を産業界を背景として書かれた劇である。一九四四年五月五日、アメリカのワシントンで初演された時には、労資の指導者および軍の人たちが見にきた。

この劇は、十二カ国に翻訳され、二十カ国で百万人以上の人びとがみた。一九四七年には、ロンドンのウエストミンスター劇場で上演され、十万人がみ、ドイツのルールでは十二万人がみた。フランス語に訳されてはパリと北部の産業地域で上演され、イタリア語に訳されては、産業の中心ロンバルジャ地方で上演された。フィンランド語に訳されて、同国で上演され、それを基にして映画もつくられた。日本では、日本人のキャストによつて東京の帝國劇場で上演された。ラングーンではビルマ語で、鉄道従業員によつて上演された。南および東アフリカでは、あらゆる人種を含む十万人がみた。ニュージールランドには与野党の指導者に招待されたが、初演の夜、外務大臣は「原爆よりも大切なものである」とのべた。その後これは映画化されている。

あらゆる主義イズムに対する解答

次の放送はブツクマン博士が一九四八年六月二日、MRA十周年世界大会に際してカリフォルニアのハリウッド・ボールから行ったものである。

スイス、デンマーク、フランス、ドイツ、オーストラリア、イギリス各

国においてもこれに呼応して同時に全国大会が開かれたのである。(註)

いたるところで、人びとは平和を求めながら、戦争の準備をすすめています。人びとは再建を志しながら、破壊にそなえています。彼らは新らしい繁栄を計画しながら、新しい災難の起ることを予想しています。

今日の世界の計画と経緯とに忘れられているものは、一体、何でしょう？ それ
 は真のデモクラシーのイデオロギーの欠乏であります。われわれはよく民主主義者で
 あるからイデオロギーなどはいらないといいますが。そしてイデオロギーを云々するこ
 とすら何か弱味を見せるかのように思っているのです。

その結果、われわれはデモクラシーと相反するイデオロギーの団結した戦略と情熱
 に対して、わずかに口さきだけで高遠な理想を唱えるのに終つてはおりません
 か。そして最後にはただ武力に頼ろうとしています。そして今まで通りの生活——身
 勝手な、安逸な、邪魔の入らない生活をつづけようとしているのです。

われわれはあまりにも長い間、安全、繁栄、安楽、文化の恩恵などというものが、
 人間に自然に与えられるものだと思ひ込んで来ました。われわれは善と悪との不断の
 戦いを忘れてはいるのです。善の勝利によつてのみ安全と繁栄がもたらされ、この戦い
 に敗北することはおろか、この戦いに無関心でいることすら、貧困と飢えと奴隷状態
 と死とを招来するのです。悪を根治するためには外交手腕だけでは足りません。神の
 ために闘うことは口さきだけでは足りません。政治家は解決の道を口にします。統一

融和を口にします。しかし、分裂は増すばかりです。彼らは道義的なものの価値について論じますが、政策には不道義的なことが蔓延しているではありませんか。彼らは歴史がすでに証明している事実については語りはしますが、あくまでそれは言葉としてのみ終つてゐるのは何故でしょう。彼らは自分自身の個人の生活においても、国家としても、問題解決のために当然払わなければならない代償を払おうとしないからです。極端な悪の力には、徹底した善の力によつて対抗しなければなりません。狂信的悪への追従に対しては、情熱的な善への追求でなければなりません。

今日の世界でデモクラシーが次つぎと敗北する理由はこれです。情熱に対処できるものは情熱以外にはないのです。両立しないイデオロギーによつて分割された世界を救うものは世界を一つに包含できる、より優れたイデオロギーだけです。

われわれアメリカ人は、イズムの戦いはすべて海のむこう側に属しているのだというような間違つた安全感にひたつてゐるようです。イズムというものは人と国とに未解決の問題があるときに起きて来るものです。一人の人の心の中に残されている憎しみの感情は百万の憎しみをかりたてます。一人の人の猜疑心は百万の猜疑心となつて

爆発します。ちようど大草原の火のように燃え拡がり、時としては地下の焰のように潜行して予期せぬ數百カ処から噴出することもあります。

アメリカは、憎しみ、恐れ、猜疑、貪欲から果して自由でしょうか？

アメリカの離婚率は、何故こうも高いのでしょうか？ 産業界の斗争はどうでしょう？ あらゆるイズムの中でも最も大きいイズム、すなわち物質主義マテリアリズムに食われているのではないのでしょうか？

物質主義こそ、あらゆるイズムの母ではないのでしょうか？ 物質主義がアメリカの国民一般のイデオロギーになりつつあるのではないのでしょうか？

われわれはヨーロッパやアジアに経済的援助の手をさしのべています。しかし、物質主義はわれわれの最良の意図をも失敗させます。物価が暴騰し、貨幣価値は下りつつあります。産業界の紛争は生産の減退を来しています。外国援助のためアメリカの力が最も必要とされるときに、われわれは今までに見たことのないような危機に直面することになるのではないのでしょうか？

他のイズムはそうなるのを望んでいるのです。待機しているのです。彼らは金銭の

みではヨーロッパを救うことのできないのを知っています。食糧と衣料だけでも救えないことも知っています。物質というものは、彼らがイデオロギー的に世界征服にのり出すときに役立つ程度に、国ぐにを物質的に強くするものだということも知っています。

十年前にMRAが生まれました。そのとき、ここハリウッド・ボールに人びとは世界の新しい秩序の予告篇を見るために集りました。

この十年間にわれわれは何を学んだでしょう？ われわれはイデオロギーをもたないデモクラシーが武力戦には勝ち得ても、平和を打ち樹てることはできないということを学びました。またイデオロギー的な備えこそ、国を挙げて行われなければならないことも学びました。これこそ道義的、軍事的、経済的観点からしても、国力の唯一の確実な基礎でもあるのです。

今日、MRAは民主主義国家群と全世界に対して一つの優れたイデオロギーを武器として提供しています。これなくしては軍備もその効を失い、政治家も力を失うでありません。

M R Aは過去十年の間に、物質主義をも含む、あらゆるイズムに対する解答として世界的になりました。M R Aによつて家庭を守り、名譽を全うし得た人は百万を越えています。そして新しい世界に対する希望を与えました。しかも、この希望を実現せしめるため、各国内に生きた有機体をつくつて来ました。あるイギリスの炭坑夫の言葉を借りていいます。「M R Aこそ、かつて発明されたあらゆるイズムに対する解答です。」それはすべての人のものなのです。

過去一年間に立証された事実を少し述べてみましょう。スイスのコーで開かれたM R A世界大会に指導的立場にいる百五十人のドイツ人が来しました。これはベルリンにいるアメリカのクレイ將軍とロンドンのパケナム卿との肝入りの結果であります。これらのドイツ人たちは虚無主義ユトピアおよび思想的に打ちひしがれた国民への解答を見出したのです。またコロンの軍政長官である連合国の一将校は「M R Aはドイツにとつて理想的な解答だ」ともいいました。元州知事で有名なドイツのある社会黨員は「ヨーロッパを救うにはM R Aの精神をもつてせねばならぬ」といつています。

これらのドイツ人の手で戦後初めてドイツに対する解答をもつ民主主義的イデオロ

ギーを伝えるパンフレットが書かれたのです。これは鉄のカーテンの彼方にまで撒布されています。スエーデンはこのパンフレットを印刷するために、百トンの紙を提供しました。というのも、この新しい精神をドイツに与えることこそスエーデンの安全だと感じたからです。

フランスの産業界——ここ数年間、イデオロギーの戦場となつてこの産業界は、融合できる力をM R Aに見出しています。六十万人の労働者を擁する、ある経営者団体の責任者で長年反労の旗印を高くかかげていた男がいます。一方、フランス社会党の婦人部長で経営者側を猜疑心をもつて見守っていた婦人がいますが、この二人はこの度、新しい戦いの目標、すなわちデモクラシーを活かす真のイデオロギーのための戦いを見出しました。二人が出会いました。ともに改変し相手に陳謝しました。そして今では肩を並べて働いています。数千人が彼らの下に集つて来ます。彼らは、革命や反動を語るのではなく、精神復興を語るようになりました。彼らは国の生れ変わり、全大陸の生れ変わりについて語るようになつたのです。

イタリー、憂うつな世界の焦点となつている国。昨年の夏、M R Aの大会に二十六

名の五つの異つた政党を代表する国会議員を含む二百名のイタリー人が来ました。キリスト教民主黨員と社会黨員が協調することを覚えました。「これは一つの奇蹟です。われわれが協調できたと同じ精神で党も同調できるのであろう」と社会黨員はいいました。これはイタリーの選挙の一秘話といえましよう。

イギリス——生産が高まっています。しかし、イギリスの最大問題は何でしょうか？ MRAが入つていつたある炭坑地区の経営者の一人がいました。「MRAはわれわれの空虚を満たし、われわれが必要としている推進力を与えてくれる」と。イギリス産業博覧会がバーミンガムで開かれたときに、MRAは大集会を催しました。そのときイギリス自動車工業界の重鎮ナッフイルド卿はメッセージを送り、その中に次のように述べています。「われわれが熱望している幸福を得たいならば、まず現代われわれに覆いかぶさつて来ている人為的な諸問題に直面する覚悟がなければならぬ。これに直面し、これに解決を与える道は、われわれの個人的生活においても家庭においても、また産業においても真理、誠実、無私の精神を全面的に導入して相手側の見解や悩みに思いやりのある理解をもたねばならないであらう。」と。

以上述べた明朗なニュースに共通しているものは何でしょうか？ 融合です。これは現代の困難な諸問題の解決に大方忘れられているものです。

分裂は現代の特徴です。心の中も分裂しています。家庭も分裂しています。産業も、国内も分裂していれば、国と国の間にも分裂があります。

融合こそ、いまだちに必要なものです。

分裂は人間の傲り、憎しみ、情欲、恐れ、貪欲の所産であります。

分裂は物質主義の商標です。

融合は生れ変わることを通して得られる恵みです。われわれは改変と生れ変わる秘訣を忘れたので融合の術を見失つたといえましょう。

MRAは、すべての人びとが融合できる神によるイデオロギーの善き道です。

カトリック教徒も、ユダヤ教徒も、ヒンズー教徒も、仏教徒も、儒教徒も、皆がこの善い道において融合できるのです。皆が一緒に歩める道です。

私は精神界のある指導者が悲嘆にくれておられるときに尋ねたことがあります。

彼はそのときフルトン・シーンの次の言葉を引用して話されました。「現代の世界の

必要事は異つた宗派間の融和を願うことよりも、宗教心のある人びとの間に融合をもち来らすことである。」これは有名なカトリック司教の言葉です。

ユダヤ人は偉大なる予言者であり指導者であるイザヤの言葉を通して昔から貢献をしています。すなわち「主なる神の故にもろもろの国は汝に來らん。」また「汝の子供らの平安は大いならん」と。また詩篇をひもどいて「ごらんなさい。「汝の律法を愛する者には大いなる平安あらん。彼らを侵し得る者なかるべし。」

回教徒は何といつていますか？ パキスタンの外相ザフルラー・カーン卿は次の言葉を送つて来ています。「私はM R Aの友人たちが、神の計画と目的とを断えず求めようとして努め、またそれに生活しようとしているのを見て大変嬉しく思います。私はこの方向に向つて真面目に努力を持続することによつてのみ人類は眞の救いにいたるものと確信しています。」

パレスチナ問題を解決する道も、ここにあるのではないでしようか？ これらの偉大なる真理も偏見のために見失われがちであります。世界の現状は「如何に兄弟互いに攻め合うかを見よ」と語つています。「如何に兄弟互いに愛し合うかを見よ」にし

なければなりません。

世界の国ぐにが必要としている最高の指導力を偏見によつて妨害してはなりません。

フィンランドのタンマフォルの監督がMRAの劇「忘れられた要素」が自国において自国語で上演されるのを見に来ました。初め、彼はこのような偉大な真理を伝える方法として劇を用いることに疑念をもっていたのですが、来て見て涙を流しました。「あらゆる人に見せるべきだ」といつて第一幕が終ると直ちに、ある有力な実業家を電話で劇場に呼んだのです。その結果、劇は一ヵ月間タンマフォルとその近郊で連続上演することになりました。

自分の国のために彼が最も望んでいたもの——すべての人びとのためのイデオロギー——を見出した時のピシヨップのよろこびは如何ばかりであつたでしょう。初めは気がすすまないのを半ば無理ににかけて来たのですから、そのよろこびは余計に大きかつたのです。

インドはどうでしょうか？　ボンベイ地区政府の労働大臣は次のような言葉をイン

ド各界の指導者および労働大衆に持ちかえつたのです。「わが国民の心と魂を蝕んでいる利己主義と貪欲とを交えることの出来る力がここにある。MRAを知るまでは、私は広く誰にでも適用できる解答があるとの確信をもたなかつた。」

ここカリフォルニアの労働者たちも同じことをいつています。彼らも正しい解答をもたらずこのイデオロギーが教えている改変オージェンして融合するという偉大なる真理をつかんだのです。

その結果、一団の労働者が経営者側にMRAの劇「善い道」グッドロードの映画化のために無報酬で働きたいと申し出たのです。私が頼んだではありません。彼らとして果し得る大きな役割のあることに気づき、進んで発議したのです。

これこそ、われわれのすべてが望む、より自由な雰囲気ではないでしょうか？ これこそ労働の尊厳といえるのではないのでしょうか？

今日のストライキを考えてみましょう。七万五千人、十万人のストライキのことを人はあまり気にもとめないようです。大統領は国家的な影響があるかもしれないうつています。経済学者も警告しています。しかし、それがあつた一つのイズムの忍び込

む入口だと気づいている人がありますか？ 労使双方、否、あなたと私の考え方や生き方が物質主義を基準にしているからではないでしょうか？

他国を責めると同じことで、アメリカは自らを破滅に導いているようなことはないでしょうか？

フランス、イタリヤ、ポ・ヴァレーはどうですか？ ストライキに対する解答を知っているでしょうか？

さて雇主側はどういつているでしょうか？ カリフォルニアのある大きな飛行機製作会社の代表者が私にいました。「MRAの働きを見るまでは、私は物質主義への解答はアジジの聖者フランシスとともに死んでしまつたと思つていました」と。

一言いいたいことがあります。MRAのメッセージは決してすべての人に歓迎されるとは思っていません。それは良心を刺激します。気持の悪いものです。逃げようとする人によつていつでも曲解されるでしょう。しかし、心の準備の出来ている人には光明として映ずるものです。

私がMRAのインスピレーション 靈感を受けた時の体験を話して見ましょう。ちょうど四十年前の

ことでしたが、私は心が乱れていました。ちようど世界の国ぐにが分裂しているように。私の心の戦いにおいて、物質主義が勝とうとしていました。私はそれを逃避しようとしてヨーロッパへ行きました。心の中の戦いは、どこまでもついて来ました。ある日、イギリスの湖水地方で、神は私の傲慢イブドと物質主義のために支払っている犠牲を示してくれました。私はそれを認めました。それが第一歩です。正直になることです。

私はまず神に、それから私が過ちをおかした人びとに対して、謝りました。それが第二段階です。

私は神に聴くことを覚えたのでした。そして私は国ぐにも、人びとも、待ち望んでいる解答をもたらず使命を感じたのです。これが第三段階です。

神はあらゆる処のあらゆる人に向つて融合をもたらず器うつわたるべく呼びかけておられます。融合は会議や法律や決議文や敬虔な希望によつてくるものではなく、改変チェンジを通じて与えられるものです。

改変チェンジこそ、この優れたイデオロギーの真髄です。

個人が変わるときに、国中に新しい生活の雰囲気がかもしだされるのです。

産業界、労働界、政界、宗教界等各界の指導者が変われば、国の政策は一変し、その国の生命の泉は再び流れだすでしょう。

世界の政治家が変わるとき、戦争と混乱のおそれはとりのぞかれます。どんな頑固なものも、生れかわつた、しかも謙虚な、かたく融和した民主主義のこえには耳を傾けるではありません。

神とあゆめば、必ずルネッサンスが来るであろうになぜ破壊への道をたどる必要があるのでしょうか？

これこそ、すべての国に与えられて新しい型の自由です。ヨーロッパおよび全世界は再び暗黒時代に閉ざされるでしょうか？あるいは最後の瞬間に、人類に奇蹟のように道義的、精神的な世界大のルネッサンスをもち来らずでしょうか？

どちらが来るべきでしょうか？ その決定権は、あなた方の掌中にあるのです。

註

この大会には、ヨーロッパ、アジア及びアメリカ・カナダ各地から有力な代表が、八十二名のアメリカ上院議員の招待によつて集つた。コイデオロギの要領こそ、現在最も必要な

ことである」ということを、この議員たちは強調したのである。

大会の意義について、国連イギリス代表の一人が次のように要約した。

「この考え方は、左翼と右翼、フランスとドイツ、中国と日本、アメリカとヨーロッパ、労資指導者のあいだにある溝を埋めた。この考え方は世界問題の取り扱ひ方に永続的な解決の可能性のある新しい方法を示している。」

大会が終了する直前、代表たちはそれぞれの国の政府と国民に共同宣言を発表したが、その一部には次のような言葉があった。

「世界に現在荒れ狂っている戦争は、根本的にはイデオロギーの戦いである。無神的な物質主義の勢力を前にして、デモクラシーに必要なものは、絶対道義標準を基本としたイデオロギーである。われわれはデモクラシーの眞のイデオロギーとして自国にも、又、全世界の戦線においても M R A を推進する決意である。」

フランスからは外相が次のような言葉をブツクマン博士に送った。

「私は眞のデモクラシーのために実践活動をしている勢力としての M R A に、心からのお礼を述べたい。苦惱するヒューマニテイの中に、精神的価値を再びうちたてることが眞のデモクラシーである。」

同じくドイツからは五名の州知事から次のような言葉が送られた。

「ドイツは、貴下のメツセージを受け入れる心の準備がある。貴方のメツセージは、古来からある永遠の眞理を、再び日常生活に意義をもつたものとして生かしてくれ。M R A のイデオロギーは、ヨーロッパと世界平和の再建には欠くことのできない基礎である。ドイツの百万の大衆は、貴下の七十歳の誕生日を心から祝うものである。」

解 答 は あ る

一九四八年十月、ブツクマン博士は二十カ国、二百五十名を連れて、ドイツ各地の指導者の招待に応じて、ドイツ国内各地を旅行した。戦後ドイツに入つた民間人の旅行者は、これが初めてであつた。このチームは音楽劇『善い道』を上演して歩いたが、各地で好評であつた。

一九四九年の初め、劇『忘れられた要素』がドイツ人の配役によつて、ルール地方で上演された。炭坑労働者や重工業労働者十二万人がこの劇を見た。その中には長年ドイツ共産党員であつた人たちも、MRAのより優れたイデオロギーにひきつけられていった。

一九四九年六月四日、コーで開かれたMRA世界大会の開会に當つて、ブツクマン博士はこのことについて次のように語つてゐる。

解答はあるでしょうか？ あります。

ドイツの黒い森を散歩していたある午後のことでしたが、神は次のように語りました。「道義的、精神的ルネッサンス、道義の再武装。」ここにこそ将来への希望があります。

MRAは百万の足をもつようになりました。それは大衆のために必要なメッセージをもつて居るのです。また政治家の必要にも応じております。仏外相シューマンの言によると、「ヨーロッパ百万の大衆の生活にはイデオロギー的内容がでなければならぬ。」のです。

労働者も、世界にはすべての人の必要を満たすものは十分あるが、すべての人の食欲を満たすだけのものはないということに気づいて来ています。

MRAは東西を問わず人の変わることによつて人びとを融合させる偉大なる力をもつて居るのです。それはあらゆる面での改変をもたらしめます。経済的な変化、社会的な変化、国家的な変化、国際的な変化、しかも、すべては個人の改変を基礎として居るのです。MRAは国の運命でさえ変え得るような個人の考え方を創り出すのです。

世界を再造し得るほどの力をもつています。国と国とを融和させる道を示すと同時に、家庭においても、産業においても、政治においても、国においても真のデモクラシーを創り出すのです。国としての反省と、生命を得るような素晴らしい生き方をさせるのです。MRAは神の心を心としています。

ドイツを例にとりましょう。州知事たちはMRAの精神を政治にとり入れようとしています。北ライン・ウェストフェリヤ州知事カール・アーノルド博士は次のようにいつています。「あるイデオロギーに答える得るものは、より優れたイデオロギーしかない。ドイツは新しく発足したデモクラシーを裏付けるような優れたイデオロギーを必要としている。MRAはヨーロッパに通ずる新しい精神的な道である。私の政府では、すでにこのイデオロギーのよい結果があらわれている。このイデオロギーこそは、われわれの国に必要な道義的、精神的な治癒をもたらし、かつ他国との間に平和を保つ真の基礎となり得るものである。世界の各国が確信と情熱をもつて善き道を求めるときに世界は新しい出発をなすであろうと私は信じている。」

彼の同僚、バヴァリア州の元知事エハート氏は、この言葉にこたえて次のようにい

つています。「世界はこのようになれるし、なるべきであり、ならせねばならない。」これはすべての人のためのために役立ちます。人びとは安全を願っています。すなわち、憎しみや、恐れや、貪欲のない世界を願っています。しかし、人間性は変えることができないと思うところに問題があります。人間の性質は、事実変えることができるのです。そして国の性質も変れるのです。

新しい人びと、新しい国々に、新しい世界を来らすための戦いに、われわれは適切な武器を必要とします。「善き道」^{Way of Right}や「忘れられた要素」という二つの劇は、いろいろな国でその国の言葉で何千の人びとに呼びかけていますが、これが映画化された暁には百万の人びとに話かけることになるでしょう。神から与えられたこの思想の侵透力に人びとは驚嘆しています。パーテン・パーデンで劇が上演されたとき、ドイツのあるマルキストはこういいました。「丁度長い山道を登りつめて、突然、光の都を見たような感じでした。」

ドイツ占領に当たっている、あるフランスの役人は次のようにいつています。「この劇は私を圧倒してしまった。四年前にこの劇が上演されていたなら独仏間に横たわる

問題はなくなつていたであろう。私は私自身の生活および私の施政にこの精神を活かしてゆく決心である。」

有名なカトリック思想家ラインホルド・シュナイダーはこういいました。「これこそ世界の隅ずみにまで行きわたらなければならぬ。」

ドイツの産業界の反響はどうでしょう？ ドイツ石炭庁長官コスト氏は、ルール地方の工業界にM R Aの精神をとりいれる計画をするために、この地方の産業人百五十人を集めました。ある人が、もしも一発の爆弾が、皆が集つているこの部屋におちたら、ルール地方の産業は停止してしまうだろうといつたほどでした。この集会には十カ国からの産業界や、労資の指導者たちが話に來たのでしたが、コスト氏が次のような言葉でこの精神の核心を表現しました。「労働者側の改変を待つべきではない。われわれの改変が先ず必要である。問題はわれわれが変るか、変らないかにあるのではなく、どう変るかにあるのです。」

ドイツのイギリス占領地区の労評議長、ハンス・ベツクラー博士もこの集会に出席してました。彼は「人びとが過去や、時代おくれのものから解放されたいと望むな

ら新しい目標をもつべきである。これは人間愛と道義的価値をすべてに先行させるとき初めて可能となるのである。私はMRAが人間生活の幾多の面において決定的な改革をもたらすことを信ずるものである。人びとが改変するとき、社会機構が変るのである。社会機構が変れば、また人びとの変革を来すのである。両者は相俟つものであり、ともに行われることが必要である。私が組合員として全力を傾注して実現しようとしている目標と、MRAのそれとは合致するものである。」といいました。

われわれはすでに二十世紀の半ばに達しました。後半の鍵をにぎるものは誰ですか？ それは虚無主義と無関心に対して解答をもつ青年のいる国ではないでしょうか、ハイデルベルヒ大学新聞を編集している学生がこういいました。「われわれ学生は行詰まつている。MRAだけが解答をもたらせるものだ。」と。

「忘れられた要素」はボン市において上演されました。そのときカトリック司祭のボン大学総長が立つて祝辞を述べたのですが、その中で彼は次のようにいつています。「十三世紀の危機にアシジの聖者フランシスのなしたことをMRAは現代のより大きな危機に対してなしている。」彼はボン大学の学生が多数MRAに共鳴している事実

を知つて、スイスのコーに来ることになりました。

フライブルグ市でこの劇が上演されたとき、切符は全部売切れていたにも拘らず、ある学生が来て必死で入場させてくれと懇願したことがあります。彼はソ連地区から来ていて次の朝には戻らなければならないと語り、さらに「東ドイツではみなMR Aのことを話しています。はつきりしたことは分らないのですが、何かわれわれの唯一の希望だといっています。私は友人たちにはつきり正体を掴んで来いといわれて来ました。帰る前にどうしてもこの目で見なくては帰れません。」といました。

誰もがMRAこそドイツに対する解答であると感じています。しかし、逆に生れ変つたドイツがすべての人に対する解答をもつことになると思つている人は少ないのです。ドイツの運命はヨーロッパの運命を決めます。

ベルリン大学法学部教授ベーター博士は「ドイツ民主主義の問題」と題する近著の中で歴史を通して見られる民主主義の七つの型に言及し、現代の民主主義の失敗に對してMRAのいう、靈感に満ちた民主主義こそ解答であると結論しております。

十七万の組合員を擁するベルリンの労評議長も次のようにいっています。「常に正

しいことをなすことができるというような、心の平和はどうしたら発見できるだろうか？ この仕事には多くの使徒が必要でしょう。私もその一人になります。MRAのメッセージは嵐のように人類をおそつていきます。」

またパリも解答があるでしょうかと？ MRAの他に解答があるでしょうかと？

ドイツのある社会主義者はこういつています。「MRAなしにはヨーロッパの融合はできないであろう。」

元フランス社会党婦人部長ロール夫人に聞いてみましょう。「私はドイツ人を憎む十分の理由をもつてコーに來ました。しかし、奇蹟が起りました。MRAを生活に活かしているドイツ人に会つたとき私の憎しみは消え去りました。第一次と第二次大戦の中間期間にドイツとフランス両国に如何なる感傷主義センチメンタリズムももたらし得なかつたことを、相互に共通するこのイデオロギーが達成しています。今や両国ともにま心で理解の橋わたしをしようとする、確固とした地盤を得ました。」

ニュージールランド副首相ウォルター・ナッシュ氏は遥か彼の地から次の言葉で呼応しています。「MRAは人と人との間に、使用者と従業員の間に、政府と政府の間に

新しい関係をもたらしています。M R Aの仕事は広く行わなければならない。現代世界において最も強い力であります。この仕事が迅速に行われるかどうかはわれわれの責任です。」

人と人が協調して働き出すとき、国には新しい精神が生まれるのです。多人数を要しません。例をあげてみましょう。東洋で起つたことです。ビルマのラングーン市の一新聞、「バーマン紙」に次のような見出しが出ました。

「国全体に及ぶ精神の発展。すべての偏見、派閥的思想、利己心からわれわれを自由にする考え方を必要とする。」

この見出しのかけにどんなことがあるかといえば、ビルマの国難に際し数人の指導的地位にある人びとが協力してM R Aの光を高く掲げたのです。彼らは次のように全国に呼びかけました。「現在まで何らの解答を見出し得ずにいた理由は、解答のあるべき個処にこれを求めていないためであつた。ビルマは借款を必要とする。財力が必要だ。殆んどすべてが足りない状態である。しかし、ここに必要欠くべからざるものがある。それは人を改変できる思想である。相互の信頼感を助長させるために、心を

変えることである。そのとき初めて相手に望む生活を自分自身が生活し始めるのである。そのとき初めてわれわれは己れの信ずるところに従つて生き始めるのである。」

これが政治に必要な新しい考えではないでしょうか？ コーの大会に出席するため、パーマン紙の主筆が出かけているのもそのためではありませんか？

政治家が利己心をはなれて指導すれば国民はついて行くものです。中国の何応欽將軍が私に送つて来たメッセージの中で道義的節操だけは堅持とすうっています。私たちの国は節操を守ろうとしているでしょうか？ それとも便宜主義に惰しているでしょうか？

インドもMRAに答えています。ボンベイ政府の労働大臣ナンダ氏は国民に一つの誓約をしました。その中には次の言葉が含まれています。「個人も国家もその力は愛、純潔、無私、正直などの徳にかかつている。」

「MRAは憎しみに対する解答をもっている」とマルキストはいつています。「白人に対する憎しみを私の心からとり除いたのもMRAです」とジャマイカの歌手パイルス氏は言っています。」

なぜM R Aが解答であるかといえ、根本を癒すからです。

あるアメリカ中部の農夫が次のようにいいました。「私は旧約聖書を読むたびに、なぜ神さまは人びとに語るのをやめなされたのかと不思議に思つたものでしたが、M R Aを知つて、やめたのは神さまの方じゃなくて、人間がきくのをやめたのだということがわかりましたよ。」

ある人の言によれば、現代人は己れの罪に無頓着ですが、無頓着であるためにその結果として己れの罪以外のほとんどすべてのものにわずらわされているのではないのでしょうか。

M R Aは罪ということをまじめに検討します。キリストをまじめに考えるのです。

ドイツのウルム監督は次のように書いています。「M R Aでは人びとはキリストの十字架をあまり口にも出さないが、彼らはその力によつて生活している。その影響が強く感じられている。彼らが党派や、国ぐにや、異宗派同志を融合できるのはそのためである。」

グラスゴウの元市長でカトリック教徒のドーラン卿は、「M R Aこそ崩壊途上の文

明にとつて唯一の確かな希望であるといっています。

ある労働運動家は、「MRAは何も新しい組合ではない。新しい宗教でもない。かといつて新政党でもない。新しい世界を実現するための共通な戦いを通して生れる救いである。」

解答はあるでしょうか？ あります。

今、われわれが必要としているのは、「よしやろう」と誓う百万の大衆です。

東と西の使命

一九五〇年五月二十八日、M R A大会はドイツの指導者の招待によってルール地域のギルセンキルヘンで開かれた。アデナウア首相がブツクマン博士に送ったメッセージの中で「M R Aは戦後のドイツの家庭用語になりました。『忘れられた要素』はルールで成功しました……全体主義的思想の攻勢に対して西ドイツ連邦、特にルール地域はM R Aの思想を宣言する最適の場所とされています」と述べている。次の演説はラジオ・ベルリンを通して全世界に放送された。

危機が叫ばれている今日、マルキストたちが新しい考え方を発見しています。階級斗争はすでにすたれつつあるのです。経営者も労働者も階級斗争に変わる積極的な生き

方を生きています。

マルキストがすっかり変わつて、使用者から「彼はわれわれの最も良い友人である」といわれるようになるとは夢にも思えませんまい。産業経営者があまりに変つたので、その旅券を見るまでは彼の改変の奇蹟を労働者が信じえないというようなことが起るとは誰が思うでしょうか？ ところがみなほんとうなのです。それが実際に起つていきます。これこそすべてのものを融和する唯一の希望であるのです。これが事実であるとすれば、東とか西とかの区別もなくなるでしょう。

すべての人が変ることこそ、すべての人が団結する唯一の基礎ではないでしょうか？ 果してマルキストは改変し得るでしょうか？ マルキストが、より偉大なイデオロギーの道をきり拓き得るでしょうか？

できない筈はありません。彼らは常に新しいものに心を開いています。

彼等は先駆者でした。彼らは信ずることのためには死をも辞しません。この優れた考え方を土台として生きる者となれない筈はありません。

二人のマルキストがコーにきました。三人目が迎えに来ました。彼も帰つていつた

ときは改変チェンジしていました。

彼をもとにもどそうとみなが骨を折りました。だましてもみました。しかし、彼は共産主義者、非共産主義者双方にこの新しい考え方を示すよい模範となりました。彼は北欧に旅して総理大臣たちに会いました。彼らは今日の時代に幾百万の人びとを動かすような大規模な奇蹟を可能とする事実を見たいと希望していたので、喜んで彼を迎えました。

このマルキストは北欧の指導者の一人に会いました。互いに違つた思想と伝統とを持つていました。しかしこの指導者は、彼の中に時を超越した兄弟愛を発見しました。「彼こそ本当の人間だ」と彼はいいました。心の中の障壁が取り去られたのです。

このマルキストの改変チェンジは、急速に一国の話題となりました。どんな問題にも常に明答を下せると自負していたある外交官が、彼のことだけは解りかねるといつて訪ねてきました。この外交官は友人たちを集めて、彼について話し始めました。マルキストが分裂に答えを見出したことが、彼らの大きな驚異となつていきます。

世界の問題の中心になつてゐるある国のことですが、国内の紛争があまりひどいの

で変わる必要があると誰もが考えています。変る決心さえあるならば、思想、伝統、宗教等解決に必要な道具立は全部一応はそろつています。しかし、ある婦人議員がジヤン・ダークの精神をもつて人びとを目覚ましはじめるまでは、みなミイラのように静まりかえつてゐるだけでした。

もちろん最初の間は誰も大反対でした。互いに相談した上で彼女に、その職を失うかもしれないと警告しました。彼女は知つてゐる限りの事実を伝えました。彼女は自分の目でドイツのマルキストが、この新しい考え方の秘訣を発見した事実をみていました。

賛成するものができました。偏見がなくなつてきました。彼女は満足な人生の答えを見出し、その新しい真理を他にも与えうる者となりました。至るところで人びとが、その答を彼らの生活に要求していることを発見しました。

彼女は北フランスにきました。その地方で彼女は綿毛紡織関係の労働者と使用者、社会党の市長と保守的な産業者の間に、今まで誰もが夢にも見なかつた解決の道が開きつつあるのを見ました。彼らはロペール・シューマン外相の言葉に動かされました。

「ここにわれわれの注目すべきものがあります。動かし得ない現実さがあります。古い真理がみな含まれています。古い真理を決して拒否せず、かえつてそれを生きたものにするものです。」

さらにこの賢明な政治家はいいました。

「われわれはすべての差異に橋を架け、団結を与える何ものかを発見する必要がある。」

イタリアにも、この聖年ハロウイヤーには、国としてまた国際的にも新しい生き方をしたいという深い熱意が見えます。イタリアの大実業家とその同僚にむかつて、M R Aこそ善き世界への道であると話しました。彼の言葉は今日の来賓の一人であるフランスの大実業家によつて裏付けられています。彼は「すべての条約や経済協定は、私がコーにおいて見出した融合の精神によつて裏書きされぬ限り真の効果を発揮し得ない」といいました。

今日われわれは、如何にして国を再建するかを知らねばなりません。あなたの国は別だと思ひになるかも知れませんが、例えば、「戦争に勝つたのだから」と考える人

もあるでしょう。しかし、日本のような国について考えてみましょう。日本は敗戦しました。そして今や再び立ち上ろうと必死の努力をしています。

種々な勢力が日本の中に働いています。特権を失つたために苦々しい気持をもつてゐる者もいます。危機を回避できるこの新しい考え方にふれていないマルキストたちもいます。彼らを味方にする必要があります。彼らは国を分裂させます。ちやうど東西ドイツの分裂から起こる悪感情があるように、日本にもその気持があります。行くべき道を見出そうとして、反対勢力と斗つてゐる政治家もあります。

生れ変るといふ恩寵から来る融和の精神を彼らは必要としています。こうした国ぐににとつてそれは決して楽なものではないのです。しかし、これのみが、可能の道なのです。

日本はこの新しい考え方に会いました。三十七名の指導者が、昨年夏コーにきました。

日本最初の社会党首相、前蔵相、二大新聞の代表、前駐米大使、三井家の人びと。今では国中がMRAの名を知るようになっていきました。一国の指導的人物、知事たち、

新聞の主要な人びと（新聞の仕事は国の使命を映しだすものである）鉄道従業員（彼らは人びとに交通の便を与えている）——一従業員から社長にいたるまで。日本タイムズは社説に次のように述べています。「MRAは日本人にデモクラシーを生き、デモクラシーを実行する機会を与えます。現在とかく口先ばかりのデモクラシーが實際的に生かされて来ると、日本はもちろん、他の国ぐににおいてもそれはますます偉大な善の勢力となるでしょう。MRAは単純な公式を土台としています。その根本は個人、社会国家の各層をなす個人であります。彼らの毎日の生活に正直、純潔、無私、愛の原則をあてはめることを要求します。個人の精神的浄化が彼の周囲の人びとを感化し、一人より一人へと拡がり、ついには国全体に浸透しそれを動かすに至ります。」（註二）

MRAはすべての人のためのものであり——全世界のすべての人のものであります。日本最高裁判所長官でカトリック教徒の有力者が「私はMRAに多大なものを期待している」といつています。

東南アジアはどうでしょうか？ その幾百万の大衆はようやく得た自由を国内の分裂によつて失おうとしています。その地域からきたある外相がいいました「MR

Aは原子爆弾と同様に重要である。」と。

それはM R Aが新しい融合への扉を開き、各人種、各階級、各国家間に、すべての人の改変を土台とした団結への扉を開くものであると彼が悟つたからです。

東洋のある偉大な政治家がいました。「私はあなたの仕事の基本的理念に対し共鳴している。」と。知識の進歩に比して人格の進歩が並行していないこと、指導精神確立の必要などについて彼は語りました。さらに言葉をついで彼はいいました。「どこかで神学者たちは道を間違えたようです。そのため潮時を間ちがえてしまつたのです。社会の勢力となるべき力が、ある場合には一番大きな頭痛の種になつています。ある国ぐには新聞記者が生活のため中傷をしますが、彼らは人の自信を傷つけ、社会がもつその人の信頼を亡ぼします。しかも自分はそれに対して何らの責任も感じないのです。ある国ぐには、国の生き方が指導者を傷つけています」

そこに問題があります。新聞は政治家に「靈感」を与えるものでなければならぬのです。新しい世界の先駆者であるべきです。生き方を先ず変えて世界を再建する偉大なプランに対し、すべての人が責任を自覚し、その計画の一部であることを感ず

るようになる必要があります。現在われわれの考え方は歪んでいます。同意することを考えるよりはまず反対を考える。しかし、M R Aの行くところには団結が生まれています。紛争がなくなっています。ストライキが解決しています。ストライキが開始されたというニューズの代りに、ある工業都市でM R Aの記念大会を市全体で労資が協力して挙行しようという提議を、組合指導者と有力な経営者が行つたという電報を、私は受け取っています。これは改変チェンジの生む当然の結果であります。

アフリカのある国家主義的指導者がヨーロッパにきます。彼の民族の指導者たちは激しい政争のため、ひどく分裂しています。国を救うためには、東か西かの何れかを取らねばならないと考えたのです。ロンドンで彼の同国人がM R A（道義再武装）のことを彼に話しました。彼は予定を変更してコーに来ました。そこで彼は東と西とを結ぶ一つの道を見出しました。アフリカに帰る前、彼は政敵に飛行場で会いたいと電報を打ち、帰国後最初に会つたのは、この人たちでした。彼らは彼の変つたことを認め協力を約しました。六ヵ月後、彼の親友が彼について次のようにいいました。「彼が政敵と融和し、誰が正しいかではなく、何が正しいかという真理を示すようになつ

て以来、わが国の政界には新しい雰囲気が生まれてきた」と。彼の経営する五つの新聞はこの新しい精神を伝えるようになりました。三千万人の人びとにとつて、分裂が融和に変わりつつあります。

全世界にわたつて港湾は一つの戦場であり、港湾を支配することは、一国の生命線を支配することにもなります。経営者や狼狽する政府は審査機関をもうけます。組合の指導者は秩序を回復しようとしませんが一向に効果がありません。問題は継続します。労働者は不満をもっています。その不満を分裂の勢力が利用しているのです。そこにMRAが入つていきました。ここに港湾の労働新聞主筆であり、昨年夏ロンドンの大ストライキを指導した人物の言葉があります。彼は解決の道を発見したのですが、次のように書いています。

「MRAのイデオロギーと神ガイダンスの導きが、過去十ヵ月に何を私に与えたかをお知らせしたいと思つてこの手紙を書いています。導きに従つたことが二つの港湾紛争を解決するものになつています。また私自身、私の妻及び家族に対し、何という大きな変化を与えたことでしょう。私の妻ネリーはいまでは私のよい人生の伴侶です。彼女はす

ばらしい闘士です。妻とともに導きを受けるようになって、とてもいろいろな、むずかしい問題が解決されます。たとえば、トリーレー・ストリートの事件にしても、私は導きガイダンスに従つてこれに関係しました。使用者、組合、労働者がみな一致できなかったとき、私は使用者のところに行つて、事実を話しました。彼は私を事務所内に案内しました。私は誰が正しいかではなく、何が正しいかで話をしました。そして私たち二人がMRAのイデオロギーをもととして話しあつた結果、使用者は組合の指導者をよびました。一時間もたないうちにストライキ問題が無事に片付きました。

最近の港湾紛争については、すでに新聞でお読みになつたことと思います。私たちがのようなものが神の導きによつて、労働者を職場に還らせただのであることをどうぞ憶えて下さい。もし導きというものがなかつたらば、恐らくストライキは今でもまだ続いていてでしょう。導きがわかると、変わった光明が与えられます。もし、世界各国の政府が過去十カ月の私のように、神の導きに従うならば、われわれの時代に世界の平和が実現するでしょう。」

数週間前に私の古い友人が死にました。彼は真のフランス人でした。アルサスの人

です。過去二十年間、彼はドイツとフランスの融和と一致のために努力してきました。死の床に横たわっていた彼の心は、世界の分裂を思つて暗かつたのです。そしてフランス語で次のようにいいました。「将来起る出来事を思うと恐ろしい。」しばらくの沈黙のあとで、張りのあるドイツ語で話し出しました。次の言葉は臨終の言葉です。

「国と国との和解が生まれなければならない、国と国とが融合しなければならない。遺族は手紙で、彼の死顔には天国の微笑みがあつたと私につたえてきました。

誰もが共鳴することは、団結だけがわれわれの唯一の希望であるということです。それがフランスとドイツの眞の使命であり、それが東と西の使命であります。その反対は分裂と死であります。M R Aこそは世界に対し、すべての国が改変して存続し、融和して生存する、最後のチャンスを与えるものなのです。

(註一) この大会は、ベルリンで行われた共産党の一大デモストレーションと同じ時に開かれた。次の日の新聞の見出しは、次のようなものだった、「ベルリンは失敗、M R Aこそは基本的な答」

(註二) 一九五〇年六月、七十六名にのぼる戦後に日本の最大の代表団がコリのM R A大会に到着した。国会議員、七人の知事、広島、長崎両市の市長、産業界、財界、労働界の指導者

を含むこの代表団は、時の首相の積極的な指示を得てきた。

帰途、彼らはワシントンに寄り、上下両院に迎えられた。今までの歴史になかったことであるが代表団のうちの国会議員は議場内で演壇から発言する機会を与えられ、アメリカ国民に対し、戦争の懸界をすると同時に、日本及び太平洋諸国の将来のためにMRAが最も偉大な希望であるとの確信をのべた。上下両院とも議員たちは全員起立して拍手を送った、

代表団は七月二十二日ロンドンを出発するまえに次のステートメントを発表した。

「われわれはコミニズムの発祥の地であるヨーロッパに、これに対する答えを求めてきた。われわれはコーにおいてMRAのイデオロギーを見出した。この考え方はアジアで直面する問題解決の基盤になることを信じ、提唱者であるブツタマン博士とチームの方がたに感謝する……日本が過去においてあやまつた道を進んだために多大の苦しみを他に与えたことを認める。将来はわれわれの行動で自らの心の変化をしめし、世界を再造するための貢献をしたいと望んでいる。

民主主義の思想がアジアをかちとるためにはイデオロギーの面により多く注意することが必要であろう。……ソ連はイデオロギーの戦いを理解するからアジアに進展をなし得ている。常に人の心をかちとるため、彼らは斗つている。われわれが西欧の国民及び政府に希むところは、未來のイデオロギーであるMRAの哲理を理解し、その実践者となることである。その時、全アジアは耳を傾けるだろう。」

生きる目的は何か

一九五〇年六月四日は、ブツクマン博士の誕生日であり、M R Aの第十二回記念日で、ドイツのゲルセンキルヘンにおいてレセプションが開かれた。ドイツのルール地域の炭坑夫とその家族数百名も、産業界の指導者やその他の人と混つて出席していた。この機会にフランス政府はブツクマン博士に、フランスとドイツのよりよい理解を増進した功績に対してレジョン・ドヌール章を授与した。

十二年前、私はフロイデンシュタット近くのブラック・フォレストの森を散歩して
いました。世界はまさに波瀾の極に達しようとしており、今日と同様に人びとは平和

を望みながら戦争の用意をしていました。

森の中を歩いていると一つの考えがくり返し心に浮んできました。「道義と精神の再武装、道義と精神の再武装（モラル・リアーマメント）。次に来る世界の大運動は各国の道義再武装を計る運動である」と。

その後数日して、私はロンドンに行き、イギリス労働運動の発祥の地、イーストハム区に行きました。労働者たちは賛成してくれました。M R A（道義再武装）が世界に拡がって行つたのです。新聞が書き立てました、ラジオが放送しました。十二年後の今日、世界の各地で人びとが国ぐにのM R Aを計画するために集まっています。ロンドンの労働者は港湾労働者とともにボブラー公会堂に集まりました。パーミンガム公会堂では労使代表がイギリスの重工業と炭坑関係から集まり、グラスゴーではクライドサイド造船工員が大会を開いています。

アメリカでは、私の友人たちが大西洋横断電話でアメリカでの運動の発展ぶりをわれわれに知らせ、またドイツのニュースを聞くことになっています。

メッセージが数日前から到着しつつありますが、オーストラリア、ニュージーラン

ド、インド、南アフリカ、アメリカ、ヨーロッパ各地、日本、極東各地からきています。その代表的なのはインド政府企画院総裁グルザリラル・ナンダ氏の言葉です。「世界の病根を根絶する唯一の希望はMRAにあると信ずる私たちの挨拶をお送りする。MRAは年とともにその世界的意義と力を増しています。全世界の全地域においてMRAの思想を、政治、経済、社会の思想と実践において最も顕著な、また最も力あるものとするまでは、MRAはその目的を達したものとはいえない。」

神に与えられた思想が勝利を得る秘訣は何でしょう。私やまた世界の何千何百という平凡な男女が、非凡なことをなし得るのは何故でしょう。極端な自己中心主義者か、盲目めくらでない限り、今日の世界を今のままでよいと思うものはいないでしょう。われわれの多くは世界を変えたいと思つています。問題は大部分の者が自分勝手な方法でそれをやりたいと思つていることです。

ある者は正しい診断を下すが、治療法がまちがつています。彼らは神を度外視し、人間性の改変チェンジを無視しているから、結果は混乱、悲哀、戦争となるのです。またある者は、理論的に立派な解答をもつていると思つています。しかしいつも先ず誰かが、

また他の国がそれを始めることを希望しているのです。結果は焦燥と絶望とであります。

正しい診断と正しい治療法が一緒に与えられるとき、奇蹟が生れます。人間が改変することによつて社会が変わるのであります。

この点を私個人の体験で説明しましょう。というのは、ある日、こういう事が私に起つたのです。突如として私は私のもつていた傲り、利己心、失敗、罪が明白に解りました。「己」という一字が私の生活の中心に立つていたので、私が変わるためには、その大きな「己」という字が抹殺されねばならないのです。六人の人に対する恨みの感情が、心の中に墓標のように立つていることがわかりました。

私は神に私を変えて下さいと願いました。神は私に六人の人と和解せよと命じました。私は神に服従して、六通の謝罪の手紙を書きました。

その同じ日に神は私を用いてひとりの人を改変しました。そこで神に従えば奇蹟が起るということを悟りました。人が聴くとき、神が語り、人が従うとき神は働く、人が変わるとき、国も変わります。

この革命的な道を私は四十二年前に踏み出しました。今では幾百万の人が歩いています。そして今日、私は諸君にもこの道を歩くことを挑戦したいのです。

諸君は何のために生きていますか？ 諸君の国は何のために生きていますか？ 利己的な個人と利己的な国家は、世界を全面的破滅に導きます。新しい型の政治家、新しい型の国策——それが現在、最も必要なものです。この目的のためにMRAは生まれました。

この春、若い、富も地位もある有望なスイスの技師が、家族と友人を残してなくなりました。彼も私と同様に生命と財産とを投じて、^{変遷}改変を土台とした新しい世界創造の秘訣を発見していました。彼は妻や子供と一緒に、世界のMRAセンターとなるコーの実現にすべてを捧げました。彼が僅か五年間に多くの人が一生を費してもなし得ない大事業を完成したことを、人びとは今となつて認めだしました。

この若いスイス人は、今から七百年前に世界を変ええるために、名誉も富もすべて、持てるものすべてを与えたある青年の足跡をふんだのです。彼はヨーロッパに新しい生命を与え、彼の一生は幾百万の人びとを感動させているのです。彼の名はアシジの

聖フランシスです。この若いスイス人の技師は聖フランシスの詩を日々愛唱していたと彼の妻はいつています。この詩こそ、世界を変える鍵でもあります。

神よ、汝の平和を

もたらす器うつわとならせたまえ。

憎しみのある処に 愛を

敵意のある処に 赦しを

紛争のある処に 調和を

誤謬のある処に 真理を

疑惑のある処に 信仰を

絶望のある処に 希望を

暗黒のある処に 光明を

悲哀のある処に 喜悅を

与えるものとならせたまえ。

私の主よ

慰められる者となるよりは

慰むる者と

理解せられる者となるよりは

理解する者と

愛せられる者となるよりは

愛する者と ならせたまえ。

そは、与えることによつて

与えられ

生命を失うことによつて

生命を見出し

赦すことによつて

赦され

死することによつて

永遠の生命に

甦よみがえり得ればなり。

光をつけよ

一九五一年六月、マキノ島で開かれたM R A世界大会の開会に當つて、ブツタマン博士がした演説。

今日の世界は混乱しています。現に戦争がおこつてゐる処もあり、戦争の噂もあり、進撃的な強い力が世界を制圧しようとしてゐるのです。至る処に——炭鉱に、港湾に、遠い朝鮮に、マレーに、インドネシヤに、オーストラリヤに、その力はこのびようとしています。これは地球大の争いであり、人びとは真剣に憂えています。恐れが彼らを捕えています。どうしてよいか答がわからないのです。

十三分間の短い放送時間に何がいいえましよう。しかし、その間に諸君に解答を示そうとするのが私の仕事です。

誰でも幸福に暮したいと願っているのです。誰でも心を煩わされるのを嫌います。しかし、いや応なしにそれが起ります。たとえば税金に関係がある場合、これはみんなに影響するので、税金が度を越えて高くなると否でも何とかな解決を見出そうと本気になるものです。

どこへ行つても人びとは不満足です。ミラノ市で私は建物に「共産主義万歳」と書いてあるのを見ました。他にどんな標語を掲げたらよいのでしょうか？ 何を「万歳」といえましよう。一致した解答がまだないのです。

政党の主義主張も前ほど意味がなくなっています。民主党といい、共和党といつても、大した差がないのです。その中のある者はよいが、あるものは悪い。人びとが心から求めているものを与えるような普遍的な型の指導者は、ワシントンではなかなか見当たらないのです。この人ならと全幅の信頼をおける人があまりにも少ないのです。昔はワシントンで政治にたずさわり、名譽に埋まつていることもそう困難ではなかつ

たのです。しかし今では、さまざま意見がひどく渦巻いているので頗る面倒です。すべての人を満足させ得る技術を持っていないとむずかしいのです。今日必要なのは、ことさら宗教くさくなくて、しかも生活のあらゆる面で、神を第一義にする人です。敵をゆるし得る人、はつきり決定のできる人。

イギリスではそうした指導者が港湾労働者の中にいます。この間まで、この人びとはストライキを起こしたり、騒いだりして、頭痛の種となっていたのですが、それがみんな変わりました。そして今度はイギリス国会の人びと——下院と上院の議員に——問題の解決を示しているという理由で、MRAの本を贈るようになりました。労働党の議員ばかりでなく保守党員にまで贈つたのですが、保守党幹部の一人が自分たちに欠けている何ものかをこれらの港湾労働者が持つていることを認めているのです。保守党でさえあればそれで十分だと呑気に考えている人もあるが、彼は「階級的な考え方をもつことは誤りである。どんな階級でも、どんな人でも常に正しいということはありません。自分より他の人が優つていようと認めるのはなかなか辛いことです。とか

く人は自分の重要性ばかり考えていて、他のことをかえりみる余裕などないのです。新しいより高度な生き方、今までに見たことのない生き方が必要です。正しきを認めて誤りを捨てるのがそれです。このことは光明をもたらせるのです。

われわれは、あまりにも長く暗闇の中で生活してきました。あるとき、私はトーマス・エジソンと夜明頃まで話しましたが、そのとき彼は聞きました。「天国にはあかりがあるでしょうか?」「もちろん」と私は答えました。「その心配はありません。とうに光がついていますよ、地上に光をとらずだけであなたの仕事は十分なのです。」

すべてに光があり得るのです。政治にも光を与えたらどうでしょう。そうしたら議論も熱の代りに光となるでしょう。「光をつけよ。もつと光を」これが混乱への答です。はつきり物が見えないでよい理由はないのです。

あかりをたくさんつける現代的な設備はできています。エジソンが世界に与えるためにともした電燈は、まず一つの家を明るくしました。霧を貫く電波探知器もありました。またものの内部を見せてくれるX光線もあります。だが神の与えているものはそれだけでないのです。これだけ光の設備を持ちながら、世界は暗黒の中を隊伍を組ん

で行進しているように見えます。

われわれの信仰も悟りの光をうけて輝やかねばならないのです。すべての信仰も超自然の輝きを必要としています。「天なる焰もてあきらかならしめよ。神はわが光、わが救い、われ誰をか恐れん。」

この光には、絶対の道義標準が照明として必要で、それに照らされるとき、個人も国家も変わるべき処を示されるのです。基督教的実践を通して、生活の錆を落し、磨きをかけなければなりません。この標準をいつも生かし、活用させることが大切です。そしてすべての人によつてそれが生活されるとき、成功の秘訣となります。

ミシガン州グリーンフィールドの町にエジソンの実験室が永久に保存されていますが、これはいま一人の偉大なアメリカ人ヘンリー・フォードの貢献です。エジソンだの、フォードの名前は何故、現代人の心を引きつけるのでしょうか。彼らが将来を見透していたからです。現在の政治家に欠けているものはそのことではないでしょうか？

ヘンリー・フォードがかつて次のようなメッセージを送ってくれたことがあります。

「MRAの実践を見ると、この国に、そして世界の将来に希望がもてる。」

エジソン夫人もM R Aを理解していました。「主人の与えた光と同様に、この光もすべての家に行きわたらなければならぬ。」と仰いました。また令息のチャールス・エジソンも海軍長官として次のようにいつています。「私は道義の再武装が、物的再武装に劣らず重要であることを確信している。」

彼らは産業時代の先駆者であつたために、世界に光を与えるM R Aを理解し得たのです。現在の世界状況は各人がそれぞれ光をつけることを要求しています。それこそわれわれの希望であります。

ロンドンのダゲナム地区にあるフォード工場の例をひいてみましょう。組立工場の監督はいいました。「戦後の不安時代に私は工員たちにきつく当つていました。ある日、工場代表委員たちが、M R Aの四つの標準を基にして問題を討議してくれないかと提案して来ました。討議の結果は上々で、工員たちをおおらないでも生産能率は上りました。この部門は、前よりはるかに経済的に運営されています。この四月の能率は九九、四三％で戦後最上のものでした。」

この大会は全世界に光が拡まりうる証拠をみせます。われわれは現実的であり、新

しい便利な道具が出来れば、すぐ家に備えつけられます。テレビジョンもその一つです。

なぜこの新しい遠くまで見透す光明をすべての家に備えないのでしょうか。

アメリカの国会の両院議員有志たちがこの仕事を支持するのは何故でしょうか？

何故外交委員会の人びとが世界中の首都に招待電報を送つたのでしょうか？ このことは全然高度な、新しい政治的指導精神を示しています。敵を友だちにできる政治力です。日につづいて夜のくるように、共産主義は暗黒を伴います。しかし、この事実を自国で体験したある閣僚がいました。「共産主義が真昼に暗やみをもたらすものであるとするなら、MRAは真夜中に太陽を輝かすものだ。」

今日ノルウェーの共産党の生みの親であり支柱である、三十四年間党員生活をした人がわれわれと一緒にここにいるのもこんな理由からです。労働指導者でコミニストだつた人びとがルールから、ロンドンの港湾から、フランスから、イタリーからきて、アジア、ヨーロッパの経営者側の人びとや各種の信条をもつ人びと、また信仰の全然ない人びと、あらゆる人種、ちがつた背景を持つた人びとが、みな受け入れることの

できる真理の実体を見出しています。「これは役に立つ」と彼らはいいます。「これこそ勤労者の求めているものだ」と産業家もいいます。彼らもそれを欲し、しかも棄めるものです。

始終問題に悩んでいる人びとが自分の誤ちを認め出すと問題も紛争も解決してしまい手持無沙汰になるほどです。CIOのある指導者がいいました「今では床につくとぐつすりねむることが出来るようになった。問題は解消した。」

変わることによつて新しい秩序の提唱者となつた人びとが本日列席しています。彼らはこの革命の進展を知っています。ちようど一年前、私はドイツ首相コンラッド・アデナウアー博士の招待で、ベルリン市の共産党示威運動の影響を削減するためにルー地区で大集会を指導していました。翌日ドイツの一新聞は一面に「ベルリンは大失敗、MRAは根本的解答」と見出しをのせました。

フランス外相シューマン氏も、フランスとドイツの関係にこの運動の効果を認めています。過去六年間のミラノ市長は社会党の人ですが、「MRAは誰をも征服することなく、誰にも征服されず、みんなが勝利する唯一の武器だ。」といいました。

中国軍隊の最高司令官であつた何応欽將軍は、最近、日本の参議院会館で次のように語りました。「中日恒久平和の基礎はM R Aである。これこそ最も重要である。」

今やM R Aは世界に進展し、その力はいよいよ拡大しています、「世界の再建」という著書は十ヵ国で出版され二十ヵ国で熱心に読まれ、広く理解されています。

一月に私は記者会見で「航空会社が道を開くであろう」といいました。この大会に特別飛行機で五つの代表団が、各航空会社から送られてくるのを見ても、この導きが如何にすばらしく実現したかを示すものです。つい数日前、イースタン航空会社のリッケンバック社社長は、二千五百人の従業員に向つて次のようにいいました。「われわれが道義的に成長しない限り、知能的な、また経済的な発展はとまつてしまふでしょう。M R Aの主張する革命的標準の第一、正直をわれわれが本気で生活すれば、他の三つもつづくにちがいない。われわれはM R Aの教える高い質の指導力を養成しましょう。われわれ各自がこの精神を一夜にして行動に移すとき、アメリカは亡びないでしょう。」

私の願ひは、アメリカの一人びとりが神の導きによる自由を得て、アメリカのため

に斗うことです。その時、アメリカ自身が目に見えない実在である神に導かれて、罪悪のきづなから真に自由となるでしょう。このことを私はまた他のすべての国のためにも望みます。次の世代の人たち、殊に戦場で斗つている青年たちに、答をもたせたいのです。答のないことは、彼らを罪にしばらくであつて、そのままにしておいてはいけません。そうでないと、われわれに対抗している人びとと同じ考え方が彼らを支配するようになります。そんなことでは靈感によるデモクラシーはつくりだすことはできません。正しい革命を遂行するには信念をもたねばならないのです。この革命を早く遂行できるか出来ないかが、アメリカと世界が救われるどうかを決めます。この革命がなければ、混乱の革命が起こるだけです。

強い薬が必要です。罪のあと口はにがく重苦しい。「その子イエス・キリストの血、すべての罪よりわれらをきよむ。」すべての人が探し求めるものはこれであり、これこそ答です。

そのとき、はじめて世界が喜んでついてくるすばらしい手本になれるのです。賢明なもの、正直なものが味方になれるアメリカができます。これこそ、世界がアメリカ

に望んでいることです。自由の雄叫び、それこそアメリカの欲しているものです。そのときこそ、靈感による真のデモクラシーが得られます。

老いも若きも、かつてリンカーンが斗つたように斗うでしょう。若者は戦いの目的を知り、そして勝利を得るでしょう。そのとき、われわれはすべての人と世界とに平和を与えるものとなります。

電撃的な衝撃が必要です

一九五二年六月アメリカのマキノ島でM R Aの世界大会が開かれた。その招待状はアメリカ上院、下院外務委員会の名においてなされた。六月十二日、アメリカの上院でM R A代表団のレセプションが開かれたが、カリフォルニア州選出のニクソン議員が次のようにいつた。

「世界の最大の戦い、すなわち自由を守ろうとするものと共産主義、独裁主義および全体主義に対する戦いは、人びとの心の中で行われることは無い。この戦いに勝利するために、M R Aは最大の要素である。」

電撃的な衝撃が必要です。おそすぎないうちに、人びとをも国ぐにをも正気にたち

かえらせるものが必要です。最も頑固な人たちをも融和し得る強力なものが必要です。私ははじめて電燈がついた時を覚えています。それはわれわれの生活を革命化し将来に対する人びとの考え方を變えてしまいました。今日あらゆる国のあらゆる家庭の最も困難な問題に解答を与えるような発見はないものでしょうか？

すべての国の無秩序の大渦巻きを癒し、不安の状態に解答をもたらずのが、われわれの仕事であります。それがあなたの仕事だと思つていますか？ それがM R Aの目的なのです。偉大な目的のために、皆が協力して働くことができます。

ある人がワシントンから会いにきました。いろいろ話をしたあとで、彼は「私は専門家たちとあらゆることを討論しますが、一番大事な点をぬかしてました。M R Aはその点を処理するのですね」といいました。次の朝、彼は早く起きて、ワシントンの上官に電話をしました。そして彼に対する非常に深い恨みについて謝まつたのです。「われわれ自身の中に分裂があるのに、世界の融和を口にしたとて何になるでしょう。私は自分が正しいと思つてあなたを恨んでいました。私はあなたに対して正直でもなかつたのです。お許し下さい。」と彼は電話でいつたのです。

あるヨーロッパ人がこれを聞いて、「この政治家のあり方こそ、人の心をかちとるあり方だ。われわれが探していたのはこれだ」といいました。

ワシントンからきたこの人の考え方を交えた光と、この人に何をすべきかを教えた力の源は、誰でもがふれることのできるものです。

短絡は人間の利己心のためです。これが電流を切るのです。ですから、暗闇となり、人が方向を失うのもこのためです。利己心を除去すれば、すべての家庭も、すべての内閣も、解答を送りだす発電所になることができます。

この解答を現実のものとして早く耳目に伝えねばなりません。

鉄のカーテンの僅か八百ヤードのところ、フィンランドの人たちの経験を土台にして作った、映画を先ほど見ました。この影響は電撃的です。映画の標題は「解答」といつて、産業界の解答を示したものです。民主主義の融合した声が正しい解答を与えているのがこれです。映画に関係しているアメリカ人が「こんなすばらしい映画を見るのははじめてだ。」といいました。

われわれが必要とするのは、鋼鉄産業のストライキに解決を与えるような映画を、

映画館が見せることです。この映画は、それをしていません。経営者側も労働者側ともに自分が正しいとがんばり合う、その過ちを衡いて、自我に対する答を与えているのです。

この映画が製作される基になつた劇があるのですが、それは世界の十六ヵ国で百万以上の人が見ています。最近、イタリーの北部の工業地帯で上演され何千人も見にきました。舞台上で経営者の役をする人は、実生活でも五万五千人の従業員を使つている人です。労働者の役をする人は、その会社の従業員で前共産党員です。この二人の改変は、ミラノに電撃的な衝撃を与えました。経営者が改変して、世界を融合させることのできる思想のために、犠牲を払う用意があるときに、労働者は必ず応えろという事実を見せているのです。

アメリカでも同じことです。ある大きい飛行会社の人事部長のいつたことですが、三年前には四百九十一の苦情が組合側から経営者側に出されていたそうです。そこへMRAが入つていきました。人びとが変りだし、正直になりました。去年は僅かに十七カ条の苦情があつただけで、今年は今のところ三つしかないとのことでした。

前共産党員であるフランスのある繊維労働組合長でMRAに会つて電撃的に変つた人がいますが、彼は「工場や政府内での正直は国の繁栄をきたす」といつています。

一つの都市を例にとつてみましょう。相当激しい産業的な争いをもつた町です。破壊的な人たちが分裂をかもし、支配権を獲得するために巧妙に働いていました。MRAを実際に適用した経験のある航空会社の人たちがそこに呼ばれて行きました。次の日、組合側の指導者がいました。「一体経営側はどうしたんだらう。随分變つたじやないか、このような人たちとなら交渉することが出来る。」経営者側も「組合指導者が別人のようだった。たしかに彼は變つた。彼を相手にして仕事をするのは楽しい位だ。こんどの問題でも何が正しいかの基盤なら彼のいうことに賛成できる。」といいました。

二日後に、そこのある経済新聞に次のような見出しがでました。「経営者と労働者とで構成されるMRAチームがきてからストライキの脅威がのぞかれた。」

われわれは電撃的なものが必要としています。新しい方法で、仕事をするようになるために、人の心に点火させるものが必要です。一つの共同社会全部をひきつけるよ

うな強い力が必要です。そういうことがおこればニュースとして取扱われます。

ここに私は昨日到着したばかりの記事をもつています。これはバード少将の書いたもので今日、全国の新聞売場で売られるのです。アメリカばかりでなくカナダの何百万の家庭が読むでしょう。その表題は、新しい世界の予告編でMRAのことを書いたものです。この記事をのせた雑誌の編集者たちは「権威あるすばらしい読み物だ」といつています。

バード少将はいいいます。「MRAは党派、階級、意見を乗り越えるものです。それは加盟できる団体ではなく、生活するイデオロギーです。新しい宗教ではなく、迫力のある勢力です。それは正直、純潔、無私、愛の絶対標準をあなたが生きた時、生れるものです。」

また別の少将が、ある島の総督の家に呼ばれて、MRAの話を公の席上でするよう頼まれました。そこには政府の人たち、市民、町村長、新聞記者、組合指導者などの人たちが集まっていました。その席上、この島の総督は、講師を紹介して次のようにいいました。「MRAの大会に行くまで、私はこれを馬鹿にしていました。行つ

て考え方を変えました。M R Aはわれわれ全部に重要なものです。これは世界中に善を押し進める非常な力です。」

馬鹿にするような人でも驚くほど早く真実が判るものです。瞬間にして心に伝わるのです。人から人に伝播します。それは階級、民族、国ぐにの融和をもたせません。

南アフリカを見てみましょう。M R A汎アフリカ会議には、あらゆる人種、あらゆる種族が集まりました。南アフリカのオランダ系の旧家の一人が立ち上りました。「私はアフリカ人に対して自分の方が優越的だという考えをもつて育ちました。M R Aに会つたとき、これが私自身にとつても、南アフリカにとつても解答であることに気がきました。自分の変らなければならぬ点が判りました。私は優越感を失いました。」

今までの私のあり方に対してアフリカのみなさんにお詫びがしたいと思えます。」

それに答えて若いアフリカ人の法律家がいいました。「オランダ系の南アフリカ人やイギリス人が私たちに謝まるのは楽なことではないのを知っています。われわれにも謝まらなければならぬことがあります。この精神をうけいれる人となら誰とでも働くことができます。」

この大会について、アフリカの指導者たちは次のようにいっています。「私たちはこの大会で人びとが絶対の道義標準と神の導きを通じて改変するのを見ました。それによつてアメリカ人も、アジア人も、ヨーロッパ人も融和するのを見ました。この道だけが新しいアフリカに通じるものと信じ、全大陸及び世界にMRAをもたらすため、自分たちも戦いに参加することを誓います。」

こうしてお話する私の傍には東洋の代表たちもいます。タイ国の総理大臣は「MRAはタイ国のために最良のものだ。タイ国もまたMRAに最良を尽くしたい」といいました。スイスのMRAのセンターには最良のお米が五トン送られてきました。船会社も鉄道も無償で運んでくれました。この贈物はタイ国首相からの贈物です。彼は東洋におけるMRAの働きを知っています。タイ国の主だった新聞にMRAについて書かれた記事を彼は読んでいます。彼はビルマ人や日本人がしていることを知っているのです。ビルマ人と日本人はインド、パキスタン、セイロンの閣僚たちと共にMRAを自国へ招待しています。ニューズは電撃的です。東と西とを融合する解答です。このマキノには、MRAを身につけて国にもち帰ろうとするために、タイ国からも

指導者の人たちがきています。

この解答をもつた人たちは国の問題に解答を与えています。南アメリカでの争いを考えてみましょう。ごく最近、ブラジルの組合員四十六人が三ヶ月の訓練をうけるためにモスコに行きました。それが問題です。答は何でしょう。

戦争中、フランスの地下運動のために斗つた貴族とマルキストで船乗りをしている人の息子（この人の母親は三百万のフランスの社会党の婦人部長をしていた人です）と、アメリカのフットボールの選手だつた人と、エジプト生れの若いスイス人とが、このブラジルで一緒に働いて著しい効果をあげています。サントスの港湾労働者たちを相手にもたれた大会も、この人たちが計画したのです。二十人が話しました。港湾労働者の組合長が司会をしました。その講師の中には、経営者もいれば、元共産党員だつた人もいました。この人はM R Aにあつて、左の憎しみと右の冷酷とに解答を与える新しい情熱と計画をもつた革命的な哲理を、M R Aに見出して変つた人です。ここにはブラジルのすべての階層の人たちがきていますが、如何にして南アメリカ全域に、この解答を与えるかを一緒に学んでいるのです。

われわれは、われわれの文明が破壊される真只中に生活しています。家庭でも、産業界でも、国と国との間にも、戦争があります。将来はどうなるでしょうか？ さらに崩壊と混乱と無政府状態と独裁性とがより増大するでしょうか？ それとも人間の性質に革命的な改変をもたらすことによつて新しい社会が生れるでしょうか？ 今日の世界で最も強力なのは聖霊の力です。人間は原子を分裂することができます。聖霊は、神に聴き従う人たちを通して、人類を融合しています。これは日々の経験とならなければなりません。これは実際の事です。効果があります。

根本的な戦いは人の意志を獲得する戦いです。これがイデオロギーの戦いです。これはあなたの心に、私の心に毎日行われる戦いです。軍隊も、協定も、経済的援助も必要ですが決定的なことは、人および国が物質主義の声に導かれるか、神の声に導かれるかなのです。

・第四部・

世界をかちとる思想

パン・平和・希望

一九五二年十月、ブツクマン博士は、二百名のチームを連れて、ヨーロッパからアジアに向つたが、これはアジアの国々への指導者の招待によるものであつた。(註一)ブツクマン博士は、一九一五年にアジアを旅行し、当時インドで、マハトマ・ガンジー翁に迎えられて以来、アジアと、その指導者との親交は絶えなかつた。まずセイロンを訪問したのであるが、時の総理大臣が「あなたは人びとの心の中に消えることのない印象を残している」といつた。十一月には、インドに行き、ニュー・デリーでは国会に招待を受け、上・下両院で話しをした。(註二)一九五三年一月には、ニュー・デリーで全アジア大会が開かれたが、その時の新年のメッセージは次に掲げるものである。

人はパンと自由と新しい世界秩序の希望とに飢えている。

神によつて導びかれた融合の前には、どんな問題でも解決されません。手には職が与えられ、空腹には食物が与えられ、空虚な心は満足を与えるイデオロギーで満たされます。それがMRAのしようとしていくことです。それは無信仰の者に信仰を与えますが、そればかりでなく、信仰をもつていく人たちが、町をも国をも変えてしまうように、その信仰を生きるようにさせます。

互に思いやりをもち、互に十分に与えられるように分け合う国は、新しい社会的な、また経済的な秩序の模範を、現在のためにも、将来のためにも作るでしょう。

国自体が平和であるときに、初めてその国は、世界に平和をもたらすことができるのです。

何が正しいかを、個人的にも、産業的にも、政治的にも、国家生活にも貫く国は全人類の進歩の上に、歴史的な足跡を残す国になるでしょう。

註一 インド・パキスタン、ビルマ、セイロン、タイ、日本

註二 一九五二年十二月ニュー・デリーにおいて、ブツタマン博士はドイツ大使館及び政府の

第四部 世界をかちとる思想

名において、平和と国家間の理解を深める有意義な功績によって、大十字章を授与された。

混乱に應える新しい政治力

セイロンからインドへ行つたブツクマン博士は、カシミール、パキスタン、イラン（国王の賓客として迎えられた）及びトルコを経てロンドンに戻つた。

一九五三年六月四日、フランク・ブツクマン博士の第七十五回誕生日に當つて行つた世界放送の全文

人びとの意見を一致させるのはむずかしいことです。共通の心をもつのは骨のおれることらしく、みなそれぞれの考えをもち、それを人に押しつけようとしています。混乱に應える新しい政治力をあみだすには、歴史を新しくつくるような強い決心をし

なければなりません。

すべての人、すべての国をかちとるような強い建設的な計画がわれわれにありません。指導者たちは、自己中心的な態度で、われわれの問題の解決には何の役にもたない会議や方式に、うき身をやつています。口では国のためというが、たいていの場合、自分自身のためにやつているので、いつも機を逸しています。

しかし、新しい政治力が世界に動き出しています。そのような建設的内容をもった会議は問題に対する解答を与えることが出来ます。

人種の戦いの激しいアフリカの真只中で先月各民族合同のM R A大会が開かれ、北ロデシアの総督、ギルバート・レニイ卿は開会にさいして、

「この大会の目的はみなが互いに猜疑心、怖れ、憎しみをもつことなく、一緒に働ける共通の目標を見出すことである。M R Aはチエンジを基礎としている。互いの関係を改善するにはわれわれ自身がチエンジしなければならぬ。この大会を通じてこのチエンジがなされることを望むものである。」といたしました。南アフリカの開拓者の家族の一人が、この総督の言葉に答えて、

「あなたの新しい政治力を示す言葉を、すべての国の政治家に聞かせたい。」といいました。この大会の結果を南アフリカの内務次官がつぎのようにいつています。

「私は半信半疑でやって来た、しかし、いまは確信をもつて帰えることができる。私はここに集つた黒人の人びとをよく知つてゐるが、彼らは明らかにチェンジしてゐる。それでいま彼らはチェンジしたヨーロッパ人を見せてほしいと望んでゐるに違いない。」

同じような大会が、一月にはインドの首都デリーで開かれ、三十四ヵ国から代表が出席しました。インドの国務大臣が結果を綜合して、「デリーの歴史に新しいページが書き加えられた」といつています。昨年秋に開かれた最初の太平洋地域大会に出席したある国連代表は、「私は何年もレークサクセスにいたが、この一週間につくり出された融和こそは眞の融和である。次に開かれる三相會議、四相會議がこの精神を土台にして行われたならどうだろう」といつています。私は最近七ヵ月間、アジア各地に滞在してきました。二十五ヵ国、二百人の人が私と一緒にMRAのメッセージをセイロン、インド、カシミール、パキスタンなどに伝えました。途中エジプト、イラ

ン、トルコにも、このメッセージを伝えました。この中で重要と思われる一つのこと
は、この国ぐにがみなM R Aに対して同じ反響を示していることです。この国ぐにの
ある政治家は、「M R Aは偉大な将来である。これこそ人類を救うものだ。」といいま
した。

パキスタン建国の功労者の一人ジンナー氏は、私を彼の国に招待しています。彼は
ロンドン滞在中のある夜、つれづれのままにM R A劇「忘れられた要素」を観にきま
した。一日中多忙で疲れ、しかも目的を達しなかつた彼は終始沈黙のまま、劇を観て
いました。劇中のセリフで、ある頑固な経営者を指して「あいつは一步もゆずらぬ人
間だ」というのをきいて、ジンナーははじめて笑いましたが、このとき新しいものが
彼の心の中にうごきました。その後、ロンドンの私の家へ食事になねいたとき彼は次
のようにいいました。「是非パキスタンへ来て下さい。あなたは世界の憎しみに解答
をもつておられる。正直に謝罪することは問題解決の鍵である。」

誰がこの鍵を歴史の鍵穴に入れて「明日への門」を世界中のすべての人に開放し平
和を招来させるのでせうか？ 美しく魅惑的なカシミールにすむ人は古来からの真理

である正直の徳を知っています。古来の真理を実践するようになれば、カシミールは世界に解答を与えるでしょう。首相シェイク・アブデュラは、「忍耐がもちろん必要である。しかし、あなたこそインドとパキスタン関係に解答をもっている」といいました。

これらの国で新聞は新しい世界の先駆者としての役目をはたしています。ジンナーが始めたドオン紙はその見出しに「新しい融合の基礎——MRAは世界問題の解答」として、MRAを通じてパキスタン人とインド人が新しい融和を見出したと報じています。

たくさんの地方新聞を出しているエクスプレス紙は、ヒンドスタン・タイムズ紙（編集者はガンジーの令息）と共に、私のメッセージをのせています。

「人はパンと自由と新しい世界秩序に飢えている。神の示す融和はすべての問題を解決する。手には職を、腹には食を、飢える心に満足を与えるイデオロギーを、これがMRAの目的である。」

ヒンツ紙は特に十ページのMRA特集号を出版し、全国に配布しました。アメリカ

カではバード少将が主唱して、下院議員、上院外務委員長、ハースト系新聞副社長、CIO全国副会長などを含む全国委員会が特集号を全米の編集者、出版人三千人に送りました。

CIOのこの副会長は五百五十万の組織労働者を会員としてますが、アメリカ労働界の新しい政治指導力になつています。

「私は正直、純潔、無私、愛の絶対標準を基準とし、神の導きによつて一生、生きぬく決心をした。」と彼はいつています。彼は家庭で融合を見出し、あらゆる交渉をするとき「誰が正しいかではなく何が正しいか」でやつています。彼はアメリカ労働界に対して次のような新しい考え方を示しています。

一、先づ組合内部の融和を見出し、それによつて全国的融和を生むこと。

二、真のデモクラシーを大衆の中に打ち立てるために先づ労資のチームワークの模
型を産業界につくること。

三、労資合同して他の国ぐにを友となしうるような外交政策を支持すること。

国ぐには今何を必要としているのでしょうか？ 日本のが頭に浮びます。日本

の人びとは「われわれは新しい憲法をもっている。だがそれは空のバスケットのようなものだ。何を入れたらよいだろうか？ デモクラシーを生かすイデオロギーが必要である」といつています。新しい日本の指導者三百人がイデオロギーの訓練をうけるためにM R A大会に出席し、帰国後は全国的に働きかけています。

私の生涯中、歴史を創る二つの発見を経験しました。その一つは原子力の発見です。原子力は測り知れないエネルギーの根源でありその集積です。そして今や原子力時代となりました。他の一つは人間の発見で人間もまた測り知れないエネルギーの根源であり、集積です。この発見がイデオロギー時代を生みました。これが現代を理解する鍵です。

政治家達が軍隊を計画し、協定を結ぶ間に破壊的な力は港湾労働者、官吏、科学者、兵隊、教師などをかち得ています。彼らは不平、悪感情及び、よりよい世界を求める心を利用します。彼らはすべてを投げうつて世界を捉えるために行動を起しています。それ故、政府が生産を上げようとするとき、産業の中には「スローダウン」が行われます。政治家が会議を開こうとするとき重要な秘密がもれます。国と国との融合の必

要が叫ばれているのに分裂のみががふえていきます。

何が答でしようか？

あたりまえの人間に理想と計画と同志的な結合をあたえ、世界を再造する計画に参加させる政治力こそ解答です。

一九三八年のある日、フロイデンシュタットの森の中を歩いていたとき、私に靈感がありました。

「全世界にわたつて、神の導きを受けた、生きた力強い運動が起るであろう。それは精神と道徳の再武装運動(MRA)」と呼ばれるだろう。」と。この思想が世界の指導者の間に根をおろしはじめました。すべての国のすべての人は、自分と国の利益をもととした解決案をもっているようですが、しかし本当の秘訣は「自己の意志ではなく、高い神の意志を求めることである。」

これが混乱を解決する道です。神を絶対の権威とすること。口先だけでハイというだけでなく生活の規律をもつて神の権威を受け入れること。これは人間を本来の姿にかえし、真実なものにします。ありのままの自分をよりよく見せようとする必要はあ

りません。

混乱は妥協から来ます。明快さはチェンジから来ます。眠っている内部の力をゆり動かす道義的チェンジ。他の人が見る目で自分の国を見たら変りたくなることは確かです。

絶対の道義標準は真の政治力のわきあがる泉です。われわれは口に平和と融合を唱えるけれど、人をあしざまにいう人は国ぐにの憎しみに答えることはできません。われわれ自身の頑固さ、——これはわれわれの子供がよく知っているのですが——は無視しやすいのです。われわれは神の導きを口にしますが、しかし「心の清きもののみ神を見る」ことを忘れやすいのです。話す人ではなく聴く人が導きを受けるのです。新しい政治力の鍵は新しいタイプの政治家のなかにあります。

今日は私の七十五回目の誕生日です。私は沢山の国で多くの体験を重ねてきました。しかし、それらのすべては四つの絶対道義標準の根本的真理と神の導きと神の意志に絶対服従することに帰着します。この体験のないかぎり、われわれには何も無いといつてよいのです。それがあれば、すべてをもつていえることができます。新しい

人がその生命で綴る新しい世界、これが唯一の希望です。M R Aは解答のイロハです。ほんとうにそうです。アフリカの酋長がいつた通りです。M R Aは解答のイロハです。

すべてのところ、すべての人のために

一九五三年の十二月、十五カ国から六十人のチームが南アフリカのローデシヤ、ナイヂエリヤ及び東アフリカの指導者たちの招待に応じてアフリカに向つた。その後の九カ月間に中央、西アフリカ二万哩を踏破した。一九五四年復活祭のとき、ヨハネスブルグで開かれた各民族合同の大会は、全アフリカ各地域から、あらゆる人種の人びとが五百六十三人出席した。独立を間近に控えたアフリカ各国の指導者たちは、新国家の基盤としてMRAを歓迎し、将来のアフリカ大陸の融和の希望をそこにみた。

ブツクマン博士とアフリカとの関係は、三十年にわたるものである。一九二九年に彼は、チームを連れて南アフリカに行つてゐる。一九四一年に時の副総理ホフマイヤー氏は、このときのことを懐古して「この訪問は国

家的の意義をもつたもので、わが国の人種的和解の始まりで、その後もこの影響は披いていた」と語った。

二年後の一九五六年の六月、モロッコ王はブツタマン博士に次のメッセーヂを送った。「わが国の試験に富んだこの年を通し、モロッコの国と国民と私自身に対して、あなたのなされたことに感謝の意を表します。基本的な道義的価値と神の意志を基とするMRAのメッセーヂが、この国の大衆にまで到達することを望んで止みません。われわれとしてはあなたのやっている仕事に対して十分の信頼をおいています。」

アフリカ大陸の一隅にあるモロッコは歴史の頁に勇敢な人びとの名を書きつらねましたが、今日では、アフリカ大陸のいずれの場所もそうであるように、新しい時代の悩みを悩んでいます。そのモロッコでこの稿を書きました。ここは分裂にたいして解答の道があるか否かという大きな課題を、政治家に提供しています。

六カ月前に、特別仕立の飛行機が、六十名のMRAのチームを乗せて、ヨーロッパを飛び立ち、中央アフリカに行きました。そのチームの中には、イギリスの提督、カトーーム地方の前総督、スコットランドの陸軍大佐、ドイツの前共産党員、スコット

ランドの伯爵、フランスのマルキストという変つた顔ぶれが、M R A という考え方によつて結ばれた勢力として加わつていたのです。そうしてアフリカの各地から加わつた人びとと共に、全大陸にM R A を伝えたいと、情熱に燃え、計画を持つて国ぐくに巡つて行きました。

ケープタウンで歴史的なことが起りました。ケープ・タイムズ紙の見出しは、「白人と黒人がともにM R A の壇上に」と大きく書かれ、二千人もの人が市会堂にすし詰めになり、戸口も、みちも全部ふさがれた模様を次のようにつたえています。

「アフリカ青年同盟会議の創始者であり、初代会長であるヌコモ博士はこの席上で『私は前には流血革命にのみ、アフリカの希望があると信じていたが、昨年ルサカに開かれたM R A 会議に出席して、そこで私は白人も黒人も生活と考え方を變えるのを見た。その上私自身も變つた』とのべたが、ヌコモ博士の言が終るや、万雷の拍手がおこつた。」

政府発行の『デイ・ブルガー』紙も彼のことを次のような見出しで書いています。
「M R A は彼をアフリカーナ(オランダ系アフリカ人)に対する憎しみから解放した。」

ヌコモ博士につづいて、前スプリングボク・ラグビー・チームの一人であつたダニール氏は（オランダ系）アフリカーン語で話したのです。

「アフリカに現存する人種間の問題が終極に於てアフリカの文明を破壊する方向に、利用されている状態を心配せずにはいられない。それだからこそ、妻と私とはMRAのチームと共に、アフリカ全大陸とすべての民族のために神の計画を見出す努力をする決心をしたのである。」神の導きのもとで南アフリカをつくり変えるため、一緒に働くというこの二人の約束はセンセーションをまきおこしました。

ケープタウン市長は次のようにいいました。「嵐がおそつたようにMRAはこの市を席卷している。」ある電信会社の通信員は、「あの夜は出番でなくてよかつた。二人の者が残業をするさわざだつた。市中の新聞記者という記者は皆記事を書いているようだつた。」

といつていました。

ナタル市でも同様のことがおこりました。市会堂には二千の聴衆がなだれ込んだのです。「ダーバンよ、アフリカに融和を示す光となれ」これが会の主題でした。

ここでもヌコモ博士は次のようにいいました。「国家主義以上に力のあるものを私は見た。すべてのところのすべての人に役立つものであるから、このイデオロギーは他のイデオロギーにまさるといえる。この道こそは、南アフリカのわれわれの進むべき最良の道であると私は信じる。」

イギリスのBBC放送会社専属の黒人歌手ブルーのヌコモ氏が、丁度帰国していて独唱しました。

聴衆はアンコールを絶叫しました。次の日、MRAチームの二人が、そこから六十哩もはなれた土地の小さい小屋に住んでいるヌコモ氏のお母さんを尋ねました。

ダーバンには多数のインド人が住んでいます。フィニクスにはマハトマ・ガンジーの創立したコミュニティー・センターとガンジー記念ホールがあります。そこにMRAチームは招待されて行きました。その中にはイギリスからきたハーデング夫人も加わっていました。

インド人文化協会の会長はお礼をのべるときに、こういつたのです。「われわれはこのホールにガンジーの名前をつけたただけだったが、あなた方は、われわれの心にガ

ンジの理想をかきつけて下さつた」と。

アフリカの各地に嵐のような共感が呼び起つています。まさに自治制がしかれようとしているナイジェリアもMRAに注目しています。三人の關係と、他のナイジェリアの指導者の署名した招待状には次の言葉が見出されます。

「われわれは、ナイジェリアが自治政体となるには、確固たる道義的基礎の上に立たなければならぬことを確信する。ヨーロッパ、アジア、その他の大陸でのMRAの業績を見ると、MRAこそが、今日の紛争と混乱の世界の中で生きるに必要な道義的革命をナイジェリアとその国民に与えることが出来ると信ずる。

ナイジェリアは最上のものを求める。その意味からいつて、われわれは党派、階級、民族、宗派、皮膚の色の違い、そうしたあらゆる差異を超越して、神の導きと人類に對する愛に根ざして活躍するMRAの世界勢力を信じるのである。」

アフリカはまたモロッコからインドネシアまでの広さを持つている回教の世界の一環である。カイロのエル・アザール大学の総長はいう。「MRAは平和、博愛、健全な道義を、何ら個人的、また国家的差別なしに披げようとしている。われわれも健全

な、神の啓示をうけたこのイデオロギーを支持するであろう。」

東南アジア、オーストラリア、日本などからの代表が新年のバンコックに開かれたMRA大会に集りました。その会場で、マレー議会議長がこういいました。「統一されたマレーと、神に導かれた民主主義が生まれるためには、強い融和の力をもつたこのイデオロギーが必要である。マレーからこの大会に出席しているわれわれ代表の中には、マレー人、華僑、インド人、イギリス人が含まれている。」

私はMRAのすぐれたイデオロギーをマレー国の政府関係に入れることを決意している。」これはマレー議会議長のことばです。

これこそすべてのところのすべての人に役立つものですし、ことに政治や産業に関係した人で、それぞれの国の政策に影響を及ぼし度いと願う人には役立つものです。

あるアジアの労組委員長がアメリカの有名な労組指導者にMRAのことをききました。彼は次のように答えました。「問題はMRAが労働運動にどうあてはまるかではない。MRAは労働運動にたづさわる人を、仕事がよく出来るようにしてくれる。MRAの四つの絶対道義標準こそ、労働運動の真の基礎である。MRAは労働運動指導

者として君が、正しく仕事が出来る人間にしてくれる。」

アジアの労組指導者はそくぎに、「この次にアメリカから代表が私の国にくる時、来て下さいませんか？ 私の国の労働運動は、M R Aを必要としています」といいました。

南インドの茶園農場労働者組合の地区委員長でスイス・コーの大会でM R Aの訓練をうけ、帰国してからその精神を實踐して、よい成果をえた人が、「M R Aは労働者のためにも、よい結果を生む建設的な力だ。M R Aは社会制度をも変えるが、そればかりでなく、人を変える。M R Aの考え方は、地理的、人種的、党派的差異と階級的紛争をのりこえるものである。」といっています。

M R Aのもたらす解答は異なる大陸をも結びます。北ローデシヤで、ピーター・ハワードの劇「ボス」(社長)が初めて上演された時に、中央アフリカ連邦の総理大臣ゴッドフレ・ハギンス卿あてにフランスから電報がとどきました。差出人はフランスの鋼鉄の町として知られているファイルミニエー市の市長で四年間、建設大臣をつとめた人でした。その電報は「ファイルミニエー市における「ボス」の上演は大成功、労働者も

産業人も考えさせられた。M R Aは盲者の目と、疑惑家の心を開き、すべての人が世界の平和を再建し、人類を融和させる道を示している。」

ファイルミニーの市長が、確信をもつて語る背後には次のような事実があるのです。国内でも有名なほどわるい住宅環境と、切迫した操業短縮に悩むファイルミニーの鋼鉄会社が、急に人員整理を取り消したという報が、市長にとどいたのです。さらに市長は劇のもたらした精神によつて、彼自身も住宅改善に本気でのり出す決意を固めるのに役立つたといっています。

フランスの社会党新聞、ラ・トリビュン紙は、この劇のことを次のように書いています。「人間の幸福という大きな問題を取りあげ、それをわづか一時間ものの中に、何ら議論の余地なく答えてしまう。この劇を見た人は誰でもこの事実を証言するであろう。その上、この印象は二度と心から消えることはないであろう。」

フランスの経営者と労働者が一しよになつて、この解決の道を、ドイツ、オランダ、イタリー、北アフリカ等に、つたえるため動き出したのも無理のないことでしよう。フランスの全職維労組書記長も、このグループに加わっている一人です。彼は最近

フランスの織維界に行われた新しい協定の責任者の一人です。

この協定について、フランスの前総理大臣ビネーは、フランスの問題を論じた記事をフイガロ紙にのせ、フランスが経済的に生きのびるために必要と思ういくつかの事項をかかげた中で、その具体化した一例として書いたものです。

人と人とを融和する秘訣は何でしょう？ 五百万の組合員をもつ、アメリカの労組の副会長が、あるとき、政治的、個人的野心のため分裂していたある組合の問題の解決を相談されたとき、彼はこの世界を融和させる唯一の方法は、個人も、社会も、国も変わるということ以外にないと答えました。そのすぐ後で、彼の組合の国際部の幹部が「ジョン君、飛行場まで私に送らせてくれないか？ 君と話がしたい。君のいつたことに感激したのだが、もつとききたい。私の家庭を融和するにはどうしたらよいのだ。私の飲みぐせに解答があるだろうか？ 組合をどうしたら融和させられるだろう？」ジョンは彼自身がどういう風にして変ったか、どういう風にして神の導きを得るようになったかを話したのです。これをきいた男は、自分の単一組合の幹部と仲直りすること、かげにかくれてやつていた政治工作について正直になること、妻や、家

族のものとの関係を正しくすることを決心したのですが、今では彼は融和を生む力の一部となつています。

どうやつて人と人とを融和し、その人びとの心に深く求めているものに答える力を得たかをジョンにきけば、彼はこう答えるのです。「私はいつも妻のローズが変ればいいと思つていた。妻が變つて完全な妻となり、私が居てほしいと思つるところにいつも居て、してもらいたいと思うことをいつもしてほしいと思つたものだ。私の方が少しは變るべきだなどとは一回も思つたことがない。

しかし、自分のありのままの姿をよくよく見つめたとき、自分の国の罪はどこからでているのかはつきり分つた。自分から始めなければだめだ。自分が家庭で妻のローズや、子供たちとの間にもつチームワーク、朝の静聴と聖書をよむことを通じて作り出したチームワークは、自分が一日働らく事務所に、会議に、或は団体交渉のときに、経営者と労働者の間にもつくり出すことができる。」

妻のローズはこういつています。「MRAに会つたとき、自分たちの結婚がうまく行かなかつた責任は自分だということが分りました。私はモデルをしていたことがあ

る関係で化粧に一時間はつかつたものでした。また夜はよく、友達のところへ遊びに行つて、お酒をのんだりしたものでした。また例の全国ストライキのときも自分が夫をせめることしかしていなかつたこと、早くストを解決させるには少しも役に立つていなかつたことも分りました。私は神にいき、神の導きを得る秘訣を学びました。最初に頭に浮んだ考えは、結婚生活の失敗について夫にわびるということでした。私たちは離婚しようとしていたときでしたが、取り止めることができました。今では夫と一しよに、我欲をはなれた生活、与える生活の先駆者にならうと心がけています。」

どうしても話し合うことの出来ないような意見の相異、どうにも制禦できない破壊力、このような分裂した世界に対する解答は何でしょうか？

その答は労働指導者たち、産業人たち、又普通一般の人や政治家が、ジョンのもつた経験を經驗することにあります。こういう人は会議の席上に信頼感をもたらしません。今のままの会議のあり方では、決して人や国の問題にも答えられず、必要をも満たさないでしょう。それは心と心が語りあつたときに、はじめて与えられるものです。その時、混乱は終ります。解決が与えられます。われわれの国の運命は、われわれがいかに

に早くこの解答をつかみ、いかに早く実践するかにかかっています。

精神界の電子学

一九五五年六月、二十八カ国の二百五十名を数えるM R A 国際使節団はアジア地域を経て中東、アフリカを歴訪した。三万五千哩の大旅行の途中、十一カ国で政府の歓待をうけた。使節団は音楽劇『消ゆく島』を伴った。この使節団の出発前の準備はマキノの世界大会でなされたが、フランク・ブツタマン博士はその際、次の演説をした。

私はロスアンゼルスで新しいものを発見しました。晩餐会に呼ばれたときに、それを発見したのです。ある人を通して発見しました。その人はリー・デフォレストという名の人でした。この人は現在、原子時代の次の時代へわれわれを導いている電子学

という新しい科学の開拓者です。彼にいわせると、近い将来に人は一週間の中、四日働き、しかもその一日は六時間働けばすむようになるとのことです。この開拓者の話を聞きながら私は古い友達だつたエヂソンの事を思い浮べていました。彼は世界に光を——電気の光を与えた人でした。私は実際にその光が世界に点じられるのを見たのです。その到来は全世界に新しいものを与えました。エヂソン夫人はかつて「主人が作つた電灯と同じように、すべての家庭にM R Aのあかりが行きわたるべきです」と確信にもえて、私と一緒にカリフォルニアに飛んで来ました。今日、電子学は新しい科学です。精神のことは、すでに古くから知られています。それは古い科学です。しかし、これが電子学と結びつけられると、世界に生命と思想の新しい次元をもたらすことができるのです。何百万のひとびとが速やかに、しかも自動的にこの新しい精神の電子学を実行できるのです。

いつたい精神の電子学とはどういうことなのでしょう？ われわれにはほとんど分っていないのです。かすかに、それをかいま見る程度です。アメリカ大陸の端から端へ、五十分の一秒よりも少ない時間に、人の考えを送ることができるというような瞬

間的な、しかも実在する反応を考えてごらん下さい。この電子学によれば、瞬間的に人の話す声が聞えるばかりでなく、その人の話している時間も、何ら人間の力を要しないで記録され、しかも、月末には、「つけ」までが、貴方の手元に送られるということです。私にはこれを説明する言葉がありません。

さて精神界の電子学について考えましょう。それは「神の心」と共に働くものです。地球を瞬間的に廻りうるものです。また、今までかつて探險されたこともなく、知られてもいない、資源にふれるものです。「ガイダンス」の問題を考えてみましょう。それは神の心と私の心との問題です。昼であろうと夜であろうと、どんな時でも頭に浮ぶ考えは人の心の創造主のものであり得るのです。こういった事實は、誰も測り知ることが出来ないものです。

ある考えが頭に浮ぶことがあります——ほんのちよつとした考えかも知れませんが、それを心にとめ、うまく実行にうつすときに何百万のひとつが恩恵をこうむることがあるのです。国を誤つた方法から救うことのできる政府の人たちと接触のある友人にあてはまることかも知れないのです。

数週間も前のことでしたが、カリフォルニア選出の国会議員ハリリー・シェパード氏はこのような精神の電子学について次のようなことをいつたのです。

「MRAがしていることは人間の達しうる最高点だし、それはひとびとを互に近づけている。」

三千三百万の人口を有しアフリカ大陸の焦点ともいえるナイジェリヤを例にとつてみましょう。ロンドン・タイムズ紙の植民地レビューには全頁にわたつて、このナイジェリヤの東地区の総理大臣アジキウエイ博士が一九四九年にMRAに会い、それをナイジェリヤに適応しようとしたことが書いてあります。

ナイジェリヤでMRAの劇が初演された晩、この人と反対党の党首で互に名誉毀損の訴訟を起していた人とが一緒に劇を見にきました。劇場は満員で席がなくて立つてゐる人も何百人もあり、窓からのぞき込んだり、外で声だけきこうとした人もありました。

野党の党首は劇を四回見にきました。その後、国会で予算の審議が行われたとき、勿論、国会も傍聴席も満員でした。彼はわざわざ席を立てて総理のところに行

き、「われわれの最大の問題で、貧困より大きなものは精神的混乱です」といいました。

総理大臣と野党の党首とがいつしよに国会に、MRAの国際チームを迎えるため、連名の招待状を印刷して発送しています。歓迎会のとき、二人は旧友のように司会しました。出席した人びとは総理大臣の音頭にならつて絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛を唱和しました。ナイジェリヤでは反感が強いだけに融和するか否かは大切な問題なのです。ある国会議員は、神と人の心の間をつなぐこの精神の電子学をためしってみました。「私はこの国を紛争で分裂させ、公の席でも憎しみにみちて話をした。しかし、国を融和するために私は変らなければならぬ」と彼はいつています。

南アフリカでも、最も激しく憎しみあつている敵同志を融和し得る力強い勢力が動いています。イースタン・プロヴィンス・ヘラルド紙は著名なアフリカーナ（オランダ系アフリカー人）の次の言葉を引用しています。「MRAは、新しい南アフリカを建設するため、今までは南北極に分れていたような人をも互に近づけている、この国の心の憎しみに対する解答をもたらした。」

インドでは、ヒンズスタン・スタンダード紙が十頁の特別増刷を出して、その中で、

心と心とを電子学的に結ぶMRAの力が、いかに大陸から大陸へ広がっているかを書いています。

第一頁の見出しは、「アジアとアフリカ——建設的協力の新時代」と書いてあります、この特別号には、南アフリカで発行されているインディアン・オピニオン紙の編輯長でマハトマ・ガンジー翁（私は一九一五年にはじめてインドに行つたとき会いました）の息子のマニラル・ガンジーも寄稿しています。

インドの下院議長、マヴァランカー氏はこういつています。「MRAは古来の東洋の道だ。MRAはわれわれの古い哲学に新しい味と翼とをつけてくれた。」ユナイテッド地方の議会の野党党首で、ブラジャ社会党の全国執行委員はこう云つています。

「私がわずか二日半の間にMRAに教えられたことは、政治生活二十五年間に学んだことより優つている、四絶対の生活を一日することは、千時間の説教より価値がある。」精神の電子学はたしかに時間を節約することができます。それにもまして正しい解答が与えられます。人によつては二十年、あるいはそれ以上も政治にたずさわることが必ずしも新しい型の人間を作りはしないからです。しかし精神の電子学によれば一

国の心臓を効果的に動かし得る新しい人を作ります。

政治的には反対の立場の二人のオーストラリア人が最近東京に行きました。二人とも日本との戦争では難儀をした人たちでした。彼ら自身、反感と憎しみから自由になることの出来た電子学的解答を持つて行きました。その一人は日本の総理大臣にこういいました。

「私どもはブックマン博士がいわれるように日本がアジアの燈台となるよう、ご一しよに働きにきました。」

この二人は日本の大臣たちの歓迎をうけ、また国会でも歓迎をうけました。左右両社会党の人たちにも話す機会があたえられました。ごく最近、総理大臣官邸でM R Aの劇の特別公演が行われ、総理はじめ閣僚その他政府の人たちが出席し、新聞、ラジオ、テレビが全国にこれを伝えたのです。

さらに日本の大蔵大臣一万田尚登氏はこういつています。

「M R Aの精神は、わが国の生活に浸みこみはじめています。M R Aを政策の基礎にすることによつて、日本の政界に新しい光明がさし込むよう斗うつもりです。」

私はたびたび日本を訪れた時の忘れがたい思い出を持っていますが、初めて四十年前に行つたとき、日本の国に感じた幻まぼろし、それが実現されつつあるのです。

精神界の電子学はすべてのところの、すべての人に必要であるばかりか、あたり前のことなのです。アメリカで一番尊敬されている黒人の経営している新聞アフロ・アメリカン紙はアジア、アフリカ会議にM R Aの根本的解答がしめされた喜びを大に次の見出しで示しています。

「バンドン会議でM R Aを提唱」。本文は次の通りです。

「イラク首席代表ジャマリ博士は会議の初頭に『M R A（道義的再武装）は今日の世界の必要である』とのべ、かつさいを得、さらに『われわれが道義的再武装を基礎としたとき東西両陣營の区別なく世界が一つになることができる』とのべた。」

M R Aの真理は回教徒の人たちには素直にうけ入れられすみやかに伝播しますが、この人たちはまたすべての文明を融和する絆きずなとなるでしょう。

私の祖先のビブリアンダーという学者は、四百十三年前に始めてコーランをドイツ語に訳し、ヨーロッパに紹介した人でした。今日アラブ連盟の書記長はこういつていま

す。「アラブの世界はM R Aの進展を現在世界の有意義なできごととして迎えている。」^(註)

エジプトの総理大臣のナセル大佐は、本年の初頭ワシントンで開かれたM R A世界大会へ送ったメッセージにこういつています。「あなたがいま世界にとりもどそうとしてゐる心を変える秘訣を持たなくては、政治家を悩ます多くの問題は解決できない。それは人間の利己心によつて育成される憎しみや嫉妬から、すべての所の人びとを自由にし、神の意志に従うときに生れる創造的なインスピレーションを彼らに与えるものです。」

総理のいう心を変える秘訣を画入りで誰にもわかりやすくかいた。これからどこへという本はエジプトの政府の情報部の手でアラビヤ語に翻訳されました。

この電子的解答を大衆にもたらすためには本や劇が使われます。今世界の全大陸でM R Aの劇が八カ国語で二十七の劇団によつて上演されています。ハリウッドでは映画や音楽の主だつた監督、俳優、技術家、デザイナーたちが新しい音楽劇、消え行く島々のためにおしみなくその天分を与えています。

この音楽劇はすべての人の心に訴える解答を劇化したものです。ハリウッドで有名

なオルセン氏はこういつています。「この歌劇は人間が理解し、更にそれを生きることのできる何物かをもつている、この中の歌は素晴らしい、これはイデオロギーの原子爆弾で世界中に反応を起すだろう。」

現在の段階は、人間が問題を解決するか、問題によつて破壊されるかの瀬戸際に來ています。すべての国の政治家は憎しみ、貪欲、怖れという人間の感情によつて作り出された問題は、いかに有能で誠実であつても人間の知恵だけでは解決できないことがわかり出しています。

それを解決するには電子学的発明、精神面の体験が必要です。新しい時代を導びく新しい次元が必要です。この体験はすべての土地のすべての生活分野に入つていかなければなりません。この新しい次元を如何にしてとらえることができるでしょうか？聖フランシスによるとその秘訣は内なる声に耳をかすことです。彼にいわせると毎日少くとも最少限度に三十分は絶対に必要な時間だといつています。特に忙しいときはまる一時間が必要だといつています。

イタリーの僧侶のいうには神の心から人の心に伝わる考えを書きとめることがよい

そうです。彼は「書かなければ忘れてしまう。そうすれば結局考えないことと同じことになる」といつています。またわれわれの自我をとらえて、それを打ちくだいたとき、はじめてわれわれは神の存在を知りうるのだ」ともいつています。

精神面の電子学は、こんなにも簡単に自然で、しかも根本的です。これが新時代の鍵です。

精神界の電子学の経験もなく、神の導びきも、^{メテシグ}変ることも知らない政治家は、嵐の中をラジオも地図もコンパスも持たずに未知の土地を飛行しようとするのと同じです。不必要なばかりでなく罪悪です。それは無軌道なほど利己的です。必然的に破局へ導びきます。ところが精神面の電子学を身につければルネッサンスは必然です。しかも早く起ります。政治家も、実業家も、労働組合指導者も労働者も、主婦も、家族の一人びとりみんなが役割りをもつています。

神に導びかれるとき、総ての人は融和を作り、現在のいらだたしさと分裂に答をもたらすことができます。

二十世紀の後半の解答は精神界の電子学が与えるでしょう。

これはききめのある解答です。

(註) 一九五五年一月、ワシントンでアフリカ、ガーナの百五十万、回教徒の指導者であるトローナーは「アブラハム・リンカーンが、アメリカにしたことを、M R A はアフリカのために行っている。それは国々への傷を癒し、人びとを解放している」といった。

考えようとしないう国ぐに

一九五六年ブツクマン博士は、オリンピック準備委員会委員長ケント・ヒューズ氏をはじめ他の指導者によつて蘇州に招待された。

続いて彼はフィリッピン、日本、台湾、ベトナム、タイ、ビルマとそれぞれの国の指導者の招待をうけて訪問した。この時、日本では勲二等旭日章を、台湾では大勳星勲章を、タイ国では王冠大十字勲爵士を授けられた。六月にはロンドンでフィリッピンのリジョン・オフ・オナー勲章と金メダルをリム上院議員を通じて授与された。次に掲げるのは六月四日ロンドンからなされた世界放送である。

いろいろ見慣れないことがあちこちで起つています。新しい視野が展開されていま

す。古い考え方がくずれずれてゆき、デモクラシーは受身になっています。もはや軍備は安全を保障することができません。

新しい勢力が生れると協定は目的も失つていき、新しい緊急事態に直面して古い忠誠は失われていきます。

世界の国家群の新しい配列は、物事を考えようとする国ぐにと、考えようとしない国ぐにの配列です。

歴史の中で見られる最大の力は、一つの目的に融合された国の考えです。

宣戦の布告なしにも、思想は侵入して来ます。一発の銃声もなく、国会が討論を続けている間に思想は国ぐにをとらえてゆきます。これは武器では防止できません。経済的援助をより良くするだけで思想をそらすことはできません。

その方向を変えるのは、指導する者も、指導される者もより優れた思想、より強い目的、より献身的な生活をするだけです。

計画だけでは充分ではありません。計画をたてる多くの人たちは、充分に考えることをしないのです。彼らは計画をたてますが、東と西に、白人と黒人に、富める国と

貧しい国との間にきずなを結ぶためには、どういうことが根本的であるかということを考えません。彼らは人びとの動機を変えることを考えません。人びとや国ぐにが生きる目的を変え得ることも考えません。それをなし得るものはイデオロギーです。

最近、ノルウェーのある労働組合指導者が自国の政界や産業界の指導者に向つて次のようにいいました。「MRAの仕事は世界にいかなることが起つていのかを政治家や国民が見ぬくことができるよう、イデオロギーで武装させることだ。

デモクラシーがよろめいているのは必要としているイデオロギーの燃料をもたないからだ。

多くの政治家は深刻なイデオロギー的栄養不良に苦しんでいる。」

それであるからイデオロギーを持たない国はイデオロギーをもつた国に考え方で負けていきます。共産主義や反共産主義が失敗するところを、より優れたイデオロギーをもつた人は成功します。

優れたイデオロギーは、新しい動機をもつた新しい型の人を増やしています。この新しい型の人には困難な問題を解決しています。

最近、私が東京に行つたとき、日本のある新聞は、私が丁度よい時期に来たと書いていました。それはちようど国会が表面的には和解しがたい、行きづまりの混乱の状態にあつたからです。議員たちは牛歩戦術をやつていました。それは人びとをいらだたせ、怒らせました。朝の三時、四時、と会議は続けられていて、睡眠も短かければ、かんしやくも度々おこしていました。新しい要素が必要でした。

与野党の指導者が、私と私の友人たち（融合のイデオロギーに生きている人たち）を国会内で昼食によびました。あとになつて彼らがいうのに「奇蹟だ。あなたは正気でないところに、正気をもたりました。解決が見出され、乱闘がなかつた。党の意志に従うのではなく、何が正しいかで問題の解決ができた。」これは私がしたのでありません。国会の人たちの考えを変えたのはイデオロギーの力なのです。

問題の根本には人間がいます。より優れたイデオロギーによつて人びとは変わるることができます。

最近まで駐米大使をしていた日本のある銀行家は「戦後の日本の道義的精神的再建に最大の力となつたのはM.R.A.だ」といつています。

総理大臣は新聞に次のように書きました。

「今日の国会の姿をみるとき、M R A の精神が国会議員の一人一人に浸みこんだならばと、つくづく考えざるを得ない。日本の国全体がいや世界中のすべての人がこのM R A の精神に生きぬくことが出来るならば、争いもなく真の平和が訪れることであらう。」

私がマニラに着いた時、港湾労働者の人たちが大きなプラカードを立てて迎えてくれました。そのプラカードには「M R A 歓迎、労働者よ世界を融和せよ」と書かれてありました。この歓迎はマニラからロンドン、ハンブルグからシドニー、ニューヨークから横浜へ至る国ぐにの生命線を支配する労働者の力強い声なのです。

次の朝、港湾労働者の一人はわれわれと一緒に大統領と朝食をとりました。

マグサイサイ大統領は人びとを知る術と人間的な接触の術を心得た人です。彼は私に「たいいていの人は私に問題をもつて来る。しかし、あなたは解答をもつて来た。」といました。

どこでも共産主義者も非共産主義者も、東であろうと西であろうと、より優れたイ

デオロギーの考え方と生き方を備えている人に反応を示します。

三十年間、坑内炭坑夫として働いたイギリスのある労働者は「熔鉱炉に石炭が必要であるように人間の心にM R Aが必要だ。それは力を与える。石炭が必要であればあるだけ、ますますM R Aが必要である。」といっています。

私はイタリーの選挙の前夜にミラノを通りました。駅には産業人や大工場の支配人と組合員、全国組合の書記長、共産主義が支配する小スターリングラードと呼ばれる地区の人たちが来ていました。

ミラノ市の交通労働組合一万二千の指導者で共産党員である人も来ていました。かたくなな共産党員であつた彼の姉は変わつてしまいました。彼女は新しい型の革命家となりました。憎しみから解放され融合を創る彼女の力に彼は驚きました。

彼は病をおして駅に私を出迎えて、私の側で闘う決意をつたえてくれました。「私は私の子供たちの将来、そしてM R Aの示す新しい世界のためにだけ生きたい」と彼はいいました。

駅にはまた、ある共産党の新聞の編集長の兄弟が来ていました。この編集長は市交

通労働組合の指導者と同じように、この優れたイデオロギーを見出したのです。彼は十頁の特集号を増刷してこのことを全市につたえました。

彼は今、ヨーロッパの政界の指導者にこの解答を与えています。

彼の妻も、彼の兄弟も、友人も、かつては敵であつた人も彼に従つています。彼は長年、教会に対して、にがにがしい感情をいだいていたこともあやまりました。彼は革命的な信仰をもつて生活してきました。彼は人間の欲望と物質主義に動かされるかわりに、神の導きを見出すよう静かに考える時間をもつことにしました。

偉大なカトリックの哲学者ガブリエル・マルセル氏がフィガロ紙に次のように書いたのも驚くことではありません。

「MRAは一つの希望だ。あるいはこれだけが希望であるかも知れない。」

北大西洋条約機構の議長であつたヨーロッパのある政治家は、「共産主義を唯一の問題とし、これに対して否定的な反対だけが解答だと思つたら大変な間違いだ。物質主義的な考え方はデモクラシーの中にも根ざしている。たとえ共産主義が存在しなくとも人類の将来にMRAは欠くべからざるものである」といつています。

M R A 国際使節団をドイツに招請するに当つて、アテナウワー首相と閣僚は、「混乱の時代に必要なのは、国家的生活のみならず、国際関係を形づくる明晰さと道義的勢力をもたらすイデオロギーである」といつています。

西ドイツはそのエネルギーと能力とによつて産業の再建を達成し、繁栄を獲得しました。しかし、繁栄だけでは憎しみをいやすことも、融和をつくることも、共産主義に解答を与えることもできないことに指導者たちは直面しています。

考えようとしぬい国ぐには、血潮と金を費し、憎しみと惨事をそだてます。

しかし、考える人びとは優れた政治力をもちます。

チュニジアの経済大臣モハメット・マスムディ氏はつい最近私に「M R A がなかつたら、私の国は無慈悲な戦乱にまき込まれているだろう」といいました。

モロッコの例をひいてみましょう。予期しないことがおこりました。

ある若い情熱的な指導者は、彼の敵のことを悪魔の化身だといつていました。人びとの深い必要をみたすことの出来るある人がこの青年と話しました。彼は聴くことを決意しました。憎しみの声、偏見の声を聴くかわりに、かすかな静かな心の声に耳を

傾けた時、その声は彼に「おまえが一番はなれていると思う人との距離が、神とおまえとの距離なのだ」といいました。

彼はふるえながら悪魔だといった政治家に会いに行きました。彼は自分の確信についてではなく、憎しみについてあやまりました。たとえ正しい確信であつても、それが偏見に満たされた人や、考えない人及び国によつて用いられると、マイナスの力となります。

当の老政治家は彼を抱擁して許しましたが、二日後にこの老政治家は政策の変更を公けに発表しました。このことは国を新しい方向に向け、融和する土台をつくりました。

今日モロツコは独立して新しい道を歩んでいます。

この効果的な方法をアルジェリアに用いるフランス人はいないでしょうか？

私はベトナムで、時の人ジエム大統領に迎えられました。彼は「われわれはM R Aを歓迎する。それは西洋の心が変わるのを待ち望むアジアの渴望を完全にみたすものであるからだ」といいました。

タイ国のピブン・ソングラム首相は普通では一切の観劇を許されない僧侶たちが特

別に、消えゆく島々を見るようにとりはからいました。彼らは異口同音に「人間を交えるMRAの力こそ世界を融和する力である」といいました。

台湾では、蔣総統と緊密な人で、私の旧友である何応欽將軍に会いました。彼は「われわれ中国の指導者がMRAの融和をもつていたならば中国の歴史は変つていたであろう」といいました。

蔣介石総統は「これこそわれわれに与えられたもつとも有効な価値ある援助である」といいました。

ビルマのウー・ヌー首相はこのイデオロギーがビルマの学生に新しい考え方の方向を与えたことに感謝の意を表明しました。

ラングーン大学の学長は「MRAはラングーン大学では魔術の言葉だ。」といいました。ウー・ヌー首相は「今の世界に必要なものは、東洋の疑いを晴らし、西洋に道義的健全さを与える普遍的なメッセージだ」といつています。

ニュー・タイムズ・オブ・ビルマ紙は次のように書いています。「人間自らが入りこんだ泥沼から現実には救い出せるものはMRAだけだ」と。

私が最近会つたウー・ヌー首相やその他のアジアの指導者たちは、多くの西洋の指導者よりも国の政策についてイデオロギーを優先的に考えることが必要だということをよく知っています。

アメリカの著名な科学者はこういつています。

「ワシントンで、いわゆる首脳部といわれている人が、どのようなものであるかを知っている私は、イデオロギーの答は官庁の企画部で準備されるものではないことを知っている。それは政府の命令によつてできるものではない。それはあなたや私の個々の心から生れる。われわれが変らなければ、答は出て来ない。その責任はわれわれにある。」

共産主義者も非共産主義者も共通の弱点をもつています。それは彼らが新しい型の人間を作つていないことです。従つて新しい世界を創るのに必要な唯一のものをもつていません。しかし、人びとに新しい性質を与えることの出来るよりすぐれたイデオロギーは存在します。しかも、これは効果的です。これは正直、純潔、無私、愛の絶對道徳標準に生きることによつて打ち出される新しい考え方です。

このイデオロギーをもつときに国ぐには考えはじめます。その時、問題は解決しはじめるでしょう。

家庭は融和され、青年は身勝手な生き方よりも、より力強い目的を見出すでしょう。これが新しい政治力です。全世界の考え方、生き方、気力を変え得る献身の生活がこれです。

すべてのところの、すべての人にとつて、これこそ将来です。これが正常な、正しい生活です。

予期しない光の源

一九五六年クリスマス・メッセージ

最も暗くみえるとき

神は光を与え給う

考えようとしなない国々には、暗黒の中を歩く国々にです。

そうした国に、このクリスマスに当つて、予期しないところから解答の光がさし込んできました。

最初のクリスマスに、アラビアとアフリカから来た博士たちが、世界にもたらされ

た希望を見付けました。

今日、アラビアとアフリカが混乱に対する解答を与える、予期しない源であるかも知れません。アフリカは今日、真の自由の意味を示すために、西欧に人を送ってきています。彼らは『フリーダム』と名付けられた劇及び映画を通して語っています。この映画は、人間関係の根本問題に対する最も大胆な扱い方であるといわれています。(註)
今は奇蹟のおきる時です。幼子キリストを拝みにムア人がきました。エジプトはこの幼子をかぐまい、カルバリの丘に十字架を背負つてゐたのも、アフリカ人でした。アフリカの語る言葉は、謙虚な心をもつたすべてのところの人びとの心に響くものをもつています。

柔和な心で神を求めるとき

主イエスは汝を訪れん

註

『フリーダム』(自由)は一九五五年スイスのコーのMRA大会に、アフリカ各地から集

つた人たちの手によつて書かれた。一九五六年にはアフリカにおいてこれが映画化された。

それは一九五七年二月十二日ハリウッドのエジプト劇場において初上映された。続いてワシ

ントンのナシヨナル劇場で上映された時に、南アフリカ教員組合副委員長マナセ・モラニ氏（彼は映画の中で首相を演じている）は舞台から次のように語った。

「アフリカの真の戦いは、イデオロギー戦であります。この戦いにおいては人力も、軍事力も、金銭も大切ではありませんが、それ自体解答にはなりません。イデオロギーなくして、これらのものは役に立たないのです。個人としても、国としても、憎しみ、怖れ、貪欲によつて造りだされる問題を処理できる根本的なイデオロギーが必要です。共産主義に対してもイデオロギー的解答が必要です。民族・皮膚の色・階級の差をのり越えて、人びとを融和しうるイデオロギーが必要です。誤まつたイデオロギーがアフリカに入りましたが、正しい解答となるMRAのイデオロギーももたらされました。このイデオロギーは、全世界が今日必要としているものです。正しいイデオロギーをもつ人が真の愛国者です。民主主義のイデオロギーの訓練をうけた勢力は、国々にとつて貴重な所有物です。」

思想は新しい世界をつくる神の武器

一九五七年六月、M R A 世界大会（註）は、マキノ島の新しい会場で開かれた。この大会には、七十六カ国から五千人の人がきたが、この中には日本青年団の百名が、台湾の青年百名と共にアジア・アフリカ、南アメリカ及び臺灣の政界、産業界の指導者らと出席していた。次に掲げるのはその期間になしたブツタマン博士の世界放送とテレビの放送全文である。

長年の、太平洋をめぐつてつみ重ねられた犠牲の多い失敗に輝かしい答が与えられました。

いわゆる「太平洋関係」という考え方は、一時、世界の視聽を集めました、これ

には間違つたものもあつたため、各国間の関係も改善されず、平和はもたらされませんでした。これは他の間違つた思想と同じに、混乱の山をきづき、何百万の人びとの融和と自由をさまたげてしまつたのです。いまこの層山は神から与えられた思想の力で整理されつつあります。

この思想の力を経験したフィリップスの故マクサイサイ大統領は「たいいていの人は私に問題を持つてくるが、あなたがたは解答を持つてきた」と私たちにいいました。

中国の何応欽將軍は戦争で日本を敗つていますが、中国本土は、今日、間違つた思想に魅せられています。將軍は長年の私の友達ですが、最近、故マクサイサイ氏の国で開かれたM R A アジア大会で、次のように語つたのです。「われわれが戦後十年間の外交手段でなし得なかつたことが、この大会で達成された。」

日本の与党の最高顧問である星島二郎氏はこの大会で「われわれはここで日韓が融和できる道を見出した」と、その確信を語りました。彼は、サンフランシスコの平和条約に署名した人です。フランス外相であつたロベール・シューマンは、その条約に署名した後で、私にこういつたのです。「われわれ政治家が日本との平和条約に署名

する勇氣をもつ二年前に、あなたはすでに日本と平和を結んでいた。」と。

私は韓国を昔から知っています。前に閣僚であつた朴夫人の夫は、その昔、日本の官憲によつて投獄され、それ以来今日まで十八年間も病床に横たわつてゐるし、彼女自身ひどい目に会つてゐるのですが、この朴夫人は、大会で次のように述べました。「私自身の心を変へることによつて、日本に対する憎しみをなくすることができた。M R Aの基盤にたつてこそ、アジアと世界の永遠の平和が達成される。」

一九一五年に、私はじめて東京に行つたとき、日本を近代工業に導いた先駆者渋沢栄一子爵のお世話になりましたが、渋沢翁の曾孫の渋沢雅英君もこの大会に出席してゐました。彼は戦後の日本の典型的な若い実業家でありませんが、M R Aに会つて、アジアの将来は、M R Aか共産主義の何れかを選ぶ以外にないことを知り、變る決意をしました。彼は信仰を見出したのです。そして、職を棄てM R Aに専心することを決意しました。元大蔵大臣であつた彼の父は、知友の經濟学者や青年実業家五十余名を集めて、息子に話をさせ、最後に、この子の曾祖父は家を出て、明治維新にとび込みましたが、それは日本の歴史が作られつつあるのを知つて、自分が一役果すために

行動したのです。この曾祖父の血がこの子の体に脈うち、今日の歴史をつくる新しい要素がMRAであることを知り、そこに自分のすべてを捧げる必要を感じているのです。』と話したのです。

「青年はどの道に行けばよいか？」四百三十万余の青年で組織されている日本青年団は、今こう問い求めています。

彼らは、ヨーロッパやアメリカで開かれたMRA大会で、日本の将来の思想を見出しています。今年、モスクワは百名の日本の青年を全額負担でソ連に招待しています。どうしようかと彼らはきいています。私たちはこの作戦に応じられますか？ それで百人の青年が、マキノ島のMRA大会にやつてきます。いや日本だけでなく、台湾、フィリピン、ベトナム、インドネシア、ビルマ、マレー、インド、セイロンなどの青年たちも同じことを考えています。「どちらの道にしようか？ モクスワカ、MRAか？」

アメリカを旅行中、ビルマのウー・ヌー首相は、ラングーンの大学で一つの思想が青年たちの心をとらえているのを聞きました。彼らをとりこにしていた間違つた思想

から青年を解放し、正しい思想が与えられたのです。

ウ・ヌー首相は、アジアのMRA大会に次のようなメッセージを送りました。

「この思想はすべての人の心の必要を満たすから、人種や階級を超えたものです。考え方や動機や目標を変え人間を変えようとするものです。」

この大学の学長の兄であるウ・チン・タット外相は「この暗い世界の中で、ただ一つ輝いている光はMRAの光である」と述べています。学長である弟は、いつも兄にたいして反対意見を持つ権利を保留していたが、こんどは彼もまた「MRAはラングーン大学では、不思議な力をもつ言葉となつている。これは新しい時代を画するものである」と語っています。

マグサイサイ大統領の未亡人は、故大統領をひきつけたと同じこの精神に心をひかれており、令息に会わせるために、コールウェル兄弟を家に招きました。このコールウェル兄弟は、故マグサイサイ氏が、フィリッピンのMRA大会にとくに参加してほしいと考えていた三人のアメリカ人でした。彼はこの兄弟の歌を全国に放送させました。三兄弟は世俗的な利益をすてています。アジアの指導者たちは「われわれの国ぐ

にに融和を結ぶ精神をかもしだすために、欠くことのできない役割をコールウェル兄弟は演じている」と述べました。三兄弟はマグサイサイ夫人宅に四時につき、家族に夜の十一時半まで引止められるほどすばらしいときをすごし、故大統領未亡人は彼らに歌を二十回も所望しました。

それからコールウェルたちは六十マイル旅行して、フク団が横行する地方から僅か十五マイル離れた農村へ行つたのです。村長、警察署長、助役など数百人の村民がアカシアの大木の下に集つて、コールウェル兄弟の歌や同行者たちの話を聞きました。三万五千の学生をもつファー・イースタン大学の医学部長グテアラツ博士が三兄弟を紹介しました。あまりに聞く人が路に溢れて、交通もときどき止まりました。聴衆の中にはフク団の人もいたといわれます。集まりが終つても、なお村民たちはコールウェル兄弟の歌を二つきくまでは帰えらなかつたのです。夫君と同じファー・イースタン大学の理事をしているグテアラツ夫人は「マグサイサイ大統領が民衆に愛されたのは、こうして直接民衆に会うために農村に行つたからです。あなた方も同じことをしています。」といました。

フイリッピン国会の上院国防委員長は、これが国のためにどういう意味をもつてい
るかをすぐに見抜いて「国防のためにMRAがこの国に根を下し勢力になつてほしい。
MRAは共産主義の侵透を阻止する第一線となろう」と語りました。

国の安全を買うために馬鹿げた努力をして、ただ一つの本当の安全、すなわち人間
を改造し、世界を改造するために彼らを融合させるこの思想を見逃がさないようにし
ましょう。

思想は新しい世界のための神の武器であり、人間は神から思想を受ける能力をもつ
ています。人間がこの思想を実践する時、自分のためにも国のためにも新しい方向を
見つけるでしょう。私は神が昼夜を問わず何時でも話しかけられるように、われわれ
は生活しなければならぬと信じています。

ある夜、私は一つの考えを強く感じました。それは「アフリカは世界に語る」とい
う考えでした。そのとき私はちようど世界大会の開かれていたコーにいました。ア
フリカ大陸の各地からアフリカ人が来ていました。彼らはこの考えを直ちに実行に移
しました。彼らの心に一番近いテーマ「フリーダム」(自由)を題材にして、劇を書

きました。ロンドンでこの劇を見たドイツ大使は、その夜早速ボンに電話をかけ、政府の人たちに、ぜひこの劇を観るようすすめました。この劇は、ヨーロッパの各首都を廻り、今は映画化されましたが、アフリカ人が書き、アフリカ人が出演し、アフリカ大陸で撮影された世界最初の映画であります。ウォルト・ディズニーのカメラマンは、契約を犠牲にして撮影にとりかかり、多くの国ぐにがお金や時間や才能を提供して来ました。そして初演はハリウッドで行われましたが、一人の評論家は「私の生涯を全く変えてしまうような映画」といつております。

「アフリカは世界に語る」——ワシントンでは一日二回ナショナル劇場の外に観衆が四列で半マイルの長い行列をつくつてこの映画を見にきました。そして、アジア大会に出席していた九カ国のアジアの指導者たちは、アメリカの下院議長と外交委員長宛につきの電報を送りました。「この圧倒的に強力な映画は、今日の危機にあたつて、われわれの国ぐのために神によつて与えられた助けであり、これこそ全アジアの大衆にみせるべきものです。このイデオロギーだけが東と西とを融合する真の基盤です。」

科学者たちは、軍事力はただ時をかせぐためにしか役にたたないことを知っています。どうしても、思想が世界をかちとらなければなりません。そしてまた、科学時代の多くの青年はM R Aに呼応しています。それは人種と階級とイデオロギーの根本的な分裂に答を与える思想だからです。

アメリカの大学生の一人の指導者がこの考え方に心をひかれ、彼はまず自分の間違っていた点から正しくしはじめました。この大学の一万六千人の学生自治会の会長は黒人ですが、彼は会長の家に行つて、自分の恨みと自分が今までにやつて来た大学の中でのやりかたを詫びました。ちようどクリスマス場所でしたが、会長は、「これは本当にうれしいクリスマスだ」と温い手を差しのべました。こうして二人は一緒に協力するようになり、教授、学生新聞関係者、自治会役員などの七百人の大学関係者をつれて映画フリーダム・自由を觀ました。さらに、この二人は一しよにアジアのM R A大会に行きましたが、会長は、ロスアンゼルス・センテナル紙に次のように書きました。「M R Aこそアメリカの人種問題のほんとうの解決である。この解答は黒人の間にも必要である。人種の偏見に答えるイデオロギーはM R Aである。なぜな

らこれこそ黒人と白人がともに變つて、新しい世界をつくることのできる唯一の勢力だからである。」

アメリカのワイリー上院議員は上院の議場で、アジア大会の報告をつぎのように述べ、国会議事録に記されました。「もし、われわれがアメリカでこのイデオロギーを生きたら、金で買うことのできないアジアの反応がみられるでしょう。それが歴史の転機となるでしょう。この大会でみられた現実にたいするより深い反響は、われわれみんなの希望の源であると同時に、この真理の光で、われわれの政策と実践とを反省する挑戦でもあります。」

新しく本が出版されました。この本の思想は、ある朝早く神から与えられた考えなのです。「アメリカはイデオロギーを必要とする」と。このイデオロギーの核心は、その昔、ウイリアム・ペンがいつていることです。

「人間は神に支配されるか、暴君に支配されるか、そのどちらかを選ばねばならない。」

人間が心の声を聴くとき、神は思想を与え、その思想に支配されようと決心すれば、

新しい型の人間になれます。この実験は誰でも、どこでも、いつでもできますし、また大変有効です。

科学者、政治家、工場に働く者、学校や農場の人びとが、これらの事実を直視し、試み、実行し、これに従つて生きるでしようか？

敏速に国ぐにを和解させる強力な思想。すべての人びとの心と意志とにうちかつて、広く世界のルネッサンスをもたらす思想。それは一瞬にして得ることができ、直ちに実践することができるのです。

思想は新しい世界のための神の武器です。

その意志さえあれば、誰でも神に聴くことができます。

註

この大会の目的は、国ぐにを和解し、東と西に橋をかけ、道を失つた人たちに方向を与え、別個しつつある文明を再建することのできるルネッサンスをもたらすことのできる決定的な

武器としての思想を、国ぐにに与えることである。

神が解答です

——われわれに迫いせまる混乱に対して——

一九五八年六月四日、フランク・ブツクマン博士の八十回
誕生日と、M R Aの二十周年を記念してなされた世界放送

日本の岸総理がワシントンに来たとき、彼はマキノに電話して、M R Aが日本に対してしたこと、の礼をいわれました。マキノではそのとき、百人の日本の指導的青年が私と一緒にいましたが、彼らはイデオロギーを求めたのです。モスコーに行く代りにM R Aに来たのです。この機会に私は総理にこの青年たちは全アジアの青年の行くべき道、左でなく右でなく真直ぐに正しく進む道を見出したと伝えました。帰国後、

総理はこれを政府の方針にしたといいました。

岸総理の東南アジア訪問旅行の直後、フィリピンのバギオではM R Aアジア大会が開かれましたが、ガルシア大統領は次の言葉で各国の代表を迎えたのです。

「われわれは経済力及び国防力を強化すると同時に、敵視による提携でなく道義的イデオロギーを基盤として結ばれるアジア各国民の提携を促進しなければならない。」
すべての国の混乱した政治家がこの確信——神が解答をもっている——をもつことができたなら非常な革命です。今日、人びとは心だけで期待していて実際には混乱の中に生きつづけています。人びとが妥協によつて混乱した人を指導者として受入れるところに悲劇があるのです。その代りに神に聴く人を指導者とすることもできるのに。

ソ連は犬を乗せた人工衛星を打上げました。全世界がそこから送られる信号に耳を傾けました。それは宇宙を征服するには大切なことでしょう。しかし、地上の混乱の解決には何の役にも立ちません。われわれが神に耳を傾けたならば、この混乱を簡単に解決できるでしょうし、そのうえ宇宙の征服にも役立つかも知れません。フィリピンの外務大臣は、マニラで聞かれたS E A T O会議（東南アジア条約機構）に出席の後、

パギオのMRA大会にきました。「これで世界を変えることができる」といいました。何が彼を感動させたのでしょうか。行動しているアジアの勢力とイデオロギーの武器としての劇とをみたのです。その一つは日本の劇でこれはマキノで書かれたものです。

これは、日本各地で上演されましたが、これは個人も家庭も社会もすべて右でなく左でなく真直ぐ行く道をしめたものです。これを見て皇室の人びとも、産業界、労働界の人びと、炭坑夫も農民も青年も感激しました。これが日本の解答だと皆がいつています。

フィリッピンの指導者たちが、この劇を招待しました。何千というフィリッピン人が占領中の日本軍の手で殺されたマニラの旧城壁内で、この劇はフィリッピン人の懇請によつて上演されました。フィリッピンのゲリラの斗士が日本の前将校と並んでこの劇を紹介しました。劇が終つてから観衆は長い間拍手をおくつて止みませんでした。舞台の上からは日本人が自分たちの心の中に見出した解答を語りました。過去の傷はいやされ、融和が見出されました。

劇の出演者の一人に住友吉左衛門氏がいます。住友産業は五十万の従業員を擁しています。日本のロックフェラーと呼ばれている彼は、劇の中では一番貧乏な小作人の

役を演じます。最初、彼は産業界の指導者の反対にあいました。とくに住友産業が根をおろしている大阪の重役たちは反対を表明しました。しかし、住友氏の確固たる信念と世界を包含する彼の新しい思想とは、彼らを納得させました。労働組合の指導者たちも住友氏は自分たちよりも革命的だから一緒に働けるといつてます。

一団のアジアの指導者たちがこうしたイデオロギーの武器とともにアジアを歴訪しています。韓国、中国、ビルマ、フィリッピン、印度、日本を加える十六ヵ国の人たちです。岸総理はこの人たちが効果的であることを知つて次の招待電文をおくりました。「私は、あなた方のもたらす思想が、歴史の現段階において最も必要なことであると信じるからこそ、劇と一団の人びとを招待します。」

高価な犠牲を払つて、この人びとは動いているのです。パキオではオランダとインドネシアの人たちが、同じ壇上から過去の許しを乞い、太平洋の新しい未来のために働くことを誓い合いました。インドネシアとフィリッピンの婦人たちが宝石を出しました。ヨーロッパ人やアメリカ人が財産を提供しました。このような精神に動かされたから、フランスの哲学者ガブリエル・マルセルは、東京を訪問した後、次のことを

いいました。

「西欧の心ある人びとは、人と人との純粋な関係を作ろうとするこの働きの真価を認めています。これは真理の要求するところです。」

アジアにこの解答をもたらししている人たちは誰でしょう。私が一九一五年に始めて東京に行つた時に、近代日本の産業の開拓者渋沢栄一氏に会いました。この人の曾孫もその一人ですが、彼の幼い子供も「フランクおぢさんのために祈つています。」といつてきました。

一九一五年にインドに行つた時、私はガンジー翁に会いました。今日、彼の孫もアジアにM R Aを伝える勢力の一人です。彼は生涯をこれに捧げています。アジアの教億にとつてはM R Aか、混乱かだといつています。ワシントンのある高官がバギオにいききました。彼はこの若いガンジーに「私はあなたのおじいさんを知っていました。彼はインドの国を作るために生涯を捧げたが、あなたはその国を救うために生涯を捧げている」といいました。

アメリカの歴史に名を残したある國務長官の子孫も、その勢力に加つていました。

彼と一緒にワシントンでも尊敬されているフィリップスの新聞人が東京についた時、総理は、令息と秘書官を空港に出迎えに出しました。次の日、総理はこの人たちを官邸に迎えて、MRAは日韓会談を可能にし、これを育成している大事な要素だといいました。フィリップスの新聞人はいつています。「武器の再武装も必要だが、MRAはアジアを融合させ得るから必要欠くべからざるものだ」と。

彼は日本の劇が北京に光をもたらすと信じています。アジアとアフリカの数億の人たちが現代の混乱に対してこの解答を見出すとも彼はいつています。われわれの役割は何でしょう。解答を見出すというならわれわれもこの新しい要素を必要とします。世界もわれわれから解答が来るのを待つています。

ビルマのウー・ヌー首相は、ラングーンにこの一行を迎えた際、語りました。「今日世界にとつて道義的に武装することが何よりも必要である。私は外国を旅行する毎に、イデオロギーの両陣営の人びとに向つて、相互のおそれと疑いを取り去ることを勧めている。しかし、私自身省みて、やはり、おそれと猜疑心につきまるとわれているのだから、私の忠告を受け入れることの困難さがよく分る。こうしてみると、ある事

がらについては、実行するより説教することの方がたやすいのである。MRAはこの点について強く挑戦している。」

アメリカ南部諸州の中心であるアトランタの劇場にも解答がもたらされました。白人と黒人が並んで劇場の階段を出てきました。彼らは音楽劇『わが生涯最高の経験』をみたのです。これはメアリー・マクロイド・ベッシュューン（有名な黒人の婦人教育家）の生涯を書いたもので、ブロードウェイのスター、ミュリエル・スミス嬢とブロードウェイのテレビスター、アン・バックルス嬢が出演しています。この二人はこのMRAの劇を南部で上演するため各種の契約を取消したのです。この劇を見た白人たちはいいました。「この基盤でならわれわれも一緒に協力することができる」と、黒人がそれに答えて「そうです。できますネ」と共鳴しました。

アトランタのある弁護士が劇を見ていいました。「四十年間の公人としての生活を通じてこれほど深く感動したことも、これほど力強い反響をみたこともありません。あなた方は非常な影響を与え、人びとの考えを変えています。われわれの中には、この解答をもちながら実行する勇氣の欠けていたものもいます。あなた方はそれを生活

し実証しているのです。これはアトランタから全国に伝わるでしょう。」

アトランタの別の指導者もこんなことをいいました。「アトランタのわれわれは時限爆弾の時を刻む音を聞いていたのですが、あなた方は聖霊の声を聴くことを教えて下さった。」ある新聞人は次のようなことをいいました。「共産党がアメリカの南部では起りえないといつたことをこの人たちは実現しているのです。」

ヨーロッパとアフリカの新聞はこのアトランタにおける仕事を「リトルロックへの解答」と呼んでいます。これは世界がアメリカに希望し、且つ期待するものです。

アフリカは道を示しています。この一年の間にアフリカの映画「フリーダム」はすべての大陸で上映されました。インドのニューデリーで上映されたとき、新聞は「この映画はインドの重要な人たちが全部が見ている」といいました。インドの映画プロデューサー・バサン氏は「すばらしい、すばらしい、すべての国語に訳されるべきだ」と叫びました。また北大西洋条約機構の本部のあるホンテンブローでは全員がこれを見ました。スタンでは政府の手によつて上映される予定です。ローマの新聞テンボ紙は「この映画は大都市ばかりでなくイタリーのすべての町々で見るべきだ」といつて

います。リベリヤのタブマン大統領はこの映画を見て「これは見る人びとの生活に深い影響を与えて世界をつくり変える使命をもつている」といつていますが、アフリカは、フリーダム⁴を通して世界に呼びかけています。彼はまたインドの映画プロデューサーと同じく「これはすばらしい映画だ、全世界にみせるべきだ」と述べました。

フランス人ばかりでなく自国の過激分子からも迫害をうけたアルジェリアの新聞記者が、「私はできるだけ早く、フリーダム⁴をアラビア語にしておいて北アフリカに持ち込みたい。わが国の独立運動をしている人たちに必要なものだ」といいました。同僚の一人もそれにつけ加えて、「会議だけでは紛争の答えにならない。唯一の解答は神に聴き一人びとりがその導きに従うことだ。この映画は北アフリカに平和と兄弟愛の新しい時代を導くことによつて大きな貢献をなすだろう」と述べました。

人びとは偉大な真理を間違つた方法で教えてきました。神が自分の国に対してもつ計画を聴こうとする情熱と、それに従う確信に欠けているのです。国のために生き、世界を再造するために生きる訓練が欠けているのです。マキノとコーは政治家や労働者、産業人、すべての人が物質的なイデオロギーをもつた人たちを、より優れたイデ

オロギーの方に勝ちとるため、訓練をうける学校です。あるヨーロッパのソ連通で、その国の首相がモスコーに行つた時に同行した人ですが、彼はこのような訓練をうけた人たちが最近三回にわたつて歴史的に決定的な役割を果たしたといつています。第一はバンドン会議の時でした。ここでM R Aが東と西を融和する道であるという宣言がなされました。

次はヨーロッパの工業地帯の真只中のルール地方が、物質的イデオロギーの人びとの掌握下にあつた時、M R Aで訓練された人びとによつてその掌握下から救われたのです。第三には、バギオの大会を通して日本、韓国、フィリピンと他のアジアの国ぐにが、道義的イデオロギーを基盤にして融和を見出したことです。これらのことは訓練され、確信をもつて生きる人たちによつてなされた成果です。頂上会談が成功するためには、融和のイデオロギーがなくてはならないのです。モスコーが共産主義を信奉すると同じように、他の国がM R Aを信奉したならば、すべての国に与えようとしてゐる融和と平和と繁栄の新時代が開かれるでしょう。

インドにいたとき、M R Aは大衆に対してどのようなプログラムをもっているかと

聞かれました。私は、「手は職で満され、腹は食物で満され、空虚な心は真に満足されるイデオロギーで満される。これがMRAです。東洋のためにも、西洋のためにも。」と答えました。

アメリカの青年を考えてみましょう。ある青年がこの解答を見出しました。それまでの彼はニューヨークで酒と麻薬に酔っている愚連隊の一人でした。六カ月のうちに三台も自動車をこわしてしまつたような男です。彼はMRAに会つたときに、大きい目的と満足する思想を見出したのです。「僕の仲間たちにはこれが必要だ。これこそが求めているものだ。」と彼はいいました。

金持ちの家に生れたある若いアメリカの婦人が、世界の憎しみと傷をいやすために生涯を捧げました。世界の国ぐにの青年のために生きた近代のジャンダークともいべきこの娘は愛国心の秘訣を知っていました。「毎日が私にとって新しい冒険です。私を妨げるものは何一つとしてない。」と彼女はいました。今年二十二才で亡くなつたのですが、彼女の生涯は全うされ、満足していたのです。

ジョン・ライフの死は、アメリカの労働界にとつて大きな損失でした。CIOの副

会長であつた彼は組合内部の融和のために斗つた人ですが、それは彼自身の家庭での改変と融和の体験からでたものです。昨年、マキノで彼は重体でした。ある日、大会に出席していた上院議員に対して彼は一つの考えを神から与えられました。

この議員が、ジョンの部屋に入つてきたとき、ジョンは繰返し静かに次の言葉をいきました。「フランク・ブックマンがこのジョン・ライフを改変したおかげで、アメリカの産業界は五億ドルの損失を防ぐことができたことをアメリカ人に伝えて下さい。」

こおいうことがインフレに対する答えではないでしょうか？ このようにして国の富が利己的な紛争によつて浪費されることから救われ、国民の融和と国民の力を増すために用いるようになるのではないでしようか？

八十になる私があなさに話しているのです。私はたびたび混乱に悩まされ、その中から除々に国に対する解答を学んだのです。政治家としても、普通の人にしても、不可解な問題に対する解答は神に聴こうとする人に与えられます。

ただし、このとき必要なことは従おうとする意志です。聴くことを期待することで

はなく、神の与えるものを聴こうとすることが大切です。現在の切迫した世界情勢を考へるにつけても、私は八十才の男の真心をもつていいます。「われわれを追いかけてくる混乱に対して神には解答はある」と。無条件に神に従えば必ず解答は与えられます。無条件に神に従えば、あなたは自分の国に解答をもたらすことができます。

註 マハトマ・ガンジーの孫、ラジモハン・ガンジーはいつた。

「MRAは、アジア人とアフリカ人の心と考へ方とを捕えました。MRAこそ、東と西の国々が融和できる、ただ一つのイデオロギーです。私の祖父が生きた生活の信念に、私自身が生きたるように、MRAは挑戦しました。歴史を変えつつ、この勢力に、私は全力を捧げつくす決心をしました。」

・第五部・

初期の動き

基本的に必要なもの

第一次世界大戦が終わったとき、楽観主義が一般の傾向であつたが、フランス・ブツクマンは世界に迫つていゝる危機の深さを見てとつていた。ソ連でもアジアでも大きな革命が行われていた。平和を保ち、人びとが望むような新しい社会秩序を創ることは、連盟や軍縮会議だけではできないことだつた。早くも一九二一年に、フランス・ブツクマンは自分の仕事の目標は「個人的、人種的、国家的、国際的改変を基にする生き方」だと宣言してゐる。ヨーロッパでも、南北アメリカでも、アフリカでもアジアでも、人びとは人間を革命的に改変して世界を再造するという戦いに参加した。

一九三二年、フランス・ブツクマンはジュネーブで次のステートメントを發表した。

人間の知恵は失敗しました。

幻滅し、困惑し、うろたえている現在の世界の無秩序に適合した解答が必要です。

今日の国際問題の底をさぐれば、利己心と怖れという個人個人の問題です。

問題が解決するためには人を改変せねばなりません。世界の平和は人の心の平和からのみ生れるでしょう。

地域的な対立、経済恐慌、人種的紛争、国際間の争いに対する解答は、神の自由な精神を力強く体験することです。

基本的必要は神の支配です。

註 十年後の一九四二年にブツクマン博士の演説集を編集していたロンドン・タイムズ紙国会

記者のペーカー氏は序文に次のように書いた。

「一九一八年の休戦以後、戦争に疲れた指導者も国民も平和を楽しもうとしてくつろいでしまつた……楽観主義が流行して人間の性質は忘れられてしまつた。

フランク・ブツクマンは、食欲と憎しみと怖れが除去されて人間が神の恵みをうけるようになったとき初めて新しい世界が生れることをみてとつた。一見、不可能なこの戦いをフランク・ブツクマンは、戦いだしたのである。その後、彼は戦いつづけているが、彼と共にこの仕事に命を捧げている人たちも同様である。

新しい光

第一次世界大戦に続く十年間、オックスフォード・グループの指導者となるべき人はイギリス及びアメリカの大学、特にオックスフォード大学から選ばれた。

一九三〇年以來、毎年オックスフォードでは会合が開かれたが、出席者は数千人にも上った。一九三四年の大会には四十五カ国から代表が集まつたが、特にカナダは多数の代表をおくつた。当時カナダの總理大臣ベネツト氏は「あなたがたの努力のおかげで政府の仕事がやりやすくなつた。カナダのどんな遠隔の地にでもあなた方の影響は感じられています。」と語つた。

一九三四年七月にブットマン博士は次の演説をした。(附録四の1参照)

オックスフォード・グループはキリスト教の革命であつて、その念願するところは生きたキリスト教であります。その目的は聖霊の支配下における新しき社会秩序の建設であります。よりよき人間関係をつくり、無私による協力関係を築き、実業界を清純にし、政界を清め、政治、産業、人種の軌轢を除くことを可能にするものであります。今日、世界には新しい精神が拡がりつつあります。光は何人にも与えられ、その光があらゆる宗派又はあらゆる社会層に属する人びとをキリスト教の信仰の根本にかえらせて基本的忠誠心をつよめるのです。

いろいろの解決は、人びとの中から湧き上るこのような精神から生れ出なければなりません。

あらゆる分野の指導者は、心の改変（オメンタ）にのみ希望があることを確信するにいたりました。その証拠は全イギリス連邦を通じて非常に多いのです。世界の改変は人間の改変を通して行われるでしょう。

オックスフォード・グループは、この新しい秩序を実現するには全世界にわたる精神的目ざめが唯一の希望であることを信じています。

改変された人びとを土台とするとき、恒久的な再建が確実となります。改変なくしては、文明は永続しないでしょう。

燃え立つノルウエー

イギリス国会の下院で、一九三三年十二月に会合が開かれたが、その席上、同席していたノルウエー国会議長カール・ハムブロー氏は、ブツタマシ博士をノルウエーに招待することを発表した。

一九三四年十一月、ハムブロー氏は、ノルウエーの各分野の指導者百二十名をオスローに近いヘスブジョーに招き、ブツタマシ博士と三十名のチームを紹介した。実際には千二百名以上の人が集った。出席者のなかには、後のノルウエーの最高主教ベルグレーブ監督、農民党指導者メルビイ氏、劇作家でノルウエー作家協会会長ロナルド・ファンゲル氏、モウインケル教授その他産業、教育、政治の各界の著名人がいた。一九三五年三月、オスローの市会堂で開かれた大会でブツタマシ博士は次の演説をした。

五ヵ月前にこの同じ会堂で、私たちは第一声を放ちました。この五ヵ月の間にみられた神の驚くべき力を考えてごらんなさい。その一部を皆様は今夜みられるのです。医者も実業家も学生もこの壇上から話しました。この若い人たちが自分の息子であり、娘であつたと考えてごらんなさい。これと同じようなことが国中に拡まつたと考えてごらんなさい。

私がノルウェーにくるまえ静聴の時に、私に与えられた考えは「キリストのために燃え立つノルウェー」でした。ノルウェーに光りが与えられました。

われわれがノルウェーにきた当時、あなたがたの何人かはこれが宗教復活であると思つたでしょう。私は宗教復活も必要だと思ひます。しかし、現在はそれ以上のものが要です。現代は革命を必要としています。この教週間われわれと一緒にこの国を旅行された人たちは、宗教復活以上のものをみたといつています。革命なのです。

第三の段階がノルウェーにきているように思ひます。それは文明復興キツァンシスです。

中世期の終りに起つた事柄を振り返つてごらんなさい。同じことが今日ノルウェーで起り得るのです。

私は、ノルウェーから三日間の旅程の処へ行つてきました。そこにも、ノルウェー人がいました。その人たちもこのメッセージを聞いていました。彼らの表現をかりていうと、「オックスフォードになろう」といつていました。またリバプールの港で、ノルウェーの水兵が、イギリスの水兵を改変チェンジさせたことを聞きました。今日、私はラトビアの新聞を読んできました。そこにはノルウェーで起つている奇蹟の長い記事が載つていました。また最近、私はヨーロッパを二度旅行しました。多くの新聞にノルウェーで起つていることがでていました。ノルウェーに光がともされたことは国ぐんで読まれています。

今夜、皆さんは真理を聞かれました。行動の時がきています。これは意志に対する挑戦です。「神に完全に献身した人を十二人与えられれば世界を変えることができます。」これを書いた人は偉大なるクリスチャンでした。彼の求めた条件というのは次のようなものでした。

与えて、その価を数えず

斗つて、傷つくを気にせず

苦勞して、安息を求めず

勞して、報酬を望まず

ただ、われら、神のみ旨を知ることのみを求む

この挑戦はつきりしています。十二人の人に対する呼びかけです。今夜、ここには千二百人がいます。この人たちは何をなすでしょうか？ 千二百人はトロンドハイム町に何をなし得るでしょうか？ 生ける神に献身した四十人がなし得たことをふり返つてみましょう。トロンドハイムではこのようなことは起り得ると思わなかつたと、牧師もいつていました。最初にオスローで開かれた会合に出席した人の中には、「ノルウェーでこのようなことが起るとは思わなかつた」というでしょう。ノルウェーに光がともされたのです。多くの人の生活の中に生けるキリストが働いていたのです。その影響はデンマークでも感じられます。となりのスエーデンでも感じられます。イギリスでも、ヨーロッパ大陸でも感じられます。

あなたがたは始めたばかりです。僅か五ヵ月です。……五年では？

すべての人が改変したら？ すべての事業が改変したら？ 町全体が神の導きをう

けるとしたら？ 政治は？ 議会は？ 国全体が神に聴いたらどうでしょう？ 国際関係は？ 今夜、この集会から家に帰つて旧約聖書のゼレミヤ第七章二十三節から読んでみて下さい。彼は現代人にも役に立つメッセージをもっている预言者です。第七章から読み始めて全部を勉強して下さい。一国をつくり変える規模で書かれたものです。

わが声にきけ、われ汝の神とならん

汝 わが民とならん

汝 わが命ずるままに歩め

それ汝のためならん

ゼレミヤの国は、聴かなかつたのです。それだから彼らは、前進せずに後退してしまつたのです。それが悲劇でした。しかし、ノルウェーは違います。ノルウェーについてわれわれは、神なる主の声をきいた国は、この国、と言えるでしょう。

ノルウェーはキリストのために燃え立つと信じます。ノルウェーはこのメッセージを他の国ぐにに伝えるであろうことを信じます。革命がさらに進んで文明復興となる

ことをも信じます。

註 オスローの日報、チデンス・テイン紙は次のように書いた。「われわれの国の言葉も知らず、風俗習慣も知らない少数の外国人がやつてきた。……数日後には、国中があげて神について話し出した。この三十人の外国人が到着した二カ月後には、この国のものの見方は確かに変つてしまつた。」

ロンドンのスペクテーター紙にも次の記事がのつた。「国家的目ざめが突然きた。その国の監督にいわせると九・パーセントが教会に行かないという国でこの目ざめが一般の人たちの中から起つてきた。ハの生活の改変を通して社会生活の刷新が行われることをはつきり証明している。オス、大学の四人の教授が次のように結論している。『あなた方の訪問はノルウエーの歴史に、定的な影響を与える。戦略的なきに正しい解答をもたらして下さつた。』」

トロンドハイムのフジエルブ監督は十年後の一九四五年四月にロンドンで当時のことを想起して次のように語つた。「ドイツに占領されている間、ナチズムに対するノルウエー教会人が歩調を揃えて抵抗できたのは、オツタスフオード・グループの働きのおかげであることを公にしたい。」新聞記者会見でも次のように話した。「オツタスフオード・グループがノルウエーに来たことは、イギリスにとつてダンケルクの戦いが不幸中の幸であつたと同様に、神の介在であつた。この人びとのおかげで、宗教が一般人の生活に密接な体験となつた。われわれは単に軍事的に闘つたばかりでなく、神を否定する物質主義と闘つていたので。キリスト教的イデオロギーのために闘う人びとをオツタスフオード・グループは与えてくれた。」

神は世界に呼びかける

一九三五年三月コペンハーゲンで八日間にわたつてMRAの集會がもたれ、三万五千人の人びとが集つた。ブツクマン博士は三カ月間デンマークで働いたが、その最後にクロンボーグのハムレットの古城において大集會を開き、一万人がそこに集つた。本文はその時になされた講演である。當時のことは一九三五年六月十日付のダーゲン・ニューダー紙に報道されている。(附録四の2参照)

私は祝日に、ロンドン放送局が英帝国に呼びかけるのを、コペンハーゲンで聞きました。世界の隅ずみの人びとまで同じメッセージをきくことができました。シンガポ

ール、オッタワ、ケープタウン、メルボルン、香港をはじめ多くの市町村で幾百万もの人びとが聞いたのです。今日は全スカンジナビアの人びとが、スエーデンとデンマークの海が交流するこのクロンボーク城で行われる聖霊降臨祭の大集會に耳を傾けています。世界各国の新聞が特別記事としてそれを取扱っています。リガからサンフランシスコ、アイスランドから南アフリカに至るまであらゆる処で人びとは熱心に聞いています。

科学の奇蹟によつて幾百万の人びとが、一つのことを考えたり、感じたりできるのです。時間と空間の障害がなくなり、言葉の違つた多くの国ぐにも一つの家族になろうとしています。

ラジオをきく人びとはその奇蹟を理解することが出来ます。ですから、この人びとは神に聴くことを教えるオックスフォード・グループをも理解できるでしょう。

「神が世界に呼びかけている」ということは、オックスフォード・グループの人びとが活動している五十ヶ国以上の国ぐにで、すでに何千の人びとが日常生活に体験しているのです。ラジオによつて人間の声が世界の隅ずみにまで伝わることはもうあた

りまえのことになつています。神の生ける声が、すべての家庭、すべての産業界、すべての国会で活動的な、創造的な力になつていけないわけはありませんまい。一国の王がラジオを通してその国民に話しかけると、みな耳を傾けます。なぜ王中の王と呼ばれる神に耳を傾けないのですか？ 神は生きていて、絶えず放送しておられるのです。

ノルウェーの人びとは耳を傾けました。ある有力な新聞記者の言葉によると、「(註) 国全体の考え方が変つた」そうです。カナダの人びとも耳を傾けました。総理大臣はそのため、政府の仕事はやりよくなり、全国の市町村にまで影響が及んだといつています。南アフリカの人びとも耳を傾けました。人種問題で長年悩んでいた地方に人種間の融和が生れはじめました。

デンマークも同じように王中の王たる神の完全な計画に聴くならば、どんな事が起るでしょうか？

最初の聖霊降臨祭に神はごく平凡な何人かの普通人に呼びかけました。この人たちは歴史の方向を変えたのです。今日世界を悩ましている問題を解決する計画を神はもつておられるのではないのでしょうか？

聖靈こそは、現代の世界で最も賢明な情報を与えてくれる根源です。神はすべての問題に解決を与えてくれます。人間が神に自分をゆだねさえすれば、どこでも神は人びとに生き方を教えています。

世界は奇蹟を必要としています。科学の奇蹟は現代の驚異です。しかし、それは平和と幸福とを国ぐにに、もたらしていないのです。聖靈の奇蹟こそは、われわれが必要としているものです。

神の導きガイダンスが、普通人にとつて、あたりまえの体験とならなければなりません。受信機さえ整備すれば、誰でも神の声を聴く事が出来るのです。神の心から人の心に確実な、正確な、適当な知らせが響いて来るのです。これが正常な祈りなのです。

人間の性質を変え、人と国とをつくり変える、精神的な迫力が必要です。あらゆるところで、あらゆる人びとに受け入れられる精神的な権威が必要です。それによつてのみ、国内的にも国際的にも混乱が終つて新しい秩序が生れるのです。

この奇蹟が世界に起るためには、どこかの国が始めなければなりません。どこかの国が神の意志に従うことをその使命とし、神に導かれた人びとを、国内でも、

外国においても、代表としなければなりません。恐怖から自由になり、野心にとらわれず、神の聖靈の導きに従う新しい指導者を作る国がなければなりません。

そのような国は国内的にも平和であるばかりか、国際間にも平和をもたらしうることができるでしょう。この国がその国になるでしょうか？

ノルウェー人の中で早くオツタスフオード・グルーブの精神をうけ入れた人に、フレデリック・ラムがいる。彼は著名な新聞記者で、アムンゼンの北極探検に随行した唯一人の新聞記者であつた。グリーンランドの漁業権に関するノルウェーとデンマークの紛争を、ヘーグの国際裁判所がデンマークに有利な判決を下して以来、彼はデンマークに対して燃えるような憎しみを抱いていた。この問題について彼の書く激烈な文章は全スカンジナビアでも有名であつた。一九三五年一月に彼はデンマークに行つた。ダーゲンス・ニューダー紙（一九三五年一月十五日付）は彼の新しい態度について次のような会見記事をのせた。

「私が先づ皆さんに云いたいことは、私の一番大きな道中は、デンマークの人びとに対する憎しみだということです。私の心はその憎しみによつて中毒していました。私は筆の力をこの憎しみを表現するために用い、しかも自分は理想主義者だといつて自己を正当づけていました。

ところがオツタスフオード・グルーブの人びとに会い、そのすばらしい生活の質に心を打たれました。……今日私は、旧敵であつたみなさんに廻りに来たのです。」

世界的解答の尖端

一九三五年七月オックスフォードで開かれた大会には、北歐諸国の多数の代表が加わり一万の人が集った。大会終了後、北歐の代表者たちは国際チームと共にデンマークへ行つた。そして六百名がデユトランドを訪問した。チームが出発する前の七月二十八日ブツタマン博士は次のような演説をした。

国際家族と共に暮したこのすばらしい一カ月間も終ろうとしている今日、私は生ける神の生みだす奇蹟の秘訣について簡潔に語りたいと思います。数百人の人たちが国へ奉仕する気持で立ち上つたのをみる時、丁度世界の混乱の解決を指し示している槍

の鋒先、矢の先のように感じられました。

一言にしていえば秘訣は、生ける神に完全に献身した個人であるといえます。

私の傍に坐つてゐる監督ビショップによつて一九二一年オックスフォード大学にこの仕事が入つたのです。また今日の会を司会した人の大学の私室で、この仕事は始まつたのです。多くの国ぐにで新しい生命が流れ始めました。

今日、私は普通の人に話したいのです。私は今七十才になる婦人のことを考えています。この人は自分の一生の仕事は終つたと思つていた人でした。——しかし、この人が得た幻を皆さんももつて頂きたいのです。この婦人は一生が終るところか、これから始まるのだと思ひついたので。それでジュネーブに行き、われわれの仲間百人を招待する手はずをととのえてくれたのです。それが始まりで力強く運動が展開しました。

二年前にオックスフォード・グループのための午餐会が、ジュネーブで開かれた時、ノルウェーの国会議長が宣言をしました。客人たちが帰ろうとしていたとき、彼は皆を呼び止めて「今日、われわれは国際連盟の議事につてゐることよりも重大なるこ

とを聞いたように思います。」と言つたのです。

彼は勇敢に行動しはじめました。その後イギリスの国会で会合があつた時、百二十五名の国会議員を前にして彼はオックスフォード・グループをノルウェーに招待したのです。

昨年（一九〇〇年）の十月、三十人がノルウェーに渡りました。人間的に考えれば言葉も習慣も知らず、知り合いも少ない三十名の外国人が、生ける神の器となつてノルウェーが今日、キリストのために燃えあがるようになるとは考えもしないことです。

はじめごろの集會に、ある監督（ビショップ）がきました。この人の二人の息子は共產主義が解答だと思つていたのですが、二人ともキリストの生きた体験をしました。今、彼らは火のように燃える人となつています。

新聞は新しい世界秩序のニュースを伝えるのに多忙です。たくさんの人たちが改変したオスローでは一流新聞が今までにない程、記事をかかげました。それはノルウェーが欲しているような良いニュースだつたのです。

運動は次にデンマークに行きました。今デュトランドには六百人の人たち（その多

くはデンマーク人です）が行つていきます。デュトランドは海戦で有名なところですが、今度は新しいニュースを聞くことでしよう。そしてデンマークがゆすぶられるだろうというのが私にきたガイダンスです。（註）

こうしたことの際にある哲理は何でしょうか？ 個人ばかりでなく、町も国も変わることができるようか？ 光がノルウェーにきました。デンマークにも、フトピアにも、エストニアにも、スエーデンにも、フィンランドにもきました。

神に支配され精神的な光のともつた国ぐにの意義を考えてごらんなさい。北欧諸国の政策が神に導かれることになつたら、ヨーロッパに何を意味するでしょうか？

これは私だけの言葉ではありません。教会の監督ビショップも、政治家も、新聞の編集者たちもいつてることです。新しい精神が、国や国民に浸透していくのを、彼らはみることができます。

正直に自分自身を振り返つてみましょう。一体何人がイエス・キリストが解答だと思つていてでしょうか？ 生ける神の靈による力強い目ざめが解答だと信じる人は何人いるでしょうか？ 政治家は時には敢てそれを口にします。ある政治家が新聞記者にい

つたことがあります。「われわれは道義的、精神的ルネッサンスを必要とする」と。新聞を通してこの言葉は全国に拡がりましたが、一向にその国には道義的にも精神的にも文明復興は起りません。

一般の人たちはどうでしょう。神に支配され、神に導かれ、神の光に輝いた普通の人たちが一つの勢力となつて住んでいる社会を変えることができるとはどうですか？ そうした時に政治家たちは調和と平和に生き、その国の議会は神に導かれるようになり、政府は神に支配されるようになるのではないのでしょうか？

こんなことがあなたの幻でしょうか？ もしそうであるなら、次の唄を歌うことができます。

力強き軍隊のごとく

神の教会は進軍す

兄弟よわれらは歩む

聖者の歩みし道を

このことはイギリスに起り得るでしょうか？ 不況にあえぐ人たちの必要を、この

グループは満すことができるでしょうか？ 神が答ででしょうか？ 丁度ノルウェーやデンマークで生ける神の靈が解答をもたらしたように、この国でもこのグループが全国を動かすことができるでしょうか？

註　ダーゲンス・ニエーダ紙のロンドン特派員ブリトケン・ベタセン氏は、デンマークにおける「オックスフォード・グループ」という著書の中に次のように書いています。

「八月に入つてオックスフォード・グループは全半島を砂嵐のように吹きまくつた。デユトランド人たちは感動しにくい人だといわれているが、何千と群をなして集まつてきた……アルクスの町では大ホールに四晩にわたつて毎晩七千人が詰めかけた。集会の終りには大寺院で大会が開かれたが、建物に入りきれない人が前庭を埋めつくした。（附録四の3参照）

一つの心・一つの意志・一つの目的

一九三五年九月、スイス連邦の大統領ルドルフ・ミンジャ氏はオツクス
フォード・グループを公式にスイスに迎えた。ジュネーブで国際連盟議長
エドワール・ベネ博士が各国代表に紹介するため午宴会を催した。十月六
日にブツクマン博士はツリーリツヒ市で次のような演説をした。

二日前、ツリーリツヒで、私はアビシニアの戦争の新聞記事を読んで考えました。「結局、キリスト教が解決の道ではないだろうか？ 正しい解答は聖霊の独裁にあるのではなからうか？ 解答はヨーロッパの精神的な総動員にあるのではなからうか？」と。この国の大統領もそうだとおっしゃいます。彼が最近いつた言葉を引用しましたよ。

う。「この矛盾から解放される道はあるだろうか？ 勇気をもつて然りと答えることが出来る。人びとを改変することの出来る新しい精神力が必要である。互に相争う危険な勢力を融和し、兄弟愛と団結とをもたらしことが出来るほどの力が必要だ、この目的を達成することを、オックスフォード・グループは使命としている。今回、スイスで活動することになつてゐるが、それは国ぐにの融合のために大きな貢献となるであらう。初期の業績を見ても、その成功は約束されてゐるのであるが、われわれはその輝かしい勝利を心から願つてゐる。」

スイスはオックスフォード・グループを心から迎えました。ただ歓迎するよりもつと大切なことをしています。それは幾千ものスイスの人びとが、その生活の中にこの精神を受入れたことです。

しかし、スイスはそれ以上の事をするとは私は信じています。

すべてに克つことのできるキリスト教をスイスに与えようと神は呼びかけています。神は新約聖書の精神で呼びかけています。「汝らは選ばれたる国民、神につける民なり、これ汝らをその妙えなるみわざに入れたまひし者の、ほまれをあらわさせん為なり、

り。

スイスが多くの国の中の予言者となり、国際家族の間に平和をつくるものとなれるのではないでしようか？ 一人びとりが神に対して責任をとることによつてキリスト教が生きた力として国の中に動き出すのではないでしようか？ スイスの教会が他の国ぐにのキリスト教徒に使節を送るほど力に満たされる事が出来るのではないでしようか？ 神に対する信仰が唯一の安全だということを、スイスの実業家が、世界の実業界の指導者に教えることも出来るのではないでしようか？ 神の導きに頼ることのみが、実際政治のあり方だということをスイスの政治家が、見せることもできるのです。またスイスの新聞が、新しい世界秩序のさきがけとしての真の使命を力強く示すことも出来ます。

一人が改変する。百万人が変わる。国が変わる。これがオックスフォード・グループのプログラムです。

オックスフォード・グループは超国家的だとある政治家が言いました。国家主義は、国を融合することができます。国家主義を超えてこそ世界を融合することができます。

それが神支配になつたとき始めて世界平和の基礎が出来るのです。

スイスの人口は四百万ですね。四百万の人びとが一つの心、一つの意志、一つの目的をもつて神に耳をかたむけ、精神的動員を行うとしたらどうでしょうか？ 全ヨーロッパが精神的動員を行つたらどうでしょうか？

一つの国が、神に献身するとき、神は何をなし得るか、世界はまつているのです。スイスがその国となるでしょうか？

北歐における奇蹟

北歐諸国におきてゐる新しい精神について、ブツクマン博士は、一九三五年十一月二十日ニューヨークのメトロポリタン・オペラ劇場で語つた博士に先立つてノルウェイ國會議長が話したが、彼は「ノルウェイでは何百何千の人びとが改変した。オックスフォード・ダルーブは、誰もが想像しえなかつた方法でデンマークをも席捲してゐる」と語つた。

ロンドンやニューヨークの本屋の店先には「ここでは起り得ない」という本が売られています。

あなた方の何人かは、ハル國務長官の語つた重要な言葉、「わが国には、道義的、

精神的なめざめが必要である」を聞いて、この本の表題と同じように「ここでは起り得ない」といつたかも知れないのです。

私が最近ロンドンを出発する前、同市の新聞に同じく國務長官のいつた大切な言葉、「アメリカが即座に必要としているのは、火と燃える使徒である」というのを読みました。途方もない言葉のように聞えますが、しかし、この国が火と燃える使徒を必要とすることが、どうして考えられないのでしょうか？

卒直にいつて現代の人たちは、精神的⁴ という言葉を恐れています。なんとなく怖いのですね。ここにおられる友人のハンブロー氏が、三十人のオックスフォード・グループのチームを海を越えてノルウェーに招待した時、どんな気持だったのか想像してごらん下さい。私もどんな気がしたか想像して下さい。

考えても下さい。言葉も習慣も知らないごく普通の人たちが行つたのです。ノルウェーで開かれた集会で話すわれわれの言葉は、一言一言全部通訳されなければならなかつたのです。このようなハンデキャップがありながらも、オックスフォード・グループの伝える思想は、その障壁を突き抜けていきました。今、ハンブロー氏が話された

ように、僅か一年余りでノルウェーはキリストのために燃えたつたのです。

どうしてそのようなことができたか考えてみましょう。ノルウェーには非常な勇氣がありました。あなた方も試してみたらその勇氣の偉大さが判るでしょう。ハンプロー氏は、百二十五人の友人を十日間、われわれと生活するために招待しました。これは大胆な行為です。

改変の奇蹟が起りました。今も二人の男について話されましたが、初めの人は著者であり有名者な不可知論でした。彼は二本のウィスキーと小説本をかかえてやつてきました。ところが、小説を読む暇もなかつたし、ウィスキーの方も忘れてしまつたそうです。彼は十日間われわれとすごして改変しました。そして彼の書いた本の中でも最も大切な本「世界的なキリスト教革命」を書きました。こうした時間がどんなにか生産的であるかわかるでしょう。

この本の題名は偉大な真理を含んでいます。すべての国が必要としているのは、世界的なキリスト教革命だと私は信じています。この男はキリスト教的革命家になりました。これが最初の奇蹟でした。

第二の奇蹟は、ある新聞の編集部員でした。彼はアムンゼンの北極探検に加わつた男です。彼はグリーンランド問題について、デンマークを憎んでいました。彼はペンを使つて躊躇することなく、ノルウェー人に対して、デンマーク人に対して、彼の感情をむき出しにして知らせました。彼は、はつきりとデンマーク人を憎むといつていました。ところが、彼がすっかり改変（チェンジ）したのです。彼がデンマークに行きラジオを通して、デンマーク人に公に謝罪するのを私は聞きました。ある男が自分が今まで憎んでいたことや、自分の間違つていたことを話すばかりでなく、それに打ち勝つたことを語る場合、どんな影響があるか考えてごらん下さい。国と国との間に全く新しい理解が生れるでしょう。

ノルウェーでは、よく人が「農民にはとてもわかるまい」といいます。（今日、アメリカで国全体の目ざめの必要を考へる場合、どうしてもアメリカの中部の農民を忘れることはできないでしょう。）この会合の時には、農民党の党首も出席していました。彼はこの新精神をノルウェーの農民に伝えるスポークスマンになりました。

ところで、デンマーク人は気持の良い土地に住む気持の良い人たちです。今度ここに

誰かデンマーク人が出席してられるなら、特にいいたいのですが、デンマーク人ほど、外国人を気持よく家に帰つたように思わせる術を心得た人を私は知りません。またデンマークの人たちは非常なユーモアをもっています。しかし、長年の間、無神論的哲学の影響下に暮してきました。だから、オックスフォード・グループなどはひやかすだろうと皆いいました。成功しても初めの一週間ですよと人はいいましたが、そうした予想を裏切つて、誰もわれわれをからかうことのできない雰囲気でした。

誰かが私に、「労働者はどうか」と聞きました。反オックスフォード・グループの会合をしようとした人たちもいましたが、コペンハーゲンの労働者で改変した人たちが行つて、自分たちの体験を話した時、その会の雰囲気を全く変えてしまいました。

新聞の見出しには「反オックスフォード・グループの会合は不成功に終る」と出ました。しかも、これは、とても相手にされまいといわれた国の話なのです。

その頃、私にきた神の導きは「デンマークはゆすぶられる」でありました。確かにあの古い国はゆすぶられました。あの国のあらゆる階層にそれが感じられます。肉屋や、パン屋や、蠟燭作りの人たちばかりでなく、インテリ層もそうです。今度もピボ

ীগの町で、裁判官や、弁護士や、インテリたちが、キリストの建設的な力の証あかしをしていました。六ヵ月前には強固な無神論者であつた人たちが、今は熱心に人を変える人となつています。

デンマークのような国で、ついこの間オックスフォード・グループの集合に、二万五千人の人びとが集つたと聞いたたら、あなたは驚きますか？ この集会を司会したのは、コペンハーゲン寺院の高僧でした。彼は最初の晩に私の通訳をしてくれた人ですが、今日、彼は火と燃える使徒です。先日彼は、デンマークの国会の開会を宣する寺院での儀式で語りました。あなた方は教会で牧師がする説教が、ニューヨークの新聞の三段抜きの見出しになるなど考えたことがありますか？ デンマークの新聞もニューヨーク価値を評価する点では、ニューヨークの新聞と似た感覚をもつていますが、この高層の説教は、三段抜きの見出しとなつたのです。

今日、コペンハーゲンから来た手紙には、その大僧正が、パリで開かれたある会合に臨んで、予言者の言葉を話したと書いてありました。アメリカの國務長官が、アメリカに必要だと言つたのは、この予言者の言葉ではないでしょうか？ この大僧正

は、デンマークで開かれた最初の集合に出席していました。今では大僧正も、高僧も、鞍造りも、肉屋も、労働者も、事業家も皆が予言者の言葉で語るのを国は聞いています。一つの国がゆすぶられているのです。このことを考えてみましょう。一人の男が改変し、百万の人が変り、そして国が変わる。

これは今、ここに集まっているあなた方の一人びとりに対する挑戦です。ただ会合に出席するだけでは足りないのです。会合を開いたところで世界は変わるものではありません。今は始まりにすぎませんが、あなた方の一人びとりが最高の挑戦に答えて下さることを私は信じています。一年前に三十人のごく普通の人が、海を渡つてノルウェーに行きました。その結果ノルウェーには光が与えられたのです。一千人の人がデンマークに行き、その国が目ざめだしたのです。(註)

スイスのことを考えてみましょう。今度私は新聞であるスイス人のことを読みました。この人は私の知っている人の中でも、最も注意深い人です。一方交通の道を横切るのにも、両側をみなければすまないといったような人です。私の先祖もスイス人です。スイス人がどんなに注意深いか知っていますが、この人がいうのには、スイ

スには、今日、単なる新しい運動ではなく、キリスト教の世界的戦線への動員がなされていくということです。これはこのスイスの指導者のいうことです。スイスでのキリスト教的戦線が始めて、やがて世界のそれになるのです。それが解答ではないでしょうか？

ヨーロッパのことを考える指導者たちは皆、ルネッサンスという言葉を考えています。それは個人にとつても国ぐにとつても、生れ変りを意味します。

行く先ざきで私は、「あの人さえ変れば」というのを聞きます。あなたも変つてほしい人を頭に浮べていることでしよう。いや五人を考えたかも知れませんが、その五人が変つたらどうでしょう？ 国ぐにが変つたらどうでしょう？ それが解答でしょうか？ 世界は今日、解答を待ち望んでいます。神の恵みによつて、解答はあります。ただはつきりしなければならぬことは、解答は人にあるのも、一国の人びとにあるのもないことです。解答は生ける神にあり、神に支配された人、神に支配された国、そして神が支配する超国家的考え方にあるのです。

ことを、次のように書いている。

「私はオツクスフオード・グループと三回デンマークに行つたが、そこで見たことを通して、これが単に個人の道義的生れ處り、心理的解放であるばかりでなく、一国の経済問題や政治問題にも影響を与える国家大のものであることを知つた。第一回目の時には、約二十カ国の人たちがデンマークに行つた。第二回目には、その前の年に改変したデンマーク人たちが、責任の半分を担つていた。第三回目には、もうデンマーク人自らが中心となつて動いていた。僅か一年にしてデンマーク人自らが指導する国家的運動になつたのである。」

一番よい出発点

デンマークにオックスフォード・グループが来てから一年後の一九三六年のイースター（復活祭）を中心に、オララツプ（註）で開かれた全国大会には一万五千の人が集った。復活祭の日曜日にフランク・ブツクマンは次の演説をした。

すべての人が相手に変わってもらいたいと思つています。すべての国は相手の国に変わってもらいたいと思つています。しかし、みんな相手が始めるのを待つています。オックスフォード・グループは現代の世界に対して本当の解答を得たいと望むなら、一番よい出発点は、自分だということです。これこそが最初の、そしてまた根本的な必

要であります。

誰でも道義的、精神的な目ざめの必要を認めています。利己主義と恐れとは、あらゆる人びとと、国ぐくに満ちています。一人が本当に変われば、百万人が変わるのです。そして国が変わるのです。

デンマークが僅か一年の間にやつたことを見てごらん下さい。秘訣は神の支配です。正気を失つているこの世界で、正気な人は、神に支配されている人びとだけです。神に支配された個人が集つてはじめて神に支配された国民が出来ます。これがオックスフォード・グループの目的です。

真の愛国者は、自分の国を神支配にするため生涯を捧げる人です。神の支配に反対する者は国民の敵です。神に支配された国は武器による軍備に加えて、人を変えることの出来る人びとを持ち、国防に加えて隣接する国ぐくにの尊敬と感謝とをかち得るでしょう。そのような国は精神の力こそ、世界で最も偉大な力であることを実証する国です。

世界平和は、神の支配を受け入れた国ぐにによつてはじめて実現するのです。誰で

も神に聴くことが出来ます。あなたもできれば、私にもできます。誰もが役割をもつことが出来ます。あなたはその一人でしょうか？ あなたの国がその国になるでしょうか？

註　ベルリンゲケ・ナテンデ紙は一九三六年四月十三日に次の記事をのせた。

「今朝、われわれは集會に集まる人たちを驚越しに眺めていた。その人たちは典型的なデンマーク人で新聞には名前のることもない人たちだった。デンマークの旗が真になびいていく目的地に向つて一つの目的をもつたこれらの群衆の流れは忘れることのできない眺めであった。この人たちは只、偶然に集まつた人たちでなく進軍する軍隊を思わせた。……昨年の復活祭に数名のデンマーク人たちが、變わる決意を語つたのだが、今年の復活祭には、その決意を日々の生活に、仕事の中に実践した数千名の人たちが集まつたのだ。」

目ざめよアメリカ!

一九三六年六月、アメリカ、マサチューセッツ州ストツクブリッジで開かれた全国大会には、アメリカ各地及びカナダから五千人が集まった。この大会は、一九三二年および三四年にブツクマン博士が、二十五カ国の人びとを連れてアメリカ全国に働きかけた仕事の集結である。

ブツクマン博士は六月四日に大西洋を越えてイギリスへ次の放送を行った。

イギリスにある私の友だちが、私への誕生日の贈り物として、この大西洋横断放送ができるようにして下さったご親切とご配慮とに深く感動しています。この調子でいくと、来年の今日はラジオをとおして、誕生日のケーキを食べ合うことだつてできる

よくなるかもしれませぬ。今、私は静かなストックブリッジ村の、青々とした芝生からみなさんにお話ししています。この村は、自由を愛好するニュー・イングランドのこもり老樹の茂つたパークシャーの丘陵地帯のまんなかにあります。数日前のことでしたが、堂々たる櫛の並木や、ゆたかな芝生——人道から白や赤で塗られた旧時代の家々の玄関までつづく、ゆたかな芝生を両側に控えた目ぬき通りを、歴史的仮装行列が進んで来ました。先頭に進んだのは、美しく着飾つたストックブリッジ・インデアンの酋長ウム・バ・ツースでした。彼はインデアンの間では、王家の嫡流で、白人がやつて来るまで何世紀もの長い間、彼の租先は、このあたりの丘陵を跋涉していたのであります。彼はいわゆる最後のモヒーカン（最後のアメリカ・インデアン土人という意味）というわけであります。それにつづいたのはジョン・ナサン・エドワーズでした。有名な説教者で、今日ではプリンストン大学という名になつている学校の初代校長をつとめた人物です。彼は初めてストックブリッジのインデアンにキリスト教を説いたジョン・サージャントと一緒に古色蒼然たる駅馬車に乗つていました。その次が例の幌馬車ハット・ト・ワゴンに乗つて西部から帰つて来たバイオニアの一群でした。太平洋沿岸から三

千マイルの長途を踏破して帰つて来た何百人というものを表わしたつもりです。イギリスの将官とアメリカの将官とが肩をならべて歩いていました。それらにつづいて諸国の兵隊がきました。それから近隣の町や田園から集つた商人や労働者の大集団、最後に村の青年たちが四十八州のそれぞれの州旗と、われわれとともに今日アメリカにおいて働いている人たちの祖国の旗をかざして行進しました。

ストックブリッジ村はイギリスとのつながりをもつています。サイラス・フィールドが、初めてイギリスからアメリカに送つた電信を受取つた古い宿舎に面した四ツ角のところには、今でも緑色の鎧戸をもつた旧時代の白塗りの木造家屋が立っています。ヴィクトリア女皇から送られた、その最初の電信は「何という驚異を神はなされたことぞ！」というのでありました。科学の驚異は今週オックスフォード・グループのメッセージ、キリスト教の復活のメッセージをアメリカにもたらしました。一九三六年の今日、地球の果てまで及ぶメッセージは「アメリカよ、目ざめよ」というのであります。

一七七五年のある四月の夜でした。ポール、レヴィイはマサッチュセッツの町々

村々を馬で、のりまわして住民を呼び起しました。(アメリカ独立戦争の契機なとつた事件) 当時義勇兵である行動隊は直ちにそれに呼応しました。先週、この同じ村々や町々の上空を、今様ポール・レヴィーヤが「目ざめよアメリカ、オックスフォード・グループ、ストックブリッジ」と書いた吹き流しを引きながら飛行機で飛びまわりました。ポール・レヴィーヤは民衆を奮いたたせた革命の先駆者でした。今様ポール・レヴィーヤは世界を融合すべき精神的革命の鼓吹者であります。

アラスカからニュー・メキシコに、コペンハーゲンから上海に、陸を越え、海を越え空を越えて、妄想と混沌と混乱とを解決するものとして、この現代的大行列は行進します。パーテンダーも銀行家も、すゝりも貴族も、就業者も失業者も、ストックブリッジとその近辺の町村に開かれてあるオックスフォード・グループ全国大会の八つのハウス・パーティーの中に会同しているのであります。ハウス・パーティーの一つは天幕都市の形をとっております。四百名のカナダ人は無防備の国境を越えて参会しましたが、只今、私がお話しているこの集りの面倒を見ているのは彼らです。

カナダ人は何のためにここへ来たと思えますか？

オックスフォード・グループは世界再造を目的とするキリスト教の革命であります。今日、世界における根本問題は、個人や国の中にある不正直、利己主義および恐怖心であります。これらの悪は重なりあつて離婚とか、犯罪とか、失業とか、頻発する不景気とか、戦争とかいう結果を産み出すのであります。数限りもない家庭内に斗争が行われているとき、どうして一国内において、あるいは国際間に平和を期待することができましようか？ 精神的回復は経済的回復に先行しなければなりません。これらの根本問題を処理しない政治的、または社会的解決は決して十分といふことはできません。人によつてつくられた法律は人格の代用物となることはできません。われわれの目前の必要事は道義と精神の覚醒であります。人間の知恵だけではそれを達成することはできません。神が個人を支配するときのみ可能となります。

この支配を通じて、人は不安定と恐怖に悩まされる世にあつて、真の自由を発見するのです。途方にくれた時代にあつて創造的意図を発見するのです。道義頹廢の内にあつて新しい道義力を発見するのです。互いに衝突する利害関係の世界の中で、神にしたがふことによつて、人びとは協力することを学びます。人びとが理解し合うこ

とによつて新しい外交が可能となり、政治家は永続的な結果を得ることができません。全人類の自由のために各国が共同して働く時には新しい信頼関係が生れます。

真の愛国者は、自分の国を神支配にするためには生活を捧げる人です。神が支配権をもつたとき、国ぐにはその真の使命を発見します。神に支配される国のみが、世界を正気と平和とに導くことができます。

けれども、誰でもが相手の人、相手の国がまず始めるのを待つています。解答はわれわれの中に、そしてわれわれの国の中に起る目ざめにあるのです。

世界中のごく普通の人々が神の支配に服従することを学んでいます。彼らは新しい質をもつた指導者を要求する新らしい世論をつくつています。そのような指導力は神の導きを日々体験する人たちのもつ権威から出てきます。

世界のいろいろの問題は、そこに住む人びとを反映します。人間を造り変えてごらんなさい。国も造り変えられます。

もはやぐずぐずしてはおられません。悪の勢力は、結婚の神聖や家庭の安定をさえも脅かしています。家庭が崩壊すれば、国家も崩壊します。あなたも私もこれについ

それぞれ責任があります。オックスフォード・グループの挑戦は、決意をすることです。神に聴くこと、そして行動することです。人が聴くとき神は語ります。誰でも神に聴くことはできません。誰でもその場所で始めることができます。

神はアメリカを支配するだろうか

一九三六年は、アメリカにとって総選挙の年であつた。ウオルター・ロツクという新聞評論家が、六月十三日付のデイトン・ニューズ紙に次のように書いた。

「フランク・ブツクマンは、あたかも電報でも受けるように神からの命令をはつきりと受ける人達によつて、国の政治を行おうとしている。その人たちは、聖書の言葉にある『かく神は云えり』という靈感で、神の言葉を聴き、かつ語る人たちである……ここに戦争や人種問題や階級斗争の問題、さらに個人生活をいかに幸福になし得るかの問題に対する解答があると、ブツクマン博士はいう。すなわち神の意志が行われるところに解答があるというのだ。」

次の演説は一九三六年六月十九日フィラデルフィヤから放送されたものである。

あなた方はアメリカの真の安全がどこにあるかを考えたことがありますか？ アメリカの安全は神の支配をうけることにあるのです。

神に支配される個人、神に支配される家庭、神に支配される学校、神に支配される産業、神に支配される政治、神に支配される国々に、このことはみな神の命令をうけることを意味します。

ある皿洗いをしている人が、先日雇主にいいました。「私は飢えています。」雇主は意外に思つて、「どうしたというのだ、食いものが足りないというのかい？」とたずねました。すると皿洗いは、「いいえ、たべ物は十分なのですが、私は神に飢えているのです。どうも神さまが足りません」といいました。「なるほど、そういわれて見ると、わしにも神さまが足りないかもしれない」と雇主も気がつきました。

われわれが国として必要とするものは、人間として神を受け入れることです。われわれが国として最も必要としているものは道義的復活です。人を神から、また他の人

びとから隔てている障壁を打ちやぶらねばなりません。

われわれの多くは、相手が正直になるべきだと信じています。少なくともわれわれは「他の人が正直であつてほしい」という点では一致します。あなた方が相手にそれをひどく切望しているうちに、自分も感染してしまいかも知れません。相手に強く望むあまり、ある朝、目がさめて見ると、自分もいく分正直になろうとするのを発見するかも知れません。誰でも正直、純潔、無私、愛が望ましいと思つています。ただし相手に向つてです。さらに相手の党にもそうあつてほしいと考えるものがあるかも知れません。しかし、オックスフォード・グループはそれ以上です。自分が、自党が、まず始めたらよいと信ずるのです。

先日、私はオックスフォード・グループについて、ある黒人と話し会いました。彼は、「みながやるなら実に素晴らしい考えだ」といいました。そのとおりです。彼は要領をつかんだのです。われわれは、こぞつてやらねばならないのです。

今日、精神的な回復を計るには、どれほどはつきりとした計画と代償とが必要であるかを知っている人は、ほとんどいないようです。神の支配の下に、団結と規律のあ

る行動をすることこそ、それを実現するに必要なものであるということを十分考えた様子がありません。ひどいになると、自分は代償を払わずに、他人に種をまかしておいて収穫だけを得ようとするものさえあります。

幸いにも、代償を払う人の数は何年もの間にふえて来て、今日その影響は五十カ国に及んでいます。また幸いにも、何が必要かを口にするだけでなく、解決の道を指し示す政治家もでてきました。そうした政治家の一人はソールスベリ侯爵で、最近、イギリス上院でオックスフォード・グループについて次のように述べました。

「世界の現状は経済的原因からでなく、道義的原因から生れたものである。悪の核心はそこにある。われわれのもつべき宗教が欠けていることに問題がある。この国および他の国ぐにおいて、現に発展している一つの大きな運動が常に用いる表現を借りていえば、われわれに必要なのは神に導かれる人びとである。これは神に導かれる国民をつくり、新しい世界をつくるのである。経済的調節をしようとする考え方はどれも、みなあまりに小さく、悪の核心にふれることができない。」

ノルウェーの下院議長も、そうした政治家の一人です。彼は最近、ニューヨークで

著名な評論家ローエル・トマス氏とのラジオ・インタビューでこういいました。

「今日、ヨーロッパの政治家たちの間には、在来の手段を基礎として実現される解決は、よくいつても一時的のものでしかない、との信念が強まりつつある。われわれヨーロッパの政治家の多くは、昨年中、オックスフォード・グループの仕事に接触して、国際的危機に対する恒久性をもつた解決の新しい希望がそこにあることを感じた。」

またニュージーランドの首相や、中国の財務長官もそうした政治家であります。サウジ首相は「オックスフォード・グループの中に真の政策を見出す」といい、中国蔵相孔博士がアディントン卿に送つた電報は、先週、上院における同卿の演説に引用されました。それはこういうものであります。

「世界は今日、混沌と、頹廢と、解体の状態にある。人が利己主義と、嫉妬と、物質主義とに支配されているからである。オックスフォード・グループは絶対の愛と、正直と、純潔と、無私という四つの原則を唱えている。それは地理的区分や、人種的差別や、党派的确執や、階級斗争を超越した運動である。私はこの運動の原理と規律

とが、世界の人びとを、よりよい新しい社会秩序をつくるために最も必要で、共通の道義的、精神的目ざめを通して結合させるものだと思ふ。神の靈感と導きのみが、人間の性質を変え、個人をも、国ぐにをも和解せしめ、そうして地には平和、人には善意を与えることができるのである。」

今は選挙運動が進行中であり、問題をとりちがえないことが大切であります。最も大きな選挙の問題は、われわれが神を、個人生活にも、国家生活にも指針として選びだすであろうかどうか、ということにあります。ある著名な評論家の言葉を借りていえば、「選挙する人と政綱と立候補者もいづれも神を受け入れれば、他のすべてはそれに従つて来るであろう」ということです。

アメリカの選挙民が、来るべき投票日にとくと考慮に入れねばならぬ存在は、神であります。真の問題は、「神はアメリカを支配するであろうか」ということなのです。

われわれの国は、あたかも電報でも受取るように、神からはつきりした命令を受けて、それをよく理解する人たちによつて治められねばなりません。それが本当の生け

る神の支配であつて、他のすべての独裁に対する解答なのです。それが本当の愛国主義です。本当の愛国者は自国の復活のために命を献ずるものです。

ここまでくると、あなた方は、有名な政界の指導者の次の言葉の意味がわかり始めるでしょう。

「オックスフォード・グループは政治に関係はない。しかし、それが関係しない政治の面というものはない。神は政治綱領ばかりでなく、政治家をも導くから、オックスフォード・グループは、政治のあらゆる面の革命となる。」神に立ち帰り、そして新しい世界秩序に向つて進みましょう。世界救済の唯一の希望は、巨大な規模において直ちに始めることです。

神はその計画を実現するために一人残らずのアリメカ人を協力者として、必要としています。国家的回復と復活とは、われわれが神とともに働く、完全な責任を受け入れるときに成就するでしょう。アメリカは、神の支配による新しい世界秩序を創造するために、その任務を果す用意がなくてはなりません。

アメリカの安全は神に支配されることです。偉大な国としての使命は、あなた方や、

私がどのような人間であるかにかかっています。「神は私に何をさせようと欲するか」これが現代の、またいつの時代においても問題なのです。出発点はあなた方自身です。始める時は今です。

どうやって聴くか

一九三六年七月二十六日、バーミンガム市の金英工業博覧会ビルで行われた全国大会に集った二万五千の人びとを前にして、ブツクマン博士は次の演説をした。サンデイ・グラフィック誌の表現によると、イギリスのパツタボーンともいふべき各界の人びとがブツクマン博士と一緒に話した。

到るところの指導者たちが世界は道義的精神的な目ざめを必要としているといっています。大学でも、政界でも、実業界でも、世界各国の大使館でもそういつています。沢山の人びとがいつています。ある人びとは非常に印象的な言葉でいつていますが、いづれも単なる言葉にすぎません。

問題はどうかしたらよいかです。口でいうことと、それを実現することとはちがいます。精神的な目覚めが必要だと感じている大方の人びとは、私が二十年前に直面した困難と同じものに直面しているようです。どうかしたらそれを実現できるかということ、国を動かすようになるために必要な多くの規律ある人びとを、どうかしたらつくり出せるかということ、です。

どうかしたらよいかわからない時、神に聴けば、道が示されるということを私は知っています。人が聴く時、神は語ります。人が従う時、神は働くのです。秘訣は神の支配にあります。われわれが神に命令するのではなく、神の命令に従うのです。そうすれば神は示して下さいます。

世界が最も必要としていることは神に聴く道を学ぶことです。

私が国際会議に出席していた時、ある將軍から人間の絵のかいてある葉書をもらったことがあります。その絵の下に、「神は人間に二つの耳と一つの口を与えて下さった。なぜ話す二倍聞かないのか」と書いてありました。これは、誰でも毎日出来ることです。毎日、神にきき、その計画を神から受けることです。

歴史を通じて予言者は神から与えられた考えによつて行動をしてきました。今、アメリカに一番必要なのは、そうした予言者のなものだと國務長官もいつています。世界に必要なのは、近代の予言者アモスであると彼はいつたのです。アモスを覚えていますか？ 彼の国に飢饉がおそつているとき、その飢饉は水や食物のそれではなく、神の言葉をきかない飢饉だといつた人です。ハル國務長官がこれと同じ飢饉が現在、世界をおそつているといわれたのは真実だと思います。

誰でも神の言葉をきくことができます。法則に従いさえすればきけるのです。第一の法則は心に示されるすべてのことを正直にきくことです。賢明な道はそれを書きつけることです。第二の法則は、心に浮ぶ考えの中で、どれが神からのものであるかをためすことです。

ためす一つの方法として聖書があります。聖書には幾世紀にもわたつて、神の導きに従つて神と共に生きる実験をした人びとの経験が記されています。その最も徹底したイエス・キリストの生活の中にわれわれは最高の精神的、道義的の挑戦、すなわち完全な正直、純潔、無私、愛を見ることができます。

もう一つの良い方法は「同じように神に聴く生活をしている他の人びとはどう思うか」を聴くということです。このことはわれわれの仲間の不文律です。これはまた自分がどれだけ神に従おうとしているかを試すよい方法です。一人だけで働く人は、決して神支配に徹することは出来ません。

神にきく意志をもつた一団の人びとに神は最もはつきりと語ります。神支配の人びとを通じて神はいつの日か世界を支配せねばなりません。

革命をいやすための革命

一九三六年八月九日、イギリスからの対米放送

私は、革命が起つているといふ報道が刻々に入つてきているヨーロッパから、あなた方に話しております。もしあなた方が望むなら、これから十五分間に、革命にどうしたら参加できるかを学ぶことができます。情熱を癒やすには、情熱をもつてせねばなりません。一つの革命をいやすには、別の革命をもつてせねばなりません。革命に対するオックスフォード・グループの答は、より以上に革命的であれということです。すなわち人間の性質の革命をします。それがわれわれの唯一の希望であります。

一体オックスフォード・グループとは何でしょうか？　そうですね、ある新聞記者はこんなふうに書きました。

それは制度でもなければ

ただの見解でもない、

君自身の中にはじまる革命だ。

ではひとつ、パーミンガム英帝国産業博覧会の建物内で行われた、オックスフォード・グループの展示会の模様を話しましょう。この建物は、屋根のあるホールとしては全欧最大のもので、英帝国の物産陳列場に使われています。この週末に大きなことが起りました。三十五カ国から多くの人びとが来しました。オランダ一国からだけでも五百人参りました。

今は軍隊の行進する足音が、全ヨーロッパにこだましています。しかし、別の新しい動員に比べて、千名以上の青年が行進する姿に対して、あの大観衆が呼応したさまを想像して下さい。

オックスフォード・グループの動員とは何でしょうか？　行進してどこへ行くのですし

ようか？ 何故行進するのですか？ 物質主義革命の時代に、彼らは精神の革命のために動員されているのです。戦争に動員されるのではなく、同じように重要な道義の戦いに動員されているのです。

世界中の国々には、今日、伝統を失い、品格を失い、国としての誇りを失つて、どこへ行つたらよいのかわからなくなつてしまつたような有様です。われわれの多くは、事態が急速に移り行く、そのあわただしさにさえも、盲目になつてゐるのです。

われわれにとつて本当の問題は何でしょうか？ 諸君はみな早魃というものをご存じでしょう。われわれは今日、精神的早魃に悩んでゐるのです。恐怖と貪欲とは、塵風のように諸国を覆うて、民衆を盲目にし、窒息させています。それは人と人を争せさせ階級と階級とを斗争せしめ、国と国とを斗わせませす。

スペインの戦争をごらん下さい。どちらが勝つにせよ、人間的な問題はあとに残ります。戦争は猜疑、嫉視、欲望、恐怖に対する解決にはなりません。もし、われわれが本当に大切なものから離れてしまえば、戦争に勝つても解決はありません。選挙運動も同じです。国家の問題にも、世界の問題にも、根本の問題、すなわち人間の性質

というものが未解決のまま残されるから、何の変化も起るはずがありません。われわれが人間の性質を国全体として徹底的に、容赦なく処理するまでは、各国は依然として暴力と破壊への歴史的道程を歩まねばならないでしょう。

三千マイルの大洋を隔てようともこの根本問題に変わりはありません。われわれが、その解決に失敗すれば、大洋はわれわれを救つてはくれないうでしょう。ヨーロッパとアメリカでは症状はちがつても、病患は同じです。ではその病患とは何ですか？ 恐怖と不正直と、怨恨と、利己主義ではないでしょうか？ われわれは自由に自由を口にしますが、本当は自己の奴隷になつてゐるのです。

今日考へうる二つの道は、崩壊か、神の支配かどちらかです。しかも崩壊は、われわれ全体の利己主義の結果に他ならぬのであります。崩壊か神の支配か？ もし、あなたがたと私とが利己主義ならば、病患の一部です。それと同様に、もし、あなたがたと私とが、神に支配されれば、癒しの一部となれるのです。

オックスフォード・グループは神の支配のための革命であり、神が本当にあなたがたとあなたがたの国とを導くことです。何ものかに導かれない人はありません。あな

たがたは何によつて導かれていますか？ 欲望ですか？ それとも財布ですか？ 恐れですか？ 妻ですか？ 夫ですか？ あるいは隣人の思惑ですか？ もし、あなたがたを導くものが、あなたがた自身の利己的計画だつたならば、あなたがたは自国の敵です。

神は世界を創造したが、人間はそれ以来、自分で世界を運営しようとして来ました。そのことは、終らなければなりません。あなたがたはウィル・ロージャースがよくいつたことを覚えておきましょう。彼は「神は人間を、天使よりはいくらか下のものにつくつた。ところが、それ以来、人間は自から更に下のものになろうとしてきた」といつたのです。しかし、今や新たな時代が始まりました。そこでは神に優先権があります。

われわれに必要なものは、押し寄せて来る物質主義の諸勢力を、押し返すための全世界にわたるキリスト的な戦線です。われわれは教会が焼かれていることを耳にするのが、教会の焼かれることに対する唯一の答は、火のごとくに燃え上つた教会です。

能率の神さまでは不十分です。ただの善意と、よい行いでは、問題の核心をつきま

せん。理想主義は成功しませんでした。事実、永続性のある社会のおよび経済的回復は、ただ道義的、精神的回復を基礎とする以外にはあり得ないのです。

あなたと私が、百パーセント神に導かれ、神に支配されなにかぎり、混乱を起す手伝いをしているのです。なまぬるい人は、実際は混乱を起す助けをしているのです。各国の運命は、あなたがたと私とが、神に支配されるかどうかにかかっています。

新しい光が世界に來なければなりません。私は電燈を發明した人を知っています。その人のつくつた最初の電球は、ヘンリー・フォード氏がデイヤボーンの実験室に大切に保存していますから、今日でも見ることが出来ます。誰でも発電所との接続さえできれば、電燈をつけることができます。神との接続をもつことも、それと同じく實際的です。偉大な科学者スタインメッツが、次の大発見は精神の領域において見られるであろうといったのは、このことを予見したからです。接続さえ確かならば、神はわれわれに光りを与えます。

必要なことは、全世界にわたつて国を越えてあらゆる処の、あらゆる状態で、あらゆる人が生きた電線の網を張りめぐらさねばなりません。多くの人は、一人の偉大な

指導者の出現を待つておりますが、オックスフォード・グループは、それは一人の人によつてなされるのではなく、神の導きの下に、ともに働くことを覚えた人びとのグループを通してなされるべきであると信ずるのであります。

オックスフォード・グループは、神と接触したとき、平凡な人にも非凡なことができるかと信ずるのです。

神は人の心に考えを注入することができます。あなたがたは、その考えを聴こうとしたことがありますか？「あなただがたは、紙と鉛筆をもつて、自分に与えられるそうした考えを書きとめようと試みたことがありますか？ それは、ありふれた考えのように思われるかもしれませんが、正直にそれを考えてごらん下さい。そうすれば、今まで知らなかつた自分の姿を見出せるでしょう。絶対の正直、絶対の純潔、絶対の無私、絶対の愛。それはキリストの標準でありますが、あなたがたの標準となつていますか？ そうするとき、過去の間違いを正さなければならぬでしょう。私自身は、そうしなければなりませんでした。私は、まず手初めに六人の人に手紙を書いて、私どもの間にあつた悪感情は、みな、私の過ちによるもので、彼らの過ちでないことを

認めました。それから、私は真実に人びとの助けとなることができようになりました。忘れてはいけませんよ——もしあなたがたが世界に正しくなれと望むならば、自分自身が正しくならねばなりません。

神の支配は、革命に対する答であるばかりでなく、革命の最中にあつても答となるのです。ごく、最近、私は実際の革命戦争にぶつかりましたが、当局が最も危いといつた場所に、とどまつて動くなという直接の命令を神から与えられました。私はそこにとどまりました。助かろうとして逃げた人たちはほとんど命を失わなければならないにありました。私と友人とは全く安全でした。

世界の安全、アメリカの安全、あなたがたの安全、あなたがたの家庭の安全は神の支配にあります。

知能だけでは不十分です。効果のあるのは、服従だけです。神への服従です。アメリカもカナダも、服従することを学ばねばなりません。

神は古えの予言者には語りました。あなたがたにも語るでしょう。神は聴く人に語り、従う人を通して働きます。

もしあなたがたが、明日の朝、少し早目に起きて、神に聴こうと試みたらどうでしょう。家族のものにも聴くようにさせたらどうですか？ 各家庭に精神のラジオ受信機を備えつけたらどうでしょう。われわれは毎日聴くことができます。そうしてきいたことに従うならば、われわれが力を合せて、キリストの十字架によつて世界を一変する未曾有の大革命をもたらせることも考えられます。

国ぐにの使命

一九三七年十一月、ライオン・タイム「濃縮」というオックスフォード・グループの写真雑誌にのせられた宣言文

科学の奇蹟によつて、人はラジオを通して、数百万の人びとに話しかけることができます。

精神の奇蹟を通して、神はすべての人に語るすることができます。神の声はすべての家庭、すべての事業、すべての政府が聞くことができます。

人がきくとき、神は語り

人が従うとき、神は働く

あなたが誰であろうと、何処にいようと問題ではありません。適確で十分な情報が神の心から、神の意志に従おうとする人の心に伝わることができます。

これは人間の性質を変え、人びと及び国ぐにを変えることによつて革命を終らせる革命です。

人びとは、指導者が神に導かれるべきだと思っています。しかし、一般の人も導かれねばなりません。神に導かれた世論は指導者を力づけることができます。このことが人びとが必要とする規律と、人びとが望む心の自由を与える神の生きた霊の支配です。

あなたの安全も、世界の安全も、神が支配することにあります。どんな社会的、経済的、政治的解決案も人間の性質の内にある病源をつかないから解答にはなりません。神によつて導かれた人だけが、神に支配された新しい世界の土台となる国をつくり得るのです。

この仕事にはすべての人が役割を持ち、すべての国がその使命を見出しうるのです。

附 錄

一 ブックマン博士を描く

1 初期の頃

ハロルド・ベグビー著「生活を改変する人びと」(一九二三年発行)より

イギリスばかりでなく、各国の大学内で、ここ四、五年興味深い仕事か、静かに、人目に立たずになされている。その性質上、多くの国の宗教家の注意を引いているこの仕事は、主としてある一人の男の活動によるものである。数年前に、私はこの男に会つた……彼と私とは友達になり、文通をしたり、ときには会つてこの仕事の発展について語り合つてもいる。一九二二年の夏、私は大西洋の兩岸の大学生たちが集る集會に招待されて行つてみた。

そこであつた人々の中には、非常に勝れた頭腦の持ち主もいたし、なかには素晴

しい運動選手もいたが、例外なく謙遜で、こちらがまが悪いくらい正直なこの人たちのおかげで、私の興味は再びもえ上つた。この人たちは、英米の最もよい青年という以上に、人類の精神生活をのせて航海する船の行手を、脅やかす物質主義という嵐をのりきるためには、頼らなければ、どうにもならないだろうと思われる優れた人たちである。この人たちを改変させ、さらに他の人を改変するように導いた人は相当重要な人だと思わずにはいられなくなる。その意味で、私はこの男を新しい興味と尊敬の念をもつて見たのだ……。

彼は現在、この仕事に力を注いでいる。将来五十年にわたつて、英語を話す国民に相当な影響を与えろと思われろ人びとの中に、宗教に対する新しい知識が拡がつていると彼は信じている。

2 いかにして始まつたか

A・J・ラッセル著「ただ御人のために」(一九三二年出版)より

フランク自身がどのようにして改変オエシしたかをハロルド・ベグビーは著書、「生活を改変する人たち」に書いているが、これは非常に面白く示唆に富んだ話である。フランクという人は、本で読んで見ても実際につきあつて見ても、益々好きになるといつた人物だ。会つたあとで、何かの理由で会わなければよかつたと思うこともあるだろう。しかし、その理由を取り除いて見ると、フランクだけがあとに残つていて、精神的敗北から勝利を得たという経験をするだろう……

ベグビーは著書の中で、フランクの求めるままに、F・B、という匿名を用いる……「体つきにも、デヌスチュアにも、一定の機敏さが見られる。決して打ちしおれることはなく、だらしなく前かがみになるといふようなこともない。彼は夜中であろう

が、あけ方であろうが、いつでも朝飯にくる時のような新鮮で機敏な眼ざしをもち、運動家のように真直ぐに背をはつてゐる。彼のようにおだやかで、静かな人で、彼はど深い幸福感を人びとに伝染させる力を持つ人も少ない。」

きびきびしたなまりが印象的だが、会話のときにとくに目立つ。声は低いが、力強く、友情にみちたひびきをもちユーモアにとんでゐる。これは彼の動作にも見受けられる。彼に会つてゐると、心の暖かい、深い幸福感にみちた人で、肉体的に疲れることも、精神的に退屈することも知らない人という印象を受ける。」

さらに、この著者は、フランクについて、気のきいた描写をつづけている。「ピックリウィック氏に息子があるとしたら、そして彼が少年時代にアメリカに移住したとしたら、恐らくやさしくて人なつこい、この心の外科医に似ていたであろう。もつと深くF・B氏を知るようになる、一見少年らしい陽気さをもつてゐるこの人は、プロチヌスからトルストイにいたる神秘家の血統を引いてゐることが分るだろう。」

フランクの生涯にはいくつかの岐路があつた。その第一は、フィラデルフィアのマウント・エイリー神学校にゐる時、同僚の学生が彼のことを野心的だとなじつたときに

始まる。この非難は彼の心を強く打った。その結果、彼は卒業後、最初に働く場所として、フィラデルフィアでも最もやりにくい土地を志願した。最初に赴任してゆく教会からの招待がふるつている。「給料の件については、今のところ明記できず」と書いてあつた。というのははまだ存在しない教会のための献金はわずか十七ドルで、しかも一銭銅貨が主であるから、当分定給は出すことができないというのだ。しかし、町角の店を提供してくれる人があつて、フランクの元気あふれる努力の結果、時を出して立派な教会になつて行つた……

間もなく青少年のためのセツルメントが出来、やがて他の市でも同様のことがいくつも出来るようになった……

このセツルメントで青少年を相手に働いているうちに、フランクは大人の扱い方を学んだのだ。特にかんしやくをおこしてはならないことを学んだ。フランクは小さい子供から決して人の欠点を笑つてはいけないことを学んだ（そういう自分も同じようにおかしいのだ。）日曜の朝早く、少年たちを起すフランクの秘訣は、叱ることではなく、「九時にパンケーキを食卓に出すよ」と宣言することだつた。その後は、時

間より早く来る子はいても、おくれる子は一人もいなかった……

そのうちに問題がおこつた。このセツルメントの運営は、牧師と一般人の委員会にまかされていたが、五年たつてから委員会とフランクの間に意見の衝突がおこつた。このことはフランクの生涯で第二の事件で、オックスフォード・グループの始まりともなつた。世話する青少年の数が多く、彼らの空腹を満たすには、予算内では賄えなかつた。委員会はフランクに減食を要求した。オリバー・トイストの精神に燃えるフランクは、その命令を恨み、この点において彼を支配していた六人の委員に悪感情を抱いた。

フランクはいう、「ここで私は失敗したのです。委員の人たちのやり方が間違つていると私はいいました。しかし、考えてみると私は自分の仕事を偶像化してしまいました。私の考えは正しかつたが、悪感情を抱いたことが間違つていたのです。仕事をしすぎで健康を害していたので、私は海外旅行にでました。その途中、思い思いが馬に乗つて私を追いかけてくるような気がしました。馬の蹄の音を聞き、馬の鼻息を首すじに感じる思いがしました。

イタリアを始め、ヨーロッパ大陸の各地を旅行したのち、イギリスへ戻つて湖水地方にあるケスウィックの町へきました。そこでは宗教大会が行われていました。そこであることが起つたのです、そのことに対して、私は常に感謝しているのです。」

村の小さい教会、会衆も少なかつた。

午後の事で、特別集会がもたれ、話し手はこともあろうに女だつたし、雷もならず、稲妻も光らず、雲もなく、不思議な声も聞こえてはこなかつた。フランクを含めて僅か十七人の会衆に向つてこの婦人は直截的で座談的な話をしていた。この婦人伝導師は罪人と世界の総ての罪を完全に贖つたキリストの十字架について語つていた。

「この教義は私も子供の頃から知つていました。私の教会もそれを信じ、私も教えられたことですが、その日以来、私にとつて偉大なる現実となりました。その小さい教会に入つたときの私は傲りと利己心の悪感情のとりこになつていたために、私の心は分裂していました。そのためキリスト教の牧師としての私は無力でした。その婦人の簡単な話が、私に十字架の意味をはつきり知らせてくれました。突如として十字架にかかつたキリストの姿が目に見えました。」

キリストを通じて神の愛が、私と神とを隔てていた溝に橋をかけてくれた深い体験をしました。新しい生命の体験を感じ、この経験を人に分ちたい気持ちで家に帰りました。そこで私は悪感情を抱いていた六人の委員の人たちに手紙に自分の体験をかき、十字架の下にあつては自分の罪だけしか考えられなかつたことを伝えました。一つ一つの手紙の上に次の讃美歌の一節をかいたのです。

栄光の御子の給いし

奇しき十字架みあげれば

富も榮譽もすべて捧げ

傲りの心をさげすまん

親愛なる友人よ、私はあなたに悪感情を抱きました。お許し下さい。そしてフランスと署名しました。」

「この新しい体験は私が国に帰つてから、さらに効果を表わしました。クリスマス朝、教会にいつた私は、最もけしからんと思つていた相手にバッタリと会いました。彼は頭がはげていて委員会の席上で彼の前に座るとき私は、彼の禿頭に I (自我) の

字が一杯書かれていゝと思つたものでした。その朝、地には平和、すべてに善意といふクリスマス精神が私の心にみなぎつていたためでしょう。私はその禿にすら気がつかなくなつたのです。そしてごく自然にかつては敵対視していたこの人に心から、クリスマスおめでとう、といひました。その人は何か落し物でもしたように床の上ばかり見つめていましたが、彼も私に、クリスマスおめでとう、といひ、十字架の体験を通して私がどんな人に対しても恨みをもつべきではないという真理を悟つたことを喜んでくれました。」

この改変オエシの話はフランク自身から私が聞いたものだ。

フランクの友人の一人でイートン学校の教諭をしていたラウドン・ハミルトンが、私に話したことを書いてみよう。それはフランクが彼の得た確信をイギリスの知識階級の中心であるオックスフォードにもたらすために到着したときのことである。忘れることもできないのはラウドンが、ケンブリッジからきたアメリカの教授に会つてみないかといわれたときに、くだらないと思ひながらも、かすかな好奇心につられていつたときのことだ。(フランクはオックスフォードにくる前に、短期間であるがケ

ンブリッチですごした。)

次にラウンドの言葉を書いてみよう。

「ケンブリッチから来た男に、会つてみないかね」一九二一年のある夏の夕方、ラグビーの選手でローズ奨学金をうけている学生が大学の校庭を横切りながらこういつた。礼儀をわきまえているわれわれは会おうと答えた。そのラグビー選手は中背の男を連れてきたが、彼の態度をみても、身なりをみても、何の職業か判らなかつた。ただ印象に残っているのは大きな活きいきとした瞳だつた。こうしてフランクはオックスフォードにやつてきた。特別な発表も宣伝もなかつた。しかし、組織をもち、援助をうけ認可された宗教運動のどれよりも偉大な影響を与えたものか、その時以来オックスフォードに入つてきたのだ。

生きたメッセージを持ち、彼自身、神と直結している一人の男がオックスフォードにやつてきたのだ。

われわれは彼を、二週間ごとに開いている哲学研究会に招待した。その会は非常に真面目な固い雰囲気だつた。ともかく、哲学的論戦を交えるというので、話がひどく

高遠になつてしまつた。オックスフォードではいうことがなくなつてからでも喋りつづけると誰かがいつたことがあるが、全くそんな状態だつたのである。

十一時になつた。まだフランクは一言も喋らなかつた。ケンブリッジから来た男としては、こんなことは全く珍しかつた。それでこちらから話を引き出さねばならなかつた。その場の情景を想像して見よう。そこにいた九十パーセントの人たちは、元將校で、階級も大佐を筆頭にさまざまであつた。なかには情報部員もいたし、海軍出もいた。二十一、二才で、すでに数多くの従軍勲章をもつた歴戦の勇士——もちろんそういうつた大勲章などは口にも出さず、見せることもなかつたが——もいた。この人たちの多くはその後教育界、政界、官界、外交界などイギリス連邦の重要な地位についているが、当時すでに大学内で影響力をもつていた。その多くの人たちはスポーツマンであつた。日曜にはごく少数が教会に行つた。

その夜、われわれは肱掛椅子にどつかり坐つてパイプをくゆらせ、部屋には煙草の煙が立ちこめていた。フランクが話し出した瞬間に雰囲気が一変した。彼はわれわれの論議の中から糸を引き出すように話を進めて、巧みに彼の構想を織りなして行つた。

彼の言葉は一向に宗教臭くなかつた。彼の語る人びとはわれわれそつくりであつたので皆の興味を引きつけた。

他にどんなやり方があつたであろうか？ 説教か？ 訴える方法か？ 哲学的精緻さか？ こういうようなやり方であつたらば、皆にとつてありふれたことであつたらうが、彼の話し振りにには全く新しさがあつた。果して新しかつたらうか？ 少くとも新鮮であつたから興味深かつた。それまでの議論は全く忘れられてしまつた。部屋を出て行くときにたがいに「この男をどう思うか」とたずねあつた。勇敢な行動を一応知つている人たちのなかにあつて、この男は一種独特の勇気をみせたのだ。われわれとしてはどきもをぬかれて、驚嘆と感動をおぼえたのであつた。

一、二週間たつと、フランクは週末をオックスフォードで過すために、三人のケンブリッジの男を連れて帰つて来た。この人たちはフランクとの接触がどんな意味をもつたかをわれわれに話してくれた。だが限定された男について語つてゐるようではなかつた。三人とも宗教にこるようなタイプではなかつた。その内の一人はケンブリッジのラグビーの正選手であり、他の二人は教養の高い魅力のある元将校であつた。そ

れだけでなく彼らの顔と態度には名状しがたい、はつきりしたかがやきがみられ、わざとらしくなく、魅力的な同志的な交りをもつていた。

その夜、われわれの部屋で彼らは極く自然ではあるが、非常な説得力をもつて、自分たちの生活の問題を解決してくれる新しい力について語つた。彼らの話は、われわれオックスフォードの者の注意をひきつけた。一般にはされない事であつたが、個人的な宗教体験についての彼らの話し方は、誰の気持もそこなうことなく、かえつて信頼と共感をよびおこしたのであつた。

彼らの言葉は、聞く気持をもつた人には、誰にでも体験を分ち合うとする誠実な人たちの言葉で語つた……

この会見のあとで、数人の者が校庭に集つては、新しくきいたこのことについて討論した。ところが、無神論者や不可知論者が改変した事実がわかるにつれて、この討論は驚きをもなつた興味に変わつていつた。大学全般に何物かを期待する雰囲気のみなきつた。一体何がおこるのであらうか？

この新しい正直さは、伝播して行つた。次の学期にも、それはつづいた。古くから

知り合つていたもの同志が、新しい変化について語り会つた。ある夜、六人の者が集つた。数日後にさらに六人が招待された。しかし、実際には四十四人も集つたので、集会所に行かねばならなかつた。そのうち四人は来る前にいささか予防線をはるために飲んで来ていた。

彼らの辛らつな攻撃も、その場の素晴しく、しかも現実的な雰囲気をつくぐがえすことができなかった。われわれは確かに天使の側についていたのだ。オックスフォードではじまつたこのことは、すでに基礎が固つていたので、これに反対することは、神に対して罪をおかすというだけでなく、学生同志の信義に背くことにまでなつたのだ。オックスフォードに与えられた、この光に対して、神に感謝する祈りの言葉が、大学の教会の説教壇から捧げられるようになった。

3 フランシク・ブックマンの秘訣

A・J・ラッセル著「ただ罪人のために」より

フランシクの力の秘訣は、どこにあるのであろうか？ ある復活祭の午後オックスフォードでお茶をのみながら、フランシクは私に話してくれた。

「私はとても忙しい思いをして、毎日、十八時間から二十時間働いていました。ベッドのわきには、電話が二つも備えてあるほどいそがしかつたのです。それでも、すこしも満足すべき結果は得られませんでした。たくさんの方が訪ねて来ましたが、その人たちの生活に与えることのできた改変は、すこしも長つづきのしない不十分なものでした。そこで私は根本的にやり方をかえてみました。電話があまりかかつてこない朝五時から六時の間に、心の内にひびく静かな声に耳を傾けて、そこから靈感と導きを得ることにしたのです。……」

正氣の人間ならば、神の導きを聴き、神の力を得ることはごくあたりまえのことだ、とフランクはいうのであるが、彼は神を常に意識して生活している。このことを考えにいれないでは、フランクを理解することはできない。フランクは心理的にも成熟した男で、彼と人との関係は人間に可能な最高のものである。彼は精神生活において、自分勝手な憶測をしない。彼は、どんな時でも、直接に神に答を求め、神からも直接に答を与えられることを期待している。この運動の中心には、こういつた規律があるのだが、これがかえつて完全なる自由を意味する。これはキリスト教の逆説ともいふべきことである。

フランクは、自分自身神に聴いて、それに子供のように絶対に服従する男である、と同時にまわりの者にも同じことをさせてしまう。最初、それを信じようが信じまいが、この基盤を受け入れない人は、フランクの運動を理解することはできない。しばらくやつているうちには、これが事実であることがわかつてくるであらう。

4 ペンシルベニアの少年

一九三八年六月四日、ブクツマン博士の六十歳の誕生日に、彼の出生地アレンタウンで発行されているモーニング・コール紙は、一頁をついやして、彼の話を載せた。そのなかから抜萃されたものを次に掲げるが、これについての編集手記として次の言葉が載っていた。

「彼の六十歳の誕生日にあたつて、この町で少年期、青年期を彼とともにした多くの友人たちは、あの頃をほめて、彼の崇高なる目的の完成を祈っている。ことに長年にわたつて、この目的の達成のために一途に擲げられた燃えるような情熱が、さらに燃えつづくように折つている。」

フランク・ブクツマンは、ペンシルベニアの土に深く根をおろしている。彼とともにペンシルベニアの町を訪れることは、めつたに得られない特権であるが、彼は、そこで若かつたころ許可があろうがなからうが、泳いだ場所を教えるであらうし、また、ついに手を出してしまわずにいられなかつたさくらんぼうがみものジョナサン家の桜の木を指さしてもくれるだろう。子供のころの想い出をまぜて、深い愛情を示しながら

ら、この土地のことを語るのを聞いてみると、世界中を旅行したこの人ほど、生れ故郷のこの町を愛している人は少ないことを感じる。

今日のブックマンは、もの静かな、そして力強い男である。六尺豊かな、体格がよい、清潔な感じの人である。規律正しく、敏捷な活気に富んだ男である。彼のまなざしは、世界を知っている男の持つ深さが見られる。その瞳は、人なつくく、ユーモアに満ちているが、歴史の流れを良くみてとる目でもある。会ったあとで残る印象は、その線の太い体格ではなく、そのなかにひそむ活力である。

彼の祖先は、一七四〇年に、自由を求めてスイスからフィニックス号でアメリカへ渡つて来た。先祖の一人は、アメリカ独立戦争のとき、ワシントン部下として、バレー・フォージの戦いに参加している。そのなかの幾人かはミネソタ州に移任した。その他の人たちがペンズブルグの町に住んだのであるが、アメリカ独立のために斗つた不屈の人びとを生んだこの町の雰囲気ななかで、ブックマンは、その少年期を過した。彼の父親は、クリスチャンの紳士、道義を重んずる実業家として、今でも記憶されている。母は、もの静かな、深い洞察力を持った教養の高い婦人であった。今日、ブ

ックマンを基本づけている鉄のような規律と、人の心を開かずにはおかないユーモアは、彼が母から受けたものである。父からは、人間に対する深い理解と、友人をつくる天才的な才能を与えられている。このお蔭で、彼は世界中に何千という友人を持っている……

彼は、古い友人を忘れるということをしなない。彼が、フィラデルフィアで少年のためのセツルメントをしていたころ、そこで働いていたコックの、メアリー・ヘンブリルが、この冬、八十才でなくなつた。この婦人は、フランクのごく初期のころの友人であるが、夫に死なれて精神的、物質的に非常に困まつていたときに、フランクがやとつたのである。アイルランド出身の彼女は、しばらくして、その国独得のユーモアを發揮して、セツルメントでの生活の中心となつた。ブックマンは、アメリカを訪問するたびに、非常に多忙な日程のなかから時間をさいて、メアリーに会いに行つたものだ。そんなとき、彼は何人かの友人をつれて行くことにしていた。この前、彼が時間をさいて会いに来たのは、二年前のことであつた。年をとつた彼女の頭は、はつきりしていなかつたが、ブックマンをみて、勤めていたころの想い出がよみがえつ

てきたのであろう、彼を指さしながら、「この人は、とても良い友達です。だけでも、この人と交きあつていると、まっすぐな道を歩かされてしまう。」と笑いながらいつた。そこにいたわれわれには、この意味が良くわかつた。そのなかには、爵位を持つた婦人も、社会的地位の高い人もいたが、メアリーと共にすごしたその夜は、彼女が中心で、女王のごとき存在であつた。フランク・ブックマンは、どんな人間でも同じように大切にあつかう。彼はみんなを王者のようにあつかう。

人間を愛する彼は、また国ぐにも愛する。彼は、いつも世界のことを心に思つてゐる。彼にとつては、道を見失なつた国ぐにの姿を見ることがほどかなしいことはない。世界に最も必要なことは、勇敢な指導者である。最大の罪は、充分な計画を持たないことである。彼はいう。「どの国かが、神の意志を見出すことを自国の使命としなければならぬ。いずれかの国が、おそれの支配から解放され、野心に打ち勝ち、神の聖靈に従う、新しい指導精神を創りださなければならぬ。このような国は、国内での平和を得られるばかりでなく、世界平和を造り出すことが出来るのだ。

「アメリカが、その国になれるだろうか？」

5 指導者としてのフランク・ブクマン

一九四四年に出版されたブクマン博士の講演集の序
文、筆者は前ノルウェー国会議長C・J・ハンプロー

指導者としてのブクマン博士の才能は、彼の言葉だけでは説明できない。彼のもつ力というよりか彼に与えられた力は、少数の人たちのグループであろうが、大きなグループであろうが、大きな集会であろうが、そこに集まつた人たちが神に聴こうとする雰囲気をつくることである。少くとも、その瞬間には、人びとが己の「我」を捨てて神の計画に心を開く意志をもたせることである。この雰囲気は、神秘的な儀式、たとえば、香をたくとか、音楽を奏でるとかで作られるのではない。舞台装置をつくるのでもなければ、いろいろな附随した道具があるわけでもない。フランクは常に現実的であり、実際的である。事務的であるとさえいえる。聖職者とか、神秘家とか、いふより科学者か医者の方である。彼は感傷的なもの、感情的なものを嫌っているが、

同時に威圧するような勿体ぶつたことや、宗教くさい語調を嫌う。彼は話すことよりも沈黙に重きをおく。そして彼の力の秘訣は静聴にある。この静聴とは、意識的に心を現世的なものから離して、神の声を聴こうとするものである。彼は、神が風とか地震とか火とかのなかに存在するのではなく、心のなかに語る声に存在することを知っている。

集會に参列するほとんどの人たちの感情に訴えるのではなく、その理性、常識に訴え、さらに彼自身の強い精神的な確信の力も加わつて奇蹟がおこるのである。懷疑論者も、皮肉屋も、無信仰の者も、無神論者も、ジャーナリストでさえ、なかには嫌々ながら集會に列席したのも、ともかくその瞬間は神の實在とよぶより他に仕方がないものを感じたことを認めている。

この意味からいつて、オックスフォード・グループの會合に出席した人びとの感じや、見たことを通じて、その集會の有様を知ることが大切である。しかし、それだけではまだ不完全である。というのは、この本の、ところどころにも書かれていることだが、集會に出席した人たちに、後でどんなことが起つたかが大切なのである。

ごく簡単なことであるが、非常に説明しにくい。何故かというに、オックスフォード・グループは新しい教義をもたらしたのではない。それは昔から存在していたのだ。オックスフォード・グループのしたことは、今まで眠っていたものを活潑に呼び起しているのだ。長い間、使わずにおいたために、役にもたないと思われている畠地を掘りおこし、ならして良い種をまくという仕事を、グループはしているのである。いわゆるキリスト教国といわれている国ぐにのなかでも、神、あるいはキリストの名を、日常の生活のなかで口にしない状態である。神について語るなどということは、何となくでれくさく、人びとに間の悪さを感じさせるのが現実であつた。

フランク・ブックマンとそのチームは、人を造り直すふりはしなかつた。彼らを変えようとしたのだ。このグループの人たちのいくところ、何処でも人の心を深く動かすものがあつた。

キリスト教的兄弟愛の近代版を見ているうちに、われわれの多くはチェスタトンがアンジの聖フランシスに書いたあの美しい小さい本を思い出した。

包囲された守衛隊だつたが

今は神に仕えるものたちが進軍するので

その足音はこの世にこだました

益々増えるその一団の先頭には

一人の男が歌を歌いながら歩いて行つた

アシジからきたフランクとアレントウンからきたフランクとの間には、十二世紀のイタリーの日常生活と二十世紀のアメリカの日常生活の差がある。それにもかかわらず、この二人を結びつける夢、幻、そして行動には、深い精神的な類似点がある。

ブックマンは、彼の重大な責任を意識しているが、そのかげには増大しつつある一団の人びとの先頭にたつて歌うことをのぞむ少年の愛らしさがみられる。一見厳格な態度と、ときには皮肉をも交えるユーモアのかげにみられるのは、この愛らしさである。実際に、フランクはここ数年間、自己中心と利己心から彼のお蔭で自由になつた人たちの先頭に立つて歩いてきたのである。この人たちは今では新しい同志的な交わりと、何物をも隠す必要がなくなつたために、完全に怖れから自由になつて生活しているのである。

『結ぶ実によつて汝らその木を知らん』

オックスフォード・グループのもたらす果実は非常に甘い。心を開いてフランク・ブックマンのチームの働きを見守つた者は、誰しもチェスタートンが十字軍について書いたものに似通つてゐることを見出すであらう。

子供たちからは見捨てられ

伝記作家からは反ばくされ

人びとからはあばかれあざけられ

にも拘わらず

彼らは正しかつた

われわれが如何に批判的であろうと、彼らをあざけりさろうとしても、笑いきれな
いものが残つた。この一団の人びとは、われわれに欠けている生活の質を持つてゐる。
彼らは、自我を忘れることに成功し、他に奉仕し、他を助けることに熱心である。ま
た普通われわれが、心の秘密の場所にしまひこんでいて鍵を失つてゐるために、何か
必要なことがあつても、探し出すこともできなくなつてゐる事がついて、ごく自

然に話すことのできる人たちだ。自分たちの間違いを快よく認め、謝ることのできる人たち、他人に過ちをした場合、公然と償いのできる人たちである。その上、一番明らかかなことは、彼らが幸福であることだが、それというのも、心を重くする秘密の重荷がないからだ。

友人の求めに応じて、この本の序文を書こうとしている私が思い出すのは、一九三四年ノルウェーで開かれた最初の家庭集会である。また、いろいろ困難があつたにもかかわらず、あのいくつかの集会を可能ならしめた私の妻の不屈なエネルギーと如何なる困難にも負けない精神と、彼女のユーモアを思い出さずにはいられない。また戦争中、ノルウェーの教会が統一することを可能にしたフランク・ブックマンの、疲れることを知らない、常に心を開いて微笑をもつた彼に対して、私は感謝をささげる。彼に真実であることは自分自身に真実であることを意味する。

私はまた集会にきた多くの人たちを想い出す。好奇心にひかれてきた人も、頭から信じないで来た人も、疑いながら心の中で求めてきた人もいた。ナチスに捕えられ、ドイツの監獄にありながら心の勝利をうたつたフレデリック・ラムのことを想う。二

年間、土牢の暗い独房の中に閉じ込められても屈することなく、勝者として釈放されたロナルド・ファンゲンのことを想う。またゲシュタポの護衛に監視されながら、森のなかの丸木小屋に幽閉されたベルグラープ監督の^{ビシホッフ}ことを想う。収容所に捕えられた多くの人たち、なかには死んだ人も、また危険にさらされながらも、神はわが咎^{とが}なり、の信仰に生きた人たちのことを想う。その人たちの中には、ヘスブゼールの集会にくるまでは、信仰をもたなかつた人も多い。この人たちにとつて、フランク・ブックマンの存在は重要であつた。もちろん、きた人のすべてが改変したというわけではないが——われわれは常に改変しつづけていかなければならない——すべての人が何らかの意味で変つたといえよう。集会にいくまえとは同じ生活はできなかつた。

ノルウェーに進駐した独軍は、オックスフォード・グループが、イギリス情報部の一部であるとの判定を下し、徹底的に弾圧すべきだと命令した。イギリス情報部にとつては、実際以上に評価された、いささかくすぐつたい賛辞である。自分たちの理想を失い、冒瀆し、また信仰を裏切つた人が、それを怖れ憎む気持で彼らはオックスフォード・グループを憎んだ。

彼らがオックスフォード・グループを怖れたのは、結局には悪に敗北をもたらす神の情報部の一部であることを本能的に感じたからである。

6 世界勢力の成長

ビーター・ハワード著「世界の再建」より

フランク・ブックマンは、スイス系のアメリカ人である。彼の祖先の一人は、ツリッヒのツイングリー（ルーテルと同時代にスイスで宗教改革のために努力した指導者）の後継者で、コーラン経典をドイツ語に翻訳している。この一家は、一七四〇年に、アメリカのペンシルベニア州に移住したが、アメリカ移住後、祖先の一人はバレー・フォージの激戦のとき、ワシントンの部下として戦い、また一人は南北戦争のとき、開戦当初リンカーンの軍隊に志願した。

一九二二年、フランク・ブックマンはイギリスのある軍事顧問に招待されて、ワシ

ントンの軍縮會議を傍聴しに行つた。このことは二つの点からいつて意義深い。その第一は、ワシントンへ行く列車のなかで、彼の心のなかにひとつの考えが迫つてきた。それは、辞職、辞職、辞職、辞職であつた。経済的に安定した容易な生活をすてて未知の道を選べという挑戦であつた。その二は、會議の模様をつぶさに見ていた彼は、人間性を変えない限り世界平和の計画だけでは足りないという日頃の確信を強めたことである。「新しい世界は紙の上で計画をすることはできるが、その実現は人によつてしなければならぬ。」であるから彼は、個人の變革を土台として經濟、社會、國家および國際間の根本的變革を計るため、あらゆる階層の人たちを訓練しはじめた。オックスフォード大学で、彼に会つた南アフリカから来ていたローズ奨學金をうけている学生たちが、ブックマンと一緒に帰国したとき、あまりにもその影響が強かつたため、ブックマンの業績は、南アフリカ全体に知れわたつた。そのとき、南アフリカの新聞が「オックスフォード・グループ」という名前をつけたのである。

この運動は急速に發展し、一九三〇年代には世界的に發展した。ノールウェーの國連代表としてジュネーブに行き、のちに國際連盟の議長となつた人がこういつた「わ

れわれが政治の在り方を^{オエンジ}変革しようとして成功しないのに、諸君は人間を際えることに成功し、多数の人びとに新しい生き方を教えておられる。」

一九三八年に、ブックマンは、軍事的抗争では世界のイデオロギー問題を解決することはできないという現実を直視して、道義の再武装(MR A—Moral Re-Armament)を唱え、戦いに勝つためにも、また正義にとづいた平和を築くためにも導義力が必要であることを明らかにした。

フランク・ブックマンの洞察力と行動は、各国にイデオロギー的斗争への心構えを与えはじめた。これはファシストとコミニストが一番恐れていたことだつた。デモクラシーの産業力と武力にさらに真のデモクラシーのイデオロギーの偉大な力が加わることである。ブックマンの行動はデモクラシー内の最良の愛国的勢力を目覚ます一方、破壊的勢力の反対をも誘発した。

一九一七年に極東を旅したときの経験から、ブックマンは共産主義の無神主義をよく認識していた。コミニストの方では、彼のもたらす道義と精神のルネッサンスは、彼らにとつて最も危険な敵であることを早く認めた。同様に、ブックマンは、ファシ

ズムもその根本は唯物主義であることをはつきり認めていた。「ファシズムとコミニズムという二つの世界勢力がある。これはどこから発生してくるか？ すべてのはイズムの母ともいふべきマテリアリズム（物質万能主義）からである。これは腐敗と、無秩序と、革命の温床となる反キリストの精神である。家庭の基礎を破壊し、階級と階級とを斗わせ、国内を分裂させる。」

運動の始めから、道義的イデオロギーが世界に根強くなるのを喜ばない人びとから、彼はひどく攻撃された。コミニストは、公式通り彼にファシストの烙印をおした。またナチスは彼の仕事を「これはデモクラシーの目標にクリスチアンの衣をさせるものだ。これは明らかに国家社会主義に反するものである」と非難した。

ところが一方、ブックマンに向つて「任つておいてくれ」とか「さつさとヒトラーを変えてきたらよかろう」とかいつた人びとの自己満足は、数年後には、デモクラシーを危険に迫り込んだのであるが、彼らは後になつてなお、M R A がドイツでやつたことはブックマンがナチスびいきだつた証拠だなどといふふらした。ブックマンは一度もヒットラーに会つたこともなく、ヒトラー自身も注意深くブックマンの影響下に

おちることを避けた。ブックマンは、ヒットラーや他のナチス指導者と親しい関係をもつたことは全然ない。

しかし、ブックマンの影響は、事実ナチスドイツにも浸透していた。ちょうどいま、鉄のカーテンを透しているのと同様である。ルーデンドルフの雑誌は、その誌上で「M R Aの甘い毒が国境を越えて浸透しつつある」と警告を発したほどである。それゆえ、ナチスが戦前からの文書を禁止したことは驚くにあたらない。ナチス侵略軍は行くさきぎきでM R Aを抑圧せよと指令されていた。

これらの事実が、ブックマンの影響力を証明していると思う。デモクラシーが変革というイデオロギーで身を固め、大戦と大戦の間の年月にドイツをはじめ、他の国ぐにに伝える方法を知っていたなら、おそらく歴史は変わっていたであろう。

今日になつて、ブックマンのイデオロギー的洞察力の正しさは、つきつきと証明されてきたが、彼はコミニズムの危険を力説する一方、反共では解決でないことをも強調してきている。「真の解決は、われわれの文明の道義的弱点をいやすことのできる道義と精神を基としたイデオロギーによらなければならない。あらゆる意味での改変チェンジ

を期待する、すべての国の人びとの心を、かち得るものでなければならぬ」と彼はいう。

世界の政治家が陰に陽に、彼の助けを求め、彼自身世界的な大運動の指導者であるがブックマンは一瞬もユーモアを失つたことはない。彼の人に対する思いやりと、その人たちの必要に敏感であることは独自のもので、年とともに深まつている。

彼は世界再造を使命として一生をささげているが、現代にあまり見られない偉大な素質を持つている。それは人が責任を十分に果たすように訓練し、人をのばすことである。彼はよくいう。「十人の人が自分より上手に自分の仕事をやれるように訓練するまでは成功したとはいえない。」

彼が一生をかけた事業は、革命的チームワークによつて将来続けられていくだろう。人に対する彼の愛、彼らの必要や失敗についての敏感さ、人に自分の最善を生きようとする意志を与える力、これは神の賜のものであり、それがこの仕事がここまでのびて来た秘訣であり、彼にいわせると誰もが身につけることのできるわざである。スコツ

トランドの炭坑夫ピーター・オコナーはフランク・ブックマンとの会見の印象を次のように語っている。「あなたに会つた半時間に、今まで誰に会つたときよりも大きな助けを得ました。」それに対してブックマンは、「私のしわざじやない。神の賜物です」と答えた。

三十年前にこの仕事をはじめて以来、ブックマンは自分の家をもつたことがない。十分な訓練を受けた彼の協力者の数は何百人に達している。彼らは月給なしで働いているが、決して飢えたことはない。フランク・ブックマンはこういつている。「神が導くとき、神はそなえる」と。

この解答が根本的に必要であると確信している何千の人びとが、この革命的勢力を進展させるために犠牲を払っている。多様な寄附はめつたにないが、生活費をきりつめての些細な寄附が多い。アメリカ独立宣言に見られると同じ精神がこの運動をまかなつている。「神の摂理による守護を固く信じ、おたがいにわれらの生命、財産および神聖な名誉をも賭けて誓う。」最初からブックマンの仕事は、これが正しいと信ずる人びとの犠牲によつて推進された。人は最も貴重な信仰のためには、最善なもの

出すものである、人びとは給料を、資本を、家を、貯金を出している。

イギリスでは港湾労働者、ショップ・スチュアード（職場の苦情処理委員）たちが各地で斗争資金を積立てている。この資金で彼らは代表をコーに送り、MRAの世界大会の援助をするわけである。

ヨーロッパのある元共産党員に、ある人が実業家の寄附を受けているかとたずねたとき、彼は次のように答えた。「寄附する人もある。もつとたくさんの実業家が寄附してくれたりよいと思う。実業家が社会正義と新しい世界秩序のために力強く斗争グループに金を出すのを、労働者は大いに喜ぶはずだ。」

新しい精神が自分の家庭や産業界、自分の社会を変えた経験をもっている人は、この絶対に必要なものを普及するためにあらゆる努力を惜しまない。金銭とは限らず、家を解放するとか、時間を提供するとか、自分の才能、食料などあらゆるものをいろいろな人が寄附している。

コーのMRA大会場にはドイツのルールから石炭、デンマークから卵とバター、イギリスのシェフィールドからナイフ、フォークの食器類、アフリカのケニヤからコー

ヒーが大量に送られてきた。

M R Aで使う金は、他のいかなる事業や政府で使うものよりはるかに経済的に使われる。というのはどんなに経験や資格のある人でもM R Aで働くときは無給で働くのであるから、運動費は最少限度に低いわけである。運動の発展がその予算の額とは比較にならないほど大きいのもこの理由による。ホテル、印刷、ガレージ、医薬、歯科等は多くの場合、どの国でもこのイデオロギーを世界に拡げたいと願う人びとによつて、無償、或いは最低の料金で与えられている。

M R Aの活動はこの運動進展を最大にするために犠牲的にそなえられた資金と奉仕を最も経済的に活用している。

フランク・ブックマンに会うまで二十五年も党員であつたドイツ・ルール地区の共產党指導者からの手紙はその典型的なものである。

「戦いはなかなかつらいが、しかし素晴らしいことだし、とくに家族一緒にこの戦いができることは感謝です。善が勝たなければなりません。仕事のあい間にも私は人にこのイデオロギーを伝えるため、話をしています。そして出来るだけよい手本になる

うとしています。私はたくさんの人間らしい間違いをしたり、また弱点もあります。家族も同様です。神が助けてくださらなければならぬことがたびたびです。しかし、一つだけ確かなことは、かつて今ほど幸福と満足を感じたことはありません。これはあなたのおかげです。

残念ながらこれでベンをおねげなりません、私の家族全体から——妻と娘婿および私からの心をこめた挨拶をお送りし、あわせて、あなたの御健康を心から祈ります。それにもまして、全世界各国でこの素晴らしいイデオロギーが勝利を得て、人類が再び幸福を得るように祈ります。」

二 奇蹟をつくる

これは、フランク・ブツクマンが一九四八年、カルフォルニア州
リヴァーサイドで開かれたMRA世界大会で話したものである。

附 録

これから、わたくしはみなさんに四十年前のことをお話したいと思います。当時の民主党全国委員会の議長が、わたくしに、ペンシルベニア州立大学に行つて、当局と学生との対立を何とか解決してくれないかというのです。彼はその大学の理事の一人で、この問題でなやんでいました。また確かなやむべき理由もありました。学生のストライキが始まっていたのです。空気は険悪でした。わたくしがこの問題を

解決できるだろうと彼は思ったのですが、わたくしにはそのあてが全然ありませんでした。これはわたくしのでる幕ではないと卒直に話しましたが、彼はなかなかあきらめず、わたくしを追いまわしたので、とうとう行くことに同意しました。

わたくしがそこへ着いた晩に、酒のパーティが十九も開かれていました。戦艦が一隻浮ぶくらい酒が溢れていたというものもあつた位です。

今日では、学生のストライキは珍らしくありません。わたくしがペルーのリマへ行つたときも、イギリス公使が最初に、わたくしにいつたことは、「学生がストライキをやっていますよ」というのでした。サンチアゴでも、カイロでも、学生ストライキがありました。今ではどこへ行つても見受けられますが、四十年前には滅多にないことでした。そのため、フット・ボールの試合に負けてばかりいました。また優の成績をとる人もいませんでした。大学全体が、何か重苦しい空気につつまれ、どこも敗北ばかりでした。これは近代教育が生んだ副産物の一つです。これはアメリカの問題の一つでもあるのです。

そのような大学生活の背後には、三人の男がいました。その一人は、ビル・ビック

ルといいました。

ごくあたりまえの人たちがどういふふうになつていくかといふことをこれから話してみましよう。ピックルは、その大学生活の中で一つの重要な要素でした。

彼はある陸軍大佐の庶子で、妻と十二人の子供があつて、みんなが彼らのことをピックルスと呼んでいました。昼は田舎医者者の馬丁をして夜は学生たちに酒を売つていました。わたくしは彼が闇夜に時間をとわず、人目を忍んで、曲りくねつた階段をそつと通つて、学生たちの部屋へ行くのを見かけたものでした。在校生だけでなく、最近の、まだずつと前の卒業生も、みんな彼の友人でした。フット・ボールの試合や大学祭のときなど、ピルは忙がしくなりました。州の法律が酒場をゆるさなかつたので、彼は、いたるところへ酒を調達したのでした。

ピルは、わたくしが行くことをいち早く知つて「あいつがきたら、ナイフで刺してやる」といきまいていました。彼は強くガッシリしていて、海象セイウチのような口ひげを生やし、まるで怒号する海賊といった風態でした。しかし同時に、人に大きな感化を及ぼす聖人になれるような罪びとに特有の魅力をすべて具えていました。この話の結果

をさぎにいいましょう。彼はわたくしと一緒にイギリスへ行き、オックスフォードで開かれたハウスパーティーに出席しました。またわたくしと一緒に国際連盟へも行きま
した。

いつたい、この話がどう発展したか、もう少し詳しく話しましょう。というのはみなさんもこういうことをしなければならぬのですから。この話はいろいろな意味をもつています。そして、わたくしにとつて有益であつたように、みなさんにとつてもきつと役にたつでしょう。わたくしは、われわれがやっていることの基礎ともなるべき多くのことを、このペンシルベニアで学んだのです。

この話にてくる第二の男は、みるからに立派な人好きのする大学院の学生です。彼はわたくしが今までに会つた中で最も愉快な人間です。彼の父は最高裁判所の判事であり、祖父は州知事でした。名前はBといい、いまイギリスにいます。この冬はロンドンで過し、わたくしの家をも訪れました。昨年ハコーへも行きました。

われわれは友だちになりました。彼は南部の生れで、すべての南部人と同じように朝食に鶏のからあげとビスケットが好きでした。ところで、わたくしには、メアリ

「という実に上手な料理人がいました。かの女はすばらしい人でした。かの女と二人の息子とが改変（改変）した話は、またの機会にしますが、それもまた一つの奇蹟でした。

さて、Bは乗馬が好きでしたので、わたくしたちはよく一緒に乗りまわしました。彼という人間は、控え目の態度と表面は無頓着にみせながら、細心の注意を必要とする人間だということを知っていたので、わたくしは、自分の心の問題については、話しませんでした。しかし、わたくしたちは、ほかのことは腹臆なく話あいました。このような術を、みなさんは学ばねばなりません。ところで、Bはだんだん興味をもつようになり、わたくしの周囲の雰囲気にとけこんできました。

ある日、彼は「クラブへ馬で行こう」といいました。忘れもしません。その日は電線に雨が凍りつく、みぞれ模様の日でした。「クラブへ馬で行くなんて気が変になつたんじやあないかな」とさえ思われました。馬の足が気遣われるような、雪のつもつている冬でした。

わたくしたちは馬で十五哩、クラブについて、とにかく、くつろいでおいしい夕食をとりました。わたくしは、骨の髄まで寒さが込み込んでいたので、数杯のコーヒー

を飲み、床につきました。

コーヒーが効いて、時計が十時、十一時、十二時と打つのが聞えました。とうとう二時を打つと、彼はわたくしにいいました。

「もう眠ったかい」

「いや、君は」

「まだだ、少し、話たいのだけど……」

「うん、何を話そう」

「あなたの信仰について、話してくれないか」

そこで、わたくしは話しました。わたくしたちは数時間も話しつづけたのです。彼は儒教を信じているといいました。

最後に、わたくしは彼に孔子の話をしてくれとたのみました。彼は孔子について、あまり詳しく知っていないようでした。そこで、わたくしは、わたくしが孔子の墓に詣でたときのこと、孔子の七十六代目の後裔が茶を振舞つてくれたこと。またある寒い日に、四枚外套を重ね着していた七十七代目にも会つたことなど話してきかせまし

た。

そこで、わたくしは彼にいいました。「わたしの知り合いで鶏泥棒をやつてゐる男がいるんだが、彼とその細君と五人の子供が儒教で、まともになれるかどうか、ひとつためしたらどうだろう。」

Bは同意しました。それから二、三ヵ月間、彼は鶏泥棒の妻に金をあたえて家計を助け、子供たちにおいしいものを買わせました。またその泥棒とも話しあいました。しかし、どうしたことか、大して成功しませんでした。鶏泥棒はまもなく捕えられました。彼はスポンジにクロロフォルムを浸し、それを鶏のくちばしに押しつけて、気を失つたところを運び出していたのです。おなじ仕事をしていた息子の一人も監獄にきました。Bは家族と共に協力し、できるだけのことをしてやり、ほんとの儒教徒のようにふるまおうと努めました。

とうとう彼はわたくしのところへ、まったく絶望して現れました。

「もうだめだ。やればやるほど、彼らは欲しがります。」

Bは大切なことを学んでいたのです。彼はキリストをぬきにして、社会保障ですべ

ての問題を解決しようとしたのです。つまり、根本の原因に触れずに表面の条件だけを考えていたのです。

Bは今は何でもやつてみる気になっていました。

「フランク、あなたならどうする？ 神に祈りますか？」と彼はききました。

そこで、わたくしは、今まで監獄にいる鶏泥棒にはききめがなかつたから、ビル・ビックルのために祈ろうと提案しました。Bはすぐに賛成しました。

「君が祈りなさい」とわたくしはいいました。できれば自分でなく、他の人に祈らせる方がよいのです。

Bは祈りました。「神様。もしあなたがいられるなら、どうぞわれわれを助けて、ビル・ビックル、ビックルの細君、そしてビックルの子供たち全部を変えて下さい。アーメン。」あまり正統的な祈りでないという人がいるかもしれませんが、この祈りはすぐにかえられました。

翌日、ビルは、自分が監督をしている野球チームに試合をさせていました。その夕方、Bとわたくしは、田舎の美しい家をもつている友人を訪問するためにでかけまし

た。この友人はスイスのコーの対岸のオート・サヴォア出の気持のよいフランス人の一家で、そこへワシントンの中国公使がくることになっていました。われわれを招待したのは、投なわで牛をとらえるのを見せようというのでした。中国公使も、それが気に入るだろうと思つたのです。わたくしたちが町を通つていくと、突然Bはわたくしにいいました。「ビルがいますよ。」ビルは、彼のチームが勝つたので、その祝酒をのんで、もうだれかれの見境もなくけんかをふつかけていました。

正直にいつて、わたくしは、ビルに会うことには気が進まなかつたのですが、Bはいいました。「われわれは、かれのために祈つていたのじゃないですか？　今こそ、何かするべきときですよ。」

ビルが近づいて来ました。みなさんも気がついておられるように、わたくしの鼻は大きいのです。「もし鼻をぶんなぐられたら……」と思ひました。このような場合には、いつたいどうするかと、あるとき中国人の友人に訊ねたら、「すきをつくことです。」とおしえてくれたことがありました。

そこで、わたくしは機先を制して、そのきき腕をおさえました。彼がなぐるろうとし

ても、それほどひどくならぬように。しかし、次にどうすればよいのでしょうか？ 瞬間、「自分のもつている一番深いものをあたえるべきだ」と心にひらめきました。

「ビル」とわたくしはいました。

「われわれは君のために祈っていたのだよ」驚いたことには、ビルの斗志はすっかり鈍ってしまいました。彼の目には涙がにじみ出ました。そして教会の塔を指さしました。「あそこに教会が見えるだろう。おれは教会のすみ石がすえられたとき、あの場所にいた。おれの一セント銅貨が一つ、あの下にうまつている。」

わたくしはいました。「ビル、きみのお母さんはきつと善い人だつたんだろう。」かれは「おふくろは、すばらしかつた」といいました。わたくしはBを紹介しました。「この人も君のために祈っていたんだ」「それは御親切に」と彼はいいました。「紳士だ」そしてつづけて「いつか遊びにきませんか」といいました。

わたくしは「それは結構だ。だが、いつかでは、はつきりしないから、時間をきめてくれないか」といいました。

「こんどの木曜日の夜七時にきて下さい」とビルが答えました。

本当にしななければならないことにはうまく時間のくり合せがつくものです。中国の公使のもとへ行く途中に、ビルに会う時間があつたわけです。Bと時間をすごすこともできました。そして、次の木曜日之夜七時にビルと会うこともきまつたのです。

さて、次の木曜日、わたくしたちは、誰かひょうきん者が「ハインズ・ハイツ」と名付けたビックル家がたつている丘の、ペンキも塗つてない彼の家を訪ねたのです。実に面白いことでした。あらゆるところからのぞき見されているように感じましたが、人つ子一人見えませんでした。ビルは、すでに隣り近所に、わたくしたちのくることを話してありました。彼は、自分を褒めるために、われわれがやつてくるのだろうと想像していたのです。その通りだつたが、彼の予期していたようなやり方はしませんでした。

彼は週に一度しか顔をそらないのに、この大切な日にそなえて、さつぱりとそつていました。

わたくしたちは、野球やフット・ボールのことを話しあいました。もちろん、彼はすべてのスポーツ通でした。馬についても知らないことはありませんでした。また、

大学生活のうら話まで話しあいました。帰る時間になりました。

「あんたがたがお出なすつて面白かつた」とビルはいいました。わたくしたちには彼を変えることができなかつたと、彼は友だちにとくとしていばりたかつたのです。けれども、あのような話し合いでも祈りで裏付けられていると、おどろくべき結果が生れるものです。ビルはわたくしたちの傍にいたがるようになりました。わたくしたちの友人になりました。

数日後、馬術大会が開かれました。彼はBとつれだつて馬を見に行きました。その日の午後は、ずつと馬のことばかり話したのですが、ビルはこんな楽しい時間をすごしたことは、はじめてだと洩らしました。

つきあつているうちに彼はもう「もし神がいられるのなら……」などとはいわなくなりしました。「神が存在することは間違いない事実だ。いつもわれわれの祈りに答えてくれるではないか」というのです。彼は、ますます強く、われわれの仲間の一人だと感ずるようになりました。

「ほくには判らないことだらけだ。聖書や祈りについてまだ何も知らないし、また、

どうして人の心をかちうるのかも知らない」と彼はいいました。

それでわたくしは「この夏一緒にすごそうじゃないか」とさそいました。

われわれは西部をめざして出発しました。毎日毎日、聖書の真理や祈りについて学び、ごく自然にすべてのことを話しあいました。このように夏を過したのですが、当時はたつた一人の人間におこつたことですが、今日では五千、一万の人びとにおこつています。この州立大学は、わたくしがこのようなことを学んだ実験室でした。わたくしは、この大学でもう一つのことを学びました。ビルが学生たちに酒を売りつけると、夜になつて学生がかつぎだされることがしばしばありました。彼らの生活は破滅に瀕していました。キリストを知らずに生活すると目茶苦茶になるのです。こんなときに、役に立つことが一つだけあります。それは、彼らを変へることのできる人、彼らを心から愛する人がいることです。この力があれば、夜昼かまわず男も女も解答をもとめてくるでしょう。いろんな人がくるでしょう。

田舎に住んでいた例のフランス人の一家は、屋敷のなかにカトリックの教会をもつていて、立派なアイルランド人の牧師が住んでいました。彼はまた、学生集会の牧師

でもありました。彼は大学で何かが起つてゐるのに気がつきました。わたくしたちのところに、たくさんの人が集つてきましたが、わたくしたちはその人たちをそのカトリックの教会へ送りました。なかには教会へ行こうともしなかつた人たちもありましたが、わたくしたちが手がけた結果、ほんものの体験をもつようになつて教会へ行くようになりました。この大学では、カトリックとプロテスタントとの間に問題もなく、この牧師もまつたく協力してくれました。そしてよくわたくしたちのところへ来て、いつたいどうやつて人を変えるかが知りたいといつていました。

これは誰もが学びたい術であり、また、必ず学ぶ必要のあるものです。われわれは子供たちのために、これを学ばねばなりません。子供たちが親のところへ行き、自分たちのことについて話すようでなければならぬし、親もまた、自分が悪い人間だということを知つて、子供たちと話しあえなければなりません。こうして子供たちの心をかち得るのであり、これがまた、多くの青年が集つてくる理由ともなるのです。かれらは、自分たちをよく理解してくれ、あまり偉そうなことをしやべらず、あまり賢そうにも見えず、思つたままを話してくれる人のところへ引きつけられていくのです。

もう一つ学んだことがあります。それはあまりに人が電話をかけてくるので私は電話を二つ必要としていました。ところがもう一つ電話をもっていました。それは生ける神からのメッセージを伝えてくる電話です。神は私になすべきことを命じ、わたくしはそれらを紙に書きつけました。何も書くこと自体がいいというのではありませんが、わたくしの記憶は、あまりにも信頼がおけないのです。まるで飾かざりのように何でもぬけてしまうのです。だから書いておくのです。写真のようにはつきりと焼きつけておくような記憶力があればすばらしいのですが、わたくしは物おぼえのわるい人間で、書いておかなければならないのです。イザヤは次のようにいっています。「主エホバは教えをうけしもの舌をわれに与え、言ことばもて疲れたるものをたすけ支うることを知り得させたもう。また朝ごとに醒し、わが耳をすまして教えをうけしものごとく、聞くことを得せしめたもう。」ずつと前のことですが、わたくしとまったく同じように、神が語ることを書きつけていた牧師がいたようです。中国では、強い記憶力も薄い墨より弱いと教えています。

わたくしはニューヨーク経由で、Bと一緒に旅行から帰つてきました。そこで、わ

たくしは、冬仕度のために真新しいビーヴァーの毛皮帽をちよつと金をはずんで買ったのですが、州立大学に帰つた晩に、それを破りました。わたくしたちが町を歩いていたら、ほかならぬビルに会いました。ビルはいつばしの役者でした。わたくしの帽子をしげしげと眺め、黙つたまま感に堪えぬようにわたくしのまわりをまわりました。握手もせず、「元気かね」とさえいわなかつたのです。

彼はいいました。「ねえ、その帽子をくれたら、おれはあんたのために何でもするんだがな」と。

わたくしはいいました。「ビル、この帽子は上げるが、ただ一つ条件がある。それは、わたしと一緒にカナダのトロントの学生大会へ行くことだ。」

彼はいいました。「行つてもいい。ともかく、あしたの朝、会おう。」そして彼はそのビーヴァー帽を被つて行つてしまいました。

朝になりました。ビルは玄関に立つていました。

「行けないんだ。」彼は口ひげを震わせながらいいました。「服を入れるものがない。」ビルは「イエス」というところを「ノー」という種類の人間でした。そんな人間は

まだたくさんいます。

「心配無用だよ。何か探してあげよう。」

「いや」とビルはいいました。「家に何かあるだろう。」

ここで、わたくしはビルとB以外の第三の男にふれねばなりません。この男は大学が変わるために不可欠の人間だったのです。それは運命論者の学長でした。誰からも好かれていました。評判がよく、人ずきあいもわるくなく、魅力があつて、男のなかの男だったのですが、ただ運命論者なものでした。ところで、彼の妻は祈ることを知っていました。こんな夫を持つ人もここにいるにちがいありませんが、はなはだ扱いにくいと思うでしょう。我慢はするものの扱いにくいことに変わりはないのです。お金、資本の使い方、税金について、彼らは彼らなりの考えをもっているのです。自分の満足や安楽のために物事をはこぶのは、実に堂に入ったものですが、女性の立場からは必ずしも満足できるものではありません。この学長は、わたくしがビルをトロントへ誘つたことをきいていました。ビルの娘が、学長の家の女中だったからです。そのビルの娘が学長夫人に話し、夫人が学長に話したので、彼はわたくしに会いにきました。

「ビル・ピックルをトロントへ連れて行くそうだね。」

「ええ、」とわたくしは、彼がどう考えているか判らないままに答えました。わたくしは、キリストのためならともかく、ただの馬鹿扱いされるのかと思いました。

しかし、学長はつづけました。「君、このことから奇蹟がおこるだろう。長い間、ぼくはビルのために、誰かが何かをするだろうと思つていたが、君がその人らしい。」
わたくしはいった。「いいえ。これはわたくしのやるべき仕事ではないのです。生ける神がやつている仕事ですよ。」

「しかし、ぼくにも一役買わせてもらいたい。ビルの旅行の費用をぼくに出させてくれないか」といいました。

そこで、ビル・ピックルとわたくしは、十七人の学生と一緒にトロントへ出発しました。あの小さい駅を出発する朝の様子が、今でも眼に浮びます。ビルは、例のビーヴァー帽を被り、ゲートルをまき、襟飾りをしていました。まるでむく犬の脚を連想させました。手には、表がすり切れた小さな模造のわに皮の鞆を持つていました。

いつたい、どんな理由でビルはその旅行に出かけたのでしょうか。五つの理由があつ

たのです。(イ)旅行をしたかつた。(ロ)トロントの酒のうまいことを聞いていた。(ハ)友情が欲しかつた。(ニ)トロントがどういふ所か見たかつた。そして五番目は、トロントへ着くまで、わたくしには判らなかつたのですが、わたくしがその帽子に似合う毛皮の外套を買つてくれるだろうと思つていたのです。

汽車のなかで、わたくしが食事にしようというとき、なぜかビルは反対しました。最初の乗換駅で、酒をどうやつて手に入れようかと企んでいたので。彼は一行十七人のなかに、彼がいつも酒を売りつけていた学生が一人いるのに気づきました。その学生はほんくらというあだ名で、もとは大酒呑みでしたが、今では大学内で正しいことのために斗つている男でした。その乗換駅で、食堂らしい扉に向つて行くほんくらの後に、ビルがついて行きました。なかは食堂ではなく、バーでした。

「おい、ビル」とほんくらはいいました。「ここはおれたちのくるところじゃない。」ビルは文句をいいますが、ほんくらは譲らず、彼らは改めて食堂に入りました。わたくしが、食堂へ行くと、ビルはおとなしくすわつて定食を食べていました。ほんくらがゆづらなかつたことが、ビルのクリスチャンとしての生活のはじまりになつたと、

あとで述懐していました。

次の乗換駅では、ビルは酒の売場を知っていましたが、そのときには、みんなが彼に注目しているように感じました。あなたがたも、そんな感じをしたことがありませんか？ みんな、あなたを見詰めているような感じですよ。けれども、その実、誰もあなたに注意はしていません。それがあなたの良心というものです。次の食事は汽車の中でした。ビルとわたくしは二人だけの場所を取りました。運命論者だった、あの男が食事の感謝の祈りを捧げました。こういう人が変つたときには、すばらしいことをするものです。わたくしにはそんなことができなかったでしょう。するとビルが突然口をだしました。「あいつのおかげで、飯がまずくなつてしまつた。」最初わたくしは、彼に食事を運んだ黒人の給仕のことをいうのかと思いましたが、ビルはいいました。「こいつは、神様に飯の感謝をした。おれのおふくろも、よくやつていたもんだが、まだそれをやる人間がいるとは恐れ入つた。おれたちは神様なんかに礼をいうものか。」

さてナイヤガラ瀑布に着くと、彼にとつて、とんでもないことがもちあがりました。

というのは、その夜、禁酒ホテルに泊ることになつていたので、わたくしが取計つたわけではなかつたのです。彼は大地に根が生えたように、絶対に禁酒ホテルに泊らないといひ張りました。彼には、いつたいていどうして、ホテルが酒場なしでやつていけるかが考えられなかつたのです。またもし、彼の仲間が、彼が禁酒ホテルに泊つたと聞いたら何んというでしょう。

「そんな詰らないことでよくよするなよ」とわたくしはいいました。「二階へ行つて休もう」わたくしは風呂をすすめました。

「風呂だつて！」ビルはいつて、海象かいじやうのような口ひげごしに、わたくしの方をジロリとにらみました。「風邪をひいて死ねとでもいうのかい？」

「とんでもないよ、ビル」わたくしはいいました。

「あんたは知らないんだね。おれの国では、十一月になると、寒くないように下着を袋のように縫いつけて、三月までほどこかないんだよ。」風呂はむりにすすめませんでした。彼は真赤なフランネルの下着の上に、ねまきをきました。間のわるいことに、かれは折りたたみの寝台に寝ることになつていました。多少危んだ様子でしたが、結

局それにもぐり込みました。

わたくしは、また部屋へ戻つていきました。「ビル、何か忘れたようだ。祈るのをね。」

「おれにそんなことはできないよ」とビルがいました。

「手伝つてあげよう」とわたくしはいいました。

ビルはのろのろと寝台からはい出し、両膝をつきました。

「あんたからはじめろよ。」

「天にまします」とわたくしははじめました。

「天にまします」とビルはいいました。

「われらの父よ。」

「われらの父よ。」

突然ビルはいいました。「それなら、昔知つていたよ。」

「もちろん知つていただろう」とわたくしはいいました。「たぐさんの人が、こう
いうふうに祈るんだよ」。

ビルはいいました。「あんたがつづけければ、おれは後からいうよ。」

このようにして主の祈りをすませたのです。そして床につきました。

翌朝、わたくしは駅の構内で実にびつくりしました。ほかでもありません、Bの荷物にべたべたと「ナイヤガラ瀑布禁酒ホテル」の紙が貼つてあつたのです。把手には五枚もつけてありました。Bはわたくしを責めました。わたくしは「わたしじやない。」といいました。ビルはシラをきつていましたが、後になつて白状しました。ビルはこうして学生たちにいたずらができるほど、学生のなかでらかな気持になつたわけです。ビルと彼らをへだてていた壁がすつかり取り払われました。ビルは後で、あの旅行中つかつた金は、あの紙代だけだつたとよく話していました。「給仕に二十五セント出して、あれを貼らしたんだ。」

わたくしたちはトロントのホテルに落ち着きました。わたくしは州知事が司会し、六千人の人が参会することになつていた午後の大会に行くことを提案しました。

「いやだ」とビルはいいました。

「じゃあ、これから何をするつもりだね」とわたくしはいいました。

「カナダはアメリカよりも毛皮が安いそうだ」とビルはいいました。「外へ出て、毛皮の外套を探したいんだ。」

「それは良い考えだ、ビル。けれども、わたしたちはまず大会に行かなければならぬと思うね。」

「おれも行つてもいいが、一つ条件がある」と彼はいいました。「おれと一緒にしろの席に坐つてくれれば行くよ。」

大会で二番目に話したのは黒人でしたが、ビルはそれに興味をひかれました。彼はいいました。「あいつ、ずいぶん黒いな。炭を塗つても白くあとがつくだろう。」

その男は、養い親と養い子と養い孫の物語を一つしましたが、それはその養い孫が養い親との関係を絶つてしまつた話でした。ビルは終始うなずいたり、あるいは激しく首を振つたりしていました。一言一句が彼を打つたのです。なぜなら、それは彼の家庭の物語と同じであつたからです。ビルはわたくしと大会場を出るといいました。

「フランク、あんたは、あの男におれのことを話したのか？」

私はいいました。「話すものか、ビル。」

わたくしたちは小さい居間に戻つて、十八人で集りをしました。ビルはわたくしに
 いました。「少し話したいことがあるんだが。」

「さあ話すがいい」とわたくしはいいました。まるで大砲の弾が打ち出されるよう
 に、彼は急に立ち上りました。「おれは六十二の老人だが、生活を変えろ決心をした。
 おれには孫があるが、あの養子のように、じいさんに反抗するようなことを見るのは
 かなわない。生れてこの方、おれは天の父に従わなかつた。これからこの老人はいま
 までとは違つた人間になるつもりだ。」

そしてわたくしを手招きしながら部屋をでました。「フランク、ばあさんに手紙を
 書いてほしいんだ。」と彼はいいました。そのばあさんというのがビッケル夫人です。
 すばらしい細君でした。純金のような心で、また料理もすばらしく上手でした。その
 後間もなく、わたくしたちは家路につきました。ほんくらが正しい扉をくぐつた例の
 駅につきました。ニューズというものが、いかに早く伝わるかは驚くべきものです。
 ちようど汽車を降りようとしていたときです。ビルはまだステップに足をかけたまま
 で、私はその後に行きました。酒を持つてきていた一団がありました。ビルの親

友たちが、何が起つたかを聞いて、最上の酒を二瓶持つてきたのです。どんなことが起ろうとも、是非ビールを酔わせて帰そうというのです。最初の瓶をビールに渡したところ、彼はそれをとつてわざと指をすべらして煉瓦のゆかの上におとしました。次のは、もつとこみ入つた方法でした。瓶のコルクを抜きとり、ビルの鼻の下に、それをもつていつて匂をかがせたのです。ビールが素早く、その男の手首をかるく叩いたので瓶はまた下に落ちました。

わたくしはほしいときにはいつでも酒をのめる環境に育ちました。しかしわたくしがなぜ、杯を手にしなやかというには一つの理由があります。それはビール・ピククルのような人のためなのです。コクテルの一滴でも、もし手にしたら、彼らをかち得ることはできません。わたくしは誰にも酒を飲むなどはいいません。誰でもしたいことはしたらいのです、誰でも聖靈の与える自由をもつていますが、わたくし自身としてはビルのような人間を考えるのです。

これは喫煙についても全く同様です。私はたばこはやりませんが、別にたばこを吸うことがわるいとはいうものではありません。しかし、わたしがたばこを吸わない理由

は、ビルが以前すこいたばこのみだつたからです。彼が変わつたとき、すべてがぼつたりとやみました。酒もたばこもです。わたくしは決してそのことについて、彼に何もいわなかつたのです。これらのこと——それを罪とはいいませんが小さな悪徳です——が人間の全生活にとつて、ときには鍵になるから驚くべきものです。

ビルは町の話題になりましたが、誰もがそれについて好意をもつたわけではありませんでした。ある牧師は、わたくしにビルを自分の教会にこさせないでくれと申し入れました。

「心配しないで下さい」とわたくしはいいました。「彼は自分も役割をもち、必要などときには口答えできるような教会がすきなのです。」

次の月曜日、ビルがやつてました。

「聞いたかね？」彼はいいました。「教会に入れてくれないんだ。」

わたくしはまるで短刀でグサリとやられたように感じました。ビルにはたえられな
いだろうと思いました。

「ビル、心配するなよ」とわたくしはいいました。「自分たちの教会をもとう。」

ビルはいいました。「これは不思議だ。おれもそう考えていたんだ。」

結局、教会は持ちませんでした。ビルをよく知っている、その地方の建物管理人が十九人もいたので土曜の夜、集会をもちました。

ビルはいいました。「おれたちみんなは、あんたに来てもらつて話してほしいんだ。」
「さあ、わたしがいつでもいいかね、わたしに一体何を話せというんだね」とわたしがいうと、ビルに例の口ひげを震わせていいました。「使徒信条について話してくださいか」。わたくしは「使徒信条だつて！」と内心思いましたが、とにかく賛成しました。毎週土曜日の夜、わたくしたちは会合しました。彼らは常にそこに集まつてきました。決してむりに集めはしませんでした。わたくしたちがキリストが「陰府（地獄）」にくだり……」という章句にぶつかつたとき、ビルはいいました。「そこで、それがおれに判らないんだ。そこはキリストの行く場所じやない。」

解答を求めて、わたくしたちはしばらく考えました。

ついにビルはいいました。「はつきりわかつた。きつとキリストは地獄を掃除にいつたんだ。次にうつろう。」

そのときから、大学内でのビルの影響力は現代の奇蹟でした。卒業生たちが毎年の卒業式に集つてきても、よつばらわなくなりました。ビルは皆から好んで招かれましたが、酒の出るパーティに顔出すことは断固として断りました。みんなはこの愉快な人物を、パーティに招びたかつたので、酒なしのパーティをしました。ビルは全くパーティの花形で、古い話をおもしろく、しかも全く新しく話すのでした。三年後にはもはや酒のパーティを開くことは、嫌われるようになりました。大学は試合に勝ち始め、学生の成績もあがりました。ジョン・モット博士が来校し、また世界の各地から神のなしたこの偉大な働きを見にきました。

学長についてですが、彼は実にすばらしい人になりました。彼がいつも欲していながらそれが現実に存在していると信じ切れなかつたもの、つまり、人びとの生活のなかに生ける現実としてこんなことが起り得るということを、ビルが彼に示したのです。彼はビルの生活のなかに、また彼の家の女中であるビルの娘に起つたのを見たのです。彼はビルの全家族が変わつたのを、また大学生活のなかに真の活動力となつたのを見たのです。

ビルはこの経験をしてから、アメリカのニグロの大学へ教えにいきましたが、そのためこの大学の学生はニグロの問題に関心を持つようになり、南部の黒人の問題ととりくむはじまりともなつたのです。

私のしたことは、ただ神に私を使つていただいたということだけです。

ビルは今から十年前に埋葬されました。それはちようと、アメリカにおけるMRAの発足を記念する大会がワシントンの憲法会館で開かれた直後でした。

世界中の政治家や指導者が、MRAだけが人類にとつてただ一つの希望であるとして、歓呼をもつて迎えたのです。ビルの葬儀は彼の生涯にふさわしいものでした。

神よわれわれに慈しみを与え給え

彼らの後に続くために

ビルやビッケル夫人（よくギリランド夫人の愛称で呼ばれていた人ですが）そしてその子供たちに続いていけるために。

結局、結論として、この世には二つの階級しかありません。それは変つた人と、変らない人との二つです。真の民主主義のイデオロギーをあたえてくれるのは変つた人

なのです。「視よ、はらから相むつみて共におるを。」終りに詩の言葉をのべましょう。

父よ許しませ

過ぎにし年の冷き愛を

今黙して静まる時に

滅したまへ

憶するところ、恐れる心を

今こそ火をもやしたまへ

主よ、われら信じ、受入れ、崇めまつる

いと小さき者より小さきものながら

愛の火よ、もえさかれわがうちに

とこしなえに、もえさかれ

われらのすべてを燃えつくすまで

魂を追う燃える情熱よ

ひたむきなるあわれみの心よ

死に至るまでも愛する愛よ

燃えさかる火よ

たえざる祈り聖き力の

失われし者にこそげ

勝利の祈り

ペンテコストの主、勝利者の

御名による祈りを

三 フランス語版「世界を再造する」の序文

ロベール・シユーマン

(元フランス外相)

この講演集の編集者は、政界人であつて、現在閣僚の地位にある私に、序文を書くことを依頼した。正直にいつて今までのところ、政治家は「世界の再造」にほんの僅かしか成功しなかつた。しかし、事實はその仕事は誰よりも彼らの職務であつて、このために与えられるあらゆる援助を歓迎すべきである。

M R A が何か新しい厚生施設とか、または既成の学説と同系統の新しい理論でもあるなら、私は懐疑的であるだろう。しかし、M R A がもたらすものは、実践にうつされた人生哲理である。

M R A は新しい道徳を樹立したというのではない。キリスト教徒にとつては、キリスト教の教えで十分であつて、人間として、また国民として生きる原則をそこから得るのである。しかし、実際にわれわれが必要とすることは互に教えあう場であり、そこでお互同志が相手に対する態度を具体的に学びあうことであるが、これが新しいところだと思ふ。この場で M R A は、キリスト教の原則が人と人の関係にあてはめて有効であることを証明するだけでなく、異つた人種、階級、国家間を分裂させている偏見と悪意に対して有効的に打ち勝つてゐるのだ。

今日、世界を分裂させているものすべてに橋をかけ、兄弟愛の眞の融和が育つような道義的雰囲気をつくるのが第一の目標である。

人間とその問題についての理解をますために、集会や個人的会合で話し合う機会をつくるのがその手法である。

新しい世界をつくり、和解の使徒として、どの国にも奉仕する人びとを訓練している。これが、社会機構の変革の初まりであつて、戦争によつて荒らされた過去十五年の期間にも、その第一歩は既にふみだされている。

政策の変化を問題にするのではなく、人間の变化チェンジが問題である。デモクラシーと自由とは、デモクラシーの名において行動する人びとの生活の質によつて決定される。

このことをブックマン博士は、素朴な、そして感動的な言葉で表現している。博士は物質主義と個人主義——この二つが利己的な分裂と社会不正義とを生み出す双生児であるが——に戦いを挑んでいる。

今なお兄弟互に攻めあう憎しみを持ちあつている全世界の国ぐくに、より多く博士の言葉が伝えられ、受け入れられんことを望むものである。

(フランス語版は一九五〇年に出版された)

四 ブックマンの演説に関する記録

1 ストリーター博士の講演

(1)

オックスフォード大学ティンズ・カレッジの学長ストリーター博士は、
数年間、オックスフォード・グループの発展に注意してきたが、一九三四年七月、オックスフォード市公会堂で開かれたM R Aの大会の席上、多数の同僚教授を前にして次のように述べた。

過去二年半、私はこの運動に特別な注意を払つて来た。今までの私の態度は外交用語でいう、好意的中立であつて、私のこの態度は初期のキリスト教会に対してパリサイ人のなかの最も温和な人物であるガマリエルがとつた態度に等しいものだと言

諸君に話していた。

今夜、私がここに来たのは、皆さんの前で、この運動こそ現代の宗教運動のなかで最も重要なものであることを認め、私が今までとつてきた好意的中立の態度をやめる決心をしたことをいうためである。

過去二年半の間、私は世界の情勢を注目してきたが、憂うつと絶望が増加するばかりであつた。善意は存在しているが、われわれの直面している戦争、階級闘争、経済不況等の難問題を解決するには不十分である。善意の人びとは落たんしている。努力はしているが、希望がうすらいでいる。教会も落たんしているといえよう。

この運動は単に悪人を善良にするばかりでなく、善意の人びとに新しい決心、新しい勇氣、新しい方向を与えているように思える。それであるから私は、世界的に絶望感の増加していく今日、この運動に自らを投ずることが私の義務であるとの結論に到達したのである。

さらに一言いうならば、私は、専門の分野で、一応人に認められている者として、または本大学の主任教授としてこのグループに参加するのではない。私はこのグループ

ブからいろいろ学んだが、更に多くを学ぼうと願うものとして参加するのであり、そしてそれによつて、より役に立つものになりたいと願つてゐるのである。

(2)

ストリーター博士は、一九三七年九月、スイスで航空事故のため死んだが、その数週間前に、次のステートメントを書いた。

私がオックスフォード・グループにひかれた根本的理由は、個人的問題や、家庭の問題を解決するためではなく、(もちろん、そうした問題に対しても、ずいぶん助けられはしたが)世界状況に絶望的になつていたからだ。もつとも最近では、この絶望感は何も私一人だけが感じるのではなく、世の中の傾向を見れば見るほど、希望を感じることが出来ない。

私も国際連盟や、その他戦後はじめられた経済や社会問題のいろいろの改革案に期待していた一人である。これらの案が不成功に終ろうとしているのは、機構そのもの

が不完全であるというより、その機構を成功させるに必要な善意が一般大衆にも、その指導者にもかけているからなのである。

キリスト教のもつている道義的エネルギーが損失されているのは、教義の差や、教会のちがいによることもあるにしても、大半はキリスト教徒たちが異口同音に主張する道義的、宗教的な理想を生活に実践しないことによるのだ。

オックスフォード・グループは、教会が個人の救いばかりでなく、国の魂をも救うという本来のつとめによび戻している。いづれの宗派とも競争しようというのではなく、却つてすべてを活気づけようとしている。いかなる運動よりも早く、悪い人間を良くし、善良な人間をさらに良くすること、しかも国際的規模においてそれをなし得ていることを、私は一九三四年にすでに知ることができた。それで、これ以上、河岸から激励と批判とを投げつける代りに私自身漕ぎ手に加わつて力をかすことが自分のなすべきことだと確信したのである。

私はグループとともにデンマークへ三回行った。そこで私は、これが単に個人の道義的生れ変わりと心理的解放をもたらすだけではなく、新しい考え方を導入して国の

経済的、政治的紛争の解決に役立つものであることを見てとつた。僅か一年の間に、デンマーク人自身の指導のもとに国家的の勢力にまで発展したのである。

日常生活に与える影響の証拠は累積していた。たとえば、首都では商売の取引が正直になされるようになったこともきいた。また政治家が党派的憎しみと陰謀の感情をすて、友好的な建設的な雰囲気で見舞う面する経済問題を処理したということもきいた。税関の役人は普通では考えられない返却金が急にふえたことを報告するし、離婚の数が目に見えて減つたのである。ともかく、ヨーロッパの一国で、わづか一年の間に、文明を破壊する原因となる問題に対して新しい精神が生れたことは事実だ。

歴史をひもどいて見ると、戦争、革命、ストライキなどという大きな出来ごとのなかで、世論を左右する比較的少数の人びとの道義的ものの見方の有無が、往々にして決定的であることが分る。現代の文明を救い得るものは道義的復活のみである。このためには十人に一人、あるいは百人に一人が改変するだけで充分だ。というのは、改変した人が家庭で、職場で、その他の公の場所で接触する人びとを引き上げて行くことができるからである。

私がデンマークで見たことは、イギリスでも起り得るのだ。イギリスの指導的立場にある人びとが、神の示唆を求めるとき、そのことは起り得るのである。そのとき、イギリスは世界を救うことができる。しかし、そのためには、災難がまだ起つていないが不安な現在、その機会を捕えなければならない。

2 クロンボークで歴史がつくられた

オックスフォード・グループは、一九三五年三月から三カ月にわたつて、デンマークでイデオロギーの戦いを展開した。その最後に聖霊降臨日曜日に国民的大集会をハムレットで名高いエルジノール城のクロンボークで開いた。このときのことを、デンマークの著名なジャーナリストのカール・ヘンリッタ・タレメンセンが、ダーゲン・ニューダー紙（一九三五年六月十日付）に掲載した。なお当時のブックマンの演説は本書第五部の「神は世界によびかける」である。

私は夜の更けるのも忘れて、今までに起つたことをつぎつぎと考へている。走馬燈のように、いろいろな場面が目の前を再びかすめていく。いつ果てるかと思われよう、群衆がせまい古城のかけ橋から流れこんでくる。何千という人の歌声が、明るく陽のてり輝く城壁と城壁の間に波濤のようにこだましているのも聞えてくる。緑色の屋根は高く、紺碧の夏空に、デリケートなバステル画のようにみえる。

二十年前に神の名の下に、世界を構成している人びとを交へることによつて、世界を交へようと決心した名もない一人の男がいた。今日この聖霊降臨日曜日にこの男はクロンボーク城に立ち、デンマークを通じて、全ヨーロッパに呼びかけた。壇上には、彼とともに全世界を旅行する忠実な協力者、各国人からなる多数の男女が一しよに座つてゐる。教会事務を管掌するデンマーク國務大臣も一家とともに、この運動の公然たる支持者として壇上に座つてゐる。コペンハーゲンの主教は感激のうちにデンマーク国教会の感謝の念をフランク・ブックマンに表明して閉会の辞とした。

城の広場は、今までにかつて一度もなかつたほどに、群衆で一ぱいであつた。あらゆる年令層の人びと、すべての政党、すべての階級、社会のすべての階層が含まれて

いた。少なくとも一万以上の人が、城内の広場を埋め、その周囲の壁には、さらに数千の人がつめかけていたにちがいない。非常に感銘ぶかい大衆的なデモンストレーションであつた。

フランク・ブックマンによつて、決定的に改変された人びとは、世界のあらゆる場所に幾千人も散らばつてゐる。今では、その人びとも人を改変する人として動員されてゐるのだ。現代にこのような事実を私はいきいたことも、みたこともない。国家を征服した運動はある。しかし、この男は世界を勝ちとる確固たる理想を持つてゐる……その他に起つたすばらしい出来事を考えてみよう。

名高い演出家であり俳優である人が壇上に進み、あのよく透る声で、最初のウィット・サンデー（聖霊降臨日曜日―復活祭後第七日曜日）の記録を新約聖書の使徒行伝から朗読した。

ニイボーグから来た肉屋と、コベンハーゲンの鞍づくりが、若い伯爵と主任司祭のかたわらでともどもに、オックスフォード・グループによつて経験した新しい生活について語つた。美しい母国の服装を着たフィンランドの若い女流コンサート歌手が、

自分の歌声の真の使命を発見したと語り、そのあとでバッハの「ハレルヤ」を独唱した。その歌声は、小鳥の声のように、大広場のすみずみまで響きわたった。最後の一瞬间、コペンハーゲンの主教が祝禱を終つたのちにも、大群衆はさらに何ものかを期待するかにように立ちつづけた。やがてさざ波のひろがるように、人びとが動き出した。人びとのささやき、友達と呼びあう婦人たちの声……突然、何人かの人がインゲマンの「巡礼の合唱」を歌い出した。動きがとまった。脱帽して人びとはその歌声に唱和した。

何が一番印象に残つたであろうか？ フランク・ブックマンがデンマークに与えた挑戦の言葉、すなわちデンマークが国として神の声に耳を傾け、そのメッセージを世界の国ぐにもたらし、さらにデンマークが世界家族の裡に本当の平和をつくるものとなるようにという理想の情熱である。

人なつっこい笑顔をした、広い肩幅の、金髪の男の語るノルウェー語は場内にひびきわたつた。「私はアーリング・ウィックボークです。オスローの最高裁判所の弁護士です」と語り出したこの男は、自分の育つた理屈つばい雰囲気のないなかで植えつけら

れた否定的な人生態度がうち破ぶられて、その代りに新しい意志と力と、自由と、そしてかつて経験したことのない幸福感とを発見したことについて語つた。

ルネスタム教授の重々しい話をききながら私は彼が臨終に際してオックスフォード・グループを祝福した大主教ネーサン・セーデルブロームの女婿であつたということを考えていた。最後に話したのはコペンハーゲンの主任司祭のポール・プロデルセンであつた。背の高い、頑強な体軀の持主である彼は、燃えるような情熱で、この精神革命のメッセージが、全デンマーク人にとつてどのような意義をもつかについて、きく人の心を最も強く打つように訴えた。

「信仰を生活に生かしましょう、その時こそ、われわれの生活を通じて、他の人びとも正しい道を知ることができ、デンマークの国民のすべてに、この光をもたらしために、列を組んで進めるのです。」

3 デンマーク大僧正のステートメント

一九三五年八月、オックスフォード・グループがゼユトラントを訪問している際、コペンハーゲンの日刊紙ベルリングスケ・チデンデ紙はオックスフォード・グループの仕事について大僧正フルサング・ダムガードビシコフ監督の会見談を発表した

オックスフォード・グループが日々何千人もの集会をもっているアールス市に、コペンハーゲンの監督ビシコフが居合せた。美しい大寺院を背にしながら、彼はオックスフォード・グループが活動しているこの数ヶ月が彼自身にとつて、またデンマークの教会にとつて何を意味したかを語つた。その言葉は経験からほとばしるものであつた。

このグループを通して私はキリスト教徒の交わりを体験した。それは神から与えられた賜物であるということに私の眼を開かせてくれた。私は現在グループの一員に加

わつている。

多くの知識層の人たち、また労働者の人たちが教会から離れていることは事実である。教会内にあつてわれわれは、この問題をたびたび論議した。オックスフォード・グループは、その答を示してくれた。

ここ数年間、益々ふえつつある離婚にどう対処すべきかが重大な問題となつていた。ところが、グループを通して如何にして新しい結婚生活を見出したかという証^{あかし}をわれわれは聞いている。

オックスフォード・グループは生きたキリスト教たるべく努めている。ということは何も教義をもたぬことではない。それは新約聖書にのせられているキリストの業績を基にしている。オックスフォード・グループの目的は一人びとりの人の属する教会が与えようとしている信仰を現実の生きたものにするのである。

4 ゲシュタポ報告

ゲシュタポ報告書「オツタスフォード・ダルーブ」は、第三ドイツ帝国国防省で作成された。一二六頁のこの文書は、フランスからドイツ軍が撤退したとき発見され、アメリカ評論記者デウイット・マツケンジーが、A P 通信を通して発表した。一九四五年十二月二十九日附のロンドンのタイムズ紙に左の手紙が掲載された。

編集局宛

ナチス・ドイツがキリスト教弾圧を目的としていたことはすでに明らかであつたが、今度発見されたゲシュタポ秘密文書ほど適確にそれを示したものはない。現在までのところ、十分に報道されていないので、ここに読者の注意を喚起するため、この文書を紹介することを許されたい。

この文書は、ブックマン博士とオックスフォード・グループに関してライヒ（第三ドイツ帝国）国防省でつくつたものである。グループは「ナチスに対して正面切つた反対の立場をとつている」とその文書は抗議している。

「彼らはその会員にキリスト教の十字架への忠誠を誓わせ、キリストの十字架によつてスワスチカ（ナチスの鉤十字）をたおそうとしている。スワスチカはキリストの十字架を破壊しようとするものであると彼らは主張する。」

「グループの重要性は現在われわれ（ナチス党）が撲滅しようとして努力しているキリスト教的罪惡觀を復活させる点である。これはドイツ人を奴隸化するための第一歩である。この運動は、われわれと同文人種のアングロサクソンから始まり、この罪惡觀を根底として國際關係を調整しようとしている。」

この文書は更に「この運動は英米外交の基調である」として「ライヒに新しい政治的、イデオロギーの状態を作ろうとするものだ」と述べている。

「グループは全体的に国家主義に反対するものであつて、国家としてそれに対して警戒をゆるがせにできない。国家主義に対する革命を説き、キリスト教的な立場で国

家主義に反対している。」

更にMRAについて次のごとく述べている。「イギリスやその他でブックマンのMRA提唱に参加している主要な人びとの名前をみれば、この運動の政治的背景は自ら明らかになる。これはユダヤ人的西欧デモクラシーである。またこの運動の対象がなんであるかも疑う余地がない。一九三八年は、ドイツが小国オーストリーを惨酷にも進攻したともつばら報道された年だ。……グループは西欧デモクラシーの息がかかっている。デモクラシーの世界的意図にキリスト教的衣をきさせようとするものだ。グループとデモクラシーは互いに補充し合い、成果を助け合っている。」

この報告書は全体としてナチスの心理を明るみに出すとともに、このキリスト教的運動について流布されていた逆宣伝に終止符を打つものである。われわれはこの文書の完訳がイギリスの読書界に提供されることを望む。それはわれわれ自身、敵側がはつきり認識していたデモクラシーの精神的根源を知り、彼らが最も恐れ、また撲滅しようとするものを守るために役立つと思うからである。

署名者

労働党上院議員

ロンドン労働党支部長

大英帝国保守派連盟会長

英国教会リッチフィールド監督

ロイター通信社社長

オックスフォード大学セント・ジョン・カレッジ学長

オックスフォード大学副総長

ロード・アモン

ハロルド・クレイ

ロード・コーソープ

エドワーズ・ウッド博士

サー・リンデン・マカッセイ

サー・シリル・ノーウッド

サー・デヴィッド・ロス

5 アジアからの招請

一九五二年十月、ブックマン博士は、極東数カ国の指導者の招待によつて、二百名

のチームを連れて、ヨーロッパからアジアに向けて出発した。ブックマン博士は一九一五年以来、広範囲にわたつてアジアを訪問し、またアジアの多くの指導者たちは、ヨーロッパやアメリカで開かれたM R A大会に参加している。

パキスタンの建国の父ジンナーがロンドンを訪問中、ブックマン博士に会つたとき、彼が最初にパキスタンへ招待した。次には時の首相リヤクワット・アリ・カンが招待している。一九五二年には、数名のパキスタンの閣僚がコー大会に出席したが、その人たちは再び彼に招待状を發した。

インドからの招請状は、政治、産業界の指導者十八名の構成する委員会の名において發せられた。

タイからは時の首相ピブン・ソングラムの名においてなされた。彼は一九五二年にマキノおよびコーで開かれた大会に著名な代表団を送つてゐる。この招請状の一節に「東と西の両方に適用し、あらゆる人種と信条をもつた人たちも参加できるM R Aの信条を生きたことなくして、今日のイデオロギー的變動の時代に、如何なる国も存続することはできない」とある。

ビルマからの招待はやはり首相ウー・ヌーの支持を得ている。後に掲げる決議文は、シュエダゴーン・バゴータの聖域内で開かれた会議の席上でなされたものであるが、この会議について、ラングーンの新聞は「最近での最大の精神的な出来事」と報道している。日本からブックマン博士にきた招請は、政治、産業、労働組合指導者の名においてなされている。

ブックマン博士のアジア歴訪は、まずセイロンのアジア大会を振り出しに始まっている。セイロンの招請も時の首相、閣僚の名において発せられたものである。

セイロンからの招請

ここ数年の間に、独立を獲得したアジアの国々には健全なる民主主義を発展する機会を必要としている。そのためには技術的援助も、あらゆる物質的資源も必要であるが、最も緊急に必要なのは平和である。しかし精神的、文化的、伝統からおしても、問題を平和裡に処理するはずの国々が戦争の勃発を怖れて戦争の準備している。

われわれの偉大なる精神的指導者が、教えてくれていることは、分裂の母体で、平和の破壊者である傲り、憎しみ、暴力から、われわれが自由になることができるのは、あらゆる生活の分野に、道義的力が導入され、個人的にも、国家的にも、正しい考え方と行動とを促進されるときのみであるということだ。

この道を追求める人は、誰でもM R Aによつてもたらせられる家庭内の和解、産業界、階級間、国家間の和解の事実を歓迎するはずである。

絶対道義標準を中心においたデモクラシーは物質主義よりも強く人の心に訴えるものを持ち、擲取および欠乏に対する解答をもつている。この真の民主主義は、東西ともに共通に必要である。それは、われわれの相違をのりこえ、平和を永久ならしめる精神を作りだすことができる。

この意味において、われわれは貴方とチームの人たちを心から歓迎し、わが国民があなたの始められた偉大な運動を直接に知ることを望むものである。

ビルマからの招請

一九五二年十月三十一日にシュエダゴン寺院境内で、サヤドウ・ウー・ナラダ大僧正の司会の下に開かれた千人の大集合の席上、ブックマン博士招請の提議が司会者によつてなされ、全会一致で可決された。

「ビルマはブックマン博士に対し心から感謝しています。一九五二年十月八日にコゝから発せられたブックマン博士のメッセージに感謝します。また毎年コゝの大会にビルマから参加した代表者がうけた真心をこめたおもてなしを感謝しています。

ブックマン博士が予言しておられるように、MRAの光が全世界を輝かすものとなることができると確信しています。ことにMRAイデオロギーは仏教の優れた教と全く一致するものです。

附 MRAのイデオロギーは、太陽の暖い愛と月の静かな清らかさを包含しているので、憎しみと反感の暗黒さをぬぐいさることができません。

MRAの若芽は、この地に深く根を下ろしました。今後八万の僧侶がこれを祝福して育んでいけば、必ずや力を増すことを信じます。

MRAはコーで東と西との間に横たわる溝を埋めました。

ブックマン博士が東洋訪問の際には是非ビルマを訪れて下さるように、そしてその日の遠くないことを祈ります。

博士が訪れて下さることは、今日われわれが直面している、種々の問題の解決を見出すのに役立つことと信じます。」

インドからの招請状

社会的経済的状态を恒久的に^{チエンゴ}変革する真ののぞみと、世界の平和とをもたらすには、MRAによつて生みだされた実際的な結果を増大する以外になく、産業に新しい刺激を与え、個人と団体のなかから不信頼、猜疑心、憎しみをのぞき、理解と協力とをも

たらず外はないと存じます。かかる道義の再武装こそ、現代の緊急事であるとともに、将来への希望であります。

貴下のいわれるように、これはあまりにも大きな仕事であり、一団体や、一階級、一国家また一民族のなしうることではありません。現代の問題を解決し、世界の風潮を変え、失業、貧困、戦争への方向を安定と繁栄に向けかえるには、すべての者の努力に加えて、最も賢明なものよりも更に優れた英知をもつ偉大なものの力が加わらねばなりません。

建国の父マハトマ・ガンジーは、最高の理想に従つて歩めという不滅の靈感を与えました。インドがこの尊い使命を果たすためにいかなる努力をも惜しまないことを、われわれは誓うものであります。

もしこの冬、貴下と国際チームがおいで下さつて、その体験を伝えて下さるならば、どんなに幸いかと存じます。経営者と労働者、左と右、東と西を包含するイデオロギ―を示すことによつて、世界を危機から解決へと転換せねばなりません。

インド航空会社専務

連邦地方議会議長

インド国民労組議事會會長

国家企画委員

マドラス大学副総長

国家企画委員會副委員長

国家企画委員

オリッサ地方議會議長

電通長官

インド商業會議所前會頭

ウエスト・ベングル首相

タタ工業社長

サー・グルナス・ビウーア

シュリ・チャンドラバール

カーンドバハアイ・デサイ

シュリ・メタ

サー・ラクシュマナスワミ・ムダーリア

シュリー・グルザリエル・ナンダ

シュリ・パーティル

パトナイク

シュリ・クリシュナ・ブラサダ

サー・シュリ・ラム

ロイ

タタ

五 MRAと西欧キリスト教

カール・アダム

ここに掲げるアダム教授の論文の複製は、スイスのルセルヌで発行されているカトリック党機関誌「アーティストランド」に掲載されたもの。

西歐の国ぐにが、意識的に協力しようと思せず、たがいに競争しあい、あるいは、反対しあつてゐる限り、アメリカの調停も益なく、ソ連の巨大な力によつてこつばみじんにくだかれてしまふだろう。この事態に直面して、われわれは地に足をおろさなくてはならない。共産主義の脅威は、現在まだソ連の物質主義のとりこになつてゐない国ぐにを全部包含する超国家的な連盟を打ち建てることを余儀なくさせてゐる。この

附

載

連盟は東欧の独裁と無智と不信仰とに立ち向う力を持たなければならぬ。力強いイデオロギーで養われた東欧の固い規律の力の前には、西欧の如何なる連盟も、それが単に政治的、経済的利益だけを基盤にしたものであつては役にたたない。

純然たる政治的、経済的方法では、この状態に対して役に立たないことを、文明社会に知らせてくれたのは、M R A の提唱者フランク・ブックマン博士である。彼は非常に敏感な洞察力と、特にすぐれた力と最後までやりぬく徹底さとで人間性の必要に對して人びとの眼を開いてくれたのである。彼はまた、大衆を掌握している共産主義のイデオロギーに對して闘うためには、より良い、より勝れたイデオロギーが必要であることを示した。より良いイデオロギーは、単に人間が社会人としてどう反応を示すかという人間の性質を捕えて、それを方向づけるだけではなく、人間の全人格のあらゆる点を掌握し、それを方向づけるものでなければならぬとした。ブックマンは「問題の真髓は人間性にある。世界は罪のためにつんぼになり、利己心のためにめくらになつてゐる。それだから個人の完全な改変——本質的で、革命的な——が必要なのである。個人の目をさませば、国ぐにの目をさますことができる」と強調する。

生れ変わる道は、四つの標準——絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛——を通してである。個人が変わることによつて家庭におよび、そして国全体が變つて行くのである。「人間の考え方を變えるためには、人間以上の力が必要である。この力の根源は神以外にない。キリストの十字架を通して働く神の力である。十字架のメッセージは、あらゆる利己心を打ちくたくであるうし、十字架の力は最大の革命を導入することができる。われわれのなすべきことは、ただ十字架を見あげ、キリストに聴くことだけである。誰でも神に聴くことをはじめることができる。」それ故に、ブックマンは「静聴」するということを始めたのである。それは自らに目をむけ、神が何をわれわれに望むかを静思する時間である。神の導きに自らを意識的に向けることである。

MRAは、その名前が示すように、単なる倫理的な運動ではない。MRAは宗教的であり、最も深い意味におけるキリスト教の運動である。しかし、それは教会の告白や、教会社会を意味するのではない。MRAの目的は、教会の告白のもとともなるべき原則を、人間の意識のなかにもちきたらせようとするのである。古い真理に重点をおき、それを新時代に適應させ、世界に示そうという以外の目的を持たない。ブック

マンはロヨラの聖イグナチオの言葉を想いおこすのである。「神にまつたく献身する十二人を与えよ、さらばわれ世界を帰依させん。」

ブックマンの目的は、現在あるものとは異つた教会を建てようというのではなく、すべての生きた宗教のよつてくる先天的なもの（ア・ブリオリ）道義的、宗教的な個人の体験を人びとに得させようというのであるから、インド、中国、日本、その他のキリスト教国でない国ぐにも確信をもつた多くの信奉者がいることは理解できることである。

ブックマンは、キリスト教徒であろうとなかろうと、この考え方を受け入れようとする人びとに向つて、真剣に強調することは、自己反省と、個人的体験をもつことで、さらに得た体験をたがいに分ち合うことを強くすすめるのである。過去三十年の間に、偉大なる世界的攻勢にまで発展したこの運動の信奉者は夢想家ばかりではなく、著名な知識人もいれば、世界的な政治家も、大産業家も、労働運動の指導者も、港湾労働者、炭坑労働者にいたるまで、大臣から料理人といったあらゆる階層の人びとを含んでゐる。彼らが共通にもつ目的は、ただ一つ、政治的、経済的、文化的難問題を、

福音書の教える光に照して解決しようというのである。もつとも複雑と思われる政治的、経済的問題に対して、いつも山上の垂訓の教える簡単なしかし明白な概念が解決の光を与えるということは驚くべき、また感心せざるをえないことである。四つの絶対と、完全に神に降参すること、キリストの十字架の力に対する信仰、そしてブックマンが力説する、静聴^イすることは、キリスト教徒として基本的なものであつて、キリスト教の精神に生きることにほかならない。

カトリック信者が、スイスのコーに行つても、何ら新しい真理を見出さないとすることも分る。しかし、腹の底までゆさぶられることは事実だ。そしてカトリック信者たちの集つて生活している社会のなかの一部には、キリスト教がこれほど深くは理解されずまた生活に生かされていないことを認めざるを得ない。「カトリック信者にコーは与える何ものを持つてゐるか」との間に対して、ストラスブルグ大寺院の首席牧師であるモンセイニョール・フィッシャーは次のように答えている。「コーで第一に気づくことは、良心がうるさく動き出すことだ。宗教の修道院以外のところで、コーほど多くの祈りが捧げられているところを私は知らない。」

たしかに、コーには宗教的主観性があるが、その背後には巨大な客観性があるのだ。地球上で最も客観性のある事実、すなわちキリスト教の黙示、キリスト教の教義、キリスト教会がある。終局的に云つて、M R Aの偉大な力とその活動力がつくるものは、キリスト教イデオロギーである。この意味からいえば、東欧の物質主義に打ち勝つものは、終局的にはキリスト教イデオロギーなのである。このことは、カトリック教会を通じてソ連の集団生活よりも、すべてを包含する社会が形づくられ、それが全世界に波及する度合に應じて解答となるだろう。

であるから、われわれカトリック信者は、いま最も重大な反省をし、決定すべき時に立つている。われわれは、カトリック信者が自分自身の責任を十分に感じていたなら東欧の物質主義が人びとの動脈のなかに、したがつて国全体のなかに入り得なかつたことを認めなくてはならないだろう。過去幾世紀かを特徴づけている現世的な俗つばさにわれわれ自身が感染していたのである。

現在の決意のときにあつて、西欧のキリスト教の復活をもたらすためには、まず第一教会内の一般人の復活が行われなければならない。原始キリスト教の理想であつ

た一般人の聖職観は、新しい光をもつて再び輝き出し、われわれの心を暖めなければならぬ。一般人よりも聖職にあるものが、優位を保つという考え方は、教会において、さほどに大きく表明すべきではない。それをするとキリスト教徒のあり方に対する主の偉大な言葉が見逃されてしまうからだ。マタイ伝二十三章八節に「汝らただ一人の主を仰ぎ、汝ら互に兄弟ならん」とある。

この精神とこの方法以外に西欧のキリスト教が復活する道はない。道徳的説教や聖職制度を越えて、われわれがつくらなくてはならないものは、最も残酷な独裁主義、最も無意味な制度におくせず、如何なる悪鬼も破壊することのできない愛の共同社会を、われわれの名において自由のあるうちにつくらなくてはならない。

ソ連の脅威に対して、キリスト教的共同社会はたがいに手をたづさえて、信仰の差はあれ、愛を基盤にした融合をもち、東欧からくる野蛮さに対して、防衛に立とうではないか？ キリスト教は、暗闇の圧力から西欧を守りぬくであろう。キリスト教はキリストである。キリストは死ぬことなく、永遠に生きるのである。

六 M R A とは何か

ガブリエル・マルセル

筆者は著名なカトリック哲学者で、フランス国立学会の会員。この一文は一九五六年一月二十八日付の「ル・ファイガロ」紙に掲載されたもの

M R A とは何か？ それは一つの宗派ではなく、パン種であり、種である。この種をまかれた人は、内部から改変モディフィされる。ということは、絶対なるものの光の証オビジュを見、その体験を通して彼ら自身、また他の人びととの間に、横たわる種々の障害物をすべることが容易となるからである。と同時に、この人たちはいきいきと輝きだし、ある意味では放射能のように人に影響を与える。この人たちに直接に接触した人は、誰も

がそれを感じる。M R Aの仕事の範囲をしめす一つの事実は、クレムリンがこれに頭を悩ましていることである。とくにタシケント放送は数回にわたつて、共産主義のイデオロギーの基礎を破壊するこの運動に警戒をする必要があると訴えている。

たしかに如何なる経済的原因にもよらずに、人びとの生活の方向が突然に変わるといふほどに共産主義イデオロギーの根底をくつがえすものがあるだろうか？ 私が個人的に最も動かされたのは、アルジェリアの回教徒の教員で逮捕され、拷問を受け、そのうえ身の証がたつたにもかかわらず、北アフリカから追放された人の話を聞いたときである。彼は、M R Aによつて信仰に生きるようになり、自分たちの過ちを完全に認めたフランス人に会つたときに、フランスに対する憎しみが消えさつたことを感動に震えた声で語つた。そして、新しいアルジェリアを建設するためにフランス人とともに働く決心を披瀝した。北アフリカに住んでいる指導的フランス人の一人が、これを聞いて、現在アルジェリアに起つてゐる悲劇の原因を作つてゐる多くの盲目的な人たちにかわつて許しを求めた。

これは、確かに一つの希望である。あるいは唯一の希望であるかもしれない。道義

的に完全に透明になりあうことによつて人と人とを融和しうる、この精神なくしては、人間同志のだまし合いと復讐という悪循環をたち切ることはできない。今日、カナダからノルウェー、中央アフリカからイラン、インドから日本におよぶあらゆる場所で、人間はこの道によつて、生きる意義を発見しているばかりでなく、人に与え、人に放射する驚くべき幸福感を見出している。これは真の平和への道である。人間同志の兄弟愛の光を再び発見し得た生きた平和である。

あとがき

フランク・ブックマン博士は、M R Aのために全世界を巡歴し、三十年前に、すでにアジア各地を訪問し、それ以後、数回にわたつて日本を訪れている。彼が、世界を再造する、というとき、彼の頭のなかには、すべての国、すべての民族が含まれているのである。彼は常に世界大に物を考えている。

本書の第五部には、彼が二十数年前になされた講演の幾つかが収録されているが、これらは特にキリスト教徒に向つてなされたものであることは読者にも明瞭であると思ふ。

ブックマン博士は常にM R Aはすべてのところの、すべての人のものだといつてゐるが、キリスト教徒にとつては、そのことは信仰を深め、それを生きることの意味する。

MRAが世界に拡まるにつれ、キリスト教以外の信仰をもつ人たちも同じ体験をしている。その人びとも深い信念をもつて生活するときに、神が現実となり、力ともなることを発見している。

本書を通じて、読者は信仰のない人びとも静聴を始めるときに、神の導きが現実になるということを見出すであろう。

なお本書は昭和二十五年三月、毎日新聞社で刊行された。その後、各方面から増版が切望されていたが、ようやく、このたびブックマン博士の第八十回の誕生日を記念し、最近の講演を新しく加えて、ここに再版できたことは大きな喜びである。初版の際、毎日新聞社が、まえがきとして次のように書いたことは現在もなお真実であり希望でもある。

「本書は、一九二一年に始まつたMRAが、ついに今日にみる国際的な運動にまで成長した長い輝かしい歴史であり、ブックマン博士の苦斗の自叙伝である。本書が新しい民主日本の建設のために大きい役割を果すことを切望する。」

昭和33年6月1日 発行

世界を再造する

Remaking The World

定価 ¥ 450.

編者 M R A ハウス

訳者 相馬 雪香

発行所 **MRA**ハウス

東京都港区麻布富士見町19

振替・東京 47199 番

印刷 白文堂

Printed in Japan

本書は世界的に拡がっている M R A のイデオロギーを裏付けるブックマン博士の講演集である。

M R A は行動にうつされた人生哲理である。問題は政策の変更にあるのではなく、人間の性質を変えることにある。デモクラシーとその自由は、デモクラシーを唱える人たちの生活の質によつて決定される。このことをブックマン博士は素朴な、そして感動的な言葉で表現している。

(フランス元外相) **ロベール・シューマン**

今日、世界には、いろいろのイデオロギーがある。しかし、それらは究極においては人を裏切り、人をさげすんでいる。自由を約束するが実際には統制に終つている。こうした生半可な真理のもたらす混乱に対して、ブックマンは鋭く、簡明ではあるが、普遍的な経験に裏付けられた解答を与えている。

(オックスフォード大学教授) **アラン・ソーンヒル**

M R A は、私の祖父マハトマ・ガンジーが生活の基準とした道義標準を私自身の生活の中に受け入れよと挑戦している。

歴史の潮流を変えつつある M R A に私はすべてを捧げる決意をした。

ラジモハン・ガンジー